

大阪府堺市・南河内郡美原町所在

ひ 置 莊 遺 跡

—近畿自動車道松原すさみ線および
府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書—

本 文 編

1995.3.

大阪府教育委員会
（財）大阪文化財センター

はづくつちょうさ 発掘調査のあらまし

日置荘遺跡は大阪府堺市と南河内郡美原町にまたがる遺跡です。

ここに近畿自動車道という高速道路をつくる計画がたてられました。しかし、この遺跡付近から泉北ニュータウンにかけては今から1600年ほど前の古墳時代に、須恵器とよばれる土器の窯がたくさん造られていたところであることが知られています。また、古代から中世にかけては「日置荘」という地名が示すように荘園に關係するところであるとも考えられており、実際に下の写真を見ても分かるように、東西南北で碁盤目状の田畠が広がっていることによって、古代の土地区画方法である「条里型地割」が残っていることも分かっています。

そのほか、日置荘の地は中世にはお寺の鐘や鍋・釜などの鋳物作りを行っていた河内鋳物師の本拠地の一つであったところでもあり、歴史的に非常に重要な地域であったといえます。

したがって、道路建設に先立って昭和61(1986)年から平成元(1989)年までの4年間、発掘調査を行いました。なお、調査の対象となった日置荘遺跡はその範囲が2km以上におよぶことから、発掘調査は大きく4つの調査区にわけて行いました。



1. 空からみた日置荘遺跡（遺跡周辺航空写真：1985年撮影）

I 調査区



2. まとまって出土した土器（土器群A-1）



3. 出土した土器（土器群A-1 出土遺物）

古墳時代の土器

調査区の東端にあたる西除川西岸で古墳時代の土器がまとまって出土しました。見つかった時の状況は川に向かう緩やかな斜面に散乱したような様子を示していました。

今回、出土した遺物を復元したところ、古墳時代の炊飯器である釜を中心として、須恵器の杯や高杯などが配置されていたことが分かってきました。

また、これに隣接して建物のあとも見つかっており、西除川をのぞむところに古墳時代のムラが営まれていたことが明らかになりました。

かわちいもじ こんせき 河内銅物師の痕跡

日置莊遺跡の周辺は昔の記録によると、中世には銅物作りにたずさわる銅物師とよばれる人々が多く住んでいたことで知られています。

実際にII調査区では、鉄を溶かすための炉のあとが見つかっています。

当調査区では、銅物師たちの作業場などを見つけることができませんでしたが、調査区の東側では仏具の一つである「磬」の鋳型が出土しており、さらに近くの井戸からは750年ほど前に作られた土器とともに鉄瓶が出土しています。

これによって、仏具から生活用品にいたるまで、多様な製品を作り、世に送り出していたことが明らかとなりました。

そのほかにも下の写真のような飾り金具が出土し、寺院の存在をうかがわせています。



4. 磬の鋳型（A地区包含層出土磬鋳型）



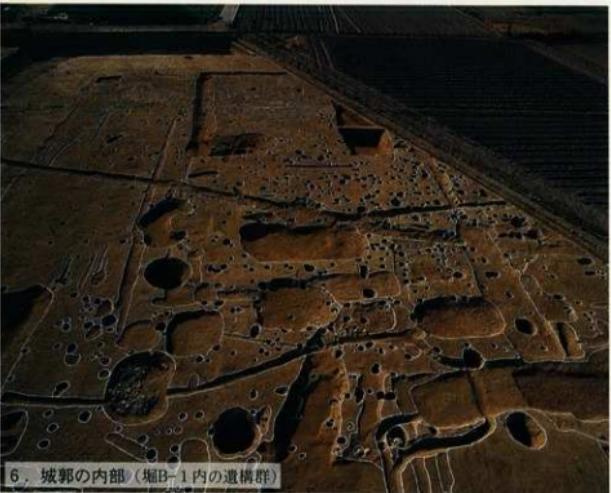
5. 飾り金具（溝B-38出土）

あまべじょうかく 余部の城郭

調査区のほぼ中央にあたる美原町余部で、
今からおよそ500～600年前の城郭のあとが
見つかりました。

発掘調査では、幅が約7m、深さ約1.5m
の堀が姿をあらわし、城郭の南側のほぼ
半分を確認しました。

北側の部分では、発掘することなく地中
の様子を探るレーダー探査を行って堀の広
がりを確認しました。その結果、内部の大
きさは東西約60m、南北約65mのほぼ正方
形の形をした城であることが明らかになり
ました。堀の内側からはたくさん柱の穴
や井戸・ゴミ捨て穴などが見つかり、何度
も造りかえられていたことが分かつてき
ています。



6. 城郭の内部(堀B-1内の遺構群)



7. 空からみた城郭(堀B-1と遺構群)

じいん 寺院

城郭と隣り合った東側の調査地からは、溝で囲まれた四角い区画が見つかり、溝の中には石道のように石を積み上げたところがあることも分かりました。

溝からはたくさん瓦や石、さらには、僧形像の頭の部分や塑像(粘土で作った仏像)・護摩鉢・火鉢や灯明台の台座などが見つかりました。

調査の結果、多くの面で当時の一般的な屋敷とは少し異なった様子をうかがい知ることができました。

具体的に建物を復元することはできませんでしたが、城郭と同じころに隣り合って営まれていた寺院の姿がおぼろげながら浮かび上がってきたといえます。



8. 中国から来た青磁の器（A地区出土磁器）



9. 空からみたI調査区の周辺（I調査区周辺航空写真）

II 調査区



10. 中世の村と萩原寺（II調査区周辺航空写真）

ちゅうせい むら 中世の村

当調査区からは今からおよそ800～400年前の村が見つかりました。発見された中世の村からは16区画におよぶ屋敷のあとが確認されています。

それぞれの屋敷は四角く溝に囲まれており、その大きさは大小さまざまですが、そのすべてが条里型地割に沿うかたちで造られていることが明らかとなりました。

また、現在の萩原神社の地には平安時代の終わりごろに「萩原寺」とよばれる寺があったと考えられています。

今回の調査で出土した瓦には「萩原寺」のものと同じ紋様をもつものもあり、両者の密接な関係をうかがわせています。

11. 条里型地割と屋敷（E地区区画2・3およびG地区区画10～14）



みぞ かこ やしき
溝に囲まれた屋敷

E地区としている調査地で見つかった屋敷の一つで、東西約30m、南北約45mで溝に囲まれています。その面積は400坪をこえるもので、当時としても大きな屋敷の一つであったといえます。溝の内側からはたくさんの建物の柱穴や井戸などが見つかっており、さらに写真右下には溝が途切れている部分があり、この部分が入口であったと考えられています。



ここからはたくさんの中のほか、仏具なども出土していることなどから、一般的の屋敷ではなく、調査地近くに存在したと考えられる「大聖寺」という寺の一角であった可能性も高いのではと考えられています。

密集する屋敷

G地区では溝で囲まれた屋敷が複数に重なり合って見つかりました。溝の内側からはたくさんの建物の柱穴・ゴミ捨て穴・井戸・溝などが発見され、それに伴ってたくさんの遺物が出土しています。注目されるのは、ここでも大量の瓦の出土が見られることです。

これまでにも各地の調査で、溝で囲まれた中世の屋敷は見つかっていますが、そのほとんどからは大量の瓦が出土することもありません。これは一般の建物の場合、板葺や桧皮葺きなど、木を使って屋根を葺いていたからで、瓦は宮殿・城・寺院などの特別の建物にのみ使われていたことが分かっています。



13. 溝で囲まれた屋敷群（G地区区画10～14）

このような実事を考えると、当遺跡から大量に出土する瓦の存在は重要な意味をもっており、これら溝で囲まれた建物がこの地にあった「萩原寺」や「大聖寺」などの寺院と関連するものであった可能性も否定できません。



4. 梵字を配する軒瓦（G地区出土梵字紋軒丸・軒平瓦）

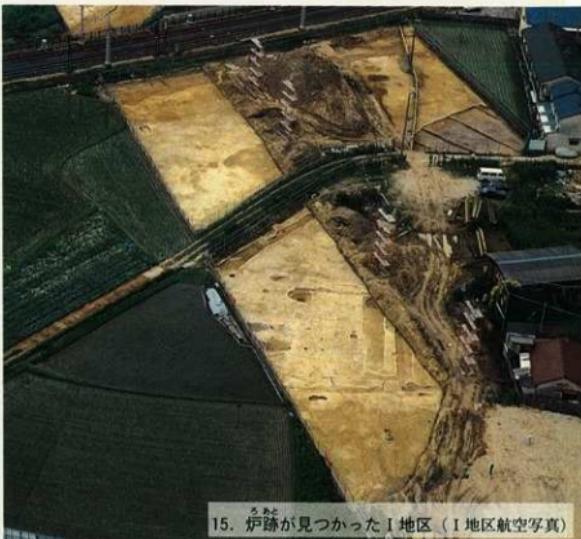
かわちいもじこうぼう 河内銅物師の工房

むかし、まろく
昔の記録によると、白瀧荘遺跡の周辺には、
いのづけ
中世に銅物作りにたずさわっていた銅物師と
よばれる人々が多く住んでいたことが知られ
ています。

当調査区ではその事実を示すかのように、
鐵を溶かすための炉のあとが見つかりました。

ここでは、小さな破片ではありましたが、
銅を流し込む鋳型が同時に出土しており、さら
に東側のI調査区では仏具の鋳型も出土して
います。

今回の発掘調査は、当時、全国的に有名で
あつた河内銅物師たちの作業や生活の一端を
私たちに示すことになり、古い記録に記され
ていたことをより具体的に探るための重要な
成果をもたらしました。



15. 炉跡が見つかったI地区（I地区航空写真）



16. 鉄を溶かす炉のあと（I地区土坑I-548）

III 調査区



7. 須恵器を焼いた窯（須恵器窯L-1）

すえき かま 須恵器の窯

調査区中央の浅い谷からは古墳時代（今からおよそ1350年前）の須恵器を焼いていた窯のあとが見つかりました（写真で人が立っている所）。

この遺跡の南東には「陶邑」とよばれる須恵器の一大生産地があり、今回の発見はその周辺にも多くの須恵器の窯が埋もれていることを明らかにしました。

また、この須恵器の窯は上部を大きく削られて壊されており、奈良～平安時代の集落の造営に際して大規模な開発が行われたことを知る手掛かりにもなっています。



18. 出土した須恵器（須恵器窯L-1 出土遺物）

こだい しゅうらく 古代の集落

奈良～平安時代にかけては掘立柱
建物が多数見つかっています。

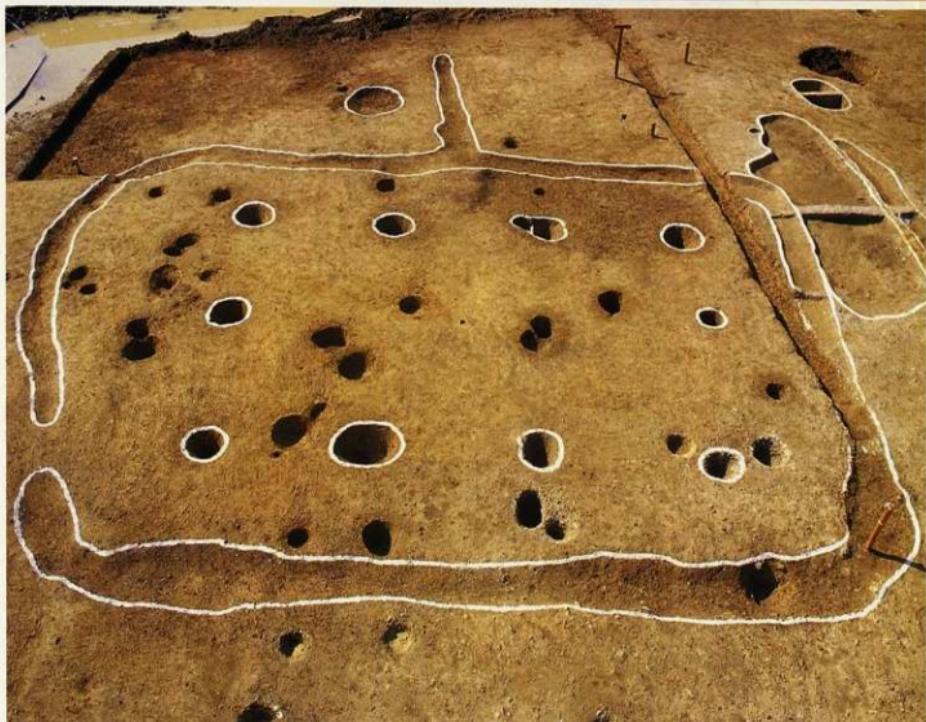
とくに平安時代の建物群は遺跡周
辺に残る条里型地割に影響を受けて
営まれています。

全体に出土遺物は少ないが、井戸
などからは黒色土器・瓦器などとよ
ぶ黒っぽい土器が出土しています。

これらの建物は当遺跡周辺での集
落の始まりと条里型地割の施工時期
を考える上で重要な意味をもってい
ます。



19. 井戸の底から出土した土器（井戸L-4 遺物出土状況）



20. 溝に囲まれた建物（建物L-21）

ちゆうせい ば ち 中世の墓地

調査区の西側からは鎌倉時代（今から約750年前）の土壙墓が3個所で見つかりました。

そのうちの2基からは中国で作られた青磁碗とともに土師器の大小の皿が出土しました。このお墓は現在見られるような集団墓地とはすいぶん様子が違っています。

これまでの発掘調査によって、中世には屋敷などの居住地近くに墓を営む「屋敷墓」というものがあったことが明らかとなっています。

当遺跡で見つかった土壙墓周辺も長期間にわたって墓地として利用されていた様子がないことからこののような墓の1つであったと考えられます。

1. 中国から来た青磁の器（土壙墓M-2出土青磁碗）



2. 鎌倉時代の墓（土壙墓M-1出土土器）



23. 中世墓から出土した土器
(土壙墓M-1 出土土器)

ししゃうつわ 死者の器

中世の墓からは青磁碗と土師器とよばれる素焼きの土器が出土しました。

2つの土壙墓から見つかった土師器はどちらも大きな皿が1枚と小皿が5枚で、まったく同じ数でした。

また、青磁碗はどちらも口の一部を打ち欠いて埋められています。現在でも葬め際に故人が使っていたお茶碗を割る風習が残っています。

葬送をめぐる共通した思想の存在も考えられる点で重要な事実であるといえます。

また、土師器は質と色に大きな違いがあり、墓の規模の差などからこの2つのお墓は男女を埋葬したお墓であった可能性も高いのではないかと考えています。



24. 中世墓から出土した土器 (土壙墓M-2 出土土器)

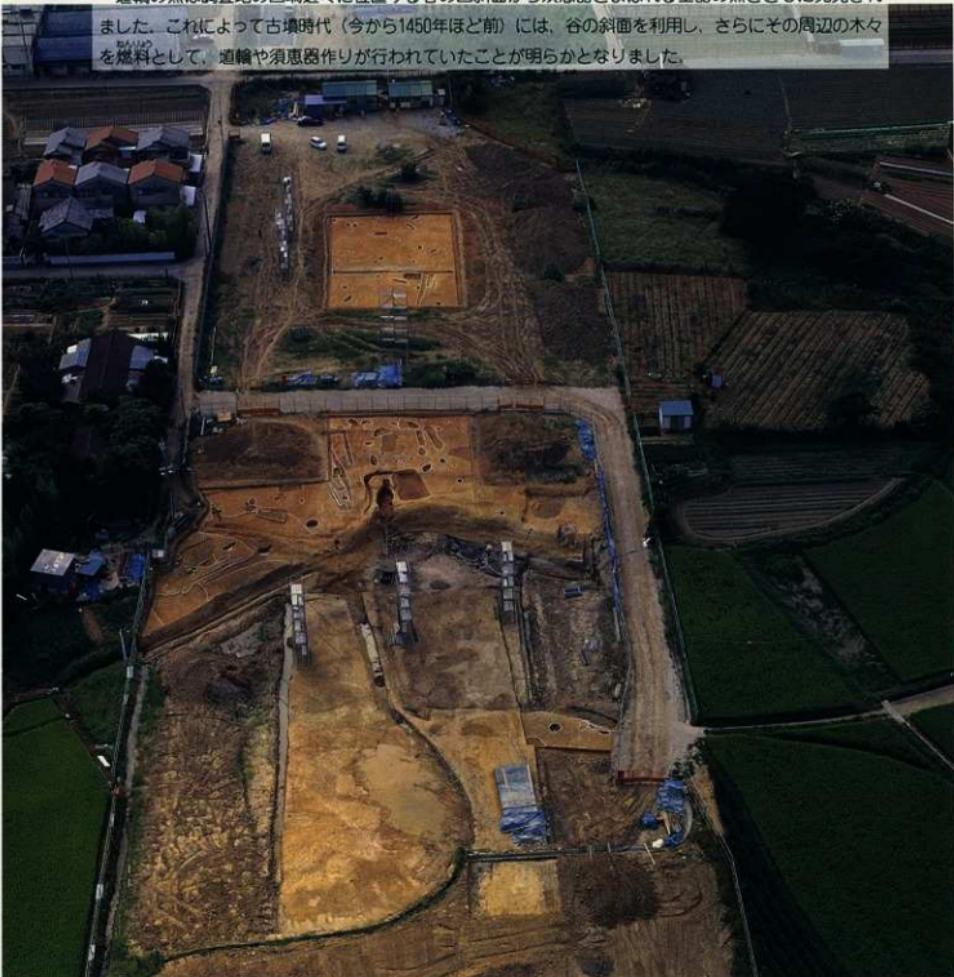
IV 調査区

はにわ すえき かま 埴輪と須恵器の窯

当調査区は、日置庄遺跡の中でも最も西側に位置し、小さな谷が入り組む複雑な地形をもっています。ここからは他の調査区で発見されたような建物などは全く確認できませんでしたが、中世から近世にかけて田畠として開発されていたことが分かりました。

また、今回の調査で最も重要な調査成果としては埴輪を焼いた窯が発見されたことをあげることができます。

埴輪の窯は調査地の西端近くに位置する谷の西斜面から須恵器とよばれる土器の窯とともに発見されました。これによって古墳時代（今から1450年ほど前）には、谷の斜面を利用し、さらにその周辺の木々を燃料として、埴輪や須恵器作りが行われていたことが明らかとなりました。



25. 空から見た埴輪と須恵器の窯（P地区航空写真）

はにわ かま 埴輪の窯

大阪府では、現在までに 6 個所で埴輪を焼いた窯のあとが見つかっています。埴輪は、大きな古墳になると何千、何万もの数が必要となりました。これまで見つかった埴輪の窯も 1 つだけで見つかる場合は少なく、いくつかの窯がまとまって発見されることが多いのが特徴です。

白匂莊遺跡でも今回、発見された埴輪窯の北約 200m でも埴輪窯が見つかっており、この辺り一帯に、さらに埴輪窯が埋まっている可能性が高いものと考えられます。

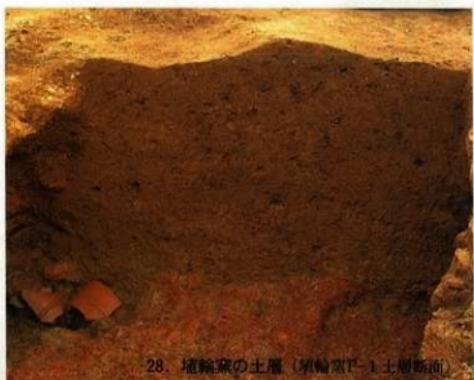
当遺跡の埴輪窯は埴輪を焼いた時の床面が 3 枚確認されており、そこからたくさんの中古の埴輪が出土しています。とくに、一番下から見つかった床面では埴輪が立ったままの状態で出土しており、埴輪がどのようにして焼かれていたのかを具体的に知ることができました。



26. 塩輪の窯あと（埴輪窯P-1 床面III）



27. 塗輪窯の中（埴輪窯P-1床面 I）



28. 塙輪窯の土層。(埴輪窯P-1 土層断面)



29. 塙輪窯の床面

(埴輪窯P-1 床面II 墓輪片除去後)



30. 出土した埴輪 (埴輪窯P-1 および灰原出土埴輪)

はにわ 埴輪

日置庄遺跡で見つかった埴輪
窯からはたくさんの埴輪が出土
しました。

その多くは円筒埴輪とよばれる
土管のような形をしたもので
すが、周辺に捨てられていた失
敗品の中には、わずかですが人
物の埴輪や家を形作った埴輪
なども見つかっています。

埴輪はこれまでの研究によっ
て今から1350~1400年ほど前の
ものであると考えられます
が、残念ながら、どこの古墳に運ば
れていたのかははっきりして
いません。

みなみかわち だいち こうそくどうろ
南河内の台地を横断する高速道路

今日の私たちの生活を支える動脈として、高速道路は必要不可欠なものとなっています。大阪でも名神高速道路を手始めに、近畿自動車道や阪神高速道路が次々と建設され、経済活動がより盛んになるとともに、生活も大変便利になっています。

しかし、こうした開発行為は、遺跡破壊を伴います。遺跡とは、昔の人々の生活の跡ですが、その中には過去の歴史が伝説のように詰まっています。私達が今あるのは、大昔からの人々の生活の積み重ねの結果です。今の私達を理解し、未来を展望するためには、過去の人々の生活を調べることが必要です。そのため、遺跡が破壊される前に必ずその部分の発掘調査を行い、遺跡に埋もれている歴史を取り出す作業が行われるのです。

今回の日置庄遺跡の発掘調査でも、膨大な歴史が掘り出されています。文字としての記録がなく、これまでまったく知られていなかった数々の貴重な発見がありました。この報告書に掲載しているのは、そのごく一部でしかありません。また、機会を得て、それらも紹介したいと考えています。



31. 完成した高速道路（近畿自動車道松原すさみ線 III調査区付近）

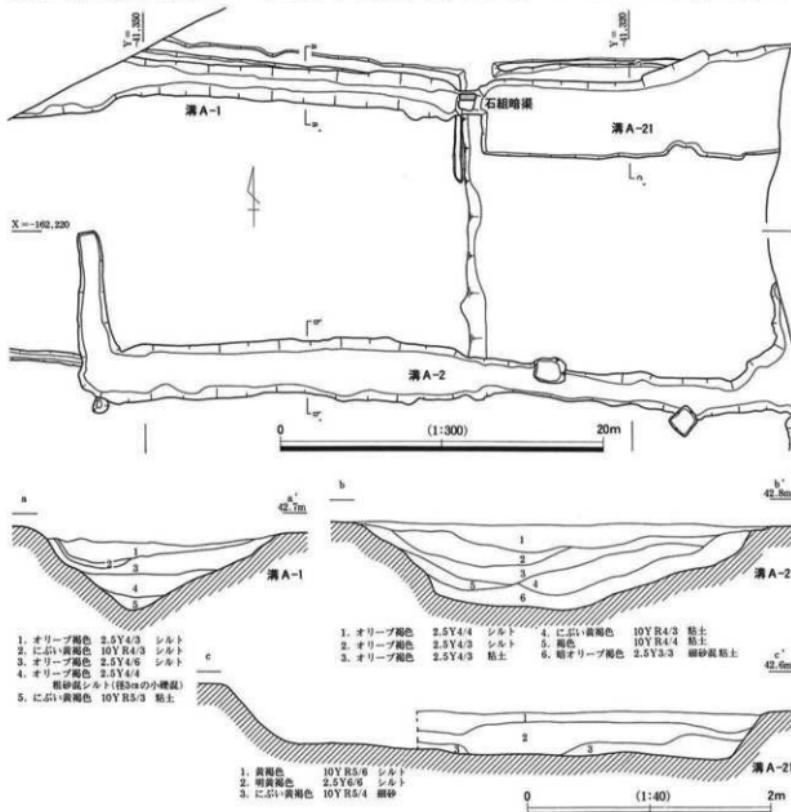
1. 溝

ほぼ東西方向に平行に走る2条の溝が検出されたほか、不定形の小型の溝が数条見つかっている。ここでは、平行に走る2条の溝について記述することとする。なお、北側の溝に関しては、同一の溝と考えることもできるが、ここでは溝A-1と溝A-21に分けている。

(1) 溝A-1 (図I-25, 26, 27、写I-4-2, 3)

低位段丘上で検出され、調査区の北部をほぼ東西方向に横断する溝である。幅約3.3m、深さ約0.6mを測り、断面はV字形を呈する。埋土は大きく3層に分けることができ、上層はオリーブ褐色シルト、中層はオリーブ褐色シルトに粗砂が混入する。下層にはぶい黄褐色粘土層で、粗砂は含まない。

埋土の堆積状況から、滯水状態の時期が長かったことが推測されるため、堀のような性格をもった区画溝と考えられる。底部のレベルはほぼ水平である。中層に粗砂を含んでいることから、後に水路とし



図I-26 A地区東部 溝A-1・溝A-2・溝A-21平面・断面図

第4章 中世の遺構・遺物

I 調査区では、調査区のはば全面にわたって、中世の遺構が展開している。このため、調査区全体を大きく6分割して、記述することとする。基本的にはA・B・C地区を各2分割したものであるが、C地区東部には、関連性の深い8B・9Bトレンチを加えることとした。

第1節 A地区東部（3A～5Aトレンチ）

A地区東部では、包含層のほとんどが削平されているため、各時期の遺構面をとらえることは困難である。しかし、地山面での遺構の残存状況は良好で、ほぼ調査区全域でみられる。古墳時代の掘立柱建物群や土器群の時期以降、12世紀代まで遺構はなく、遺物もほとんど検出されていない。

中世の主な遺構としては、平行に走る2条の溝や土坑・井戸なども検出された。2条の溝は多くの遺物が出土し、ほぼ同時期と考えられる。しかし、近世まで残る溝もあることから、土坑・井戸の時期とはかなり差があり、関連性はみられない。また、柱穴がほとんど検出されていないことから、掘立柱建物の復原はできない。さらに、土坑・井戸も単独で検出されていることから、中世の集落が営まれていた形跡は認められない。土坑の中には、近世に掘削された土坑と切り合い関係のあるものもある。

ここでは、溝・土坑・井戸の順に記述を進めていくこととする。

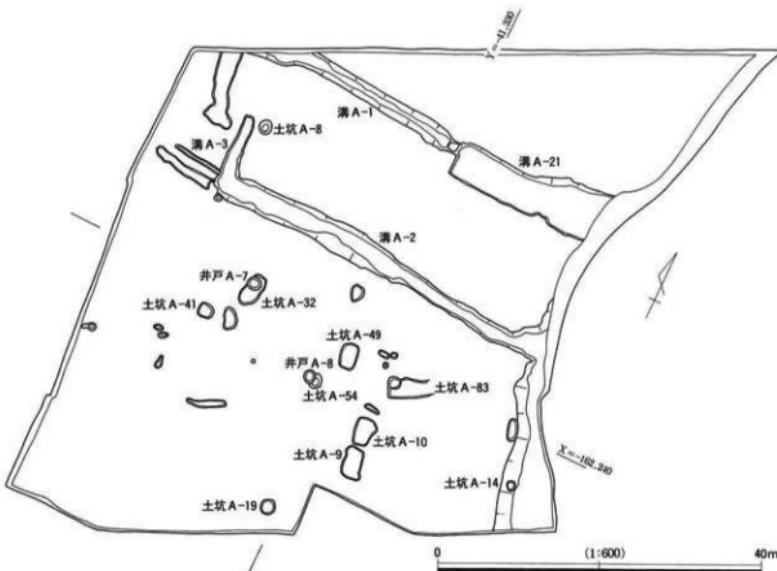
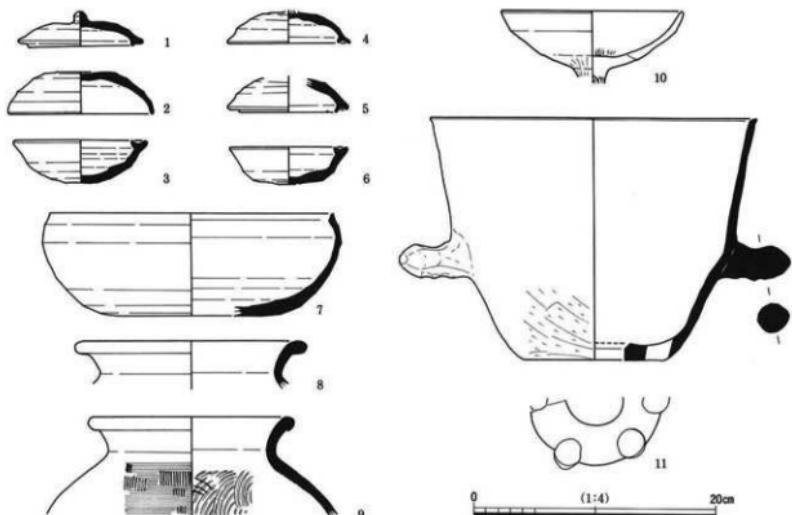


図 I-25 A地区東部 中世遺構略図



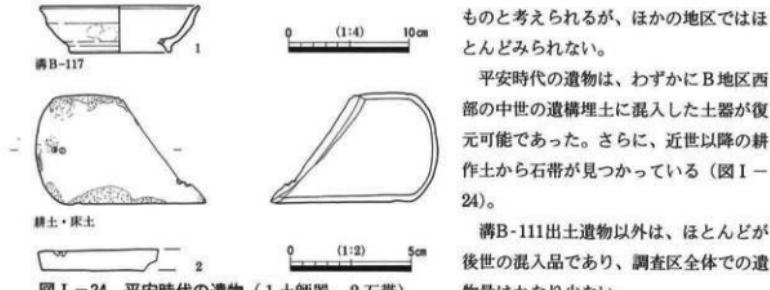
図I-23 飛鳥・奈良時代の土器（溝B-111:1～7,10、自然流路C-1:8,9,11）

測る。断面はU字形を呈しており、埋土は明黄褐色シルトや灰色シルトで、部分的に黄褐色粗砂を含む。遺物はあまり多くは出土していないが、須恵器杯身・杯蓋・鉢・甕、土師器高杯などが細片でみられる。また、北部の西に折れた部分で須恵器大甕が拳大の礫とともに出土した。

第2節 遺物

遺構の時期をあらわす明確な遺物は、溝B-111出土のものに限られる。全域から須恵器を中心とする遺物が出土しているが、復元可能な遺物は図示したもののみである（図I-23-1～7,10）。ほぼ飛鳥時代におさまる時期の遺物であるが、ほかの地区からは同時期の遺物はほとんど検出されていない。

自然流路C-1（図I-22、写I-3-2～5）のほぼ中央部で、底が一段低くなっている部分が検出され、ここから須恵器甕、瓶が出土した（図I-23-8,9,11）。遺物は図示したもののみで、奈良時代のものと考えられるが、ほかの地区ではほとんどみられない。



図I-24 平安時代の遺物（1 土師器、2 石帶）

平安時代の遺物は、わずかにB地区西部の中世の遺構埋土に混入した土器が復元可能であった。さらに、近世以降の耕作土から石帯が見つかっている（図I-24）。

溝B-111出土遺物以外は、ほとんどが後世の混入品であり、調査区全体での遺物量はかなり少ない。

第3章 古代の遺構・遺物

I 調査区において、古代のものと考えられる遺構・遺物はほとんど検出されていない。遺構は、B地区西部でわずかに溝が検出されているのみで、調査区全体の景観を復原することは困難である。また、この時期の包含層も残っていないため、遺物の量もきわめて少ない。かろうじて、B地区西部の溝とC地区東部の自然流路C-1の最下層から復元可能な遺物が出土したにとどまる。ここでは、各時代ごとに分けて、大きく遺構と遺物に分けて、記述を進めることとする。

第1節 遺構

B地区西部において、溝が2条検出されたのみで、土坑などはみられない。他に遺構が存在する可能性は低いと考えられる。また、B地区西部で多く検出されているピットの中にも、当該期の遺物を出土するものがみられないことから、建物の存在も確認できない。さらに、C地区東部の自然流路C-1の最下層から奈良時代の遺物が検出されているが、自然流路の時期を確定することはできない。ここでは、B地区西部で検出された溝の記述にとどめる。

1. 溝

(1) 溝B-101（図I-22）

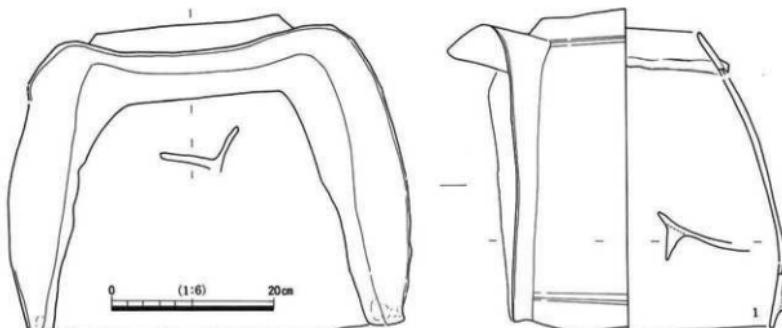
B地区西部の南半部で検出された。南東から北西方向にまっすぐ延びており、北端部は溝B-111につづき、南東端部は調査区外へのびる。遺物が少ないため、時期ははっきりしないが、埋土・方向などから溝B-111とはほぼ同時期と考えられる。

(2) 溝B-111（図I-22、写I-3-1）

B地区西部のほぼ中央部分を南北方向に継断する溝である。東へ約20°振ってほばまっすぐ延びているが、北部でやや西に折れて調査区外へ出る。総延長74mを検出した。規模は幅約1.5m、深さ0.3mを



図I-22 B地区西部・C地区東部 飛鳥・奈良時代遺構略図



図I-21 A地区東部 土器群A-1出土土器(5)

I-48-4)は、把手の上面にヘラで2条切り込みを入れるものもある。

鍋は1点のみ出土し(図I-19-5)、短く外反する口縁部の端部が面をもちわずかに立ち上がる。外面わずかに横方向のハケメを残す。壺は復元完形で、外方へ開く口縁部に球形の体部をもつ(図I-20-1)。鉢は、牛角状の把手を1個付ける平底のもので、砂粒をほとんど含まない胎土である(同図-2,3,8)。高杯は脚部のみ2点出土している(同図-19,20)。

甕には、小型のもの(同図-4~7)と中型のものがあり、中型のものには、口縁部が外反するものと内傾するものがある。(同図-14)は、体部外面に平行叩き目を施す。(同図-16)は、底部がわずかに突出する平底をもち、底部外面に木の葉圧痕を残す。(同図-15,17,18)は、平底の甕と思われ、(同図-21)は、長胴形の体部下半である。

竈は、体部の大半を欠損するが、ほぼ全体形が復元できるもので、奥行より幅があり、焚き口には鉗が付く。口縁部は内傾し端部が丸みをもつ。体部との境目に凸帯を1条巡らす。底部は、中央部が約1cm程隙間を開けられ、体部との境目に凸帯を1条巡らす(図I-21)。

以上、土器について述べたが、泉州地域においてはこの時期の須恵器は大量に出土するものの、土師器は数少なく、残存状態も悪いために復元できるものも少なく、報告例が少ないのが現状である。時期決定がし易い須恵器に目がゆきがちであるが、土師器も丁寧に接合作業をすれば形の復元できるものがあることが、整理作業の結果として認識された。

4. 小結

古墳時代の遺構は、A地区東部で検出されたのみである。建物群が調査区の中央部から南側では検出されていないことや、井戸や土坑、溝などもみられないことから、集落は調査区の北側に拡がるものといえる。建物間の重複はなく、あまり長期間続いた集落とは考えられない。

西除川西岸の緩斜面で土器群A-1が検出されたが、遺物の時期差はあまり認められず、短期間に廃棄されたものといえる。この中で、土師器竈を中心として土師器瓶や甕、須恵器高杯・杯などがまとめて検出されていることから、意図的な土器の廃棄がうかがわれる。また、焼成不良のものや焼け歪みのある須恵器もわずかにみられることから、日常生活による廃棄物のみとは考えにくい。土器群A-1が集落から西除川を臨む場所に位置していることは示唆的である。

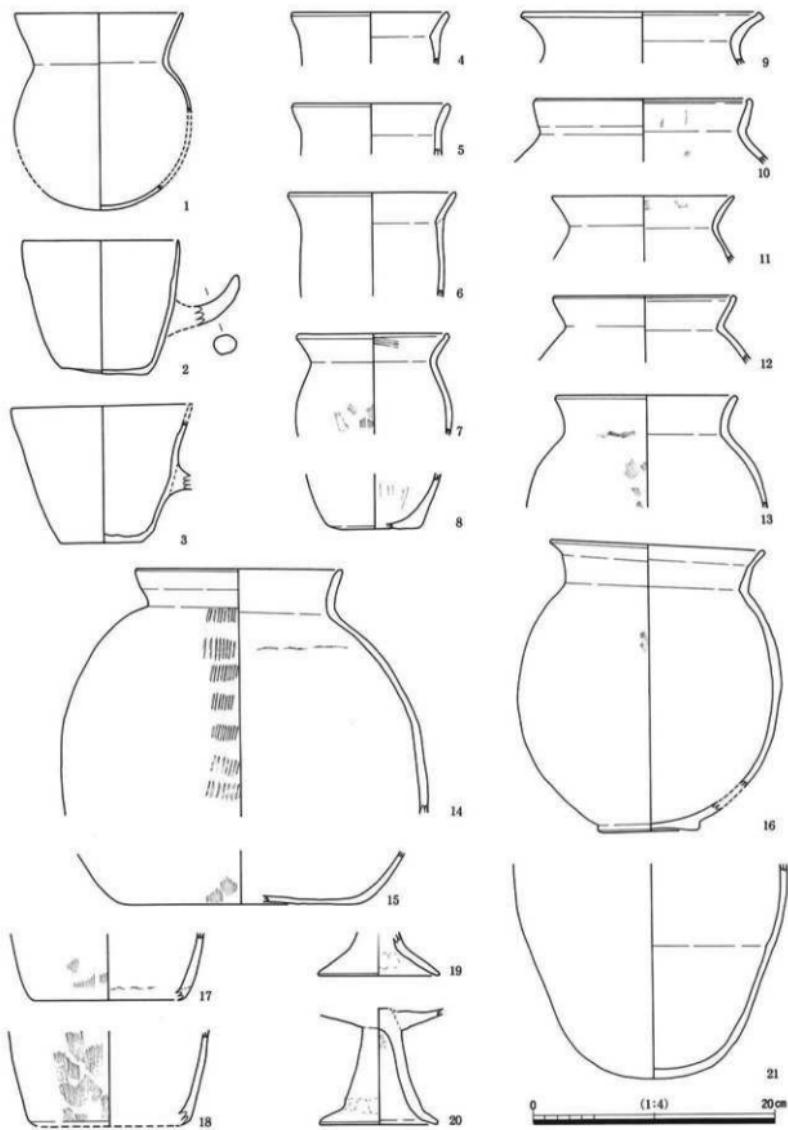


図 I-20 A地区東部 土器群A-1 出土土器(4)

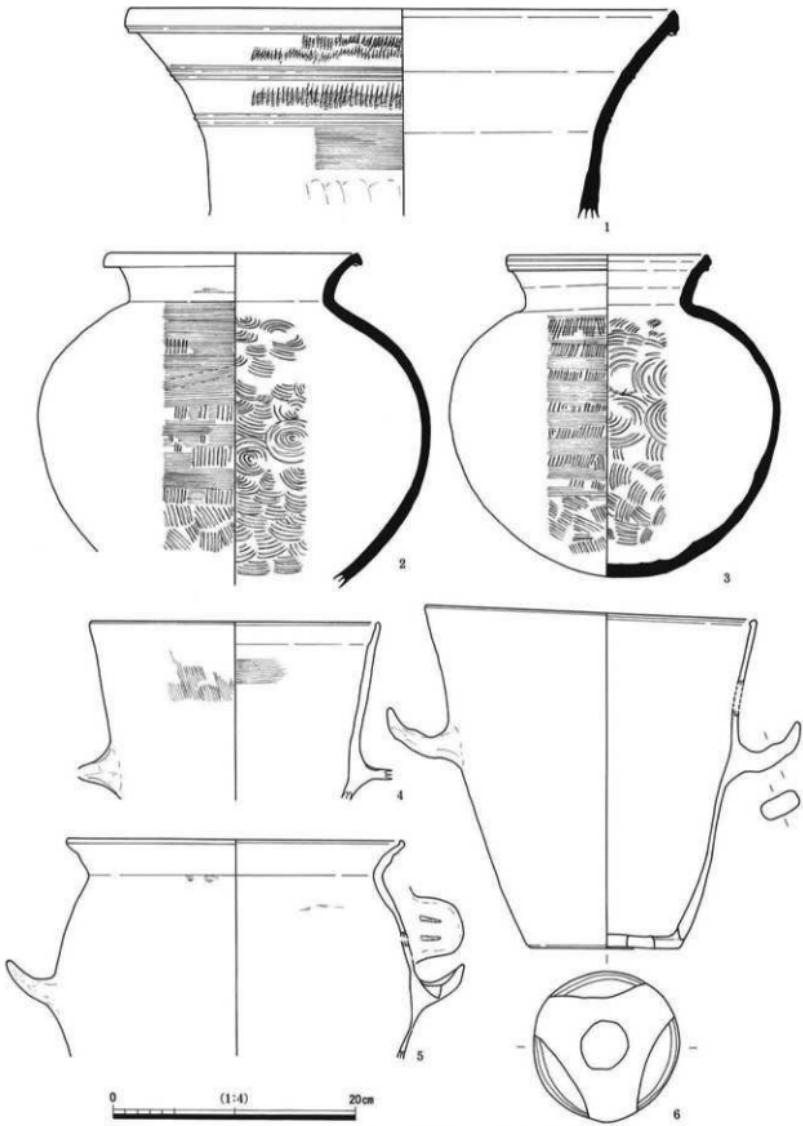


図 I -19 A 地区東部 土器群A-1 出土土器 (3)

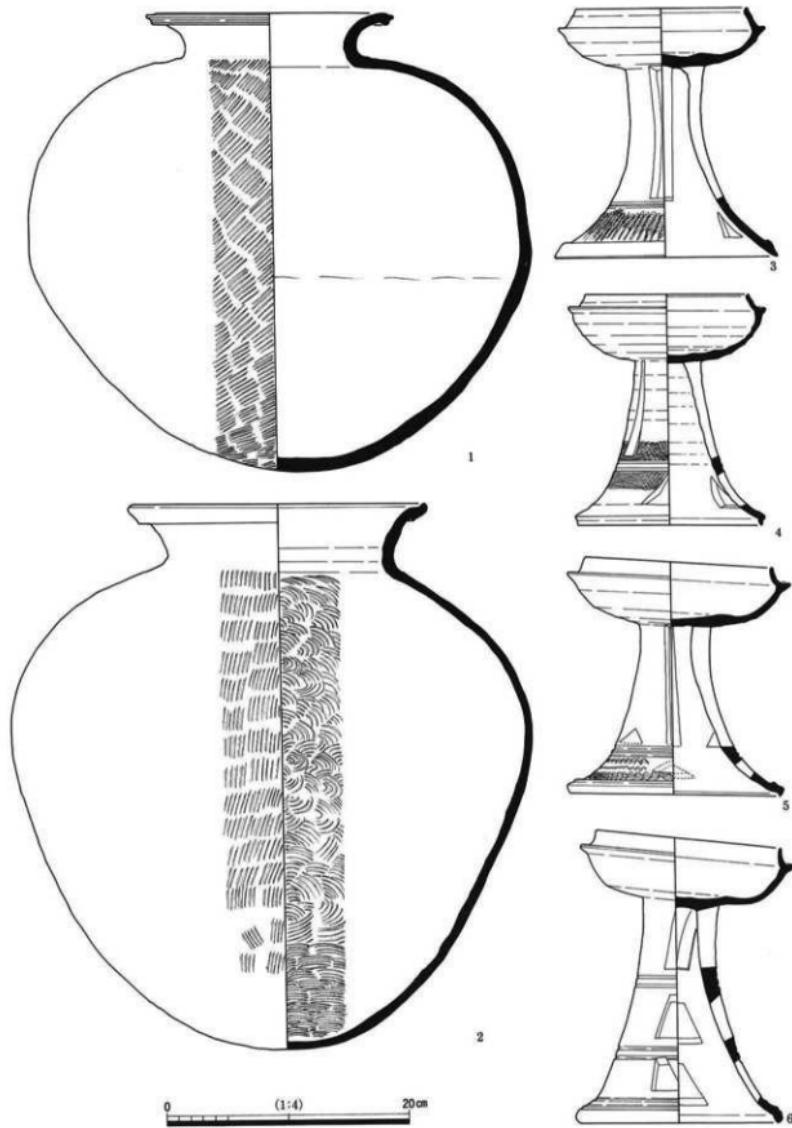


図 I - 18 A 地区東部 土器群A-1 出土土器 (2)

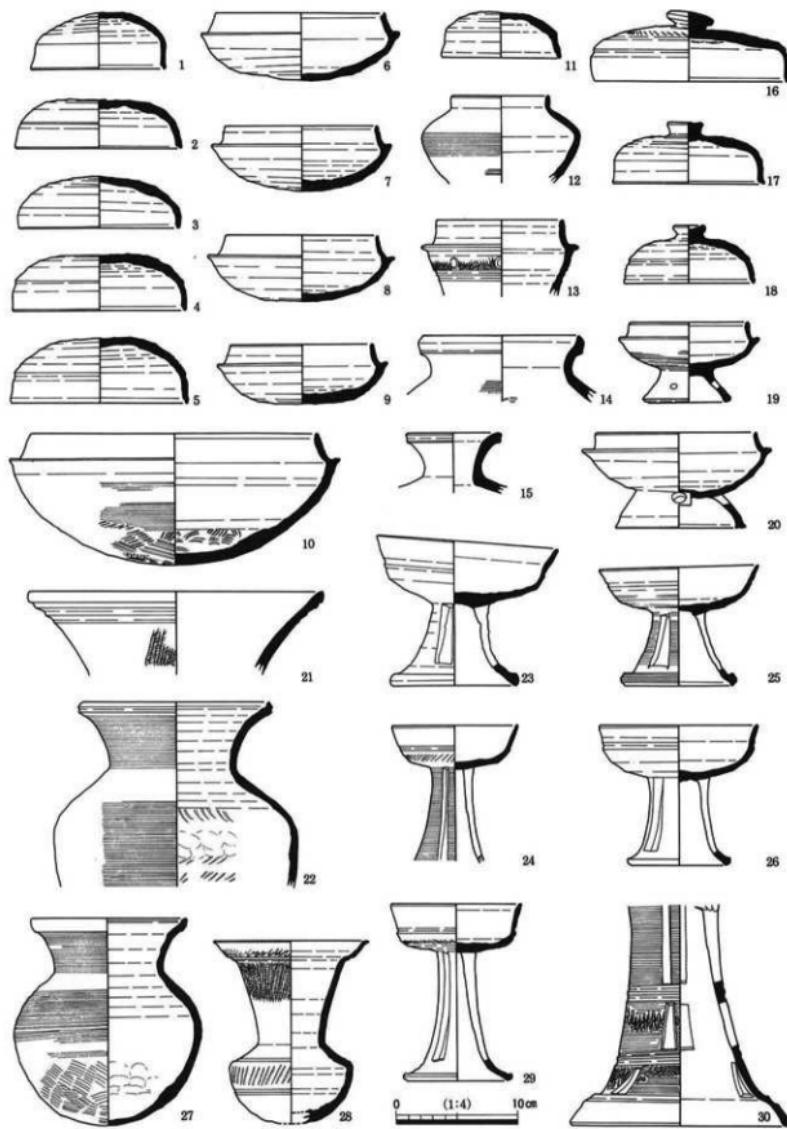
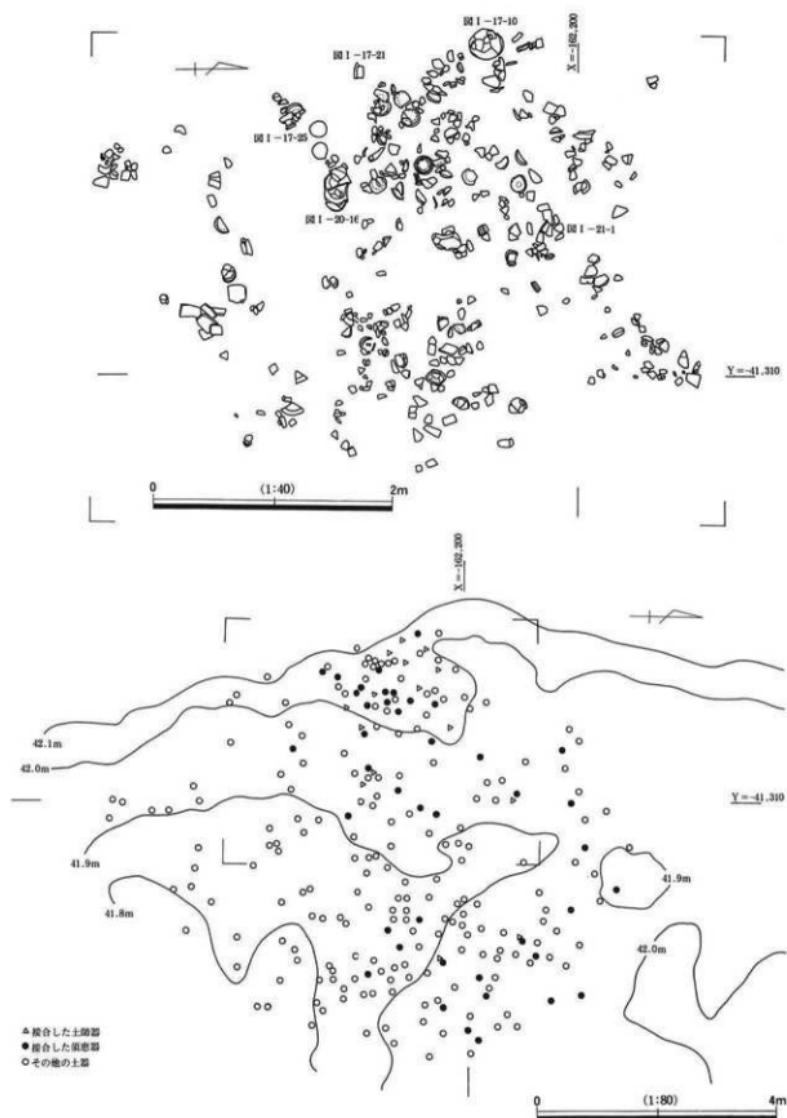


図 I-17 A地区東部 土器群A-1出土土器(1)



図I-16 A地区東部 土器群A-1土器分布図・細部

の中型のもの（図 I - 18-1,2）があり、いずれも無紋である。大型のもの（図 I - 19-1）は、口頸部のみ残存しており、波状紋と凹線紋を交互に施している。

土器には、瓶・鍋・壺・把手付き鉢・高杯・甕・竈などが出土している。いずれも表面が磨滅しており、調整がほとんど残っていないものである。

瓶は、図示した以外に口縁部破片が 6 点出土しており、1 点外反する口縁部をもつものがある。器壁が 3 mm 前後と薄いものが多い。（図 I - 19-6）は、復元完形で、直口の口縁部端部が内方へわずかに肥厚する。口径が底径の約 2 倍あり、牛角状の把手を 2 個一対つける。底部は中央に円孔、周囲 3 方に椭円形の透かしを穿つ。底部外面に黒斑が残る。砂粒をほとんど含まない胎土である。（同図-4、写

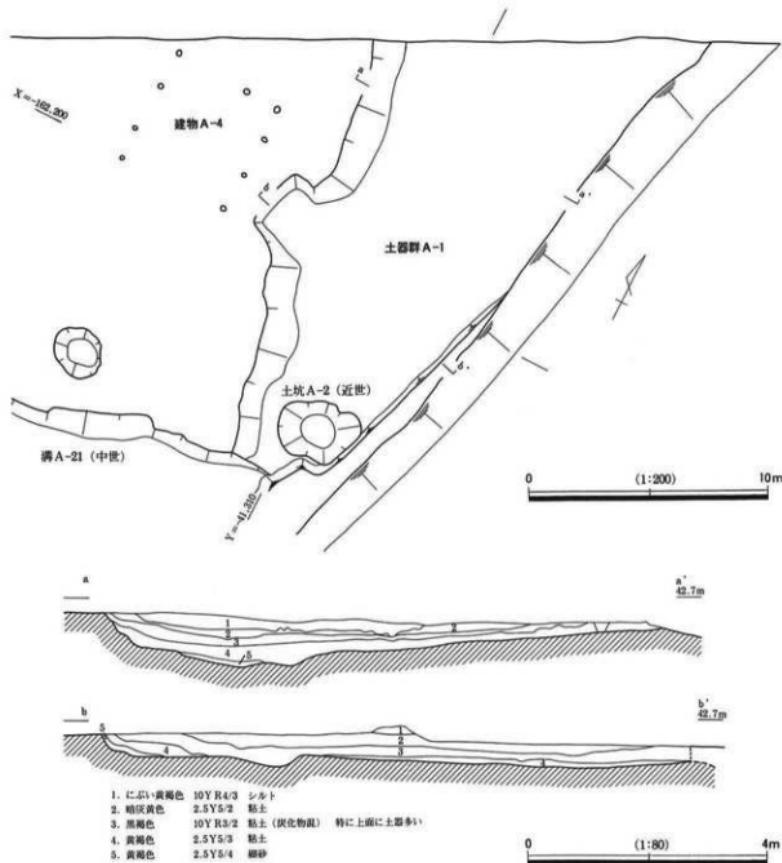


図 I - 15 A 地区東部 土器群A-1 平面・断面図

したものか、人為的に整地したものかはっきりしないが、低位段丘が西除川に向かって落ちる東端部の緩斜面を利用している。土器群の広がりは、ほぼ3Aトレンチ内におさまっており、南側ではまったくみられない。調査区北側に広がる可能性もあるが、現地表面ではこの緩斜面は認められない。

土器群A-1の土層は、ほぼ4層に分けることができるが、遺物の大部分は3層の黒褐色粘土層に集中している。3層に土器が廃棄された後には遺物は混入しておらず、人為的に埋められた形跡もみられないことから、段丘上の遺物包含層の遺物がこの部分に集中したものとは考えられない。西側の建物群は出土遺物などからほぼ同時期のものと考えられ、土器群A-1と集落は関連のあるものといえる。ただ、集落内の日常生活に伴う土器廃棄の場と考えるには問題があるようである。

3. 土器群A-1の遺物（図I-17~21、写I-42~49）

土器群A-1から出土した遺物は、コンテナにして約30杯を数える。大半が須恵器で占められるが、土師器も若干出土している。

須恵器には、蓋杯・高杯・高杯蓋・短頸壺・短頸壺蓋・甌・提瓶・横瓶・壺・甕などがあるが、蓋杯が大半を占め、他は数える程である。

蓋杯は、完形のものが多く、生焼け・焼け歪みのあるものもある。杯蓋は大型化し、口縁端部は内傾する段をもつものと内傾する凹面をもつものがある。天井部との境目は形骸化した稜線をもつものと丸みをもつものがある。天井部内面に一方方向のナデを施す。杯身も大型化し、口縁端部が丸みをもつものと内傾する段をもつものがある。底部は丸みを帯びる。底部内面に同心円紋當て具痕を残すものと一方方向のナデを施すものがある。（図I-17-10）は、口径約23cmの大型の杯身で口縁端部が丸みをもち、体部上半外面に回転カキメを施し、底部外面に平行叩き目、内面に同心円紋當て具痕を残す。

高杯には、短脚1段透かし・長脚1段透かし・長脚2段透かし・長脚3段透かしのものがあり、その蓋がある。短脚のものは、有蓋高杯で、口縁端部は丸みをもち、3方に円形の透かしを穿つ。長脚1段透かしの高杯は、いずれも無蓋の高杯である。長脚2段・3段透かしの高杯はいずれも有蓋のもので、（図I-18-3~5）は、杯身と同様の杯部に比較してやや太い脚が付く。（3,4）は脚柱部に長台形透かし、脚台部に三角形透かしを穿つ。（5）は、脚柱部に長台形と三角形の透かしを交互に穿ち、脚台部に三角形の透かしを穿っている。脚柱部と脚台部の境目に凹線紋を施し、脚台部に波状紋を施す。

（同図-6）は、前述の高杯と同様な形態で、脚柱部に長台形と台形の透かしを2段、脚台部に台形透かしを1段穿ち、透かしを区切るかたちで凹線紋を施している。（図I-17-30）は、脚部のみ残存しており、長方形・台形・台形の3段透かしを穿ち、透かし間に凹線紋を施している。前述の高杯と同様の形態と思われるが、台付き壺の脚部の可能性も考えられる。高杯の蓋には、大・中・小と3種類が出土しており（図I-17-16~18）、（16）は天井部に列点紋を施している。

短頸壺は、1点のみ出土しており（同図-12）、その蓋が2点（同図-1,11）ある。

甌は1点のみあり、口縁部の大部分と体部の2/3を欠損する。透かし孔は不明である。口縁部と頸部に波状紋、体部に凹線紋間列点紋を施している（同図-28）。

提瓶・横瓶は、口縁部破片が各1点ずつ出土するのみである（同図-14,15）。

壺には、広口壺と有蓋壺があり、広口壺には、無紋で小型のもの（同図-22,27）と、大きく開く口縁部をもち、凸線紋・波状紋を施すもの（同図-21）がある。有蓋壺は、1点のみ口縁部破片があり、頸部に波状紋上竹管紋・凹線紋を施す（同図-13）。

甕は、完形になるものが3点あり、器高30cm前後の小型のもの（図I-19-2,3）と、器高40cm前後

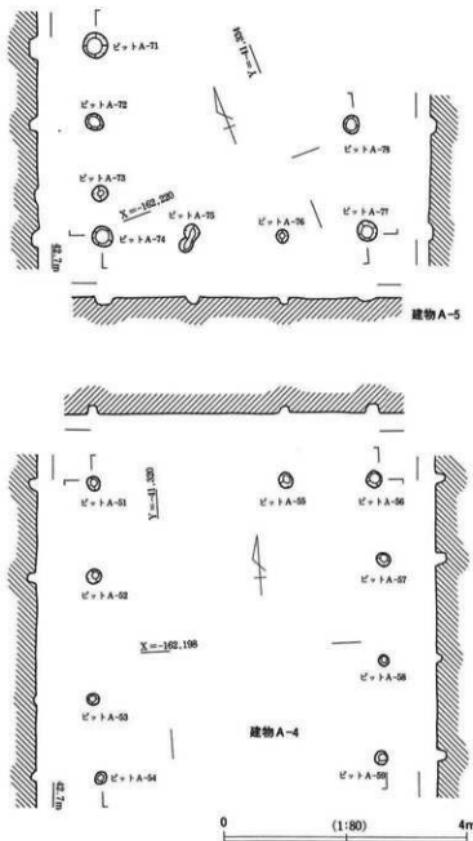


図 I - 14 A地区東部 建物A-4・A-5平面・断面図
は、住居や倉庫を含む集落の一部と考えられ、後述する緩斜面の土器群A-1との関連が興味深いところである。建物間に重複関係がまったくないことや、埋土に共通性が認められることから、あまり長い期間続いた集落とは考えられない。

2. 土器群A-1 (図I-11,15,16,写I-2-1~3)

3 Aトレンチの低位段丘東端部の緩斜面上で、ほぼ一面にわたって土器群が検出された。南北15m、東西7mの範囲に土器が点在しており、集中している部分も數ヶ所みられることから、意図的に配置されたものと推定できる。特に、土器群のほぼ中央の斜面上部では、土師器竈を中心として須恵器高杯や杯などがまとまって検出されており、完形に近いものが多い。土器群は、あまり重なりあった状態では検出されてはおらず、時期差もあまりないことから短期間に廃棄されたものといえる。自然地形を利用

る。柱穴掘方はほぼ円形で、径18~26cm、深さ5~17cmを測る。柱穴からは遺物は出土していない。

建物A-1・建物A-2や建物A-3とは主軸方向が一致しておらず、関連性は認められない。

(5) 建物A-5 (図I-11,14)

建物A-1の南部で検出された。東西方向が長い長方形を呈していると考えられるが、削平による柱穴の消滅などで、規模ははっきりしない。検出された柱穴の復原により、現状では東西3間(4.3m)×南北3間(3.2m)の建物と推定した。面積は約13.8m²である。さらに北へ広がり、建物A-1と重複する可能性も考えられるが、柱穴は検出されなかつた。

主軸方向はN-20°-Eで、ほかの建物とはやや方向が異なる。北側の東西列と東側の南北列の柱穴は見つかっていないが、検出された柱通りから、柱間は一定ではなく、かなり差のあることがわかる。柱穴掘方はほぼ円形を呈しており、径20~42cm、深さ5~13cmを測る。柱穴から遺物は出土しておらず、時期は特定できない。

は少ないとと思われる。柱穴掘方は円形であるが、深さは一定ではなく、径24~38cm、深さ4~22cmである。埋土は建物A-1と同様に黒褐色シルトが基本であるが、遺物は検出されていない。

建物A-2の東端の南北方向の柱通りと建物A-1の西端の南北方向の柱通りが一致することや、埋土に共通性があり、規模が同じであることなどの関連性が認められるため、建物A-1と建物A-2はほぼ同時期に存在していたと考えることができる。なお、建物A-1・建物A-2と主軸方向が同じ他の掘立柱建物は検出されていない。

(3) 建物A-3(図I-11,13)

写I-1-3)

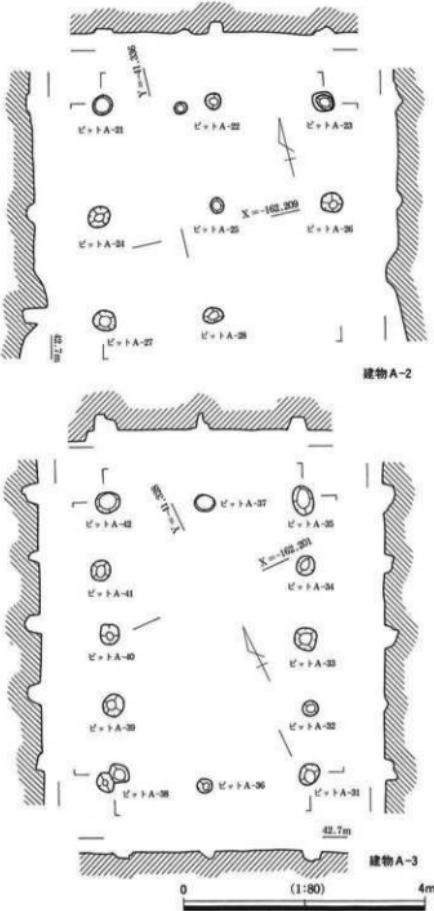
建物A-2の北側で検出された。東西2間(3.2m)×南北4間(4.5m)の建物で、主軸方向はN-24°-Eである。建物A-1・建物A-2とは方向が異なる。東西列の柱間が長く、平均は東西1.6m、南北1.1mである。面積は約14.4m²である。柱穴掘方はほぼ円形であるが、検出面の削平などにより、深さは一定ではなく、径24~42cm、深さ7~30cmを測る。埋土は褐灰色シルトが基本で、明黄褐色シルトが混入している。

遺物は、土師器の細片が少量出土する程度で、時期は確定できない。建物A-1・建物A-2と主軸方向が異なっていることや、埋土が若干異なる点などから、関連性はあまりみられない。しかし、重複関係がなく、遺物の時期差もあまり認められないことから、建物A-3が住居、建物A-1・建物A-2が倉庫として同時に存在していた可能性を考えることができる。

(4) 建物A-4(図I-11,14,15)

写I-1-4)

建物A-3の北東部で検出された。東西3間(4.7m)×南北3間(4.9m)の建物で、一辺約4.8mの正方形を呈している。主軸方向はN-2°-Eで、ほぼ方位と一致している。検出面の削平などにより、東西列の柱穴はほとんど検出できなかったが、南北方向の柱通りからの推定で3間とした。柱間は一定ではなく、かなりの差があるが、平均は1.6mである。面積は約23.0m²である。



図I-13 A地区東部 建物A-2・A-3平面・断面図

第2節 古墳時代の遺構・遺物

当調査区において検出した古墳時代の遺構・遺物は、ほぼA地区東部に限られる。ただ、包含層がほとんど削平されているため、古墳時代の遺構面をとらえることは困難である。その中で、低位段丘東部の5 Aトレンチにおいて、須恵器が多く含む古墳時代包含層が部分的に残存していた。

3 Aトレンチの低位段丘東端部の緩斜面で、多量の土器が散乱した状態で検出された。その西側では、地山面でほぼ同時期と考えられる建物群が検出されている。4 Aトレンチでは、同時期の遺構や遺物はほとんど検出されていない。古墳時代の遺構群は、調査区外の北側へ拡がるものと推定される。

1. 建物（図I-11）

3 Aトレンチの低位段丘上の東半部で検出され、形状の不確定な建物も含めて、5棟分の復原ができる。柱穴はかなりしっかりとおり、掘立柱建物の重複関係は認められない。付近で同時期の土坑や井戸などは検出されていないことから、集落の中心は調査区の北側にあるものと考えられる。

（1）建物A-1（図I-11,12、写I-1-1）

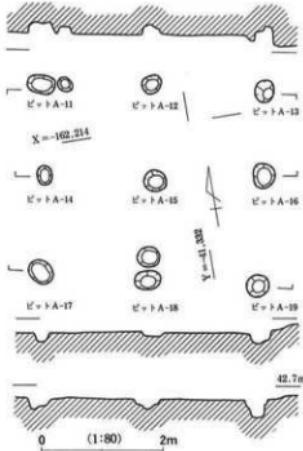
3 Aトレンチの低位段丘上のほぼ中央で検出された。東西2間（3.6m）×南北2間（3.2m）の総柱の建物で、主軸方向はN-10°-Eである。東西列の柱間がやや長く、平均は東西1.8m、南北1.6mを測る。面積は約11.5m²である。すぐ北側に中世の溝A-1が掘削されているためはっきりしないが、建物が北に広がる可能性は少ないものと考えられる。柱穴掘方はほぼ円形であるが、深さは一定ではなく、径20~50cm、深さ10~30cmである。埋土は黒褐色シルトが基本で、浅黄色シルトのブロックや炭化物が混入している。遺物は、土師器や須恵器の細片が少量出土する程度で、時期は確定できない。

（2）建物A-2（図I-11,13、写I-1-2）

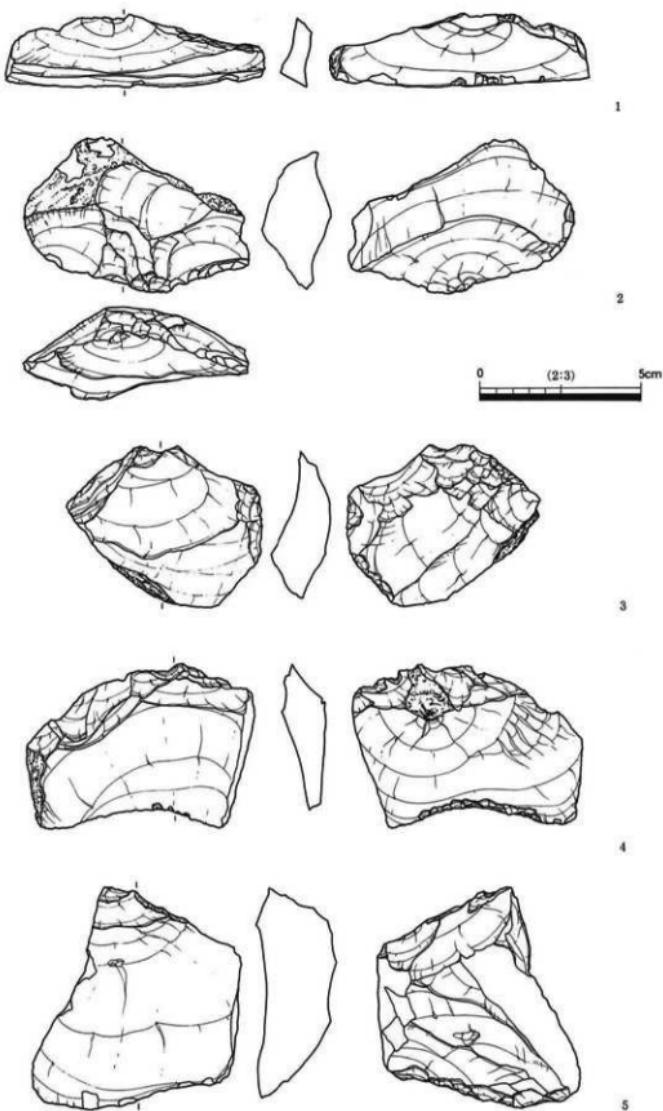
建物A-1の北西部で検出された。東西2間（3.7m）×南北2間（3.5m）の総柱の建物である。主軸方向はN-10°-Eで、建物A-1と同じ方向である。東西列の柱間がやや長く、平均は東西1.8m、南北1.7mを測る。面積は約13.0m²である。南側の柱穴列は、中世の溝A-1の掘削により削平をうけているが、南にのびる可能性



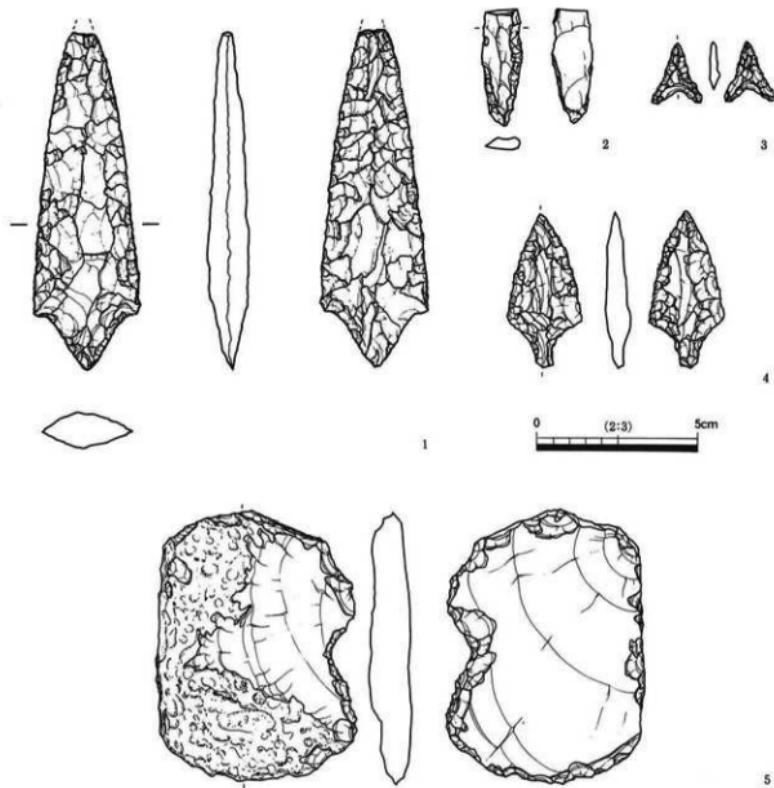
図I-11 A地区東部 古墳時代建物群略図



図I-12 A地区東部 建物A-1



図I-10 石器(2) [1翼状剥片, 2石核, 3~5不定形刃器]



図I-9 石器（1）〔1有舌尖頭器，2ナイフ形石器，3縄紋石鎌，4弥生石鎌，5スクレイパー〕
2. 縄紋・弥生時代の遺物

縄紋・弥生時代についても、旧石器時代と同様に包含層や遺構は、検出されていない。遺物はいずれも混入品であり、石器のみで、縄紋土器や弥生土器などは出土していない。

縄紋時代の石器は、石鎌と不定形刃器である。A地区東部とB地区西部、C地区で検出されているが、中世の遺構埋土や包含層から見つかっている。ただ、C地区東部で検出されたものは、地山上面からの出土であるため、この部分に縄紋時代の包含層が残存している可能性がある。

弥生時代の石器は、石鎌と石鎌未製品である。A地区東部とB地区東部、C地区で検出されているが、ほかの石器と同様に、中世の遺構や包含層から出土している。A地区東部で検出されたものは、近世の整地層の中から見つかったものである。

C地区東部の3Cトレーナーから、旧石器～縄紋・弥生時代の石器が出土していることから、この部分を中心に包含層が存在していた可能性がある。

第2章 古墳時代以前の遺構・遺物

I 調査区では、古墳時代以前の遺構として、古墳時代の掘立柱建物と土器群が検出されたのみで、これをさかのぼるものは見つかっていない。遺物では、旧石器～繩紋・弥生時代のものと考えられる石器が検出されているが、良好な包含層は残っておらず、いずれも混入品である。ここでは、旧石器～繩紋・弥生時代の遺物と古墳時代の遺構・遺物に分けて記述することにする。

第1節 旧石器時代～縄紋・弥生時代の遺物

旧石器時代~繩紋・弥生時代の遺物は、いずれも石器で、中世以降の遺構埋土や包含層から出土したものである。中世の整地層などにこの時期の遺物が混入していることから、調査区周辺に包含層が存在した可能性は考えられるが、調査区内では良好な包含層は検出されていない。

石器は、ほぼ調査区全域から出土しており、特に集中する地点はみられない。このため、分布状況から当時の生活域を推定することはできない。また、遺構埋土から出土するものが多く、原位置を保っていると考えられるものはほとんどみられない。

1. 旧石器時代の遺物

旧石器時代の石器と考えられるものは、有舌尖頭器・翼状剣片・ナイフ形石器・石核である。B地区とC地区で検出されているが、ほとんどが中世の遺構や包含層から見つかっている。有舌尖頭器のみC地区東部の谷状地形の地山上面で検出されたことから、原位置を保ったものと考えることもできるが、周辺では同様の出土状況の石器はみられないため、はっきりしない。



図 I-8 石器出土地点分布図

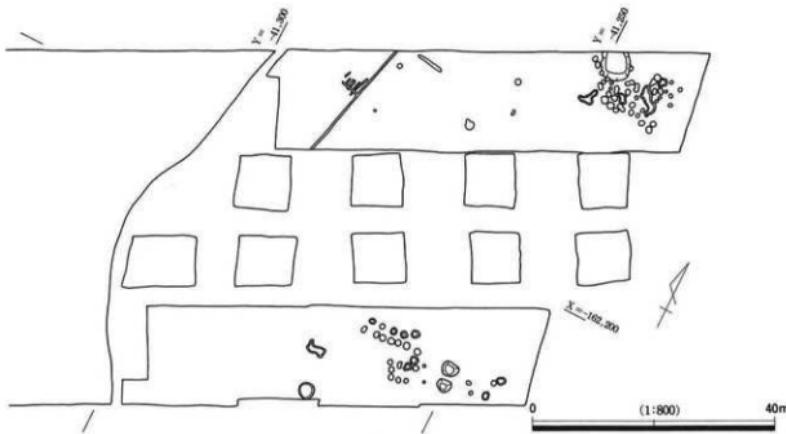


図 I - 7 A 地区東部 谷底平野部分平面図

から出土しており、16世紀を中心とした時期の土器が比較的まとまっている。

A地区西部では、焼土や炭化物、炉壁片、スラグなどが出土した土坑群や井戸などが検出されている。さらに、包含層から磬の鉄型が出土していることから、明確な工房跡の復原はできないものの、铸造関連の遺構が存在していた可能性は高い。遺物の時期は13～14世紀を中心としており、特に井戸から比較的多くまとまって出土している。

B地区東部では、区画溝に囲まれた屋敷地が検出されている。溝からは多くの瓦がまとまって出土しており、寺院関連の屋敷と推定される。溝のなかには石組が残っているものもあり、丁寧につくられたことがわかる。建物の配置などは復原できなかったが、溝や柵の方向に規格性が認められる。遺物は13～15世紀を中心としており、陶磁器や瓦質火鉢や香炉などの特殊品が多く出土している。また、仏教関連の遺物として、瓦質僧形像や瓦質護摩鉢などもみられる。

B地区西部では、堀に囲まれた城郭が検出されている。内部は、溝や土坑がまとまっているほか、柱穴が密集しており、掘立柱建物が何度も建て替えられたことを物語っている。堀のすぐ内側には、土墨の痕跡も認められ、かなり規模の大きい城郭ということができる。遺物の量は比較的小ないが、13～14世紀を中心とした時期の土器がまとまっている。

C地区東部では、包含層は残存していたが、遺物の量が少なく、遺構もほとんど検出されていない。C地区西部では、掘立柱建物や溝、土坑がまとまっているが、南端部に集中しており、集落の中心は調査区外の南側にひろがる。遺物の量は少ないが、13～14世紀を中心とした土器がみられる。また、土坑から炉壁片やスラグが出土しており、铸造関連の遺構が存在した可能性は高い。

(4) 近世

近世の遺構は、現在の集落に接するA地区東部に限られ、溝や土坑がまとまって検出されている。遺物もA地区東部の出土が多く、ほかの地区ではほとんどみられない。谷底平野部では、近世以降の耕作の痕跡が残っているのみで、遺物もほとんど出土していない。

層除去後はほとんどが地山面となるが、この面での遺構の残存状況は比較的良好である。

A地区西部もA地区東部と同様、削平により包含層はほとんど残っていない。包含層は黄褐色シルトが中心で、これに地山の褐色粘土などが混入している部分もある。A地区東部の低位段丘端部では、基本的に地山はシルト層であるが、A地区西部では、礫を多く含む部分や粘土層の部分も認められるなど、一様ではなく、洪積世に複雑な地層が形成されたことがわかる。

B地区東部の東半部は、大規模な現代の攪乱が多くみられ、包含層がほとんど削平をうけているため、遺構の残存状況も良好ではなかった。地山はA地区西部から続く、礫を多く含むシルト層である。これに対し、西半部では削平をうけたが、地山に達するほどの大きな攪乱はなく、遺構の残存状況は比較的良好であった。包含層はにぶい黄橙色シルトが中心で、粗砂が混入している。また、西半部の地山は、東半部とは異なり、礫を含まないシルト層である。

B地区西部は、低位段丘上の平坦部があり、地山がシルト層で形成されているが、部分的に段丘疊層もみられる。東端は低い段丘崖となり、現地表面でB地区東部との間でやや比高差が認められる。ほぼ全域で包含層がみられ、遺構の残存状況も良好である。包含層は黄褐色シルトが中心で、細砂が混入する部分もある。中世以前の遺物が検出されており、近世以降のものはみられない。

C地区東部は、地表面がほぼ平坦な地形であるが、9B・2Cトレーニングで南北方向に走る浅い谷状地形が認められた。包含層は良好に残存していたが、全体に遺物の量が少ない。谷部の底からは自然流路C-1が検出されている。8Bトレーニングは、この谷を臨む平坦部にある。

C地区西部のうち、4Cトレーニングは谷状地形の西側平坦部にあたるが、全体に削平を受けており、包含層の残存状況が悪い。5C～7Cトレーニングでも、同様に削平を受けているため、包含層はほとんど残っていない。C地区的地山は全体にシルト層で、礫を含む部分があまりみられない。

2. 遺構・遺物の概略

(1) 古墳時代以前

西除川をはさんで対岸の太井遺跡では、旧石器時代や縄文時代晩期の包含層がわずかに残存しているが、当調査区では弥生時代以前の包含層や遺構は検出されていない。わずかに混入品として、中世以降の包含層や遺構埋土などから石器が検出されているのみで、土器はみられない。

古墳時代の遺構は、A地区東部の低位段丘東端部で建物群と土器群が検出されているが、包含層はほとんどみられない。ほかの地区では、混入品として、須恵器が数点出土しているのみで、遺構は検出されていない。

(2) 古代

古代の遺構は、わずかにB地区西部で飛鳥時代の溝が検出されているのみで、ほかに遺構はみられない。全体に遺物の量は少なく、C地区東部の自然流路C-1から奈良時代の遺物が出土しているほかは、混入品もほとんどみられない。A地区東部で検出された古墳時代の遺構の後、平安時代末までの時期に関する遺構・遺物はあまり検出されておらず、生活の痕跡はみられない。

(3) 中世

中世の遺構・遺物は、当調査区の成果のほとんどを占める。ほぼ調査区全体で検出されており、包含層も残存している。遺構は比較的まとまった単位でとらえることができ、屋敷地や集落と考えることが可能である。

A地区東部では、屋敷地などを区画する溝とともに土坑や井戸が検出されている。遺物は主として溝

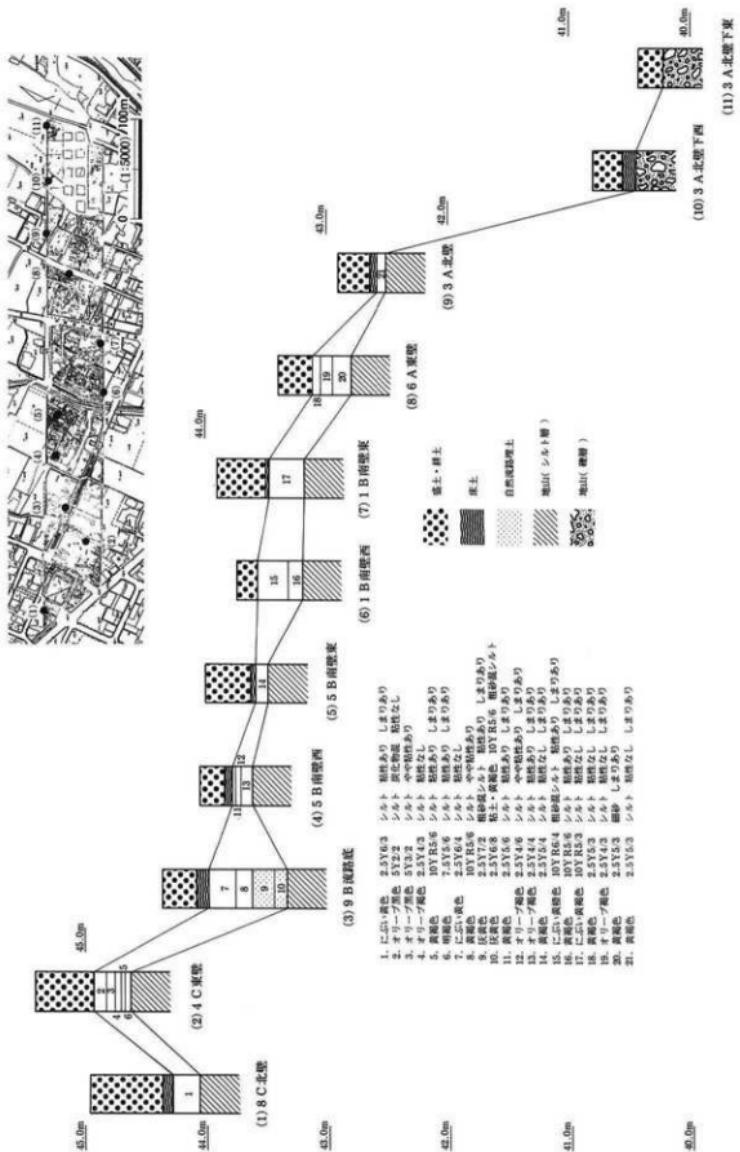




図 I - 5 地区割設定図〔小区画〕



図 I-4 地区割設定図〔中区画〕

3. 調査の方法

発掘調査は、まず現代の耕作土および盛土層をバックホーによって除去する機械掘削を行い、その下に堆積している包含層や遺構については、人力掘削を行った。最終遺構面では大阪府教育委員会の立会をうけ、重要と判断された遺構については、厚さ20cmの海砂を用いた保存処置を行っている。当調査区では、B地区西部の城館跡などが対象となっている。

遺構の実測は、遺物出土状況図の作製など、個別に手書きにより行っているものもあるが、最終遺構面の測量はほぼ全面を通じて、ヘリコプターを用いた写真測量により、20分の1の平面図を作製している。また、遺物などの密集する部分では、ブームを用いた垂直撮影による写真測量を行い、10分の1の平面図を作製している。さらに、20分の1の平面図を編集することにより、100分の1の遺構平面図も作製している。

遺物の取り上げは、今までに当センターが使用した地区割を用いており、通常は10m×10mの単位が最小となる。この地区割は国土座標を基本としており、当調査区の地区割については100m四方の第III区画（図I-4）のほか、10m四方の第IV区画についても、調査区にかかる部分については明記している（図I-5）。

第3節 調査成果の概要

1. 基本層序

当調査区は、第1節でも述べたように、西除川西岸の谷底平野と低位段丘上に立地しており、全体を通しての鍵層となるような堆積層はみられない。調査時には、調査区全体を通じてトレンチ北壁や南壁などの、東西方向の土層断面図を作成するように努めたが、同じ条件で作成することが困難な地区もあったため、調査区全体を横断する土層図は作成できなかった。このため、各調査区における典型的な土層を示す部分をまとめて、調査区を東西方向に概観する土層柱状図を作成した（図I-6）。

A地区東部の谷底平野部分では、包含層がほとんど残っておらず、近代以降の耕作跡がみられる程度で遺物も出土していない。耕作土や床土層の下が砂礫層の部分が多い。開発などにより、本来存在していた包含層が削平されたか、西除川の流れで流失した可能性も考えられる。前年に行われた、西除川東岸の太井遺跡での谷底平野部の調査の際、砂礫層から遺物が出土していないことから、今回の調査では、砂礫層を地山として掘り下げなかった。

低位段丘上においても、近世の開発に伴った整地によって、包含層はほとんど削平されている。床土

B地区東部（1B～3B）では、北側の府道部分が今回の調査対象範囲外であったため、南側の府道部分の調査のみを先行して行った。さらに近畿道部分（2Bトレンチ）は、府道大阪狭山線で下水道工事が並行して行われていたことに伴い、分割して調査を行った。C地区では府営住宅の敷地などがあり、区画が細分化されていたため、3分割する調査方法はとれなかった。

調査着手前に大枠のトレンチを設定していたが、未買収地などの問題のため、調査時期の前後するところが生じている。また、調査の後半では、並行する工事の進捗状況により、小面積の調査が数回にわたって行われることになったため、C地区ではかなり細分化されたトレンチとなっている。

なお、A地区東部では谷底平野部から低位段丘上にわたる、長さ約140mのトレンチを設定していたが、谷底平野部の近畿道部分が橋脚部のみの調査となつたため、3A～5Aトレンチの形状がやや複雑なものとなっている。さらに、東側の調査区東端部分には、1A・2Aトレンチを設定していたが、調査を行わなかったため、欠番となっている。

2. 調査の経過

発掘調査の大半は1987年度に行ったが、未買収地として残っていたB地区の一部とC地区の一部の調査は1988年度以降に行なった。また、B地区とC地区を区画する道路の付け替えに伴う調査も追加され、I調査区の現地での発掘調査は1990年度に完了した。各トレンチの発掘年度および担当者、既報告については以下の表の通りである。

表 I - 1 I 調査区トレンチ別調査年度表

トレンチ	調査年度	調査担当者	概要報告書
3A～6A	1987年度	金光正裕・中村淳磯	『日置莊遺跡(その1)調査の概要』1988
1B～4B	1988年度	中村淳磯	『日置莊遺跡(その5)調査の概要』1989
5B～8B	1987年度	金光正裕・中村淳磯	『日置莊遺跡(その1)調査の概要』1988
9B	1988年度	中村淳磯	『日置莊遺跡(その5)調査の概要』1989
1C・3C	1988年度	中村淳磯	『日置莊遺跡(その5)調査の概要』1989
2C・4C～8C	1987年度	金光正裕・中村淳磯	『日置莊遺跡(その1)調査の概要』1988
9C～11C	1989年度	中村淳磯	『太井遺跡(その4ほか) 日置莊遺跡(その1-2)調査の概要』1990
12C～17C	1990年度	村上年生	『日置莊遺跡(その2-3・その6-2)調査の概要』1991



図 I - 3 遺構全体図

が田畠として利用されていた。ただ、調査区東部は、北余部集落の北端部にかかっていることから、一部が宅地として利用されていた。さらに、調査区西端部においては、調査前まで府営住宅が存在しており、宅地が整然と並んでいる。

現地表面の標高は、東端部の谷底平野で40.4m、東部の低位段丘上で42.8m、西端部で44.8mを測る。谷底平野内では、高低差はほとんどみられないが、低位段丘上においては、西に向かってゆるやかな勾配のあることがわかる。調査区を南北方向に走る浅い開析谷が、現在でも水路として利用されており、人為的に埋められているが、若干の高低差は現地表面においてもみることができる（図I-6）。

第2節 調査方法

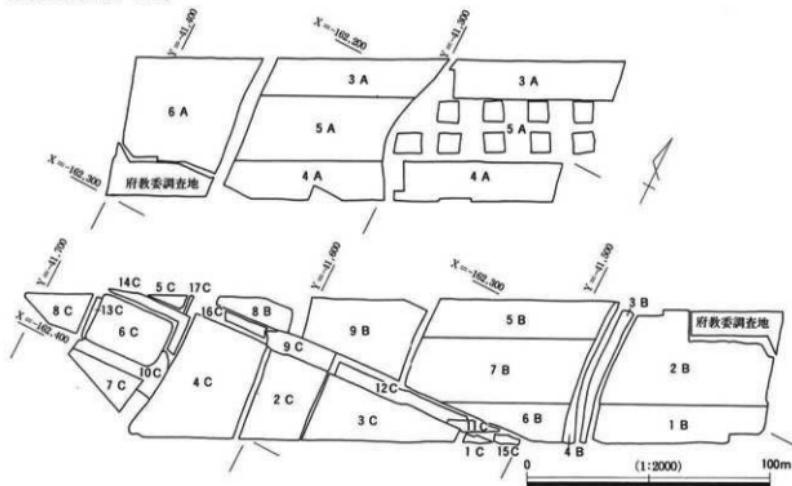
日置荘遺跡全体の調査方法は、すでに述べられているため、ここでは、I調査区におけるトレントの設定と調査の経過についてのみ記述することとする。

1. トレントの設定（図I-2）

I調査区の調査は、西除川から府道界富田林線までの約550mにわたる範囲のため、調査区を横切る道路により大きく3分割され、東からA、B、C地区とした。さらに各地区は里道や水路により分割されたほか、府道部分と近畿道部分で分けるなど、数カ所のトレントに細分された。

当初の予定では、南北両側の府道部分の調査を先行して行い、その調査成果に基づいて近畿道部分の調査を行うこととなっていたため、最初に調査に着手したA地区東部（3 A～5 A）とB地区西部（4 B～7 B）では、3分割するかたちで調査を行っている。

B地区西部では、府道部分の調査を先行して行ったが、調査の過程で、検出された遺構の性格上、各トレントに細分するよりもひとつにまとめたほうがよいとの判断から、最終的にはトレントごとの分割調査は行わなかった。



図I-2 トレント配置図

第1章 調査の概要と前提

第1節 位置と地形環境

日置荘遺跡全体の位置関係についてはすでに述べられているため、ここでは、I調査区に関連する事項のみを記述することにする。

1. 位置(図I-1)

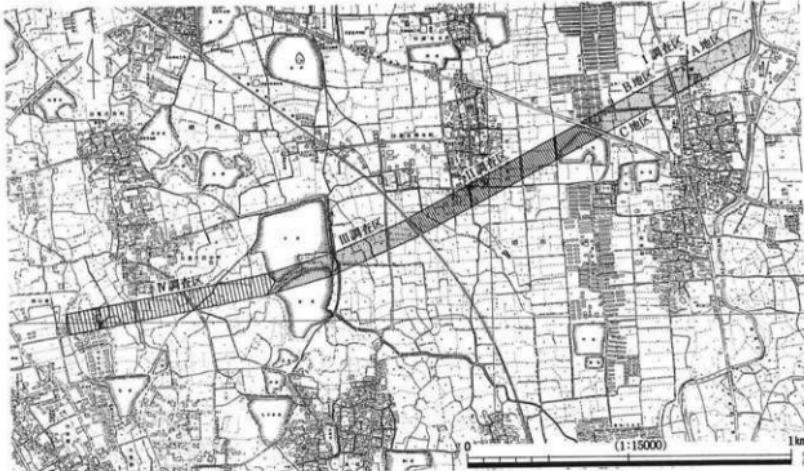
I調査区は、西除川を東端、府道堺富田林線を西端とする延長約550m、幅60mの区間を包括する調査区である。行政上では、南河内郡美原町北余部の南西端部に位置する。

調査区のほぼ全域にわたって調査を行ったが、西除川西岸の谷底平野部分では明瞭な遺構が存在しないことから、府道部分と近畿道の橋脚部のみの調査を行った(図I-7)。また、調査区を縦断する府道大阪狭山線に隣接する部分では、下水道工事に伴う調査が大阪府教育委員会によって、一部先行して行われている。

2. 地形環境

I調査区は、西除川西岸の谷底平野とそれを臨む低位段丘上に位置している。調査区東部においては、現況で約2mの段差が存在しており、谷底平野と低位段丘が明瞭に区別できる。さらに低位段丘上では、調査区を縦断して南北方向に延びる浅い開析谷が数本みられる。このため、東半部ではこの浅い開析谷を利用した里道や水路などが多く造られており、調査区を区切っている。西半部ではII調査区にかけて良好に遺存している条里地割に一部かかることから、整然とした区画が部分的にみられる。

調査区全体は現在の北余部集落の北側に位置しており、調査前は、谷底平野部を含めてほとんど全域



図I-1 調査区位置図

第 I 部　I 調査区の調査成果

良時代と変わらない。特に丹比道を挟んで南北に位置する觀音寺遺跡(21)と丹上遺跡の調査では8~10世紀にかけて規格性の強い建物群が営まれてきたことが知られている。

一方中世の遺跡分布は西除川左岸における飛躍的な遺跡の増加により特徴付けられる。これらの遺跡はほとんどが集落遺跡であり、類似した丘陵上地形にあるため遺物散布地の場合でもそこが村落を構成する領域の一部であることは間違いない。したがって単純に考えれば、平安時代から中世に移る段階で集落または村落が増加したことが推測されるものである。なお文献に残る丹南鉄物師の痕跡に関連して、真福寺遺跡では13世紀代の鉄造土坑が検出されている。

註

- 1) 序・図4は土地条件図による表記であるが、日下雅義によれば(1980「依羅池」付近の微地形と古代における池溝の開削)『歴史時代の地形環境』古今書院)、段丘下位面が中位段丘、段丘低位面が低位段丘と沖積段丘、谷底平野と氾濫平野の分離など、記述に違いがみられる。小論では足利健亮・桑原公徳 1985 「2 松原市の地形」『松原市史』第1巻に従い、本文では日下氏の表現を使用している。
 - 2) 服部昌之 1976 「美原町周辺の地形」『美原の歴史』第2号 美原町教育委員会
 - 3) 森 浩一 1978 「生産の発展とその技術」『大阪府史』第1巻
 - 3) 日下雅義 1980 「狹山池の変遷と西除・東除兩河川の性格」『歴史時代の地形環境』古今書院 東除川は段丘を横断するかたちでつくられており、近世以降の運河と考えられる。さらに、水面が地表より低い面にあたるため、中・上流の地域では、物理的にも用水とすることが不可能である。
 - 4) 日下雅義 前掲書註3
 - 5) 弘仁12年(821)の太政官符によれば、交野・丹比両郡は土地が高燥で干害を避けることができず、易田とされ、普通の二倍の田が与えられている(類聚三才格)。
 - 6) 福島雅蔵 1967 「狹山池」『狭山町史』第1巻
 - 7) 末永雅雄・森 浩一 1953 『河内黒姫山古墳の研究』(大阪府文化財調査報告書第1輯) 大阪府教育委員会
 - 8) 両道以外に大和と和泉を結ぶ道として、「茅渟道」も丹南を通過している。
直木孝次郎 1978 「茅渟の道について」『美原の歴史』第3号
 - 9) 直木孝次郎 1985 「古代編第1章 律令制以前の丹比地方」『松原市史』第1巻
 - 10) 直木孝次郎 1976 「丹比連について」『美原の歴史』第2号。
吉田 晶 1983 「古墳と豪族」『古代の地方史』3 朝倉書店ほか
 - 11) 直木孝次郎 1985 「古代編第2章 律令制下の丹比地方」『松原市史』第1巻
 - 12) 平凡社 1986 『大阪府の地名』
 - 13) 羽曳野市の説がある。前掲書註12
 - 14) 坪井良平 1984 『歴史考古学の研究』 ビジネス教育出版社・1989 『梵鐘と考古学』 ビジネス教育出版社・1991 『梵鐘の研究』 ビジネス教育出版社・1970 『日本の梵鐘』 角川書店
 - 15) 網野善彦 1972 「真難文書にみえる平安末~南北朝の文書について」『名古屋大学文学部研究論集・史学』・1973 「真難文書にみえる室町期の文書」『名古屋大学文学部研究論集・史学』・1974 「真難文書にみえる戦国朝の文書(一)」『名古屋大学文学部研究論集・史学』・1975 「中世中期における鉄物師の存在形態」『名古屋大学文学部研究論集・史学』・1976 「中世都市論」『講座 日本歴史』7 岩波書店・1982 「中世初期における鉄物師の存在形態」『名古屋大学日本史論集(上)』吉川弘文館・1983 「中世の鉄器生産と流通」『講座・日本技術の社会史』第5巻 株式会社日本評論社・1986 「河内日置莊と中世鉄物師」『河内鉄物師の歴史と技術』 美原町・1986 「中世の旅人たち」『週刊朝日百科日本の歴史』6 朝日新聞社
 - 16) 河音能平 1975 「藏人所の全国鉄物師支配の成立過程」『美原の歴史』1号
美原町教育委員会・1977 「鎌倉前期河内鉄物師の一風貌」『美原の歴史』3号 美原町教育委員会
 - 17) 黒山郷自体の領域の広さも指摘されている。
水野正好 1978 「河州丹南八上両郡境長和寺小考」『美原の歴史』第3号
 - 18) 前掲書註12
- 参考文献
- 鈴柄俊夫 1992 「中世丹南における職能民の集落遺跡」『国立歴史民俗博物館研究報告』第48集



序一図9 遺跡周辺地形図（大日本帝國陸地測量部 明治18年測量）

紋～弥生時代の遺跡はほとんどが包含層であり、南花田(5)・丹上(35)・小角田(100)・太井遺跡(46)で有茎尖頭器、丹上遺跡で石鎌・石匙・石包丁、真福寺遺跡(47)で石鎌・弥生後期土器などが検出されている。

古墳時代の遺跡は、百舌鳥・古市の大古墳群の間にあって、河内大塚山古墳(17)と黒姫山古墳(50)およびその周辺の古墳群と、須恵器などの生産遺跡および集落跡に分けられる。このうち当該地域の西南部は須恵器生産の拠点となつた陶器山丘陵の北端部にあたり、日置荘西町窯跡群(44)から埴輪窯が、本遺跡(45)から須恵器窯も検出されている。当遺跡に近接する黒姫山古墳は、周濠をめぐらせた二段築成の前方後円墳で、全長は約114mを測る。昭和22年の調査により前方部の石室や櫻付を含む24領の短甲、11個の衝角付冑、13個の眉庇付冑をはじめとして多くの鉄製品が検出された。5世紀後半の代表的な古墳である。また周囲に6基の古墳が存在することも知られていたが、本遺跡に東接する太井遺跡の調査においてそのうちのひとつであるサバ山古墳の全形が明らかとなつていている。

なおこの時代の遺跡の分布としては、弥生時代までが当該地域の北半部を中心としていたのに対して、古墳時代以降はほとんど全域での広がりをみせる。ただし分布の細部によれば、古墳時代の集落は古墳と生産遺跡を除いた当該地域の北半部を中心としており、基本的な環境は弥生時代以前とあまり変わらなかつたのかもしれない。

これに対し7世紀以降の遺跡の分布は、西南部地域が須恵器生産の衰退により減少し、代わって当該地域の中央に位置する大座間池以南でも集落遺跡が確認されるようになる。南北に難波大道跡(64)が、東西に大津道(1)と丹比道(25)が整備され、丹比柴籬宮跡(14)・太井遺跡・平尾遺跡(55)などの大規模な集落遺跡がこの地区に営まれる。その背景として、狭山池の築造による開発との関わりが直接的にうかがわれるところである。平尾遺跡では庇付の大型建物をはじめとして42棟の掘立柱建物跡が柵をともなって検出され、郡衙または当地の豪族である丹比氏の本拠地である可能性も考えられている。また黒山庵寺(51)・丹比庵寺(53)・野中寺(87)・善正寺跡(90)・東野庵寺(97)などもこの時代の重要な遺跡である。

9・10世紀を中心とする平安時代の状況も基本的には奈



序一図8 日置荘I・II調査区と字名

べた狹山池に対して、崇神62年10月条などによると丹比郡の北西部には「依網池」が築かれ、天皇の権力によって開発されたと考えられる依網屯倉の設置などにより⁹⁾、この地域の北部開発の進んでいたことが知られる。

一方「新撰姓氏錄」によればこの地に居住した氏族には、丹比連とその同族および丹比公の一族をはじめとして、土師宿禰、布忍首、依網阿比古、依網連、依網造、物部依網連、中臣酒屋連、阿保連、村山連、上道、尋来津公、菅生朝臣、矢田部首、狹山連、船連、葛井連、津連、河内画師、秦、河内連、河内造、三宅史などがみられる。

これらを地域毎にみると、丹比郡北部では、布忍・依網・阿保・三宅・矢田部などの系統および、中臣酒屋連が現在松原市三宅町の屯倉神社に祭られている式内社の酒屋神社との関係、上道波提麻呂が天平勝宝2年(750)の記事によって、いずれも三宅郷に居住していたことが推測される。東部では野中郷を本貫地とする船氏と同族の葛井・津氏が、南部では村山・狹山が狹山郷、菅生が菅生郷の居住に比定されよう。中部では太井遺跡に関連して、丹比連と丹比公が少なくとも6～8世紀代に黒山地域を中心として居住していたことが推測され¹⁰⁾、やはり黒山郷を本貫地とする秦氏も考慮される¹¹⁾。

なお河内画師は天平勝宝9年(757)の記事により丹比郡土師郷にいたことが記されているが、その地については反正天皇の時期の土師村の伝承と字名により松原市立部から上田町付近に比定する考えと、丹比郡の南西端で大鳥郡に接する日置莊周辺に比定する説がある¹²⁾。

一方「倭名類聚鈔」によれば、この地域には依羅・黒山・野中・丹上・三宅・八下・田邑・菅生・丹下・土師・狹山の11郷があり、西琳寺縁起所引の天平15年帳(743?)には「丹比郡余戸郷」がみえている。

さて、平安時代以降の村落の状況を復原する手がかりとしては、莊園・寺院に加えて金石文に記された鉄物師の存在がある。このうち莊園は、北から矢田・長原・大堀・(高木)¹³⁾・羽昨・長曾祢・松原・会賀牧・金田・田井・大富・日置・高松・菅生・野田・狹山が知られる。これらが全て繼續したわけではないが、位置的な関係だけで復原すると、律令期の郷および氏族とは、矢田莊が矢田部、羽昨莊が三宅・田邑・布忍、松原莊が土師？郷、長曾祢・金田莊が八下郷、日置・高松莊が土師？・余戸郷、田井莊が黒山郷、菅生・狹山・野田莊が菅生・狹山郷などに対比される。おおむね西部から南部にかけては郷の分割をみせる新たな領域の出現が、中部から北では前記の状況に加えて大型の莊による古代郷の取り込みがおこなわれた状況がうかがわれる。

そしてこの時期以降鎌倉時代までの間、この地域は全国に名を知られた河内鉄物師の本拠地として、文献と梵鐘などの金石文に知られることになる。坪井良平¹⁴⁾・網野善彦¹⁵⁾・河音能平¹⁶⁾氏などによるその研究成果についてここで繰り返すまでもないが、例えば鎌倉期を中心とした有力な莊園を見れば、広隆寺領の松原莊、浄金剛院領の大富莊、興福寺領の日置莊、石清水八幡宮領の田井莊などのうち、大富莊は鉄物師村とされる「大保千軒」に、日置莊はおそらく「日置莊鉄物師」に比定され、田井莊は野遠郷・大饗郷・黒山郷¹⁷⁾・同郷河辺里とともに¹⁸⁾真福寺遺跡を領域内に含むなど、やはりこの地と鉄物師との関連の強いことがわかる。

このような文献史的環境に対して、発掘調査などで明らかにされている遺跡は、おおむね丹比郡に対応するこの地域(序-図6)で124カ所を数え、その分布は羽曳野丘陵の末端に当たる高位段丘を除き全域に広がる。

旧石器時代では南花田遺跡(5)で国府型ナイフ形石器とともに住居跡の可能性がある竪穴状遺構を検出し、太井遺跡(46)では瀬戸内技法を伴わないものの同時期と推定される包含層が確認されている。繩

ことが、記録と地形的な条件から知られている³⁾。またこの地域を特徴付ける環境に瀬戸内式の気候がある。ただしこの地域はそれに属するばかりでなく、規模の小さな河川が段丘面より低い位置を流れているため⁴⁾、古代より水利の困難な土地として知られていた⁵⁾。この地域の地理景観を特徴付ける多数の溜池はこの理由から築かれてきた。かつてより当地域の溜池は「公有百三拾有余」と称されており⁶⁾、昭和30年代前半までの段階でも150を超える溜池を数えることができる（序・図5）。

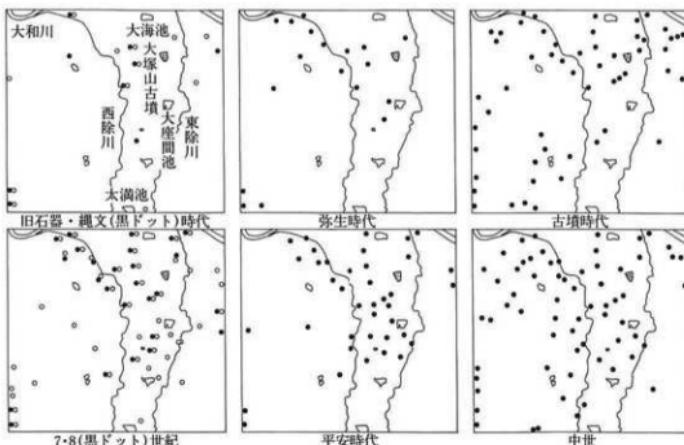
なお遺跡の周辺をみれば、西除川を境とするその東端は、一部に東へ下降する斜面部と谷底平野を持ち、一方中央部はII調査区の東半部（E地区）付近で浅い谷がみられるものの、南海電鉄高野線付近までは段丘上のおおむね平坦な地形が広がる。この平坦な地形はII調査区の西端まで続き、その先は幅1km近い谷地形をみるとことになる。この谷地形は、陶器山丘陵に沿う形で北西に向かって緩やかに広がっている。おおむね狭山池を頂部とする古天野川の扇状地形に対しほば西の境界に沿ったものであり、IV調査区の窓はこの地形と地理関係を前提に構築されたことになる。

なおII調査区の東端に位置する桜ヶ池は等高線の凸部に築かれた「皿池」であり、III調査区の西に所在する今池・剣池は前記谷地形の一部を堰止めて築かれた、いわゆる「谷池」である。

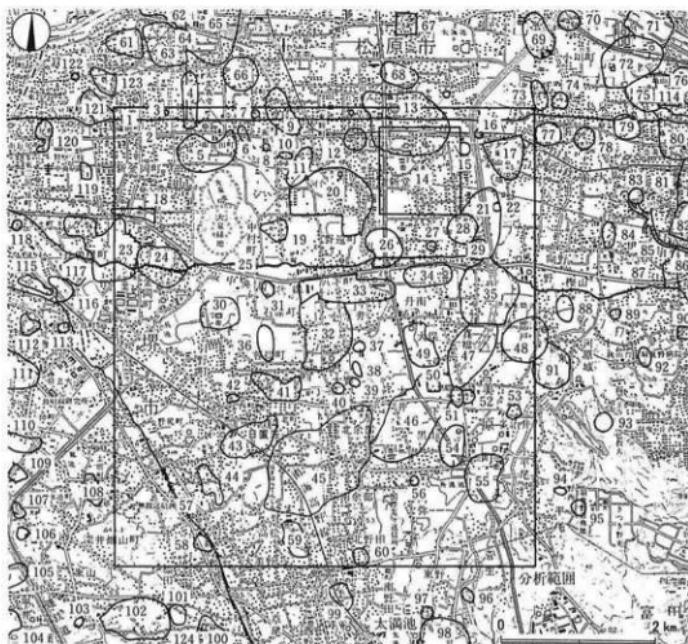
第2節 歴史的環境

5世紀までさかのぼる黒姫山古墳⁷⁾と雄略陵説のある河内大塚山古墳をはじめとして、日本書紀にみえる仁徳天皇14年条の難波大道の記事、反正天皇元年10月条の「河内の丹比に都をつくる。是を榮離宮と謂う」の記事および、天武元年(672)条の大津・丹比の両道⁸⁾の記事などにより、この地が古代より大和と難波をむすぶ重要な地域であったことは明らかである。

そのなかにあって、日置荘遺跡は歴史的には広く丹比郡に含まれて整理されることになる。同郡内の村落の名称としてもっとも早く文献にみえるのは日本書紀の仁徳天皇14年条に載る「丹比邑」である。その位置については布忍村・松原村または金田村などの候補があるが、未だ明確ではない。また先に述べたように、この地域は古くから水害の多発地帯であり、また河川改修によって河川の位置が大きく変化した歴史がある。そのため、現在の地名と古文書や古地図との対応が複雑である。

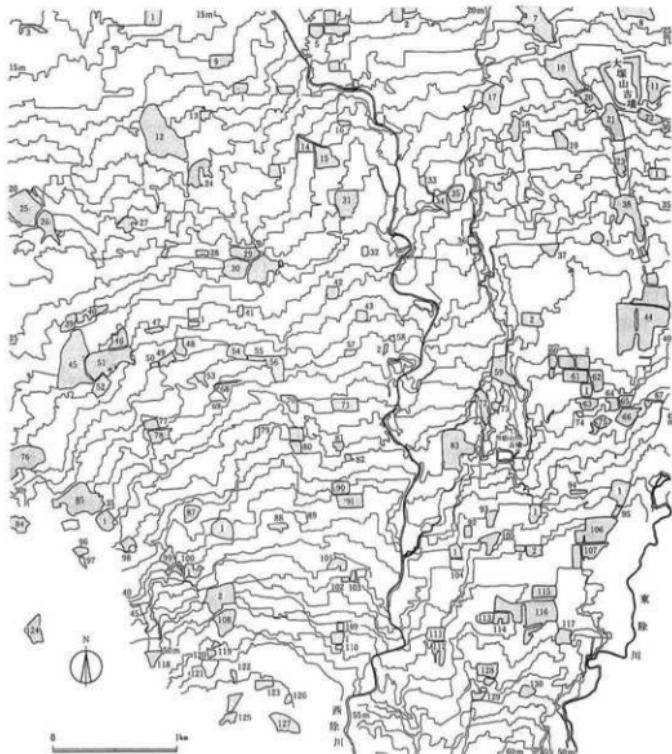


序-図7 日置荘遺跡周辺の時代別遺跡変遷図



序-図 6 日置荘遺跡周辺の遺跡分布図

序-表1 遺跡地名表



[池名称] 1新池、2今池、3濱池、4寺池、5西ノ池、6長池、7寺池、8西池、9蓮池、10園野ヶ池、11ノド池、12大泉池、13穴池、14尻池、15青池、16浜塚池、17下ノ池、18鶴野池、19松室池、20小治ヶ池、21今池、22広池、23上池、24頭泉池、25下井池、26春田池、27加呂登池、28平池、29尻池、30大池、31北池、32東池、33尻ノ池、34清音池、35宮ノ池、36鳴池、37地藏池、38阿彌戸池、39九頭神池、40蓮池、41太鼓池、42繩田池、43出ノ池、44大座間池、45長池、46森池、47寺池、48城池、49堂池、50松池、51菅池、52小菅池、53鶴池、54植池、55細池、56吉田池、57神鏡池、58西池、59管池、60奥池、61白池、62横枕池、63清音之坊池、64小池、65下ノ青池、66上ノ青池、67細池、68長池、69芦池、70石池、71大池、72王藏池、73寺池、74中ノ池、75桔池、76宮路池、77大池、78小池、79小山池、80匂分池、81蓀池、82城ヶ池、83花田池、84星谷池、85大井池、86加古里池、87前池、88西池、89東池、90三保池、91前池、92更池、93蓮池、94宮ノ池、95田池、96下土塔池、97上土塔池、98羽室池、99羽原池、100坊池、101更ヶ池、102コマケ池、103中池、104上代ヶ池、105寺池、106笠田池、107こそ池、108鶴池、109桥池、110横池、111松池、112美濃池、113前池、114平池、115芋池、116船渡池、117平尾新池、118石池、119高池、120中池、121九丈池、122水端池、123鶴池、124柏原池、125岸面池、126太池、127大池、128阿弥斎池、129コモ池、130菅生新池

序-図5 日置荘遺跡周辺の等高線図（大阪府 昭和36年測量）

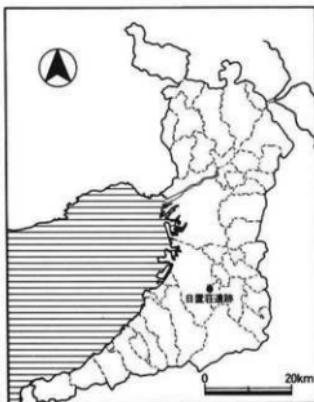
第2章 位置と環境

第1節 自然的環境

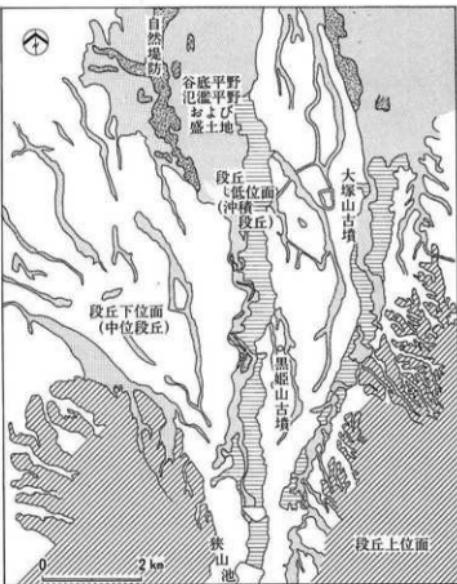
大阪府南部の地形は、和歌山県との府県境を形成する和泉山脈と、そこから緩やかに下降して北上および西進する複数の尾根と丘陵を特徴とする。このうち北へ延びる尾根の一端は羽曳野丘陵を、別の先端は陶器山丘陵などの高位段丘を形成し、古代須恵器生産の拠点である陶邑遺跡の基盤ともなった。そして日置荘遺跡の所在するこの地域は、中央に西除川を配して、羽曳野丘陵と陶器山丘陵にはさまれた、北へ開く扇状地形の中に位置している。

おおむねその表面は起伏の少ない平坦な台地状を呈するが、地形の細部によれば、南北方向を軸とした複数の開析谷または旧河道の存在が知られる。西除川の周辺でみられる谷底平野とあわせて、古代から中世にかけては、比高差数m以下の段差が各所でみられたものであろう（序図4）。これらの中地形のうち最も規模の大きなものが、現在の西除川の氾濫原および谷底平野に対応する「古天野川」の侵食である。当初その流路は現在の高位段丘上も含めた広域におよんでいたが、下刻により中位段丘を形成してこの扇状地をつくりだしたものとされている。その後中位段丘の間にできた谷を埋めて、西除川の右岸に沖積段丘が、やがて氾濫原・谷底平野・自然堤防などの形成が進められたと考えられている¹⁾。

このなかにあって、6世紀後半から7世紀初頭頃に、「古天野川」の開拓による谷底平野を堰止めるかたちで狹山池が築造された²⁾。これにより、それまで耕作の困難であった中位段丘上の部分が灌漑可能の地として開発の対象となったのである。もっともその主たる水路は西除川であり、西除川は慶長13年の狹山池改修と近い時期に、旧流路を利用して切り開かれた運河である



序一図3 日置荘遺跡の位置



序一図4 日置荘遺跡周辺の地形

第III区画は、第II区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦A～O、横1～20となる。第IV区画は、第III区画内を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。表示は北東端を基点に縦a～j、横1～10となる。

第V区画は、第IV区画内を5m単位で4分割するもので、遺物の取り上げ等の際に第IV区画を面として細分する場合に使用する。北東側I、北西側II、南東側III、南西側IVと呼称する。第VI区画は、第IV区画を5m単位ではなく、任意に細分する場合に使用し、北東端を基点に必要な桁まで表示する。

因みに今回の日置荘遺跡の調査範囲の第I区画はE-5、第II区画は7と8にまたがる。第III区画以下は、A 1 (第III区画) a 1 (第IV区画) - I (第V区画) S 2.30m W 3.10m (第VI区画) というよう表示される。

方位については、座標北を使用している。これは、地区割や測量基準線も国土座標を使用している関係からである。因みに他の方位との関係は、真北が東へ0°15'39"、磁北が西へ6°30'振っている。

水準は、全国で共通基準となっている東京湾平均海面(T.P.)を使用している。大阪ではT.P.の他に大阪湾平均海面(O.P.)も併用されており、今も大阪府関係等の土木工事で盛んに使用されている。過去の報告書の中には、表記がなくてどちらを使用しているか判別できない場合もある。なお、両者のレベル差は、T.P. ± 0m = O.P. + 1.3mと定められている。

今回の日置荘遺跡の調査では、大きく4調査区に分割している。それらの調査区は、さらに道路や水路等の障害物で細分されるため、I調査区がA～C地区、II調査区がD～J地区、III調査区がK～M地区、IV調査区がN～Q地区と17地区に細分されている。各地区は、それぞれの地区的実情に合わせてトレンチに細分されるが、呼称は3 Aトレンチという形の数字を前に出す方式である。

各調査区の位置と地区については、各調査区の項の冒頭において1/15,000の平面図に記している。また、第III区画についてはトレンチ配置図とともに1/4,000の平面図に、第IV区画の10mグリッドについては1/2,000の平面図に統一して付している。各調査区の冒頭には、それぞれの調査経過の具体的な内容についても詳しく記述しているので、それを参照されたい。

遺構番号については、各調査区で細切れな調査を強いた事もあって命名法に若干の混乱を来たした部分もあった。そのため、本報告では各地区毎に一連の番号を振る事に統一している。遺構番号が変わったものについては、主要遺構一覧表に新旧の対照を行っている。

なお、併設区間の調査は、1986年度より3段階調査方式が採用されている。その方法は、まず第1次調査として側道となる府道の歩道部分5mを第1遺構面もしくは包含層上面まで機械掘削し、調査の必要範囲を決定する。その後、第2次調査として調査が必要と判断された範囲の府道部分（上下線各約20m）を全面調査し、そこで確認された遺構・遺物の分布をもとに保存すべき個所を避けて高速道路の橋脚位置を決定する。第3次調査は、高速道路内の橋脚基礎部とそれ以外の特に必要と認められる部分を対象として実施するものである。このような複雑な調査方法が採用されたのは、過去の経緯から全面調査を基本としてきた府道方式と、いわゆる「トレンチ調査方式」という2段階調査を採用してきた近畿自動車道天理吹田線方式との折衷が図られたためである。日置荘遺跡もこの方式が採用されている。

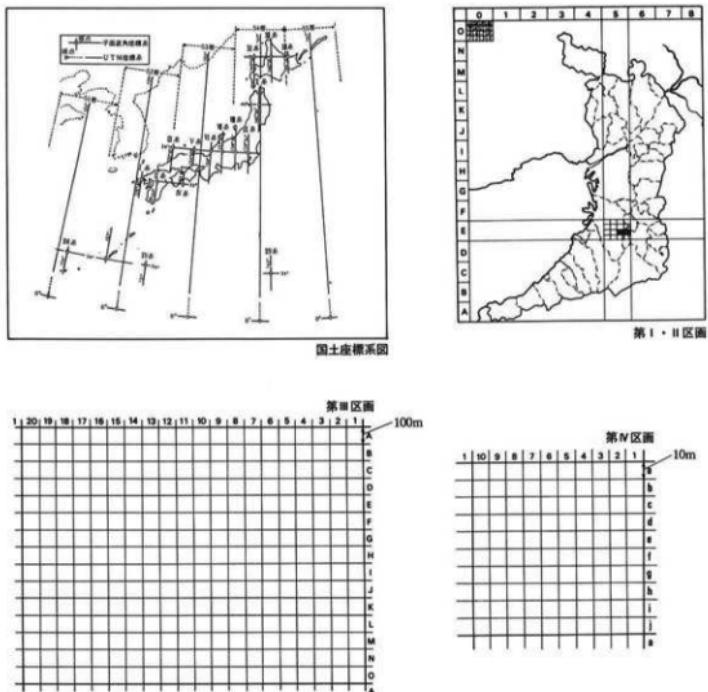
調査の過程では、出来るだけ遺跡を一般公開すべく、適宜現地説明会を開催している。III調査区では1987年10月31日に古墳時代の須恵器窯と奈良・平安時代の掘立柱建物群、鎌倉時代の土塙墓群を対象として、I調査区では1988年2月20日に室町時代の城郭跡を中心として、IV調査区では1988年9月24日に古墳時代の埴輪窯・須恵器窯を対象としてそれぞれ開催している。

第2節 発掘調査の方法

日置荘遺跡の調査は、当センターが制定した「遺跡調査基本マニュアル」に則って実施されている。このマニュアルが制定された契機は、近畿自動車道天理吹田線（通称大阪線）の調査がそれぞれの調査区の担当者によりバラバラな方法で遂行されたために、後の整理段階でデータの理解に非常に苦労した事による。マニュアル作成にあたっては、発掘調査に係わる職員全員が討議に参加し、意見の一致を見た部分のみを文化化した。そのため、発掘調査に不可欠な必要最低限の方法のみを定めたものになっている。

地区割については、国土座標軸（第VI座標系）を基準線とし、大阪府全域を共通的方式で区割できるように、大小6段階の区画を設定している。第I区画は、1/10,000地形図の地区割図をそのまま利用したもので、縦6km、横8kmが1区画となる。南西端を基点とし、縦軸A～O、横軸0～8で表示する。

第II区画は、1/2,500地形図の地区割図をそのまま利用したもので、第I区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。南西端を1とし、北東端を16とする東方向への平行式の地区名表示である。



序一図2 國土座標系とそれに伴う地区割

府道堺かつらぎ線以東の併設区間については、1974年度にセンターが予備的な分布調査を実施し、確認された遺跡の内の真福寺遺跡について1975年度にセンターで試掘調査を実施した¹⁾。その後、1977年度に大阪府教育委員会の手で再度分布調査が実施され、多くの遺跡の存在が確認された。その結果を受けて、関係機関の間で協議が進められ、出来るだけ路線が埋蔵文化財を避けるとともに、やむを得ず路線内にかかる遺跡については発掘調査を実施する事になった。現地調査は、大阪府教育委員会の指導の下に引き続きセンターが担当する事になり、1981年12月に大阪府教育委員会・大阪府土木部・日本道路公団大阪建設局・センターの関係4機関の間で基本協定が締結された。調査の対象となった遺跡は、美原町域の丹上・真福寺・太井遺跡、美原町から堺市域にかけての日置荘遺跡、堺市域の福田・平井・小阪遺跡である。なお、平井遺跡については、諸般の事情により（財）大阪府埋蔵文化財協会に調査を委ねており、1986～1989年度に調査が実施されている²⁾。

日置荘遺跡は、主に日置荘原寺町、日置荘田中町にかけて所在し、東西約1.6km、南北約1.2kmの広がりを有する。今回、日置荘遺跡として調査した中には、美原町北余部、南余部に所在する余部遺跡部分も範囲に含めており、総延長約2.2kmにも及ぶ長大なものとなった。当該範囲は、1986年5～6月にセンターにより2m×2mの65カ所の試掘グリッドを設定する試掘調査を実施し（序-図1）、全城が調査の必要ありと判断された。そのため、1987年4月より本調査を開始している。

実際の調査では、この範囲を大きく4分割し、東側の西除川左岸部より府道堺富田林線までをI調査区、南海高野線までをII調査区、今池・劍池西岸までをIII調査区、日置荘西町の石池谷西側斜面上部までをIV調査区とした。これらの調査は、4調査区とも1カ年の予定で実施されたが、用地問題の解決の遅れ等で随所に調査不能な場所が残された。それらの場所は、やむを得ず調査可能になった場所から順次調査にかかるということで、1988年4月から1991年3月までかけて細切れの調査を実施した。

この間、調査成果の早期公開を狙いとして、8冊の概要報告書を刊行している³⁾。本調査終了後、1991年4月から1994年3月までの間、遺物整理事業として発掘資料の各種整理作業を実施し、本報告書の作成を行った。本報告書は、1994年度に印刷作業を行い、1995年3月31日付けをもって刊行した。

註

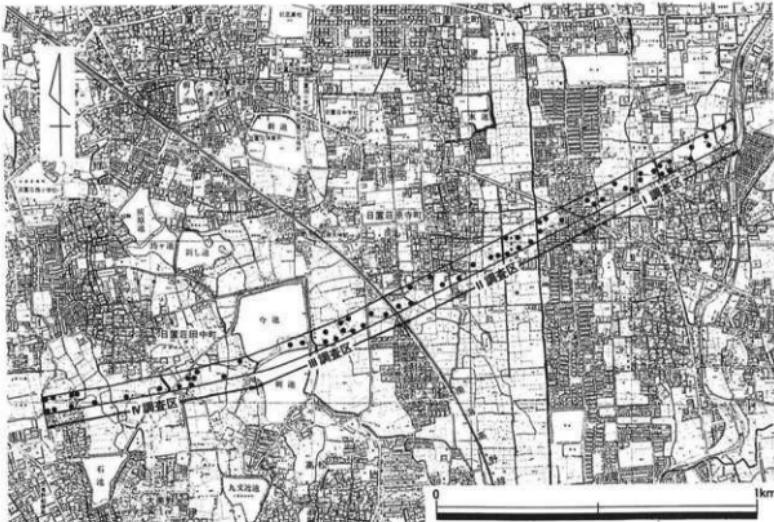
- 1) 大阪文化財センター 1975 『都市計画道路松原～泉大津線建設予定地内遺跡試掘分布調査報告書』
- 2) 大阪府教育委員会 1976 『大園遺跡発掘調査概要』 III
" 1981 『 " " " 』 V
" 1982 『 " " " 』 VII
- 3) 大阪府教育委員会 1982 『觀音寺遺跡発掘調査報告書』
- 4) 大阪府教育委員会 1980 『西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』
" 1982 『鶴田池東遺跡発掘調査概要』 II
- 5) 大阪府教育委員会 1980 『西浦橋・鶴田池東遺跡発掘調査概要』
- 6) 大阪文化財センター 1984 『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』 I 及び II
- 7) 大阪文化財センター 1975 『美原町真福寺所在遺跡試掘調査報告書』
- 8) 大阪府埋蔵文化財協会 1988 『平井遺跡』
" 1989 『平井遺跡』 II
- 9) 大阪府教育委員会・大阪文化財センター 1988 『日置荘遺跡（その1）』
" 1988 『日置荘遺跡（その2）』
" 1988 『日置荘遺跡（その3）』
" 1988 『日置荘遺跡（その4）』
" 1989 『日置荘遺跡（その5）』
" 1990 『日置荘遺跡（その2-2・その6）』
" 1990 『太井遺跡（その4ほか）・日置荘遺跡（その1-2）』
" 1991 『日置荘遺跡（その2-3・その6-2）』

第1章 調査の概要

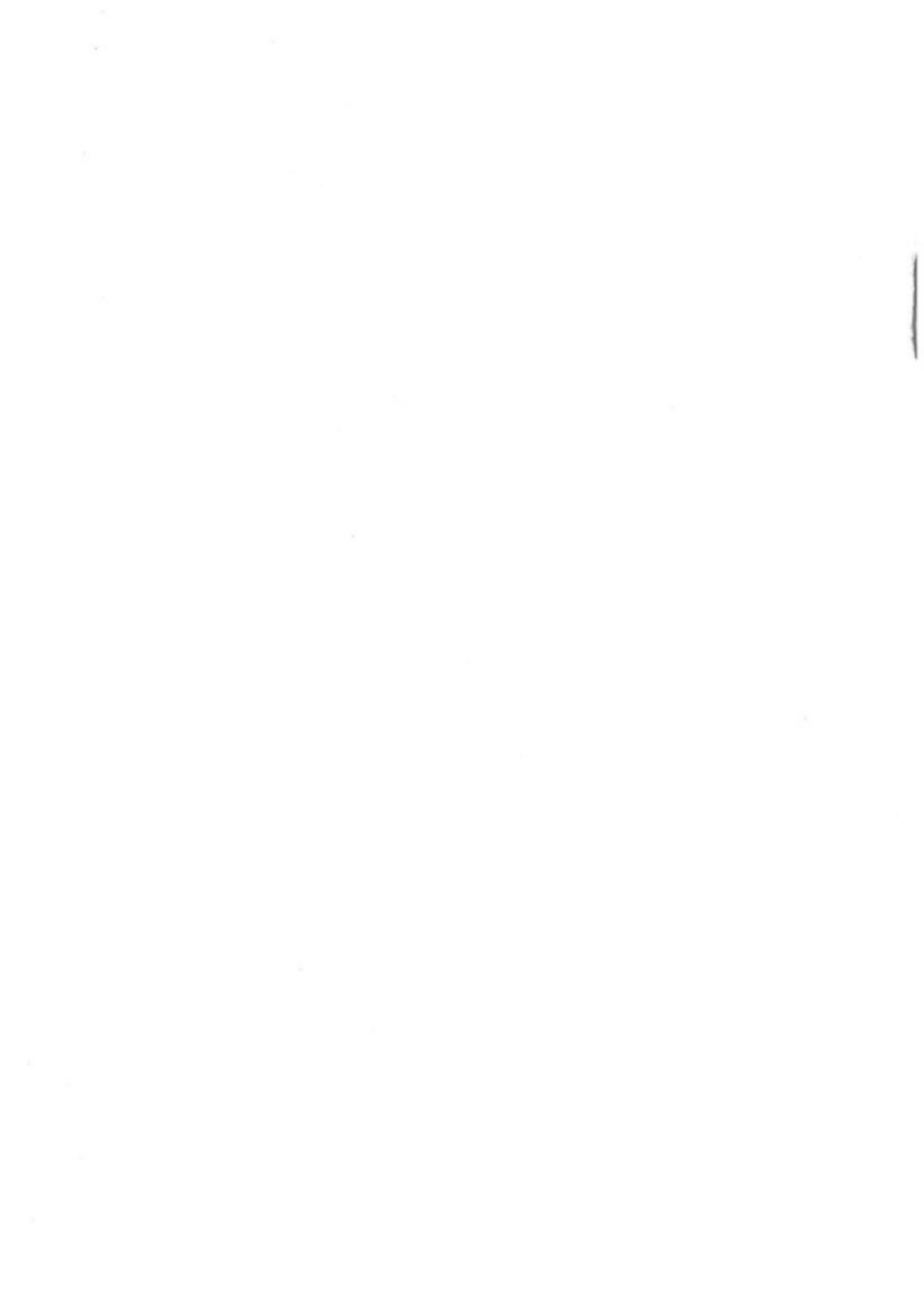
第1節 発掘調査に至る経過

近畿自動車道松原すさみ線（旧松原海南線）は、近畿自動車道天理吹田線の松原ジャンクションより南に分岐し、和歌山県海南市を経てすさみ町に至る高速国道である。一方、府道松原泉大津線は、府道中央環状線の美原ロータリーより南に分岐し、泉大津市助松で府道大阪臨海線と結ぶ都市計画道路である。この両道は、美原ロータリーから堺市小阪まで併設され、中央に高架橋方式の高速道路、両側に平面方式の府道が建設される。

この道路建設予定地には多くの遺跡の存在が予想されたため、早くよりその取扱いについて大阪府教育委員会、大阪府土木部、日本道路公団大阪建設局等の関係機関の間で協議が続けられてきた。その内の府道堺かつらぎ線（泉北2号線）以西の松原泉大津線単独区間にについては、1974年度に（財）大阪文化財センター（以下、センターと略す）により周知の和泉市・高石市・泉大津市の大園遺跡、和泉市觀音寺遺跡の試掘調査と、それ以外の路線内の分布調査を実施した¹⁾。この分布調査によって、鶴田池東・西浦橋・菱木下・万崎池・太平寺遺跡が新たに発見された。これらの遺跡の内、大園²⁾・觀音寺³⁾・鶴田池東⁴⁾・西浦橋遺跡（西半部）⁵⁾については、大阪府教育委員会の手により順次本調査が実施されている。また、西浦橋（東半部）・菱木下・万崎池・太平寺遺跡については、センターにより1980～1983年度に本調査を実施している⁶⁾。



序一図1 調査地と試掘グリッドの位置



序　調査の概要と遺跡の立地

H地区（10, 11Hトレンチ）全体図
付図II-5 II調査区G地区（西半部）・H地区全体図

—— 第III部 III調査区の調査成果 ——

付図III-1 III調査区K地区全体図
付図III-2 III調査区L地区全体図

付図III-3 III調査区M地区（東半部）全体図
付図III-4 III調査区M地区（西半部）全体図

—— 第IV部 IV調査区の調査成果 ——

付図IV-1 IV調査区N地区（東半部）全体図
付図IV-2 IV調査区N地区（西半部）全体図
付図IV-3 IV調査区O地区（東半部）全体図

付図IV-4 IV調査区O地区（西半部）・P地区（東半部）
全体図
付図IV-5 IV調査区P地区（西半部）・Q地区全体図

付表III-19	III調査区主要ピット一覧(9)	156	付表III-26	III調査区掲載遺物一覧(6)	162
付表III-20	III調査区主要遺構(その他)一覧	156	付表III-27	III調査区掲載遺物一覧(7)	163
付表III-21	III調査区掲載遺物一覧(1)	157	付表III-28	III調査区掲載遺物一覧(8)	164
付表III-22	III調査区掲載遺物一覧(2)	158	付表III-29	III調査区掲載遺物一覧(9)	165
付表III-23	III調査区掲載遺物一覧(3)	159	付表III-30	III調査区掲載遺物一覧(10)	166
付表III-24	III調査区掲載遺物一覧(4)	160	付表III-31	III調査区掲載遺物一覧(11)	167
付表III-25	III調査区掲載遺物一覧(5)	161			

—— 第IV部 IV調査区の調査成果 ——

付表IV-1	IV調査区主要溝一覧(1)	168		古墳時代埴輪②	175
付表IV-2	IV調査区主要溝一覧(2)	169	付表IV-18	IV調査区掲載遺物一覧(4)	
付表IV-3	IV調査区主要戸井一覧	169		古墳時代埴輪③	176
付表IV-4	IV調査区主要土坑一覧(1)	169	付表IV-19	IV調査区掲載遺物一覧(5)	
付表IV-5	IV調査区主要土坑一覧(2)	170		古墳時代埴輪④	177
付表IV-6	IV調査区主要ピット一覧	170	付表IV-20	IV調査区掲載遺物一覧(6)	
付表IV-7	IV調査区主要落込一覧	171		古墳時代埴輪⑤	178
付表IV-8	IV調査区主要是ねつるべ柱痕群一覧	171	付表IV-21	IV調査区掲載遺物一覧(7)	
付表IV-9	IV調査区主要風倒木痕一覧	172		古墳時代須恵器①	178
付表IV-10	IV調査区主要河道一覧	172	付表IV-22	IV調査区掲載遺物一覧(8)	
付表IV-11	IV調査区主要暗渠一覧	172		古墳時代須恵器②	179
付表IV-12	IV調査区主要埴輪窯・ 須恵器窯関連遺構一覧	172	付表IV-23	IV調査区掲載遺物一覧(9)	
				古墳時代須恵器③	180
付表IV-13	IV調査区主要遺構(その他)一覧	173	付表IV-24	IV調査区掲載遺物一覧(10)	
付表IV-14	IV調査区主要埴輪溜まり一覧	173		古墳時代須恵器④・その他	181
付表IV-15	IV調査区掲載遺物一覧(1)	174	付表IV-25	IV調査区掲載遺物一覧(11)	
付表IV-16	IV調査区掲載遺物一覧(2)	174		古墳時代以降	181
	古墳時代埴輪①	174	付表IV-26	IV調査区掲載遺物一覧(12)	
付表IV-17	IV調査区掲載遺物一覧(3)			中世	182

付 図 目 次

—— 第I部 I調査区の調査成果 ——

付図I-1	I調査区A地区全体図		付図I-3	I調査区C地区全体図	
付図I-2	I調査区B地区全体図				

—— 第II部 II調査区の調査成果 ——

付図II-1	II調査区D地区全体図		付図II-3	II調査区F地区・G地区(東半部)全体図	
付図II-2	II調査区E地区全体図		付図II-4	II調査区F地区(7, 8, 9, 10Fトレンチ)・	

付表II-47	II調査区掲載遺物一覧(8)	96	軒丸瓦-3	119	
付表II-48	II調査区掲載遺物一覧(9)	97	付表II-72	II調査区掲載遺物一覧(33)	
付表II-49	II調査区掲載遺物一覧(10)	98	軒平瓦-1	119	
付表II-50	II調査区掲載遺物一覧(11)	99	付表II-73	II調査区掲載遺物一覧(34)	
付表II-51	II調査区掲載遺物一覧(12)	100	軒平瓦-2	120	
付表II-52	II調査区掲載遺物一覧(13)	101	付表II-74	II調査区掲載遺物一覧(35)	
付表II-53	II調査区掲載遺物一覧(14)	102	丸瓦・平瓦・道具瓦-1	121	
付表II-54	II調査区掲載遺物一覧(15)	103	付表II-75	II調査区掲載遺物一覧(36)	
付表II-55	II調査区掲載遺物一覧(16)	104	丸瓦・平瓦・道具瓦-2	122	
付表II-56	II調査区掲載遺物一覧(17)	105	付表II-76	II調査区遺構別出土土器一覧(1)	123
付表II-57	II調査区掲載遺物一覧(18)	106	付表II-77	II調査区遺構別出土土器一覧(2)	124
付表II-58	II調査区掲載遺物一覧(19)	107	付表II-78	II調査区遺構別出土土器一覧(3)	125
付表II-59	II調査区掲載遺物一覧(20)	108	付表II-79	II調査区遺構別出土土器一覧(4)	126
付表II-60	II調査区掲載遺物一覧(21)	109	付表II-80	II調査区遺構別出土土器一覧(5)	127
付表II-61	II調査区掲載遺物一覧(22)	110	付表II-81	II調査区遺構別出土土器一覧(6)	128
付表II-62	II調査区掲載遺物一覧(23)	111	付表II-82	II調査区遺構別出土土器一覧(7)	129
付表II-63	II調査区掲載遺物一覧(24)	112	付表II-83	II調査区遺構別出土土器一覧(8)	130
付表II-64	II調査区掲載遺物一覧(25)	113	付表II-84	II調査区遺構別出土土器一覧(9)	131
付表II-65	II調査区掲載遺物一覧(26)	114	付表II-85	II調査区遺構別出土土器一覧(10)	132
付表II-66	II調査区掲載遺物一覧(27)	115	付表II-86	II調査区遺構別出土土器一覧(11)	133
付表II-67	II調査区掲載遺物一覧(28)	116	付表II-87	II調査区遺構別出土瓦一覧(1)	134
付表II-68	II調査区掲載遺物一覧(29)	117	付表II-88	II調査区遺構別出土瓦一覧(2)	135
付表II-69	II調査区掲載遺物一覧(30)		付表II-89	II調査区遺構別出土瓦一覧(3)	136
軒丸瓦-1		117	付表II-90	II調査区遺構別出土瓦一覧(4)	137
付表II-70	II調査区掲載遺物一覧(31)		付表II-91	II調査区遺構別出土瓦一覧(5)	138
軒丸瓦-2		118	付表II-92	II調査区遺構別出土瓦一覧(6)	139
付表II-71	II調査区掲載遺物一覧(32)				

—— 第III部 III調査区の調査成果 ——

付表III-1	III調査区建物一覧(1)	140	付表III-10	III調査区主要土坑一覧	147
付表III-2	III調査区建物一覧(2)	141	付表III-11	III調査区主要ピット一覧(1)	148
付表III-3	III調査区建物一覧(3)	142	付表III-12	III調査区主要ピット一覧(2)	149
付表III-4	III調査区建物一覧(4)	143	付表III-13	III調査区主要ピット一覧(3)	150
付表III-5	III調査区建物一覧(5)	144	付表III-14	III調査区主要ピット一覧(4)	151
付表III-6	III調査区建物一覧(6)	145	付表III-15	III調査区主要ピット一覧(5)	152
付表III-7	III調査区建物一覧(7)	146	付表III-16	III調査区主要ピット一覧(6)	153
付表III-8	III調査区主要溝一覧	147	付表III-17	III調査区主要ピット一覧(7)	154
付表III-9	III調査区主要井戸一覧	147	付表III-18	III調査区主要ピット一覧(8)	155

	—中世B地区西部 5 —	43	付表 I - 63	I 調査区掲載遺物一覧 (35)	
付表 I - 57	I 調査区掲載遺物一覧 (29)			—中世軒丸瓦 2 —	48
	—中世B地区西部 6 —	44	付表 I - 64	I 調査区掲載遺物一覧 (36)	
付表 I - 58	I 調査区掲載遺物一覧 (30)			—中世軒平瓦 1 —	48
	—中世B地区西部 7 —	45	付表 I - 65	I 調査区掲載遺物一覧 (37)	
付表 I - 59	I 調査区掲載遺物一覧 (31)			—中世軒平瓦 2 —	49
	—中世C地区東部 —	45	付表 I - 66	I 調査区掲載遺物一覧 (38)	
付表 I - 60	I 調査区掲載遺物一覧 (32)			—中世丸・平・道具瓦 1 —	49
	—中世C地区西部 1 —	45	付表 I - 67	I 調査区掲載遺物一覧 (39)	
付表 I - 61	I 調査区掲載遺物一覧 (33)			—中世丸・平・道具瓦 2 —	50
	—中世C地区西部 2 —	46	付表 I - 68	I 調査区掲載遺物一覧 (40)	
付表 I - 62	I 調査区掲載遺物一覧 (34)			—近世—	51
	—中世軒丸瓦 1 —	47			

—— 第II部 II調査区の調査成果 ——

付表 II - 1	II 調査区建物一覧 (1)	52	付表 II - 24	II 調査区主要ピット一覧 (1)	73
付表 II - 2	II 調査区建物一覧 (2)	53	付表 II - 25	II 調査区主要ピット一覧 (2)	74
付表 II - 3	II 調査区建物一覧 (3)	54	付表 II - 26	II 調査区主要ピット一覧 (3)	75
付表 II - 4	II 調査区建物一覧 (4)	55	付表 II - 27	II 調査区主要ピット一覧 (4)	76
付表 II - 5	II 調査区建物一覧 (5)	56	付表 II - 28	II 調査区主要ピット一覧 (5)	77
付表 II - 6	II 調査区建物一覧 (6)	57	付表 II - 29	II 調査区主要ピット一覧 (6)	78
付表 II - 7	II 調査区建物一覧 (7)	58	付表 II - 30	II 調査区主要ピット一覧 (7)	79
付表 II - 8	II 調査区主要溝一覧 (1)	59	付表 II - 31	II 調査区主要ピット一覧 (8)	80
付表 II - 9	II 調査区主要溝一覧 (2)	60	付表 II - 32	II 調査区主要ピット一覧 (9)	81
付表 II - 10	II 調査区主要溝一覧 (3)	61	付表 II - 33	II 調査区主要ピット一覧 (10)	82
付表 II - 11	II 調査区主要溝一覧 (4)	62	付表 II - 34	II 調査区主要ピット一覧 (11)	83
付表 II - 12	II 調査区主要溝一覧 (5)	63	付表 II - 35	II 調査区主要ピット一覧 (12)	84
付表 II - 13	II 調査区主要溝一覧 (6)	64	付表 II - 36	II 調査区主要ピット一覧 (13)	85
付表 II - 14	II 調査区主要井戸一覧 (1)	65	付表 II - 37	II 調査区主要ピット一覧 (14)	86
付表 II - 15	II 調査区主要井戸一覧 (2)	66	付表 II - 38	II 調査区主要ピット一覧 (15)	87
付表 II - 16	II 調査区主要井戸一覧 (3)	67	付表 II - 39	II 調査区主要遺構 (その他) 一覧	88
付表 II - 17	II 調査区主要土坑一覧 (1)	67	付表 II - 40	II 調査区掲載遺物一覧 (1)	89
付表 II - 18	II 調査区主要土坑一覧 (2)	68	付表 II - 41	II 調査区掲載遺物一覧 (2)	90
付表 II - 19	II 調査区主要土坑一覧 (3)	69	付表 II - 42	II 調査区掲載遺物一覧 (3)	91
付表 II - 20	II 調査区主要土坑一覧 (4)	70	付表 II - 43	II 調査区掲載遺物一覧 (4)	92
付表 II - 21	II 調査区主要土坑一覧 (5)	71	付表 II - 44	II 調査区掲載遺物一覧 (5)	93
付表 II - 22	II 調査区主要土坑一覧 (6)	72	付表 II - 45	II 調査区掲載遺物一覧 (6)	94
付表 II - 23	II 調査区主要土坑一覧 (7)	73	付表 II - 46	II 調査区掲載遺物一覧 (7)	95

付表 I - 13	I 調査区主要ピット一覧 (5)	12	付表 I - 39	I 調査区掲載遺物一覧 (11)	
付表 I - 14	I 調査区主要ピット一覧 (6)	13		-中世B地区東部1-	29
付表 I - 15	I 調査区主要ピット一覧 (7)	14	付表 I - 40	I 調査区掲載遺物一覧 (12)	
付表 I - 16	I 調査区主要ピット一覧 (8)	15		-中世B地区東部2-	30
付表 I - 17	I 調査区堀一覧	16	付表 I - 41	I 調査区掲載遺物一覧 (13)	
付表 I - 18	I 調査区主要溝一覧 (1)	16		-中世B地区東部3-	31
付表 I - 19	I 調査区主要溝一覧 (2)	17	付表 I - 42	I 調査区掲載遺物一覧 (14)	
付表 I - 20	I 調査区主要土坑一覧 (1)	17		-中世B地区東部4-	32
付表 I - 21	I 調査区主要土坑一覧 (2)	18	付表 I - 43	I 調査区掲載遺物一覧 (15)	
付表 I - 22	I 調査区主要土坑一覧 (3)	19		-中世B地区東部5-	33
付表 I - 23	I 調査区主要土坑一覧 (4)	20	付表 I - 44	I 調査区掲載遺物一覧 (16)	
付表 I - 24	I 調査区主要井戸一覧	21		-中世B地区東部6-	34
付表 I - 25	I 調査区主要遺構 (その他) 一覧	21	付表 I - 45	I 調査区掲載遺物一覧 (17)	
付表 I - 26	I 調査区 B 地区東部 遺構別陶磁器一覧	21		-中世B地区東部7-	35
付表 I - 27	I 調査区 B 地区東部 遺構別瓦質土器一覧	22	付表 I - 46	I 調査区掲載遺物一覧 (18)	
付表 I - 28	I 調査区遺構別瓦一覧	22		-中世B地区東部8〔陶磁器1〕-	35
付表 I - 29	I 調査区掲載遺物一覧 (1) -旧石器・縄文・弥生石器-	23	付表 I - 47	I 調査区掲載遺物一覧 (19)	
付表 I - 30	I 調査区掲載遺物一覧 (2) -古墳時代1-	23		-中世B地区東部9〔陶磁器2〕-	36
付表 I - 31	I 調査区掲載遺物一覧 (3) -古墳時代2-	24	付表 I - 48	I 調査区掲載遺物一覧 (20)	
付表 I - 32	I 調査区掲載遺物一覧 (4) -古代-	24		-中世B地区東部10 〔瓦質土器1〕-	36
付表 I - 33	I 調査区掲載遺物一覧 (5) -中世A地区東部1-	25	付表 I - 49	I 調査区掲載遺物一覧 (21)	
付表 I - 34	I 調査区掲載遺物一覧 (6) -中世A地区東部2-	26		-中世B地区東部11 〔瓦質土器2〕-	37
付表 I - 35	I 調査区掲載遺物一覧 (7) -中世A地区西部1-	26	付表 I - 50	I 調査区掲載遺物一覧 (22)	
付表 I - 36	I 調査区掲載遺物一覧 (8) -中世A地区西部2-	27		-中世B地区東部12 〔瓦質土器3〕-	38
付表 I - 37	I 調査区掲載遺物一覧 (9) -中世A地区西部3-	28	付表 I - 51	I 調査区掲載遺物一覧 (23)	
付表 I - 38	I 調査区掲載遺物一覧 (10) -中世A地区西部4-	29		-中世B地区東部13-	39
			付表 I - 52	I 調査区掲載遺物一覧 (24)	
				-中世B地区西部1-	39
			付表 I - 53	I 調査区掲載遺物一覧 (25)	
				-中世B地区西部2-	40
			付表 I - 54	I 調査区掲載遺物一覧 (26)	
				-中世B地区西部3-	41
			付表 I - 55	I 調査区掲載遺物一覧 (27)	
				-中世B地区西部4-	42
			付表 I - 56	I 調査区掲載遺物一覧 (28)	

図版 IV-40	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	灰原出土須恵器（1）
	埴輪窯P-1	灰原出土埴輪（8）	
図版 IV-41	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	灰原出土須恵器（2）
	埴輪窯P-1	灰原出土埴輪（9）	
図版 IV-42	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	灰原出土須恵器（3）
	埴輪窯P-1	灰原出土埴輪（10）	
図版 IV-43	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	灰原出土須恵器（4）
	埴輪窯P-1	灰原出土埴輪（11）	
図版 IV-44	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	灰原出土須恵器（5）
	埴輪窯P-1	灰原出土埴輪（12）	
図版 IV-45	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	灰原出土須恵器（6）
	埴輪窯P-1	灰原出土埴輪（13）	
図版 IV-46	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	灰原出土須恵器（7）
	埴輪窯P-1	灰原出土埴輪（14）・陶棺	
図版 IV-47	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	灰原出土須恵器（8）
	埴輪窯P-1	灰原出土埴輪（15）	
図版 IV-48	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	灰原出土須恵器（9）
	埴輪窯P-1	灰原出土埴輪（16）	
図版 IV-49	古墳時代後期遺物（P地区）	埴輪満まりP-1・埴輪軸用井戸P-1	
	出土埴輪		
図版 IV-50	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	床面I出土須恵器（1）
図版 IV-51	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	床面I出土須恵器（2）
図版 IV-52	古墳時代後期遺物（P地区）	須恵器窯P-1	床面I出土須恵器（3）
図版 IV-53	古墳時代後期遺物（P地区）		

付 表 目 次

—— 第 I 部 I 調査区の調査成果 ——

付表 I-1	I 調査区建物一覧（1）	1	付表 I-7	I 調査区櫛一覧（2）	7
付表 I-2	I 調査区建物一覧（2）	2	付表 I-8	I 調査区櫛一覧（3）	8
付表 I-3	I 調査区建物一覧（3）	3	付表 I-9	I 調査区主要ピット一覧（1）	8
付表 I-4	I 調査区建物一覧（4）	4	付表 I-10	I 調査区主要ピット一覧（2）	9
付表 I-5	I 調査区建物一覧（5）	5	付表 I-11	I 調査区主要ピット一覧（3）	10
付表 I-6	I 調査区櫛一覧（1）	6	付表 I-12	I 調査区主要ピット一覧（4）	11

5. 6Pトレンチ足跡検出状況

図版IV-13 中世P地区・中近世N地区遺構

1. 土坑P-39
2. 落込N-1～N-8堆積層断面

3. 24Nトレンチ暗渠N-5人物埴輪出土状況
4. 4Nトレンチ全景

図版IV-14 近世N地区遺構

1. 25Nトレンチ全景
2. 24Nトレンチ暗渠N-1～N-4、集石遺構N-1・N-2

図版IV-15 近世N・O地区遺構

1. 18Nトレンチ落込N-7
2. 20Nトレンチ全景
3. 風倒木痕O-2

図版IV-16 近世O地区遺構

1. 風倒木痕O-1
2. 土坑O-480
3. 土坑O-98

図版IV-17 近世P地区遺構

1. 4Pトレンチ全景
2. 塗輪軸用井戸P-1、塗輪溜まりP-1
3. 塗輪軸用井戸P-1断面

図版IV-18 古墳時代以前遺物（P地区）

出土石器

図版IV-19 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面I出土〔樹立塗輪〕(1)
塗輪窯P-1 床面I出土〔樹立塗輪〕(2)

図版IV-20 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面I出土〔樹立塗輪〕(1)
塗輪窯P-1 床面I出土〔樹立塗輪〕(2)

図版IV-21 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面I出土塗輪(1)

図版IV-22 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面I出土塗輪(2)

図版IV-23 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面I焚き口付近出土塗輪

図版IV-24 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面II出土塗輪(1)

図版IV-25 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面II出土塗輪(2)

図版IV-26 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面II出土塗輪(3)

図版IV-27 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面II出土塗輪(4)

図版IV-28 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面III出土塗輪(1)

図版IV-29 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面III出土塗輪(2)

図版IV-30 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面III出土塗輪(3)

図版IV-31 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面III出土塗輪(4)

図版IV-32 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 床面III出土塗輪(5)

図版IV-33 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪(1)

図版IV-34 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪(2)

図版IV-35 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪(3)

図版IV-36 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪(4)

図版IV-37 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪(5)

図版IV-38 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪(6)

図版IV-39 古墳時代後期遺物（P地区）

- 塗輪窯P-1 灰原出土塗輪(7)

IV 調査区の調査成果

図版 IV-1 古墳時代 P 地区遺構 塗輪窯 P-1

1. 塗輪窯 P-1 および灰原検出状況
2. 塗輪窯 P-1 床面 I [樹立塗輪] 出土状況
3. 塗輪窯 P-1 床面 I 塗輪出土状況

図版 IV-2 古墳時代 P 地区遺構 塗輪窯 P-1

1. 塗輪窯 P-1 床面 II 塗輪出土状況
2. 塗輪窯 P-1 床面 III 塗輪出土状況
3. 塗輪窯 P-1 床面 III 天井部崩落状況

図版 IV-3 古墳時代 P 地区遺構 塗輪窯 P-1

1. 塗輪窯 P-1 窯体内土層断面
2. 塗輪窯 P-1 床面 III 天井部崩落状況細部
3. 塗輪窯 P-1 灰原、河道 P-2D、
塗輪窯 P-1 烧造時排土

図版 IV-4 古墳時代 P 地区遺構 塗輪窯 P-1

1. 塗輪窯 P-1 煙道
2. 塗輪窯 P-1 排水溝断面
3. 塗輪窯 P-1 焚き口付近土層断面

図版 IV-5 古墳時代 P 地区遺構 須恵器窯 P-1

1. 須恵器窯 P-1 床面 I 須恵器出土状況
2. 須恵器窯 P-1 床面 I 須恵器出土状況細部
3. 須恵器窯 P-1 床面 I 下層柱穴検出状況

図版 IV-6 古墳時代 P 地区遺構

1. 須恵器窯 P-1 灰原細部
2. 須恵器窯 P-1 灰原
3. 灰原

図版 IV-7 古墳時代 P 地区遺構

1. 塗輪窯 P-1 烧造時排土と高位段丘層間の
土器出土状況
2. 河道 P-2D 遺物出土状況
3. 塗輪窯 P-1 烧造時排土と
河道 P-2D 堆積層断面
4. 河道 P-2D 下層須恵器出土状況

図版 IV-8 古墳時代 P 地区遺構 須恵器窯 P-1

1. 須恵器窯 P-1 灰原土層断面
2. 須恵器窯 P-1 灰原下層土層断面
3. 須恵器窯 P-1 灰原・河道 P-2D 土層断面

図版 IV-9 古墳時代 P 地区遺構 河道

1. 河道 P-2
2. 河道 P-2
3. 河道 P-2D 下層須恵器出土状況

図版 IV-10 古墳時代 P 地区遺構

1. 河道 P-2B 叩き板・当て具出土状況
2. 河道 P-2C 叩き板出土状況
3. 土坑 P-5 遺物出土状況

図版 IV-11 中世 N～P 地区遺構

1. 22N トレンチ落込 N-6
2. 8O トレンチ全景
3. 3P トレンチ中世遺構面
4. 土坑 P-52

図版 IV-12 中世 P 地区遺構

1. 土坑 P-46
2. 落込 P-21 下面検出足跡
3. 落込 P-21 下面検出足跡
4. 落込 P-21 下面足跡検出状況

図版III-22 近世M地区遺構 堤M-1

1. 堤M-1 突出部土層縦断面

2. 堤M-1 突出部下層検出 水田M-1

図版III-23 近世M地区遺構 積M-1

1. 積M-1 全景

2. 積M-1 積管接合部の墨書き

3. 積M-1 積管と木柱

4. 堤M-1 横断面

図版III-24 近世M地区遺構 積M-2

1. 積M-2 全景

2. 積M-2 積門部

3. 積M-2 積門北柱石碑文

4. 積M-2 積門南柱石および裏込め五輪塔

図版III-25 古墳時代中期～後期遺物 (K・L地区)

自然流路L-1・土坑K-2 出土須恵器

土坑・包含層出土土器

図版III-26 古墳時代後期遺物 (L地区)

須恵器窯L-1 土坑L-34・土坑L-35・

図版III-35 飛鳥～奈良時代遺物 (K・L・M地区)

土坑L-36出土須恵器

溝・土坑・ピット出土土器

図版III-27 古墳時代後期遺物 (L地区)

須恵器窯L-1 土坑L-34・土坑L-35・

図版III-36 平安時代遺物 (K地区)

土坑L-36出土須恵器

溝・土坑・ピット出土土器

図版III-28 古墳時代後期遺物 (L地区)

須恵器窯L-1 土坑L-34・土坑L-35・

図版III-37 平安時代遺物 (L地区)

土坑L-36・灰原出土須恵器

井戸・ピット・溝出土遺物

図版III-29 古墳時代後期遺物 (L地区)

須恵器窯L-1 土坑L-35・土坑L-36・

図版III-38 平安時代遺物 (L地区)

灰原出土須恵器

井戸L-4 出土土器

図版III-30 古墳時代後期遺物 (L地区)

須恵器窯L-1 床面I・土坑L-34・

図版III-39 平安時代遺物 (M地区)

土坑L-36出土土器

土器埋納ピットM-1 出土土師器

図版III-31 古墳時代後期遺物 (L地区)

須恵器窯L-1 土坑L-34・土坑L-35・

図版III-40 平安時代遺物 (M地区)

土坑L-36・灰原出土須恵器

土器埋納ピットM-2 出土土師器

図版III-32 古墳時代後期遺物 (L地区)

須恵器窯L-1 土坑L-34・土坑L-35・

図版III-41 錆倉時代遺物 (M地区)

土坑L-36・灰原出土須恵器

土壤墓M-1 出土土器(1)

図版III-33 古墳時代後期遺物 (L地区)

須恵器窯L-1 土坑L-34・土坑L-35・

図版III-42 錆倉時代遺物 (M地区)

灰原出土須恵器

土壤墓M-1 出土土器(2)

図版III-34 古墳時代後期遺物 (L地区)

須恵器窯L-1 土坑L-34・土坑L-35・

図版III-43 錆倉時代遺物 (M地区)

灰原出土須恵器

土壤墓M-2 出土土器

図版III-44 平安～鎌倉時代遺物 (M地区)

土壤墓M-3・ピットM-655・

土壤墓M-2出土土器

V層出土埴輪

図版III-45 包含層遺物 (L地区)

V層出土埴輪

図版III-46 包含層遺物 (K地区)

N・V層出土土器、石鏃

図版III-47 近世・包含層遺物 (L・M地区)

N・V層出土土器、青銅製鉗、

積M-2出土墓石

灰原出土須恵器

1. 井戸L-2 完掘状況
2. 井戸L-2 土層断面
- 図版III-9 奈良時代L・M地区遺構
1. 土坑L-31遺物出土状況
2. 土坑M-32遺物出土状況
3. 井戸L-2 遺物出土状況
4. 井戸M-3 土層断面
- 図版III-10 平安時代K地区遺構
1. 2Kトレンチ建物群
2. 1Kトレンチ溝K-1
3. 3Kトレンチ溝K-1
- 図版III-11 平安時代K地区遺構
1. 溝K-1・溝K-2
2. 建物K-2
3. 建物K-1
4. ピットK-1
- 図版III-12 平安時代L地区遺構 建物群
1. 1Lトレンチ建物群東半部
2. 1Lトレンチ建物群西半部
- 図版III-13 平安時代L地区遺構 建物群
1. 3Lトレンチ建物群
2. 1Lトレンチ建物群
- 図版III-14 平安時代L地区遺構
1. 1Lトレンチ建物群
2. 建物L-19
3. 建物L-21
4. 炉状遺構L-1
- 図版III-15 平安時代L地区遺構
1. 井戸L-1
2. 井戸L-1 遺物出土状況
3. 土坑L-7・土坑L-8
4. ピットL-209遺物出土状況
- 図版III-16 平安時代L地区遺構 井戸L-4
1. 井戸L-4
2. 井戸L-4 遺物出土状況
3. 井戸L-4 遺物出土状況
- 図版III-17 平安時代M地区遺構
1. 2Mトレンチ建物群
2. 2Mトレンチ建物群
3. 2Mトレンチ建物群
4. 炉状遺構M-2
- 図版III-18 平安時代M地区遺構 土器埋納ピット
1. 土器埋納ピットM-2
2. 土器埋納ピットM-2 遺物出土状況
3. 土器埋納ピットM-1 遺物出土状況
4. 土器埋納ピットM-1 遺物出土状況
- 図版III-19 鎌倉時代M地区遺構 土壙墓M-1
1. 土壙墓M-1
2. 土壙墓M-1 遺物出土状況
3. 土壙墓M-1 遺物出土状況
- 図版III-20 鎌倉時代M地区遺構 土壙墓M-2
1. 土壙墓M-2 遺景
2. 土壙墓M-2
3. 土壙墓M-2
- 図版III-21 鎌倉時代M地区遺構 土壙墓M-3
1. 土壙墓M-3
2. 土壙墓M-3 瓦器椀出土状況
3. 土壙墓M-3 土師器皿出土状況

図版II-81 中世軒平瓦（3）	吊紐・布袋・粘土組積み上げ資料
F-6～J-1b型式	
図版II-82 中世軒平瓦（4）	内叩き・瓦当と丸瓦接合資料
J-4～K-1型式	
図版II-83 中世軒平瓦（5）	図版II-90 中世平瓦（1）
J-1a～L-2型式・J型式梵字瓦	
図版II-84 中世軒平瓦（6）	図版II-91 中世平瓦（2）
L-3～N-11型式	
図版II-85 中世軒平瓦（7）	図版II-92 中世平瓦（3）
N-15～S-8型式	
図版II-86 中世軒平瓦（8）	図版II-93 中世道具瓦・線刻瓦
S-9～S-23型式	雁振瓦、鳥衾瓦、熨斗瓦、用途不明品、 線刻瓦、文字瓦
図版II-87 中世丸瓦（1）	図版II-94 中世鬼瓦
図版II-88 中世丸瓦（2）	

III調査区の調査成果

図版III-1 調査前景観および土層断面	1. 調査前景観	2. 土層断面
図版III-2 古墳時代L地区遺構 須恵器窯L-1	1. 須恵器窯L-1全景	2. 須恵器窯L-1全景
図版III-3 古墳時代L地区遺構 須恵器窯L-1	1. 須恵器窯L-1灰原検出状況	3. 須恵器窯L-1床面I遺物出土状況
	2. 須恵器窯L-1窯体および前部	4. 須恵器窯L-1床面II遺物出土状況
図版III-4 古墳時代L地区遺構 須恵器窯L-1	1. 須恵器窯L-1全景	3. 土坑L-34遺物出土状況
	2. 溝L-12遺物出土状況	4. 土坑L-36北半部遺物出土状況
図版III-5 古墳時代K・L地区遺構	1. 自然流路L-1	3. 土坑K-2遺物出土状況
	2. 自然流路L-1	4. 土坑K-2遺物出土状況
図版III-6 奈良時代L地区遺構 建物L-8	1. 建物L-8	3. 建物L-8 ピットL-469断面
	2. 建物L-8 ピットL-467断面	4. 建物L-8 ピットL-468断面
図版III-7 奈良時代M地区遺構 建物群	1. 建物群全景	4. 建物M-33
	2. 建物M-31	5. 建物M-34
	3. 建物M-32	
図版III-8 奈良時代L地区遺構 井戸L-2		

図版II-46	中世遺物（区画1・2）	井戸・溝・土坑出土土器
	区画1 井戸、区画2 溝・土坑出土土器	
図版II-47	中世遺物（区画2・9Fトレンチ）	溝・井戸・土坑・包含層出土土器、金属製品
	区画2 土坑出土鉢型、谷・包含層出土土器、9Fトレンチ土坑出土土器	
図版II-48	中世遺物（8Fトレンチ・区画3・4）	井戸・溝・土坑出土土器
	8Fトレンチ井戸、区画3・4 溝出土土器	
図版II-49	中世遺物（区画3・4）	井戸出土鐵瓶、井戸枠、溝出土土器
	溝出土土器	
図版II-50	中世遺物（区画3）	井戸出土土器
	溝出土土器	
図版II-51	中世遺物（区画3）	溝・土坑出土土器、石鍋
	溝・土坑出土土器	
図版II-52	中世遺物（区画3）	井戸出土木製品、包含層出土鐵釘
	溝・土坑出土土器	
図版II-53	中世遺物（区画3）	溝H-469・溝H-194・溝H-124出土土器
	土坑出土土器、包含層出土五輪塔	
図版II-54	中世遺物（区画3・5・7）	井戸出土土器
	土坑出土貨銭、井戸・ピット・溝・包含層出土土器	
図版II-55	中世遺物（区画5～8）	井戸・溝出土土器
	井戸・溝出土土器	
図版II-56	中世遺物（区画6・7）	井戸・溝F-516・溝F-292出土土器
	溝F-516・溝F-292出土土器	
図版II-57	中世遺物（区画6・7）	中世遺物
	溝・土坑出土土器	
図版II-58	中世遺物（区画6・7）	中世遺物
	土坑・井戸出土土器	
図版II-59	中世遺物（区画6～9）	中世軒丸瓦（1）
	溝F-292出土石仏、包含層・溝F-311・溝F-75出土土器	B-2～I-2型式
図版II-60	中世遺物（区画8・9）	中世軒丸瓦（2）
	溝・土坑出土土器、貨銭、刀子	E-1～K-5型式
図版II-61	中世遺物（区画8・9）	中世軒丸瓦（3）
	土坑出土土器	K-6～K-18型式
図版II-62	中世遺物（区画8・9）	中世軒丸瓦（4）
	土坑・井戸・ピット出土土器、石鍋	K-19～K-34型式
図版II-63	中世遺物（区画8～11）	中世軒丸瓦（5）
		K-35～K-46型式
		中世軒平瓦（1）
		A-1～F-7型式
		中世軒平瓦（2）
		F-4～F-5型式

3. 区画14 ピットG-2004
4. 区画14 ピットG-1906
- 図版II-35 中世H地区遺構 区画15、10H・11Hトレンチ
1. 区画15中央部 2H・3Hトレンチ全景
2. 10Hトレンチ全景
3. 11Hトレンチ全景
- 図版II-36 中世H地区遺構 区画15
1. 区画15北西部 溝H-194・土坑H-194
2. 溝H-469
3. 溝H-124
4. 溝H-124杭列
- 図版II-37 中世I・J地区遺構
1. I・J地区全景 線路を挟んで
2. 区画16
- III調査区
- 図版II-38 中世I地区遺構 区画16
1. 土坑I-759～土坑I-763、
建物I-35・建物I-37
2. 土坑I-762
3. 建物I-38
4. 建物I-39
- 図版II-39 中世I地区遺構 区画16周辺
1. 3Iトレンチ全景
2. 建物I-27・建物I-28
3. 建物I-29
4. 建物I-25
- 図版II-40 中世I・J地区遺構 区画16および周辺
1. 区画16西外側 建物J-41・建物J-42
2. 区画16西外側 建物J-42
3. 区画16 ピットI-110
- 図版II-41 中世I地区遺構 区画16および周辺
1. 区画16 建物I-35 ピットI-1
2. 区画16 建物I-36 ピットI-32
3. 区画16 建物I-39 ピットI-41
4. 区画16 ピットI-47
5. 区画16 ピットI-48
6. 区画16 建物I-36 ピットI-90
7. 区画16北側 ピットI-3715
8. 区画16 ピットI-3843
- 図版II-42 中世I地区遺構 区画16および周辺
1. 区画16 建物I-40 ピットI-3855・
ピットI-3856
2. 区画16北側 ピットI-4680
3. 区画16北側 建物I-30 ピットI-4707
4. 区画16北側 建物I-30 ピットI-4735
5. 区画16北側 ピットI-4755
6. 区画16北側 ピットI-4755石除去後
7. 区画16北側 ピットI-4751
- 図版II-43 中世I地区遺構 区画16西側（鉄造閻連土坑）
1. 土坑I-548遠景
2. 土坑I-548検出状況
3. 土坑I-548内部除去状況
- 図版II-44 中世I地区遺構（鉄造閻連土坑）
1. 土坑I-548石組南壁
2. 土坑I-548石組東壁
3. 土坑I-548石組北壁
4. 土坑I-548石組西壁
- 図版II-45 中世以前・中世遺物（区画1および周辺）
- 中世以前包含層・区画1および周辺土坑出土土器

1. 溝F-494瓦集中部出土状況
2. 溝F-494石列検出状況
- 図版II-22 中世F地区遺構 区画8・9
1. 区画9 土坑F-94・土坑F-874
2. 区画9 土坑F-94鉄製関連遺物出土状況
3. 溝F-494瓦集中部内仏花瓶出土状況
4. 区画8 土坑F-223
5. 区画8 土坑F-225
- 図版II-23 中世F地区遺構 区画8・9
1. 区画9 土坑F-95
2. 区画9 土坑F-96
3. 区画8 井戸F-24
4. 区画8 井戸F-66
- 図版II-24 中世G地区遺構 区画10~14
1. 区画10 全景
2. 区画11~14 全景
- 図版II-25 中世G地区遺構 区画11
1. 溝G-97石積・瓦積
2. 溝G-97石積
3. 溝G-97瓦積
4. 溝G-495瓦集中部
- 図版II-26 中世G地区遺構 区画10・11
1. 区画11 土坑G-822瓦出土状況
2. 区画11 土坑G-822瓦出土状況
3. 区画10 井戸G-28
4. 区画11 井戸G-80
- 図版II-27 中世G地区遺構 区画12・14
1. 区画12・14 全景
2. 区画12 井戸G-48
3. 区画12 井戸G-48木枠
- 図版II-28 中世G地区遺構 区画12
1. 井戸G-41
2. 井戸G-41
3. 井戸G-83
4. 井戸G-83
- 図版II-29 中世G地区遺構 区画12
1. 土坑G-130
2. ピットG-1746
3. 井戸G-81
4. 溝G-153西端
- 図版II-30 中世G地区遺構 区画12および周辺
1. 区画12 土坑G-129
2. 区画12 土坑G-142
3. 区画12南西外側 土坑G-263
4. 区画12南西外側 溝G-104東端
- 図版II-31 中世G地区遺構 区画13・14
1. 全景
2. 全景
- 図版II-32 中世G地区遺構 区画13・14
1. 区画14 土坑G-111
2. 区画14 土坑G-120
3. 区画13 土坑G-122
4. 区画13 井戸G-37断面
- 図版II-33 中世G地区遺構 区画14および周辺
1. 区画14 土坑G-774検出状況
2. 区画14 土坑G-774南東側石列
3. 区画14 土坑G-774西側石列
4. 区画14西外側 土坑G-479~土坑G-481
- 図版II-34 中世G地区遺構 区画14・1Gトレンチ
1. 1Gトレンチ 溝G-114・溝G-115
2. 区画14 建物G-24 ピットG-2511

1. 区画2 溝E-56断面
2. 区画2南外側 溝E-15~溝E-19
3. 区画2 土坑E-46
4. 区画2 土坑E-60
- 図版II-10 中世E地区遺構 区画2と南外側
1. 区画2南外側 土坑E-12
2. 区画2 ピットE-675
3. 区画2 ピットE-723
4. 区画2 建物E-13 ピットE-685
5. 区画2 建物E-13 ピットE-685
上部土器除去後
- 図版II-11 中世F地区遺構 8F・9F・10Fトレンチ
1. 8Fトレンチ全景
2. 9Fトレンチ全景
3. 10Fトレンチ全景
4. 8Fトレンチ 井戸F-159
5. 9Fトレンチ 土坑F-442
- 図版II-12 中世E地区遺構 区画3・4
1. 区画3 溝E-31南端断面
2. 区画3南半部・区画4
3. 区画3・4 溝E-27瓦出土状況
4. 区画3・4 溝E-27瓦出土状況
- 図版II-13 中世E地区遺構 区画3
1. 溝E-192
2. 溝E-160・溝E-163、土坑E-296・
土坑E-852
3. 土坑E-280
4. 土坑E-284
- 図版II-14 中世E地区遺構 区画3
1. 土坑E-271
2. 土坑E-310
3. 土坑E-281
4. 土坑E-55
- 図版II-15 中世E地区遺構 区画3
1. 土坑E-34
2. 土坑E-36
3. 土坑E-49
4. 土坑E-268
- 図版II-16 中世E地区遺構 区画3
1. 土坑E-757
2. 土坑E-35
3. 土坑E-276
4. 土坑E-276遺物出土状況
- 図版II-17 中世F地区遺構 区画5~9
1. 全景
2. 区画5 全景
- 図版II-18 中世F地区遺構 区画5~7
1. 区画6・7 溝F-70杭列
2. 区画6 土坑F-102
3. 区画5 溝F-84・建物F-22
4. 区画5 井戸F-22
- 図版II-19 中世F地区遺構 区画6・7、7Fトレンチ
1. 区画6 土坑F-89
2. 区画7 土坑F-98
3. 区画7・7Fトレンチ 全景
4. 7Fトレンチ 溝F-292遺物出土状況
- 図版II-20 中世F地区遺構 区画8・9
1. 全景
2. 溝F-75断面
3. 溝F-75瓦出土状況
- 図版II-21 中世F地区遺構 区画8
1. 全景

図版 I - 117 中世軒平瓦 (6)

O-2~S-26型式

図版 I - 118 中世軒平瓦 (7)

S-27~S-36型式

図版 I - 119 中世丸瓦 (1)

図版 I - 120 中世丸瓦 (2)

図版 I - 121 中世丸瓦 (3)・平瓦 (1)

図版 I - 122 中世平瓦 (2)

図版 I - 123 中世平瓦 (3)

図版 I - 124 中世道具瓦 (1)

隅木蓋・熨斗・面土瓦、他

図版 I - 125 中世道具瓦 (2)

鳥糞・雁振瓦、塙、他

図版 I - 126 中世鬼瓦

図版 I - 127 近世遺物 (A地区)

土坑出土土器・土製品

図版 I - 128 近世遺物 (A地区)

土坑 A-27出土瓦

—— II調査区の調査成果 ——

図版 II - 1 中世以前 G・I・J 地区遺構

1. 谷 J - 2
2. 溝 J - 2
3. 溝 G - 207・溝 G - 208
4. 溝 I - 389

図版 II - 2 中世 D 地区遺構 区画 1 および周辺

1. 全景

図版 II - 3 中世 D 地区遺構 区画 1 および周辺

1. 区画 1 北西外側 土坑 D - 10
2. 区画 1 土坑 D - 348
3. 区画 1 溝 D - 528 縦集中部
4. 区画 1 井戸 D - 104

図版 II - 4 中世 E 地区遺構 区画 2 および周辺

1. 区画 2 および南側全景
2. 区画 2 溝 E - 61
3. 区画 2 溝 E - 61

図版 II - 5 中世 E 地区遺構 区画 2

1. 溝 E - 61 と溝 E - 49 のコーナー部分
2. 溝 E - 61 断面
3. 溝 E - 61 瓦集中部
4. 溝 E - 61 瓦集中部

図版 II - 6 中世 E 地区遺構 区画 2

1. 溝 E - 61 付属暗渠 E - 1 検出状況
2. 溝 E - 61 付属暗渠 E - 1 覆丸瓦除去状況
3. 溝 E - 61 付属暗渠 E - 1 部分断面
4. 溝 E - 61 付属暗渠 E - 1 西端部

図版 II - 7 中世 E 地区遺構 区画 2

1. 溝 E - 217 暗渠 E - 2 検出状況
2. 溝 E - 217 暗渠 E - 2 最上部覆瓦除去状況
3. 溝 E - 217 暗渠 E - 2 上部丸瓦除去状況

図版 II - 8 中世 E 地区遺構 区画 2

1. 中央部
2. 中央部 手前一建物 E - 9
3. 西半部

図版 II - 9 中世 E 地区遺構 区画 2 と南外側

青磁碗・皿	溝・土坑出土土器
図版 I - 80 中世遺物（B地区東部）	図版 I - 99 中世遺物（B地区西部）
青磁碗	土坑 B - 118 出土土器
図版 I - 81 中世遺物（B地区東部）	図版 I - 100 中世遺物（B地区西部）
白磁壺・碗・皿・合子	土坑出土土器
図版 I - 82 中世遺物（B地区東部）	図版 I - 101 中世遺物（B地区西部）
白磁杯・皿	土坑・井戸出土土器
図版 I - 83 中世遺物（B地区東部）	図版 I - 102 中世遺物（B地区西部）
瀬戸・美濃焼き	堀 B - 1 出土土器（1）、金属製品
図版 I - 84 中世遺物（B地区東部）	図版 I - 103 中世遺物（B地区西部）
瓦質火鉢（1）	堀 B - 1 出土土器（2）
図版 I - 85 中世遺物（B地区東部）	図版 I - 104 中世遺物（B地区西部）
瓦質火鉢（2）	堀 B - 1 出土土器（3）、包含層出土土器
図版 I - 86 中世遺物（B地区東部）	図版 I - 105 中世遺物（B地区西部・C地区東部）
瓦質火鉢（3）	土器群 B - 1、B地区西部・C地区東部
図版 I - 87 中世遺物（B地区東部）	包含層出土土器
瓦質火鉢（4）・灯明具	図版 I - 106 中世遺物（C地区）
図版 I - 88 中世遺物（B地区東部）	ピット・溝・土坑・包含層出土土器
瓦質火鉢（5）	図版 I - 107 中世軒丸瓦（1）
図版 I - 89 中世遺物（B地区東部）	A - 1b～H - 5型式
瓦質火鉢（6）	図版 I - 108 中世軒丸瓦（2）
図版 I - 90 中世遺物（B地区東部）	G - 1～K - 57型式
瓦質火鉢（7）	図版 I - 109 中世軒丸瓦（3）
図版 I - 91 中世遺物（B地区東部）	K - 58～K - 68型式
瓦質火鉢（8）	図版 I - 110 中世軒丸瓦（4）
図版 I - 92 中世遺物（B地区東部）	K - 69～K - 80型式
瓦製品（1）	図版 I - 111 中世軒丸瓦（5）
図版 I - 93 中世遺物（B地区東部）	K - 81～K - 93型式
瓦製品（2）	図版 I - 112 中世軒平瓦（1）
図版 I - 94 中世遺物（B地区東部）	B - 1～E - 1型式
包含層出土土器・溝 B - 4 出土石製品	図版 I - 113 中世軒平瓦（2）
図版 I - 95 中世遺物（B地区西部）	D - 2～I - 2型式
ピット出土土器	図版 I - 114 中世軒平瓦（3）
図版 I - 96 中世遺物（B地区西部）	J - 2～J - 6型式
溝出土土器・瓦製品	図版 I - 115 中世軒平瓦（4）
図版 I - 97 中世遺物（B地区西部）	J - 7～N - 4型式
溝 B - 112・溝 B - 117 出土土器	図版 I - 116 中世軒平瓦（5）
図版 I - 98 中世遺物（B地区西部）	N - 5～O - 1型式

- 図版 I - 43 古墳時代遺物（A地区東部）
土器群A-1 出土須恵器（2）
- 図版 I - 44 古墳時代遺物（A地区東部）
土器群A-1 出土須恵器（3）
- 図版 I - 45 古墳時代遺物（A地区東部）
土器群A-1 出土須恵器（4）
- 図版 I - 46 古墳時代遺物（A地区東部）
土器群A-1 出土須恵器（5）
- 図版 I - 47 古墳時代遺物（A地区東部）
土器群A-1 出土土師器（1）
- 図版 I - 48 古墳時代遺物（A地区東部）
土器群A-1 出土土師器（2）
- 図版 I - 49 古墳時代遺物（A地区東部）
土器群A-1 出土土師器（3）
- 図版 I - 50 中世遺物（A地区東部）
溝A-1・溝A-2 出土土器
- 図版 I - 51 中世遺物（A地区東部）
溝A-2・土坑A-9 出土土器
- 図版 I - 52 中世遺物（A地区東部）
土坑A-8 出土土器、井戸A-8 出土
井筒、溝A-2 出土石製品
- 図版 I - 53 中世遺物（A地区西部）
溝A-10・溝A-12・溝A-17 出土土器
- 図版 I - 54 中世遺物（A地区西部）
土坑A-110・土坑A-113 出土土器
- 図版 I - 55 中世遺物（A地区西部）
土坑A-139・土坑A-141~土坑A-143・
ピットA-61 出土土器
- 図版 I - 56 中世遺物（A地区西部）
土坑A-148・土坑A-173 出土土器
- 図版 I - 57 中世遺物（A地区西部）
土坑A-173・井戸A-4 出土土器
- 図版 I - 58 中世遺物（A地区西部）
井戸A-4・井戸A-5 出土土器
- 図版 I - 59 中世遺物（A地区西部）
井戸A-5・井戸A-6 出土土器
- 図版 I - 60 中世遺物（A地区西部）
包含層出土器の鉢型、
- 井戸A-6 出土鉄瓶・土器
- 図版 I - 61 中世遺物（B地区東部）
ピット・溝出土土器
- 図版 I - 62 中世遺物（B地区東部）
溝B-3・溝B-7 出土土器
- 図版 I - 63 中世遺物（B地区東部）
溝B-7 出土土器
- 図版 I - 64 中世遺物（B地区東部）
溝B-4・溝B-11 出土土器
- 図版 I - 65 中世遺物（B地区東部）
溝B-1・溝B-11 出土土器
- 図版 I - 66 中世遺物（B地区東部）
溝B-33 出土土器
- 図版 I - 67 中世遺物（B地区東部）
溝B-33・溝B-2・溝B-12 出土土器
- 図版 I - 68 中世遺物（B地区東部）
溝B-12・溝B-38 出土土器
- 図版 I - 69 中世遺物（B地区東部）
溝B-38・溝B-12・土坑B-3 出土土器
- 図版 I - 70 中世遺物（B地区東部）
土坑B-5・土坑B-7 出土土器
- 図版 I - 71 中世遺物（B地区東部）
土坑B-7・土坑B-55 出土土器
- 図版 I - 72 中世遺物（B地区東部）
土坑出土土器
- 図版 I - 73 中世遺物（B地区東部）
土器溜まりB-1 出土土器(1)
- 図版 I - 74 中世遺物（B地区東部）
土器溜まりB-1 出土土器(2)
- 図版 I - 75 中世遺物（B地区東部）
土器溜まりB-1 出土土器(3)・鉢型
- 図版 I - 76 中世遺物（B地区東部）
井戸B-1・井戸B-8・井戸B-9 出土土器
- 図版 I - 77 中世遺物（B地区東部）
天目茶碗、青磁壺、褐釉壺
- 図版 I - 78 中世遺物（B地区東部）
青磁碗
- 図版 I - 79 中世遺物（B地区東部）

1. 土坑B-128土器出土状況
2. 井戸B-22断面
- 図版 I-30 中世B地区西部遺構(9)
1. 土坑B-141土器出土状況
2. 土坑B-141土器出土状況
- 図版 I-31 中世C地区東部遺構
1. 3C・9Bトレンチ全景
2. 2Cトレンチ北部
- 図版 I-32 中世C地区西部遺構(1)
1. 4Cトレンチ南部
2. 4Cトレンチ南部
- 図版 I-33 中世C地区西部遺構(2)
1. 建物C-1・建物C-2
2. 建物C-3・建物C-4
3. 溝C-3土器出土状況
- 図版 I-34 中世C地区西部遺構(3)
1. 5~8Cトレンチ全景
2. 10Cトレンチ西部
- 図版 I-35 中世C地区西部遺構(4)
1. 7Cトレンチ全景
- 図版 I-36 中世C地区西部遺構(5)
1. 土坑C-51土器・礫出土状況
2. 土坑C-51土器・礫出土状況
- 図版 I-37 中世C地区西部遺構(6)
1. 土坑C-56・土坑C-57
2. ピットC-365土器出土状況
- 図版 I-38 近世A地区遺構(1)
1. 4Aトレンチ中央部
2. 土坑A-2遺物出土状況
3. 土坑A-3・溝A-22
- 図版 I-39 近世A地区遺構(2)
1. 土坑A-22土器出土状況
2. 井戸A-2断面
- 図版 I-40 近世A地区遺構 西除川谷底平野部分
1. 3Aトレンチ東半部全景
2. 4Aトレンチ東半部全景
- 図版 I-41 旧石器～弥生時代遺物
出土石器
3. 土坑B-128下層土器出土状況
4. 土坑B-127土器出土状況
3. 土坑B-142出土状況
4. 土坑B-142土器・礫出土状況
3. 1Cトレンチ全景
4. 8Bトレンチ全景
3. 4Cトレンチ南西部
4. 4Cトレンチ北部
4. 土坑C-10第2層上面
5. 溝C-2土器出土状況
3. 5Cトレンチ全景
4. 6Cトレンチ溝C-14
2. 建物C-5
3. 土坑C-51完掘状況
4. ピットC-228遺物出土状況
3. 土坑C-55
4. 8Cトレンチ全景
4. 土坑A-11・土坑A-12
5. 土坑A-12出土状況
3. 土坑A-191
4. 土坑A-192
3. 5Aトレンチ東半部全景
- 図版 I-42 古墳時代遺物(A地区東部)
土器群A-1出土須恵器(1)

1. 溝B-38縹・瓦出土状況
2. 溝B-38金属製品出土状況
3. 溝B-33土器出土状況
4. 溝B-33土器出土状況
- 図版I-18 中世B地区東部遺構(6)
1. 1Bトレンチ中央部
 2. 1Bトレンチ西部
- 図版I-19 中世B地区東部遺構(7)
1. 土器溜まりB-1土器出土状況
 2. 土坑B-21瓦出土状況
 3. 土坑B-1瓦出土状況
 4. 土坑B-3土器出土状況
- 図版I-20 中世B地区東部遺構(8)
1. 2Bトレンチ中央部
 2. 井戸B-1断面
 3. 井戸B-1土器出土状況
 4. 土坑B-50焼土・炭化物検出状況
 5. 土坑B-75土器出土状況
- 図版I-21 中世B地区東部遺構(9)
1. 井戸B-7土器出土状況
 2. 井戸B-9土器出土状況
 3. 土坑B-47瓦出土状況
 4. 土坑B-71
- 図版I-22 中世B地区西部遺構(1)
1. 5~7Bトレンチ全景
- 図版I-23 中世B地区西部遺構(2)
1. 城館全景
 2. 城館内北東部
- 図版I-24 中世B地区西部遺構(3)
1. 堀B-1南部
 2. 堀B-1東部
 3. 堀B-1断面
 4. 堀B-1底部遺物出土状況
 5. 堀B-1南東部屈曲部分
- 図版I-25 中世B地区西部遺構(4)
1. 建物B-16
 2. 建物B-17
 3. 建物B-18
 4. 建物B-19・建物B-20
- 図版I-26 中世B地区西部遺構(5)
1. ピットB-1001土器出土状況
 2. ピットB-1031土器出土状況
 3. ピットB-1100土器出土状況
 4. ピットB-1194土器出土状況
 5. ピットB-1331土器出土状況
 6. ピットB-1388土器出土状況
 7. ピットB-1438上層土器出土状況
 8. ピットB-1438下層土器出土状況
- 図版I-27 中世B地区西部遺構(6)
1. 城館北部土坑群
 2. 溝B-112土器出土状況
 3. 溝B-117土器出土状況
 4. 6Bトレンチ南東部
 5. 土坑B-103縹出土状況
- 図版I-28 中世B地区西部遺構(7)
1. 土坑B-104底部土器出土状況
 2. 土坑B-114土器出土状況
 3. 土坑B-115土器出土状況
 4. 土坑B-122土器出土状況
- 図版I-29 中世B地区西部遺構(8)

3. 溝A-2 土器出土状況
4. 溝A-2 断面
- 図版 I-6 中世A地区東部遺構(3)
1. 土坑A-8 土器出土状況
 2. 土坑A-8 土器出土状況
 3. 4Aトレンチ西半部全景
- 図版 I-7 中世A地区東部遺構(4)
1. 5Aトレンチ中央土坑群
 2. 土坑A-83土器出土状況
 3. 土坑A-49
- 図版 I-8 中世A地区西部遺構(1)
1. 6Aトレンチ全景
- 図版 I-9 中世A地区西部遺構(2)
1. 溝A-10
 2. 溝A-10東西方向断面
 3. 溝A-12断面
- 図版 I-10 中世A地区西部遺構(3)
1. 土坑A-101・土坑A-102
 2. 土坑A-103
- 図版 I-11 中世A地区西部遺構(4)
1. 土坑A-121・土坑A-122断面
 2. 土坑A-125・土坑A-126断面
 3. 土坑A-113断面および土器出土状況
- 図版 I-12 中世A地区西部遺構(5)
1. 6Aトレンチ北半部
 2. 土坑A-173断面
- 図版 I-13 中世B地区東部遺構(1)
1. 1Bトレンチ西半部
- 図版 I-14 中世B地区東部遺構(2)
1. 溝B-3・溝B-4・溝B-7・
土器溜まりB-1検出状況
 2. 溝B-4・溝B-11内石組・疊群
- 図版 I-15 中世B地区東部遺構(3)
1. 2Bトレンチ中央部
- 図版 I-16 中世B地区東部遺構(4)
1. 2Bトレンチ西半部全景
 2. 溝B-1 疊・瓦出土状況
- 図版 I-17 中世B地区東部遺構(5)
5. 溝A-2・土坑A-8
 4. 4Aトレンチ段落ち部分
 5. 土坑A-41疊出土状況
 6. 土坑A-14土器出土状況
4. 井戸A-7
 5. 土坑A-54・井戸A-8
2. 6Aトレンチ全景
 4. 土坑A-143土器出土状況および断面
 5. 溝A-17
3. 土坑A-103東西方向断面
 4. 土坑A-103南北方向断面
4. 土坑A-113土器出土状況
 5. 6Aトレンチ東半部土坑群
3. 井戸A-5断面
 4. 井戸A-6断面
2. 1Bトレンチ東半部
3. 溝B-4 土器出土状況
 4. 溝B-11北端部瓦質僧形像出土状況
 5. 溝B-11疊・瓦出土状況
3. 溝B-1・溝B-39疊・瓦出土状況
 4. 溝B-1 疊・瓦出土状況

写 真 目 次

—— 第VI部 自然科学的調査 ——

VI-13-写真1 梶形状鉄滓の顕微鏡組織	273	顕微鏡組織	279
VI-13-写真2 梶形状鉄滓と羽口先端溶融		VI-13-写真8 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	280
ガラス質滓の顕微鏡組織	274	VI-13-写真9 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	281
VI-13-写真3 梶形状鉄滓と羽口先端溶融	275	VI-13-写真10 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	282
ガラス質滓の顕微鏡組織	275	VI-13-写真11 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	283
VI-13-写真4 羽口先端溶融ガラス質滓の 顕微鏡組織	276	VI-13-写真12 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	284
VI-13-写真5 不定形鉄滓と 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	277	VI-13-写真13 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	285
VI-13-写真6 炉壁溶融スラグの顕微鏡組織	278	VI-13-写真14 送風管と炉壁溶融スラグの 顕微鏡組織	286
VI-13-写真7 炉壁・羽口先端溶融スラグの		VI-13-写真15 炉壁溶融スラグの特性X線像	287
		VI-13-写真16 送風管溶融スラグの特性X線像	288

—— 第VII部 考察 ——

萩原寺址出土丸瓦1および端丸瓦2	311	萩原寺址出土端平瓦1・2	
萩原寺址出土端丸瓦3および端丸瓦4	311	および原寺村寺社御改帳	310

写 真 図 版 目 次

—— I 調査区の調査成果 ——

図版 I-1 古墳時代A地区遺構 建物群

1. 建物A-1
2. 建物A-2
3. 建物A-3
4. 建物A-4

図版 I-2 古墳時代A地区遺構 土器群A-1

1. 土器群A-1全景
2. 土器群A-1出土状況
3. 土器群A-1出土状況
4. 3Aトレンチ西半部全景

図版 I-3 飛鳥・奈良時代B地区遺構

1. 溝B-111土器・礫出土状況
2. 9Bトレンチ自然流路C-1
3. 9Bトレンチ自然流路C-1
4. 自然流路C-1内土器出土状況
5. 自然流路C-1内土器出土状況

図版 I-4 中世A地区東部遺構(1)

1. 3A・4Aトレンチ全景
2. 溝A-1・溝A-21
3. 溝A-1東石組暗渠
4. 溝A-21土器出土状況

図版 I-5 中世A地区東部遺構(2)

1. 溝A-2全景
2. 溝A-2土器出土状況

—— 第VI部 自然科学的調査 ——

VI-1-表1	自然科学分析一覧表	137	VI-7-表6	中世土器胎土性状表(1)	214
VI-2-表1	解析を行った古代・中世瓦一覧	143	VI-7-表7	中世土器胎土性状表(2)	215
VI-3-表1	分析値(1)一日置莊窯・日置莊西町窯・ 百舌鳥梅町窯・土師の里窯	154	VI-7-表8	中世土器胎土性状表(3)	216
VI-3-表2	分析値(2)一晉田白鳥窯	155	VI-8-表1	胎土性状表(1)	221
VI-3-表3	分析値(3)-新池窯	156	VI-8-表2	胎土性状表(2)	222
VI-3-表4	分析値(4)-百舌鳥古墳群	156	VI-9-表1	須恵器窯焼土試料の 自然残留磁気測定結果	226
VI-4-表1	化学分析表(1)	163	VI-9-表2	須恵器窯焼土試料の 消磁前及び消磁後の平均磁化方位	227
VI-4-表2	化学分析表(2)	164	VI-9-表3	埴輪窯焼土試料の 自然残留磁気測定結果	227
VI-4-表3	化学分析表(3)	165	VI-9-表4	須恵器窯の残留磁気測定結果	229
VI-4-表4	化学分析表(4)	166	VI-9-表5	埴輪窯の残留磁気測定結果	229
VI-4-表5	胎土性状表(1)	167	VI-10-表1	¹⁴ C年代試料一覧表	235
VI-4-表6	胎土性状表(2)	168	VI-11-表1	珪藻の生態分類	238
VI-4-表7	胎土性状表(3)	169	VI-11-表2	淡水生種の 各生態性に対する適応性	238
VI-4-表8	胎土性状表(4)	170	VI-12-表1	O地区分析試料一覧表	251
VI-5-表1	試料の分析処理結果状況	173	VI-12-表2	O地区採集土壤試料花粉分析結果	258
VI-5-表2	試料の重鉱物組成一覧表	174	VI-12-表3	河道P-2B採集土壤試料	
VI-5-表3	薄片観察試料一覧表	180	VI-12-表4	花粉分析結果	259
VI-5-表4	試料の鉱物・岩石比の量比	181	VI-12-表5	河道P-2Bにおけるイネ属比率	260
VI-5-表5	分析試料一覧表(1)	190	VI-12-表6	溝O-18採集土壤	
VI-5-表6	分析試料一覧表(2)	191	VI-12-表7	プラント・オパール分析結果	265
VI-5-表7	分析試料一覧表(3)	192	VI-13-表1	落込O-1採集土壤	
VI-6-表1	化学分析表(1)	197	VI-13-表2	プラント・オパール分析結果	265
VI-6-表2	化学分析表(2)	198	VI-13-表3	河道P-2B採集土壤試料	
VI-6-表3	胎土性状表(1)	199	VI-13-表4	プラント・オパール分析結果	266
VI-6-表4	胎土性状表(2)	200	VI-13-表5	供試材の履歴と調査項目	270
VI-7-表1	中世瓦化学分析表	209	VI-13-表6	供試材の化学組成	271
VI-7-表2	中世瓦胎土性状表	210			
VI-7-表3	中世土器化学分析表(1)	211			
VI-7-表4	中世土器化学分析表(2)	212			
VI-7-表5	中世土器化学分析表(3)	213			

—— 第VII部 考察 ——

VII-1-表1	分類対照表	292	VII-2-表1	狭山村の瓦生産	304
VII-1-表2	中世後半期の土器様相	298			

表 目 次

——序 調査の概要と遺跡の立地——

序-表1 遺跡地名表 7

——第I部 I調査区の調査成果——

表I-1 I調査区トレンチ別調査年度表 15 表I-2 I調査区軒瓦出土点数表 159

——第II部 II調査区の調査成果——

表II-1 新旧トレンチ対照表 192 表II-3 軒丸・軒平瓦新旧型式対照出土点数表 321

表II-2 新旧区画番号対照表 195 表II-4 中世区画一覧表 340

——第III部 III調査区の調査成果——

表III-1 III調査区の調査一覧表 346

——第IV部 IV調査区の調査成果——

表IV-1 IV調査区調査年次一覧表 455

——第V部 基礎分析——

V-1-表1 同心円紋スタンプ集計表	8	基礎分析表	40
V-1-表2 須恵器窯L-1 出土須恵器の破片数集計表	8	V-3-表1 四隅計測法による出土数量	71
V-1-表3 須恵器窯L-1 出土須恵器の重量集計表	9	V-3-表2 出土瓦重量	71
V-1-表4 須恵器窯L-1 出土須恵器の口縁残存度集計表	9	V-3-表3 I調査区軒瓦地区別出土比率	80
V-1-表5 蓋杯のヘラ記号集計表	10	V-3-表4 II調査区軒瓦地区別出土比率	82
V-1-表6 大阪府下における口縁端部に刻み目状 調整を有する須恵器一覧表	15	V-3-表5 日置荘遺跡出土軒瓦 同範・同紋・同系関係表	85
V-1-表7 須恵器窯P-1 床面I出土須恵器集計表	19	V-5-表1 屋地(区画)別重量集計	111
V-1-表8 須恵器窯P-1 床面I出土のヘラ記号蓋杯一覧表	21	V-5-表2 出土土器の時期別体積一覧	114
V-2-表1 IV調査区出土埴輪数量表	37	V-5-表3 種類別比重(計測分)	114
V-2-表2 IV調査区出土円筒埴輪の		V-5-表4 種類別比重(第四紀・井上)	114
		V-5-表5 出土土器の時期別個体重量一覧	114
		V-5-表6 比重計測用資料一覧表	117
		V-7-表1 I調査区B地区東部 土器種構成表	128・129

VI-5-図4	胎土分析試料		VI-11-図3	F地区花粉化石群集層位分布	242
	-喜田白鳥埴輪窯埴輪	189	VI-11-図4	G地区土壤サンプリング位置図	245
VI-6-図1	Qt-Pt図	194	VI-11-図5	7Gトレンチ試料における 主要珪藻化石群集層位分布	246
VI-6-図2	SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 図	194	VI-11-図6	6Gトレンチ溝G-119試料における 花粉化石群集分布	248
VI-6-図3	Fe ₂ O ₃ -MgO図	195	VI-11-図7	7Gトレンチ落込G-5試料における 花粉化石群集分布	248
VI-6-図4	K ₂ O-CaO図	195	VI-11-図8	7Gトレンチ土坑G-493試料における 花粉化石群集分布	249
VI-7-図1	Qt-Pt図	202	VI-11-図9	8Gトレンチ溝G-352試料における 花粉化石群集分布	249
VI-7-図2	SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 図	202	VI-12-図1	O地区土壤試料採取位置図	252
VI-7-図3	Fe ₂ O ₃ -MgO図	204	VI-12-図2	P地区土壤試料採取位置図	252
VI-7-図4	K ₂ O-CaO図	204	VI-12-図3	河道P-2B	
VI-7-図5	Qt-Pt図	206	VI-12-図4	土層柱状図および試料採取層位	252
VI-7-図6	SiO ₂ -Al ₂ O ₃ 図	206	VI-12-図5	河道P-2B試料における 主要珪藻化石群集変遷	255
VI-7-図7	Fe ₂ O ₃ -MgO図	208	VI-12-図6	溝O-18・落込O-1試料 プラント・オパール産出割合	265
VI-7-図8	K ₂ O-CaO図	208	VI-12-図7	河道P-2B試料 プラント・オパール産出割合	266
VI-8-図1	Qt-Pt図	218	VI-13-図1	炉壁溶融スラグのコンピュータープログラム による高速定性分析結果	272
VI-8-図2	サンプリング地点位置図	219	VI-13-図2	溶融スラグのコンピュータープログラム による高速定性分析結果	272
VI-9-図1	西日本での伏角・ 偏角年変化曲線	223			
VI-9-図2	埴輪窯および須恵器窯の 試料採取場所	224			
VI-9-図3	須恵器窯焼土試料の 直交座標交流消磁図	226			
VI-9-図4	須恵器窯焼土試料の段階交流消磁実験に 伴う残留磁化方位の変化	227			
VI-9-図5	埴輪窯焼土試料の 直交座標交流消磁図	228			
VI-9-図6	偏角・伏角変化曲線図	230			
VI-11-図1	F地区土壤サンプリング位置図	237			
VI-11-図2	F地区主要珪藻化石群集層位分布	240			

—— 第VII部 考察 ——

VII-1-図1	堺分類図	293	VII-1-図4	羽釜分類図(2)	297
VII-1-図2	播鉢分類図	294	VII-2-図1	丹南地域周辺地形図	307
VII-1-図3	羽釜分類図(1)	296			

V-5-図9	10m方眼による 遺物の重量集計(8).....	103	V-7-図2	I調査区B地区東部 主要遺構土器分布図(1).....	127
V-5-図10	10m方眼による 遺物の重量集計(9).....	104	V-7-図3	I調査区B地区東部 主要遺構土器分布図(2).....	130
V-5-図11	土釜の重量にみる分布の変遷.....	105			131
V-5-図12	井戸分布図.....	106	V-7-図4	I調査区B地区東部 主要遺構土器分布図(3).....	132
V-5-図13	II調査区の集落変遷(1).....	109	V-7-図5	I調査区B地区東部 主要遺構土器分布図(4).....	133
V-5-図14	II調査区の集落変遷(2).....	110			
V-5-図15	土器の容積・体積の 計測方法模式図.....	113	V-7-図6	I調査区B地区東部 遺構別器種構成比(1).....	134
V-6-図1	I調査区の遺物出土分布図.....	120			
V-6-図2	日置荘村落の変遷.....	122	V-7-図7	I調査区B地区東部 遺構別器種構成比(2).....	135
V-7-図1	I調査区B地区東部				

— 第VI部 自然科学的調査 —

VI-2-図1	用いた布目圧痕サンプル.....	143	VI-3-図10	日置荘・梅町窯出土埴輪の Rb-Sr分布図.....	150
VI-2-図2	布目圧痕サンプルに押しつけた 布の画像.....	143	VI-3-図11	ニサンザイ古墳出土埴輪の Rb-Sr分布図.....	150
VI-2-図3	古代中世瓦の布目圧痕の 画像解析結果(1).....	144	VI-3-図12	御廟山古墳出土埴輪の Rb-Sr分布図.....	150
VI-2-図4	古代中世瓦の布目圧痕の 画像解析結果(2).....	145	VI-3-図13	源工門山古墳出土埴輪の Rb-Sr分布図.....	150
VI-2-図5	古代中世瓦の布目圧痕の 画像解析結果(3).....	146	VI-3-図14	塚越り古墳出土埴輪の Rb-Sr分布図.....	150
VI-2-図6	古代・中世瓦製作年代と 布目圧痕との相関関係.....	146	VI-3-図15	新池群と土師の里群の相互識別.....	152
VI-3-図1	K因子の比較.....	148	VI-3-図16	誉田白鳥群と日置荘群の相互識別.....	152
VI-3-図2	Ca因子の比較.....	148	VI-3-図17	新池群と日置荘群の相互識別.....	152
VI-3-図3	Fe因子の比較.....	148	VI-4-図1	三角ダイヤグラム位置分類図.....	158
VI-3-図4	Rb因子の比較.....	149	VI-4-図2	菱形ダイヤグラム位置分類図.....	158
VI-3-図5	Sr因子の比較.....	149	VI-4-図3	Qt-Pt図.....	160
VI-3-図6	Na因子の比較.....	149	VI-4-図4	$\text{SiO}_2\text{-Al}_2\text{O}_3$ 図.....	160
VI-3-図7	誉田白鳥窯出土埴輪の Rb-Sr分布図.....	150	VI-4-図5	$\text{Fe}_2\text{O}_3\text{-MgO}$ 図.....	161
VI-3-図8	土師の里窯出土埴輪の Rb-Sr分布図.....	150	VI-4-図6	$\text{K}_2\text{O}\text{-CaO}$ 図.....	161
VI-3-図9	新池窯出土埴輪の Rb-Sr分布図.....	150	VI-5-図1	試料の重鉱物組成(1).....	175
			VI-5-図2	試料の重鉱物組成(2).....	176
			VI-5-図3	試料の重鉱物組成(3).....	177

V-1-図14 須恵器窯P-1	V-3-図12 II調査区軒丸瓦分布図	72
床面I出土須恵器の器種構成	V-3-図13 I調査区軒丸瓦分布図	73
V-1-図15 須恵器窯P-1	V-3-図14 II調査区軒平瓦分布図	74
床面I須恵器出土状況	V-3-図15 I調査区軒平瓦分布図	75
V-1-図16 須恵器窯P-1	V-3-図16 II調査区丸瓦分布図	76
床面I出土のヘラ記号蓋杯(1)	V-3-図17 I調査区丸瓦分布図	77
V-1-図17 須恵器窯P-1	V-3-図18 II調査区平瓦分布図	78
床面I出土のヘラ記号蓋杯(2)	V-3-図19 I調査区平瓦分布図	79
V-1-図18 床面I出土	V-3-図20 II調査区鬼瓦・	
ヘラ記号蓋杯の法量分布	雁振瓦・熨斗瓦分布図	80
V-1-図19 床面I出土無記号蓋杯の法量分布	V-3-図21 I調査区軒瓦地区別出土量比率	80
V-1-図20 MT206-1号窯	V-3-図22 I調査区鬼瓦・	
窯内の須恵器出土状況	雁振瓦・熨斗瓦分布図	81
V-1-図21 須恵器窯P-1	V-3-図23 II調査区軒瓦時期別出土量比率	81
床面I共有工人の構成推定図	V-3-図24 軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせ	83
V-1-図22 口縁端部に刻み目を有する	V-3-図25 萩原神社境内出土瓦	84
須恵器の分布	V-4-図1 平安時代以降の遺物変遷図(1)	88
V-2-図1 日置莊跡IV調査区埴輪窯P-1	V-4-図2 平安時代以降の遺物変遷図(2)	89
出土の円筒埴輪の透かし位置	V-4-図3 遺物の出土分布図(1)	90
V-2-図2 日置莊跡IV調査区埴輪窯P-1	V-4-図4 遺物の出土分布図(2)	91
出土円筒埴輪断面図1	V-4-図5 遺物の出土分布図(3)	92
V-2-図3 日置莊跡IV調査区埴輪窯P-1	V-5-図1 重量集計用の	
出土円筒埴輪断面図2	10m方眼と調査区の位置	95
V-2-図4 日置莊跡IV調査区埴輪窯P-1	V-5-図2 10m方眼による	
出土円筒埴輪の諸特徴出現頻度	遺物の重量集計(1)	96
V-2-図5 日置莊跡IV調査区埴輪窯P-1	V-5-図3 10m方眼による	
出土埴輪変遷図	遺物の重量集計(2)	97
V-3-図1 瓦の部位名称	V-5-図4 10m方眼による	
V-3-図2 丸瓦凹面吊り紐模式図	遺物の重量集計(3)	98
V-3-図3 瓦観察表・観察ポイント	V-5-図5 10m方眼による	
V-3-図4 軒平瓦顎形態模式図	遺物の重量集計(4)	99
V-3-図5 雁振瓦分類模式図	V-5-図6 10m方眼による	
V-3-図6 軒丸瓦変遷図(1)	遺物の重量集計(5)	100
V-3-図7 軒丸瓦変遷図(2)	V-5-図7 10m方眼による	
V-3-図8 軒平瓦変遷図(1)	遺物の重量集計(6)	101
V-3-図9 軒平瓦変遷図(2)	V-5-図8 10m方眼による	
V-3-図10 軒丸瓦・丸瓦各部位の法量変化	遺物の重量集計(7)	102
V-3-図11 軒平瓦・平瓦各部位の法量変化		
	69	

図IV-59 塗輪窯P-1床面I 〔樹立埴輪〕(1)	536	図IV-82 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(4)	560
図IV-60 塗輪窯P-1床面I 〔樹立埴輪〕(2)	537	図IV-83 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(5)	562
図IV-61 塗輪窯P-1床面I塗輪接合状況	538	図IV-84 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(6)	563
図IV-62 塗輪窯P-1床面I出土埴輪(1)	539	図IV-85 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(7)	564
図IV-63 塗輪窯P-1床面I出土埴輪(2)	540	図IV-86 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(8)	565
図IV-64 塗輪窯P-1床面I 焚き口付近出土埴輪(1)	541	図IV-87 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(9)	566
図IV-65 塗輪窯P-1床面I 焚き口付近出土埴輪(2)	542	図IV-88 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(10)	567
図IV-66 塗輪窯P-1床面II塗輪接合状況	543	図IV-89 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(11)	568
図IV-67 塗輪窯P-1床面II出土埴輪(1)	544	図IV-90 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(12)	569
図IV-68 塗輪窯P-1床面II出土埴輪(2)	545	図IV-91 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(13)	570
図IV-69 塗輪窯P-1床面II出土埴輪(3)	546	図IV-92 塗輪窯P-1出土埴輪	571
図IV-70 塗輪窯P-1床面II出土埴輪(4)	547		
図IV-71 塗輪窯P-1床面III塗輪接合状況	548	図IV-93 塗輪窯P-1出土埴輪	572
図IV-72 塗輪窯P-1床面III出土埴輪(1)	550	図IV-94 須恵器窯P-1床面I · 床面II出土須恵器	573
図IV-73 塗輪窯P-1床面III出土埴輪(2)	551	図IV-95 須恵器窯P-1灰原出土須恵器(1)	574
図IV-74 塗輪窯P-1床面III出土埴輪(3)	552	図IV-96 須恵器窯P-1灰原出土須恵器(2)	575
図IV-75 塗輪窯P-1床面III出土埴輪(4)	553	図IV-97 須恵器窯P-1灰原出土須恵器(3)	576
図IV-76 塗輪窯P-1床面III出土埴輪(5)	554	図IV-98 須恵器窯P-1灰原出土須恵器(4)	577
図IV-77 塗輪窯P-1床面III出土埴輪(6)	555	図IV-99 須恵器窯P-1灰原出土須恵器(5)	578
図IV-78 塗輪窯P-1床面III出土埴輪(7)	556	図IV-100 須恵器窯P-1灰原出土須恵器(6)	579
図IV-79 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(1)	557	図IV-101 須恵器窯P-1灰原出土須恵器(7)	580
図IV-80 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(2)	558	図IV-102 須恵器窯P-1灰原出土遺物	581
図IV-81 塗輪窯P-1灰原出土埴輪(3)	559	図IV-103 河道P-2出土土器	581

— 第V部 基礎分析 —

V-1-図1 日置佐遺跡周辺の須恵器窯分布図	2	V-1-図7 桜井谷2-17窯跡の器種構成	8
V-1-図2 須恵器窯L-1 出土須恵器の器種構成	3	V-1-図8 蓋杯のヘラ記号	10
V-1-図3 須恵器窯L-1出土甕の分類	4	V-1-図9 須恵器窯L-1と小阪須恵器窯 出土須恵器の器種構成	10
V-1-図4 須恵器窯L-1 出土甕口縁部の法量分布	4	V-1-図10 異形杯	17
V-1-図5 蓋杯の同心円紋スタンプ	5	V-1-図11 須恵器窯P-1 出土須恵器の器種構成	17
V-1-図6 須恵器窯L-1 出土蓋杯の属性分類	6	V-1-図12 須恵器窯P-1出土須恵器拓影	18
		V-1-図13 蓋杯のヘラ記号	19

—— 第IV部 IV調査区の調査成果 ——

図IV-1	IV調査区全体図	451	図IV-28	N地区落込平面図	492
図IV-2	IV調査区地区割図(大区画)	452	図IV-29	O地区中世溝断面図	493
図IV-3	N~Q地区土地区画と 凹地状地形位置図	453	図IV-30	O地区落込堆積層序図	494
図IV-4	トレンチ配置図	454	図IV-31	P地区中世溝断面図	495
図IV-5	地区割図(西半部)	456	図IV-32	P地区中世土坑平面・断面図	497
図IV-6	地区割図(東半部)	457	図IV-33	P地区中世遺構図	498
図IV-7	基本層序概略図	458	図IV-34	N地区落込平面図	501
図IV-8	P地区開折谷、 O+N地区凹地の基本層序模式図	459	図IV-35	N地区溝断面図	502
図IV-9	P地区基本層序模式図	460	図IV-36	N地区暗渠・集石遺構平面図	503
図IV-10	P地区河道平面図	461	図IV-37	N地区石列N-1・暗渠N-5平面図	504
図IV-11	P地区埴輪窯P-1平面・ 埴輪窯P-1排水溝断面図	462	図IV-38	N地区風倒木痕平面・断面図	505
図IV-12	埴輪窯P-1縦断面図	463	図IV-39	O地区近世複数部第1遺構平面図	506
図IV-13	埴輪窯P-1横断面図	465	図IV-40	中・近世溝断面図	508
図IV-14	埴輪窯P-1 床面I樹立埴輪出土状況	467	図IV-41	O地区風倒木痕・土坑平面・断面図	510
図IV-15	埴輪窯P-1 床面I埴輪出土状況	468	図IV-42	P地区近世溝断面図	511
図IV-16	埴輪窯P-1 床面II埴輪出土状況	469	図IV-43	埴輪転用井戸P-1 埴輪溜まりP-1平面・断面図	512
図IV-17	埴輪窯P-1 床面III埴輪出土状況	471	図IV-44	N地区落込N-8平面図	514
図IV-18	埴輪窯P-1 須恵器窯P-1周辺位置図	473	図IV-45	N地区落込N-8上面遺構平面図	515
図IV-19	埴輪窯P-1灰原・須恵器窯P-1灰原・ 河道P-2D堆積層断面図	474・475	図IV-46	井戸O-9と はねつるべ柱痕群O-6平面・断面図	516
図IV-20	埴輪窯P-1灰原・ 河道P-2D土層断面図	476	図IV-47	N地区近世溝断面図	517
図IV-21	須恵器窯P-1 平面・断面図	479	図IV-48	O地区掘立柱小屋平面・断面図	519
図IV-22	須恵器窯P-1 床面I出土遺物詳細図	481	図IV-49	P地区近世後半期遺構平面図	521
図IV-23	須恵器窯P-1 推定復元図	483	図IV-50	P地区木組みP-1平面・見通し図	523
図IV-24	河道P-2A~P-2E平面図	484	図IV-51	IV調査区周辺の 水系および井戸位置図	524・525
図IV-25	P地区開折谷部分 東西方向断面図	486・487	図IV-52	P地区貨幣出土地点	526
図IV-26	P地区古墳時代後期遺構平面図	489	図IV-53	IV調査区時期変遷図(1)(I~IV期)	528
図IV-27	土坑P-3・土坑P-5平面・断面図	491	図IV-54	IV調査区時期変遷図(2)(V~VII期)	529
			図IV-55	IV調査区時期変遷図(3)(IX~X期)	531
			図IV-56	石器(1)	533
			図IV-57	石器(2)	534
			図IV-58	埴輪窯P-1床面I 〔樹立埴輪〕出土状況	535

図III-29 中世水田作土層（包含層）出土遺物		図III-65 建物L-18平面・断面図	410
-古墳時代以前	380	図III-66 建物L-19平面・断面図	410
図III-30 奈良時代の遺構	381	図III-67 建物L-20平面・断面図	411
図III-31 建物L-8平面・断面図	382	図III-68 建物L-21平面・断面図	412
図III-32 土坑L-31平面・断面図	383	図III-69 建物L-22平面・断面図	414
図III-33 井戸L-2平面・断面図	385	図III-70 L地区平安時代ピット・溝出土遺物	414
図III-34 M地区建物群全体図	387	図III-71 井戸L-1平面・断面図	415
図III-35 建物M-31平面・断面図	388	図III-72 井戸L-4平面・断面図	416
図III-36 建物M-32平面・断面図	388	図III-73 L地区平安時代井戸出土遺物	417
図III-37 建物M-33平面・断面図	389	図III-74 L地区平安時代土坑出土遺物	418
図III-38 建物M-34平面・断面図	389	図III-75 炉状遺構L-1平面・断面図	418
図III-39 土坑M-32平面・断面図	390	図III-76 M地区遺構平面図	420
図III-40 井戸M-3平面・断面図	392	図III-77 建物M-23平面・断面図	421
図III-41 奈良時代遺構出土遺物	393	図III-78 建物M-24平面・断面図	421
図III-42 中世水田作土層（包含層）出土遺物		図III-79 建物M-25平面・断面図	422
-飛鳥～奈良時代	394	図III-80 建物M-26平面・断面図	422
図III-43 平安時代の遺構	395	図III-81 建物M-27平面・断面図	423
図III-44 K地区遺構平面図	396	図III-82 建物M-28平面・断面図	423
図III-45 建物K-1平面・断面図	397	図III-83 建物M-29平面・断面図	424
図III-46 建物K-2平面・断面図	397	図III-84 建物M-30平面・断面図	425
図III-47 ピットK-1平面・断面図	398	図III-85 土器埋納ピットM-1	426
図III-48 K地区溝・土坑断面図	398	図III-86 土器埋納ピットM-2	426
図III-49 K地区平安時代遺構出土遺物	400	図III-87 ピット・土器埋納ピット出土遺物	427
図III-50 L地区遺構平面図	401	図III-88 炉状遺構M-2平面・断面図	428
図III-51 建物L-3平面・断面図	402	図III-89 中世水田作土層（包含層）出土遺物	
図III-52 建物L-4平面・断面図	403	-平安時代以降	430
図III-53 建物L-5平面・断面図	403	図III-90 鎌倉時代の遺構	431
図III-54 建物L-6平面・断面図	404	図III-91 土壇墓群全体図	432
図III-55 建物L-7平面・断面図	404	図III-92 土壇墓M-1平面・断面図	433
図III-56 建物L-9平面・断面図	405	図III-93 土壇墓M-2平面・断面図	435
図III-57 建物L-10平面・断面図	405	図III-94 土壇墓M-3平面・断面図	436
図III-58 建物L-11平面・断面図	406	図III-95 土壇墓群出土遺物	437
図III-59 建物L-12平面・断面図	406	図III-96 堤M-1断面図	440
図III-60 建物L-13平面・断面図	407	図III-97 堤M-1平面・立面図	442
図III-61 建物L-14平面・断面図	407	図III-98 水田M-1平面図および	
図III-62 建物L-15平面・断面図	408	堤M-1突出部縦断面図	443
図III-63 建物L-16平面・断面図	409	図III-99 堤M-2・堤M-2断面図	445
図III-64 建物L-17平面・断面図	409	図III-100 堤M-2平面・立面図	446

図II-178 区画16北外側	325
建物I-31・32平面・断面図	313
図II-179 区画16北外側	326
ピットI-4680・4755平面・断面図	314
図II-180 区画16北外側 土壙墓群平面図、土坑I-558・559・563・572・580平面・断面図	327
	315
図II-181 区画16および周辺	328
溝、土坑、包含層出土遺物	316
図II-182 区画16 土坑I-762出土遺物	329
	317
図II-183 区画16および周辺	330
溝、土坑、ピット出土遺物	318
図II-184 区画16および周辺	331
土坑、落込、ピット出土遺物	319
図II-185 軒丸瓦(1)	332
	322
図II-186 軒丸瓦(2)	333
	323
図II-187 軒丸瓦(3)	334
	324
図II-188 軒丸瓦(4)	335
	325
図II-189 軒丸瓦(5)	336
	326
図II-190 軒丸瓦(6)	337
	327
図II-191 軒丸瓦(7)	338
	328
図II-192 軒平瓦(1)	329
	329
図II-193 軒平瓦(2)	330
	330
図II-194 軒平瓦(3)	331
	331
図II-195 軒平瓦(4)	332
	332
図II-196 軒平瓦(5)	333
	333
図II-197 丸瓦(1)	334
	334
図II-198 丸瓦(2)	335
	335
図II-199 平瓦(1)	336
	336
図II-200 丸瓦(3)、平瓦(2)、道具瓦(1)	337
	337
図II-201 道具瓦(2)	338
	338
図II-202 区画16 建物変遷推定図	341

—— 第III部 III調査区の調査成果 ——

図III-1 III調査区の位置	343	-灰原〔土坑L-34〕	362
図III-2 トレンチ配置図	344	図III-18 須恵器窯L-1出土遺物(4)	
図III-3 地区割設定図	345	-灰原〔土坑L-35〕	365
図III-4 土層断面の観察位置	347	図III-19 須恵器窯L-1出土遺物(5)	
図III-5 K地区土層断面図	347	-灰原〔土坑L-35〕	366
図III-6 L地区土層断面図	348	図III-20 須恵器窯L-1出土遺物(6)	
図III-7 M地区土層断面図	348	-灰原〔土坑L-36〕	370
図III-8 調査区全体図	349	図III-21 須恵器窯L-1出土遺物(7)	371
図III-9 古墳時代の遺構	350	図III-22 須恵器窯L-1出土遺物(8)	372
図III-10 土坑K-2	351	図III-23 須恵器窯L-1出土遺物(9) -窯体	
図III-11 土坑K-2および		前部・溝L-12・灰原	373
自然流路L-1出土遺物	351	図III-24 須恵器窯L-1出土遺物(10)	374
図III-12 須恵器窯L-1平面図	353	図III-25 須恵器窯L-1出土須恵器蓋杯拓本(1)	
図III-13 須恵器窯L-1土層断面図	354	-ヘラ記号	375
図III-14 床面II遺物出土状況	355	図III-26 須恵器窯L-1出土須恵器蓋杯拓本(2)	
図III-15 須恵器窯L-1出土遺物(1)		-ヘラ記号	376
-灰原〔土坑L-34〕	360	図III-27 須恵器窯L-1出土須恵器蓋杯拓本(3)	
図III-16 須恵器窯L-1出土遺物(2)		-同心円紋スタンプ	377
-灰原〔土坑L-34〕	361	図III-28 須恵器窯L-1出土須恵器蓋杯拓本(4)	
図III-17 須恵器窯L-1出土遺物(3)		-口縁部調整	378

図II-127 区画11 溝G-97内瓦積・石積護岸平面図	272	図II-155 区画14 ピット、井戸、溝出土遺物	292
図II-128 区画11 土坑G-822平面図	272	図II-156 区画13・14・14西外側 土坑、井戸、包含層出土遺物	293
図II-129 区画11 土坑G-304平面図	272	図II-157 区画15平面図	294
図II-130 区画11 溝、土坑出土遺物	273	図II-158 区画15 溝H-124・194・205・469、 井戸H-51断面図	295
図II-131 区画11 溝、井戸、包含層出土遺物	274	図II-159 区画15 溝出土遺物	296
図II-132 区画11 井戸G-80出土遺物	275	図II-160 区画15 溝、土坑出土遺物	297
図II-133 区画11 土坑出土遺物	276	図II-161 区画15東外側 井戸出土遺物	298
図II-134 区画12平面図	277	図II-162 区画15周辺 土坑、溝出土遺物	299
図II-135 区画12 溝G-99・103断面図	278	図II-163 10・11Hトレンチ平面図	300
図II-136 区画12 井戸G-41・48・73・74平面・断面図	278	図II-164 10・11Hトレンチ 土坑、溝出土遺物	300
図II-137 区画12 井戸G-83平面・断面図	279	図II-165 区画16および周辺平面図	301
図II-138 区画12 井戸G-81平面図	279	図II-166 区画16および周辺平面図	302
図II-139 区画12 土坑G-142平面・断面図	279	図II-167 区画16 溝I-1・4~8、井戸I-1断面図	303
図II-140 区画12 土坑G-133~135断面図	279	図II-168 区画16 建物I-34・35、 ピットI-1・2・131平面・断面図	304
図II-141 区画12 土坑G-115・125・130平面・断面図	280	図II-169 区画16 建物I-36・37、 ピットI-32・192平面・断面図	305
図II-142 区画12 溝出土遺物	281	図II-170 区画16 建物I-38・39、 柵I-1平面・断面図	306
図II-143 区画12 井戸出土遺物	282	図II-171 区画16 建物I-40、 建物J-41・42平面・断面図	307
図II-144 区画12および周辺 溝、土坑、包含層出土遺物	283	図II-172 区画16 土坑I-759~763平面・断面図	308
図II-145 区画13・14平面図	284	図II-173 区画16 ピットI-48・110平面・断面図	308
図II-146 区画13 溝G-94・95、井戸G-43、 土坑G-122平面・断面図	285	図II-174 区画16周辺 土坑I-548平面・断面図	309
図II-147 区画14 建物G-24平面・断面図	286	図II-175 区画16北外側 建物I-25・26・33平面・断面図	310
図II-148 区画14 井戸G-31・36・44、 土坑G-111・120平面・断面図	286	図II-176 区画16北外側 建物I-27・28平面・断面図	311
図II-149 区画14 土坑G-774検出状況と石列の変遷	287	図II-177 区画16北外側 建物I-29・30、 ピットI-4707・4735平面・断面図	312
図II-150 区画14西外側 土坑G-487、井戸G-163、 溝G-349平面・断面図	288		
図II-151 区画14西外側 土坑G-479~481平面・断面図	288		
図II-152 区画13・14 溝、ピット、井戸出土遺物	289		
図II-153 区画13・14 溝、土坑出土遺物(1)	290		
図II-154 区画13・14 溝、土坑出土遺物(2)	291		

図II-65	区画4 建物E-20平面・断面図	226	図II-97	7Fトレンチ 溝F-292出土遺物(1)	251
図II-66	区画3・4 溝出土遺物(1)	227	図II-98	7Fトレンチ 溝F-292出土遺物(2)	252
図II-67	区画3・4 溝出土遺物(2)	228	図II-99	区画8・9平面図	253
図II-68	区画3 溝出土遺物(1)	229	図II-100	区画8 溝F-494北端部遺物出土状況	254
図II-69	区画3 溝出土遺物(2)	230	図II-101	区画8・9 溝F-75平面・断面図	255
図II-70	区画3 溝E-160(土坑E-852)出土遺物	231	図II-102	区画8 土坑F-223平面・断面図	255
図II-71	区画3 溝、包含層出土遺物	232	図II-103	区画8 土坑F-88・105・ 210・225・228平面図	256
図II-72	区画3 溝出土遺物	233	図II-104	区画8 井戸F-66平面・断面図	256
図II-73	区画3 井戸、土坑出土遺物	234	図II-105	区画8 井戸F-24平面・断面図	256
図II-74	区画3 溝、土坑、ビット出土遺物	235	図II-106	区画8 井戸F-12・13・15・16・62・ 63・69・172、溝F-75断面図	257
図II-75	区画3 土坑出土遺物	236	図II-107	区画9 土坑F-96平面・断面図	258
図II-76	区画3 土坑、ビット出土遺物	237	図II-108	区画9 土坑F-95平面・断面図	258
図II-77	区画5・6・7平面図	238	図II-109	区画9 土坑F-94・874平面・断面図	258
図II-78	区画5平面図	239	図II-110	区画9 井戸F-19断面図	258
図II-79	区画5 建物F-21平面・断面図	240	図II-111	区画8 溝出土遺物	259
図II-80	区画5 建物F-22平面・断面図	240	図II-112	区画8・9 溝出土遺物	260
図II-81	区画5 井戸F-21~23・57平面・断面図	241	図II-113	区画8・9 井戸、土坑、ビット出土遺物	261
図II-82	区画5 溝、井戸、ビット、土坑出土遺物	242	図II-114	区画8・9 土坑出土遺物	262
図II-83	区画6・7平面図	243	図II-115	区画8 土坑F-223出土遺物	263
図II-84	区画6・7 溝F-70・81・138断面図	243	図II-116	区画10~14平面図	264
図II-85	7Fトレンチ 溝F-292遺物出土状況	244	図II-117	区画10平面図	265
図II-86	区画6 井戸F-14・52・58・60・61断面図	245	図II-118	区画10 溝G-90断面図	265
図II-87	区画6 土坑F-102平面・断面図	245	図II-119	区画10 井戸G-27・28・32~35平面・断面図	266
図II-88	区画6 土坑F-215平面図	245	図II-120	区画10 溝G-90出土遺物	267
図II-89	区画6 土坑F-217・238断面図	245	図II-121	区画10・12 溝、井戸出土遺物	268
図II-90	区画7 土坑F-98平面図	245	図II-122	区画10 井戸出土遺物	269
図II-91	区画7 溝F-72遺物出土状況	245	図II-123	区画11平面図	270
図II-92	区画6 土坑F-89平面・断面図	246	図II-124	区画11 溝G-150・154・495断面図	271
図II-93	区画5~7 溝、ビット出土遺物	247	図II-125	区画11 井戸G-80平面・断面図	271
図II-94	区画6 井戸、土坑出土遺物	248	図II-126	区画11 井戸G-76・78・79、 土坑G-250断面図	271
図II-95	区画6・9 出土遺物	249			
図II-96	区画5~8 土坑、包含層出土遺物	250			

—— 第II部 II調査区の調査成果 ——

図II-1 II調査区の位置	187	図II-34 10Fトレント平面図	211
図II-2 II調査区トレント配置図	188	図II-35 8・9Fトレント平面図	211
図II-3 地区割設定図（大区画）	189	図II-36 9Fトレント 土坑F-442平面・断面図	211
図II-4 地区割設定図（小区画）	190	図II-37 8Fトレント 井戸F-159断面図	211
図II-5 II調査区遺構・断面図	191	図II-38 10Fトレント 土坑F-441平面・断面図	211
図II-6 溝G-118・119・207・208 平面・断面図	193	図II-39 区画2南外側平面・断面図	212
図II-7 溝I-389、谷J-2断面図	193	図II-40 区画2 溝出土遺物	213
図II-8 中世以前出土遺物	194	図II-41 区画2 溝、井戸出土遺物	214
図II-9 区画配置図	195	図II-42 区画2・3 および周辺 土坑、井戸出土遺物	215
図II-10 区画1および周辺平面図	196	図II-43 区画2南外側出土遺物	216
図II-11 区画1および周辺平面図	197	図II-44 8～10Fトレント 井戸、 ピット出土遺物	217
図II-12 区画1 溝D-12・13・211、 土坑D-345平面・断面図	198	図II-45 区画3・4平面図	218
図II-13 区画1 建物D-7平面・断面図	198	図II-46 区画3・4 溝E-27遺物出土状況	219
図II-14 区画1 土坑D-348平面・見通し図	199	図II-47 区画3・4 溝E-27・31断面図	220
図II-15 区画1周辺 土坑D-10平面図	199	図II-48 区画3 溝E-160・163、 土坑E-296・852遺物出土状況	220
図II-16 区画1 溝D-214平面・断面図	199	図II-49 区画3 溝E-171・172・192遺物出土状況	221
図II-17 区画1 溝出土遺物	200	図II-50 区画3 建物E-16平面・断面図	222
図II-18 区画1周辺 井戸出土遺物	201	図II-51 区画3 建物E-17平面・断面図	223
図II-19 区画1および周辺 ピット、溝、土坑出土遺物	202	図II-52 区画3 建物E-18平面・断面図	223
図II-20 区画2～4および周辺平面図	203	図II-53 区画3 建物E-19平面・断面図	224
図II-21 区画2平面図、溝E-61断面図	204	図II-54 区画3 土坑E-276平面・断面図	224
図II-22 区画2 溝E-61瓦溜出土状況	205	図II-55 区画3 土坑E-284平面図	224
図II-23 区画2 溝E-61付属暗渠E-1	205	図II-56 区画3 土坑E-280・281平面図	224
図II-24 区画2 溝E-217付属暗渠E-2	206	図II-57 区画3 土坑E-268・271平面図	225
図II-25 区画2 溝E-51・56・66断面図	207	図II-58 区画3 土坑E-42平面・断面図	225
図II-26 区画2 ピットE-675平面・断面図	207	図II-59 区画3 土坑E-45平面・断面図	225
図II-27 区画2 建物E-9平面・断面図	207	図II-60 区画3 土坑E-36平面・断面図	225
図II-28 区画2 建物E-13平面・断面図	208	図II-61 区画3 土坑E-34平面・断面図	225
図II-29 区画2 建物E-15平面・断面図	208	図II-62 区画3 土坑E-49平面・断面図	226
図II-30 区画2 建物E-14平面・断面図	209	図II-63 区画3 土坑E-757平面・断面図	226
図II-31 区画2 土坑E-60平面・断面図	209	図II-64 区画3 土坑E-35平面・断面図	226
図II-32 区画2・3 井戸E-4～7・9・11断面図	209		
図II-33 区画2 土坑E-46平面・断面図	210		

図 I - 153 B地区西部	土坑B - 128平面・断面図	133	図 I - 182 C地区西部	土坑C - 56・土坑C - 57平面・断面図	157
図 I - 154 B地区西部 土坑B - 128出土土器	134	図 I - 183 C地区西部 包含層出土土器	158		
図 I - 155 B地区西部		図 I - 184 軒丸瓦(1)	160		
土坑B - 141遺物出土状況図	135	図 I - 185 軒丸瓦(2)	161		
図 I - 156 B地区西部 土坑B - 141出土土器	136	図 I - 186 軒丸瓦(3)	162		
図 I - 157 B地区西部		図 I - 187 軒丸瓦(4)	163		
土坑B - 142遺物出土状況図	136	図 I - 188 軒丸瓦(5)	164		
図 I - 158 B地区西部 土坑B - 142出土土器	137	図 I - 189 軒平瓦(1)	165		
図 I - 159 B地区西部 井戸B - 22平面・断面図	138	図 I - 190 軒平瓦(2)	166		
図 I - 160 B地区西部 井戸B - 22出土土器	138	図 I - 191 軒平瓦(3)	167		
図 I - 161 B地区西部 堀B - 1断面図	139	図 I - 192 丸瓦(1)	168		
図 I - 162 B地区西部 堀B - 1出土土器(1)	140	図 I - 193 丸瓦(2)	169		
図 I - 163 B地区西部 堀B - 1出土土器(2)	141	図 I - 194 丸瓦(3)	170		
図 I - 164 B地区西部 堀B - 1出土金属製品	141	図 I - 195 平瓦(1)	171		
図 I - 165 B地区西部		図 I - 196 平瓦(2)・道具瓦(1)	172		
土器群B - 1・包含層出土土器	142	図 I - 197 道具瓦(2)	173		
図 I - 166 C地区東部 中世遺構略図	144	図 I - 198 塚	174		
図 I - 167 C地区東部 包含層出土土器	145	図 I - 199 A地区東部 近世遺構略図	175		
図 I - 168 C地区東部 自然流路C - 1断面図	145	図 I - 200 A地区東部			
図 I - 169 C地区西部 中世遺構略図	146	土坑A - 12疊・遺物出土状況図	176		
図 I - 170 4Cトレンチ南部平面図	147	図 I - 201 A地区東部 溝A - 4・土坑A - 11・			
図 I - 171 C地区西部 建物C - 3平面・断面図	147	土坑A - 12・土坑A - 19断面図	176		
図 I - 172 C地区西部 建物C - 4平面・断面図	148	図 I - 202 A地区東部 土坑群平面図	177		
図 I - 173 C地区西部 建物C - 5平面・断面図	149	図 I - 203 A地区東部 土坑A - 55・土坑A - 56周辺			
図 I - 174 C地区西部 ピット出土土器	150	平面・断面図	178		
図 I - 175 C地区西部		図 I - 204 A地区東部 土坑A - 5平面・断面図	179		
溝C - 2・溝C - 3出土土器	151	図 I - 205 A地区東部 井戸A - 3平面・断面図	179		
図 I - 176 C地区西部		図 I - 206 A地区東部 近世遺構出土土器(1)	179		
土坑C - 2・土坑C - 27・土坑C - 28	152	図 I - 207 A地区東部 近世遺構出土土器(2)	180		
図 I - 177 C地区西部 土坑C - 9・土坑C - 10・		図 I - 208 A地区東部 近世土坑A - 27出土瓦	181		
土坑C - 19・土坑C - 26平面・断面図	153	図 I - 209 A地区東部			
図 I - 178 4Cトレンチ土坑出土土器	154	近世井戸A - 3出土石製品	182		
図 I - 179 C地区西部 土坑C - 51平面・断面図	155	図 I - 210 I調査区周辺小字図	183		
図 I - 180 C地区西部 土坑C - 51出土土器	156	図 I - 211 B地区西部 城郭推定範囲図	185		
図 I - 181 C地区西部 土坑C - 55平面・断面図	157				

図 I - 100 B地区東部		図 I - 128 B地区西部	
土坑B-55平面・断面図	89	建物B-14・建物B-15平面・断面図	112
図 I - 101 B地区東部 土坑B-55出土土器	90	図 I - 129 B地区西部	
図 I - 102 B地区東部 土坑B-71	90	建物B-18平面・断面図	113
図 I - 103 B地区東部		図 I - 130 B地区西部	
土坑B-71・土坑B-75出土土器	91	建物B-19・建物B-20平面・断面図	114
図 I - 104 B地区東部 土坑出土土器	91	図 I - 131 B地区西部 ピットB-1438	115
図 I - 105 B地区東部		図 I - 132 B地区西部 ピット出土土器(1)	115
土器溜まりB-1出土土器(1)	92	図 I - 133 B地区西部 ピット出土土器(2)	116
図 I - 106 B地区東部		図 I - 134 B地区西部	
土器溜まりB-1出土土器(2)	93	溝B-103・溝B-131断面図	117
図 I - 107 B地区東部 井戸B-9平面・断面図	94	図 I - 135 B地区西部 溝出土土器	117
図 I - 108 B地区東部 井戸B-1平面・断面図	94	図 I - 136 B地区西部	
図 I - 109 B地区東部 井戸出土土器	95	溝B-112周辺平面・溝B-112断面図	118
図 I - 110 B地区東部出土		図 I - 137 B地区西部 溝B-112出土土器(1)	119
陶磁器(1)〔中国製天目茶碗〕	96	図 I - 138 B地区西部 溝B-112出土土器(2)	120
図 I - 111 B地区東部出土		図 I - 139 B地区西部 溝B-117平面・断面図	121
陶磁器(2)〔青磁〕	97	図 I - 140 B地区西部 溝B-117出土土器	122
図 I - 112 B地区東部出土		図 I - 141 B地区西部	
陶磁器(3)〔青磁・白磁〕	98	溝B-120・その他断面図	123
図 I - 113 B地区東部出土		図 I - 142 B地区西部 溝B-120出土土器	123
陶磁器(4)〔瀬戸・美濃焼〕	99	図 I - 143 6Bトレンチ東部遺構平面図	124
図 I - 114 B地区東部出土 瓦質火鉢(1)	99	図 I - 144 B地区西部	
図 I - 115 B地区東部出土 瓦質火鉢(2)	100	土坑B-101・土坑B-102出土土器	125
図 I - 116 B地区東部出土 瓦質火鉢(3)	101	図 I - 145 B地区西部	
図 I - 117 B地区東部出土 瓦質火鉢(4)	102	土坑B-114平面・断面図	126
図 I - 118 B地区東部出土 瓦質火鉢(5)	103	図 I - 146 B地区西部	
図 I - 119 B地区東部出土 瓦質火鉢(6)	104	土坑B-115遺物出土状況図	126
図 I - 120 B地区東部出土 瓦質火鉢(7)	105	図 I - 147 B地区西部 土坑B-116・土坑B-120	
図 I - 121 B地区東部出土		平面・断面図	127
瓦質火鉢(8)・瓦質製品(1)	106	図 I - 148 B地区西部 土坑出土土器	128
図 I - 122 B地区東部出土 瓦質製品(2)	107	図 I - 149 B地区西部	
図 I - 123 B地区東部出土 石製品	108	土坑B-118・溝B-105平面・断面図	129
図 I - 124 B地区東部 包含層出土土器	108	図 I - 150 B地区西部 土坑B-118出土土器	130
図 I - 125 B地区西部 中世遺構略図	109	図 I - 151 B地区西部	
図 I - 126 B地区西部 建物・構造略図	110	土坑B-122平面・断面図	131
図 I - 127 B地区西部		図 I - 152 B地区西部 土坑出土土器	132
建物B-13平面・断面図	111		

図 I - 40 A地区西部 溝A-10出土土器	48	溝B-3・溝B-4石組平面図	71
図 I - 41 A地区西部 溝A-12・土坑A-114	49	図 I - 73 B地区東部 溝B-3・溝B-4・ 溝B-7断面図	71
図 I - 42 A地区西部 溝A-12・溝A-17出土土器	49	図 I - 74 B地区東部	
図 I - 43 A地区西部 土坑A-103平面・断面図	50	溝B-3・溝B-7出土土器	72
図 I - 44 A地区西部 土坑A-103平面・断面図	51	図 I - 75 B地区東部 溝B-4出土土器	73
図 I - 45 A地区西部 土坑A-103出土土器	52	図 I - 76 B地区東部	
図 I - 46 A地区西部 土坑A-110	52	溝B-4・溝B-11石組平面図	74
図 I - 47 A地区西部 土坑A-113	53	図 I - 77 B地区東部	
図 I - 48 A地区西部 土坑出土土器	53	溝B-4・溝B-11断面図	75
図 I - 49 A地区西部 東部土坑群平面図	54	図 I - 78 B地区東部 溝B-11出土井筒	75
図 I - 50 A地区西部 東部土坑群断面図	55	図 I - 79 B地区東部 溝B-11出土土器	76
図 I - 51 A地区西部 土坑・ピット出土土器	57	図 I - 80 B地区東部 溝B-1出土土器	77
図 I - 52 A地区西部 土坑A-143	58	図 I - 81 B地区東部 溝B-1断面図	77
図 I - 53 A地区西部 土坑A-143出土土器	58	図 I - 82 B地区東部 溝B-32出土土器	77
図 I - 54 A地区西部 土坑A-148出土土器	58	図 I - 83 B地区東部 溝B-33断面図	78
図 I - 55 A地区西部 土坑A-173平面・断面図	59	図 I - 84 B地区東部 溝B-33出土土器(1)	78
図 I - 56 A地区西部 土坑A-173出土土器	59	図 I - 85 B地区東部 溝B-33出土土器(2)	79
図 I - 57 A地区西部 井戸A-4出土土器	60	図 I - 86 B地区東部 溝B-12断面図	79
図 I - 58 A地区西部 井戸A-5	61	図 I - 87 B地区東部	
図 I - 59 A地区西部 井戸A-6	61	溝B-2・溝B-12出土土器	80
図 I - 60 A地区西部 井戸A-5・井戸A-6出土土器	62	図 I - 88 B地区東部 溝B-6・土坑B-21	81
図 I - 61 A地区西部 井戸A-6出土鉄瓶	63	図 I - 89 B地区東部 溝B-38断面図	82
図 I - 62 A地区西部 包含層出土器類型	63	図 I - 90 B地区東部 溝B-38出土土器	82
図 I - 63 B地区東部 中世遺構略図	64	図 I - 91 B地区東部	
図 I - 64 1Bトレンチ建物・構造略図	65	溝B-51・溝B-52断面図	83
図 I - 65 B地区東部 横B-1	66	図 I - 92 B地区東部 溝B-52出土土器	83
図 I - 66 B地区東部 横B-2	67	図 I - 93 B地区東部 土坑B-2・土坑B-3・ 土坑B-4平面・断面図	84
図 I - 67 B地区東部 ピット出土土器	67	図 I - 94 B地区東部	
図 I - 68 B地区東部 溝略図	68	土坑B-3・土坑B-4出土土器	85
図 I - 69 B地区東部 溝B-39断面図	69	図 I - 95 B地区東部 土坑B-5平面・断面図	85
図 I - 70 B地区東部 溝B-39出土土器(1)	69	図 I - 96 B地区東部 土坑B-5出土土器	86
図 I - 71 B地区東部 溝B-39出土土器(2)	70	図 I - 97 B地区東部 土坑B-8	87
図 I - 72 B地区東部		図 I - 98 B地区東部 土坑B-7	87
		図 I - 99 B地区東部 土坑B-7・土坑B-8出土土器	88

挿図目次

—序 調査の概要と遺跡の立地—

序一図1 調査地と試掘グリッドの位置	1	序一図6 日置荘遺跡周辺の遺跡分布図	7
序一図2 國土座標系とそれに伴う地区割	3	序一図7 日置荘遺跡周辺の時代別遺跡変遷図	8
序一図3 日置荘遺跡の位置	5	序一図8 日置荘遺跡I・II調査区と字名	10
序一図4 日置荘遺跡周辺の地形	5	序一図9 遺跡周辺地形図	11
序一図5 日置荘遺跡周辺の等高線図	6		

—第Ⅰ部 I 調査区の調査成果—

図I-1 調査区位置図	13	土器群A-1出土土器(4)	33
図I-2 トレンチ配置図	14	図I-21 A地区東部	
図I-3 遺構全体図	15	土器群A-1出土土器(5)	34
図I-4 地区割設定図(中区画)	16	図I-22 B地区西部・C地区東部	
図I-5 地区割設定図(小区画)	17	飛鳥・奈良時代遺構略図	35
図I-6 基本層序柱状図	18	図I-23 飛鳥・奈良時代の土器	36
図I-7 A地区東部 谷底平野部分平面図	20	図I-24 平安時代の遺物	36
図I-8 石器出土地点分布図	21	図I-25 A地区東部 中世遺構略図	37
図I-9 石器(1)	22	図I-26 A地区東部 溝A-1・溝A-2・	
図I-10 石器(2)	23	溝A-21平面・断面図	38
図I-11 A地区東部 古墳時代建物群略図	24	図I-27 A地区東部	
図I-12 A地区東部 建物A-1	24	石組暗渠平面・断面・見通し図	39
図I-13 A地区東部 建物A-2・A-3平面・断面図	25	図I-28 A地区東部 溝A-1・溝A-21出土土器・土製品	39
図I-14 A地区東部 建物A-4・A-5平面・断面図	26	図I-29 A地区東部 溝A-2遺物出土状況	40
図I-15 A地区東部 土器群A-1平面・断面図	28	図I-30 A地区東部 溝A-2出土土器(1)	41
図I-16 A地区東部 土器群A-1土器分布図・細部	29	図I-31 A地区東部 溝A-2出土土器(2)	42
図I-17 A地区東部 土器群A-1出土土器(1)	30	図I-32 A地区東部 土坑A-8平面・断面図	43
図I-18 A地区東部 土器群A-1出土土器(2)	31	図I-33 A地区東部 土坑A-9・土坑A-10平面・断面図	43
図I-19 A地区東部 土器群A-1出土土器(3)	32	図I-34 A地区東部 土坑A-14遺物出土状況	44
図I-20 A地区東部		図I-35 A地区東部 土坑A-8・土坑A-9・ 土坑A-14出土土器	44
		図I-36 A地区東部 井戸A-7	45
		図I-37 A地区東部 井戸A-8出土井筒	45
		図I-38 A地区西部 中世遺構略図	46
		図I-39 A地区西部 溝A-10平面・断面図	47

第2節 瓦生産	303
第3節 煉瓦生産	305
第4節 土器生産	306
第5節 まとめ	308

第3章 河内萩原寺考	藤澤一夫
1. はしがき	320
2. 日置莊町原寺という地	320
3. 萩原神社の祭神と氏族	320
4. 萩原神社脇の須恵器窯	319
5. 萩原神社の祭祀の氏族	318
6. 萩原寺即ち大聖寺の性格	317
7. 萩原寺の遺物たる屋瓦	317
8. 屋瓦から見た萩原寺史	315
9. 萩原寺創立時の流動性	315
10. 法燈嗣ぐ近世の大聖寺	314

第11章 日置荘II調査区検出の中世遺構採集土壤の花粉・珪藻分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

第1節 はじめに	237
第2節 F地区における花粉・珪藻分析	238
1. 試料	2. 硅藻化石群集からみた各遺構内の堆積環境
3. 花粉化石群集からみた古植生	4. おわりに
第3節 G地区における花粉・珪藻分析	245
1. 硅藻分析	2. 花粉分析
3. まとめ	

第12章 日置荘IV調査区採集土壤の花粉、珪藻、プラント・オパール分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

第1節 目的	251
第2節 試料	251
第3節 硅藻分析	251
1. 分析方法	2. 結果および考察
第4節 花粉分析	258
1. 分析方法	2. 結果
3. 考察	
第5節 プラント・オパール分析	263
1. 分析方法	2. 結果と考察
第6節 まとめ	266

第13章 日置荘遺跡出土遺物の分析調査

大澤正己 269

第VII部 考察

第1章 大阪府南部の瓦質土器生産（1）

動柄俊夫

第1節 はじめに	289
第2節 研究史抄	290
第3節 分類	292
1. 壺	2. 楼鉢
3. 羽釜	
第4節 編年	297
第5節 まとめにかえて	299

第2章 丹南地域における近代以降の窯業生産

市川秀之

第1節 はじめに	303
----------	-----

1. 方法	
第2章 分析結果	193
1. タイプ分類	2. Qt (石英) - Pl (斜長石) の相関について
第3章 化学分析	193
1. SiO ₂ - Al ₂ O ₃ の相関について	2. Fe ₂ O ₃ - MgO の相関について
3. K ₂ O - CaO の相関について	
第4章 まとめ	196
第7章 日置莊遺跡中世瓦・土器胎土分析 井上 嶽	
第1節 瓦類の分析	201
1. X線回折試験	2. 化学分析
3. まとめ	
第2節 土器類の分析	205
1. X線回折試験	2. 化学分析
3. まとめ	
第8章 日置莊遺跡周辺の原土分析 井上 嶽	
第1節 X線回折試験	217
1. 方法	
第2節 分析結果	217
1. タイプ分類	2. Qt (石英) - Pl (斜長石) の相関について
第3節 まとめ	220
1. 原土の組成	2. Qt (石英) - Pl (斜長石) の相関
第9章 日置莊遺跡で検出された埴輪窯および須恵器窯の考古地磁気研究 前中一見・伊達宗泰	
第1節 はじめに	223
第2節 考古地磁気の原理	223
第3節 遺構の概要	224
第4節 残留磁気測定装置	225
第5節 残留磁気測定結果	225
第6節 考古地磁気年代推定	229
第10章 日置莊遺跡の液体シンチレーション ¹⁴ C年代測定について 山田 治	
第1節 はじめに	231
第2節 ¹⁴ C年代測定の原理	231
第3節 ¹⁴ C年代測定の方法	232
1. ¹⁴ C年代測定の方法	2. 結果の読み方

第1節 はじめに	143
第2節 画像処理手順	143
1. 前処理	2. 1次元高速フーリエ変換
第3節 画像解析結果	146
第4節 まとめ	146

第3章 日置荘埴輪窯P-1および大阪府下埴輪窯出土埴輪の化学特性について

三辻利一

第1節 はじめに	147
第2節 分析方法	148
第3節 分析結果	148

第4章 日置荘遺跡関連埴輪胎土分析

井上 崑

第1節 X線回折試験及び化学分析試験	157
1. 実験条件	2. X線回折試験結果の取り扱い
第2節 壁輪類の分析	159
1. X線回折試験	2. 化学分析
第3節 まとめ	162
1. X線回折試験結果	2. 化学分析結果

第5章 日置荘埴輪窯および大阪府下埴輪窯出土埴輪の流通について

パリノ・サーヴェイ株式会社

第1節 重金物分析による検証	171
1. はじめに	2. 試料
3. 分析方法	4. 分析結果
5. 考察	6. 重金物分析の課題と今後の展開
第2節 薄片観察による検証	179
1. はじめに	2. 薄片試料
3. 分析方法	4. 観察結果
5. 考察	
第3節 壁輪窯と古墳から出土した埴輪の関連性	187
第4節 まとめ	187
1. 金物片の特徴	2. 岩石片の特徴
3. 推定焼成温度	4. 各遺跡の埴輪の胎土の特徴と関連性
5. 今後の展開	

第6章 日置荘遺跡関連須恵器胎土分析

井上 崑

第1節 X線回折試験	193
------------------	-----

第3章 日置荘遺跡出土瓦の分布	70
1. 出土量の計測方法	2. 分布状況
第4章 まとめ	82
1. 軒丸瓦・軒平瓦の組み合わせ	2. 瓦からみた日置荘遺跡
第4章 平安時代以降の遺物について 鋤柄俊夫	
第1節 はじめに	87
第2節 時期別検討	87
1. 9~11世紀	2. 12~13世紀
3. 14世紀	4. 15~16世紀中頃
第5章 II調査区の景観復原 鋤柄俊夫・亀井 晃	
第1節 屋敷地配置の変遷	95
第2節 14世紀におけるII調査区村落の存在形態	107
1. 出土資料の個体数分析	2. 出土資料の内容構成
第6章 日置荘遺跡の遺構変遷 鋤柄俊夫	
第1節 はじめに	119
第2節 I・III調査区	119
1. I調査区	2. III調査区
第3節 時期別変遷	121
1. 11世紀以前	2. 12世紀
3. 13世紀	4. 14世紀
5. 15~16世紀中葉	
第4節 まとめにかえて	124
第7章 日置荘遺跡I調査区B地区東部出土遺物の基礎分析 中村淳穂 126	
第VI部 自然科学的調査	
第1章 自然科学的調査の概要 (江浦) 137	
第1節 自然科学的調査の経過	137
第2節 自然科学的調査の概要	138
1. 年代測定	2. 胎土分析
3. 環境分析	4. その他の分析
第2章 画像解析による出土瓦の布目圧痕とその製作年代の相関関係の抽出 中谷幸太郎・森脇耕介	

埴輪転用井戸 P - 1 出土遺物	3. 須恵器窯 P - 1 出土須恵器
4. 河道 P - 2 出土遺物	
第3節 中世以降の遺物 584
第4節 まとめ—遺物から見ての一 585
1. 立地	2. 構造
3. 焼成	4. 遺物
5. 時期	

第V部 基礎分析

第1章 陶邑周辺部における須恵器生産点描	江浦 洋
第1節 序説 1
1. 本稿の目的と前提	2. 日置莊遺跡検出の古墳時代遺構概観
第2節 III調査区須恵器窯 L - 1 の基礎的検討 3
1. 須恵器窯 L - 1 出土遺物の基礎分析	
第3節 IV調査区須恵器窯 P - 1 の基礎的検討 16
1. 遺構の概要と分析の前提	2. 須恵器窯 P - 1 床面 I 出土遺物の基礎分析
3. 陶邑窯跡群におけるヘラ記号資料	4. 須恵器窯 P - 1 をめぐる工人組織
第4節 結語 33
1. 陶邑窯跡群の拡大とその背景	2. 需要と供給に関する予察
第2章 日置莊遺跡IV調査区出土埴輪の基礎分析	森屋美佐子
第1節 はじめに 37
第2節 分類基準 37
1. 数量	2. 円筒埴輪の諸特徴
第3節 分類結果 41
1. 墓輪窯 P - 1 出土埴輪の諸特徴	2. 灰原出土埴輪の諸特徴
第4節 まとめ 49
第3章 日置莊遺跡出土瓦の分析	市本芳三
第1節 製作技法 53
1. 軒丸瓦・丸瓦の製作技法	2. 軒平瓦・平瓦の製作技法
3. 道具瓦の製作技法	
第2節 変遷 60
1. 軒丸瓦	2. 軒平瓦
3. 丸瓦	4. 平瓦
5. 雁振瓦	6. 塙
7. 鬼瓦	

第6章 近世の遺構・遺物	438
第1節 M地区今池・劍池間堤の調査	438
1. 堤	2. 稲
3. 水田	
第2節 M地区剣池東堤の調査	444
1. 堤	2. 稲
第7章 近代以降の遺構・遺物	448
第1節 K地区の遺構・遺物	448
1. 銃弾	
第8章 まとめ	449
1. 古墳時代	2. 奈良時代
3. 平安時代	4. 中世
5. 近世以降	

第IV部 IV調査区の調査成果

第1章 遺構	(入江) 451
第1節 調査の概要と前提	451
1. 位置と地形と地質	2. 歴史的環境
3. 調査の概要	
第2節 旧石器・縄文・弥生時代	460
1. 遺構	2. 遺物
第3節 古墳時代の遺構と遺物	462
1. 古墳時代前・中期の遺構と遺物	2. 古墳時代後期の遺構
第4節 古代・中世の遺構	492
1. 古代の遺構	2. 中世の遺構
第5節 近世の遺構	500
1. 近世前半期の遺構	2. 近世後半期の遺構
第6節 まとめ	527
1. 時期区分	2. 各時期の様相
3. 各時期の年代	
第2章 遺物	(森屋) 533
第1節 古墳時代前期以前の遺物	533
第2節 古墳時代後期の遺物	534
1. 増輪窯P-1出土遺物	2. 増輪窯P-1および

第1節 位置と地形環境	343
1. 位置	2. 地形環境
第2節 調査方法	344
1. トレンチの設定	2. 調査の経過
3. 調査の方法	
第3節 調査成果の概要	346
1. 基本層序	2. 遺構・遺物の概要
 第2章 古墳時代の遺構・遺物	350
第1節 K・L地区の遺構・遺物	350
1. 土坑	2. 自然流路
3. 須恵器窯	4. 中世水田作土層（包含層）出土の 古墳時代以前の遺物
 第3章 奈良時代の遺構・遺物	381
第1節 K・L地区の遺構	381
1. 建物	2. 土坑
3. 井戸	
第2節 M地区の遺構・遺物	386
1. 建物	2. 土坑
3. 井戸	4. 中世水田作土層（包含層）出土の 飛鳥・奈良時代の遺物
 第4章 平安時代の遺構・遺物	395
第1節 K地区の遺構・遺物	395
1. 建物	2. ピット
3. 溝	4. 土坑
第2節 L地区の遺構・遺物	401
1. 建物	2. 井戸
3. 土坑	4. 炉状遺構
第3節 M地区の遺構・遺物	419
1. 建物	2. ピット
3. 炉状遺構	4. 中世水田作土層（包含層）出土の 平安時代以降の遺物
 第5章 中世の遺構・遺物	431
第1節 M地区の遺構・遺物	431
1. 土塙墓	

3. 井戸	4. 土坑
5. 遺物	
第9節 区画12	266
1. 溝	2. 建物
3. 井戸	4. 土坑
5. 遺物	
第10節 区画13・14	274
1. 区画13	2. 区画14
3. 区画12・14の周辺	
第11節 区画15および周辺	288
1. 区画15	2. 区画15の周辺
3. 遺物	
第12節 10H・11H トレンチ	299
第13節 区画16とその周辺	300
1. 区画16	2. 区画16の周辺
第14節 出土瓦	320
1. 軒丸瓦	2. 軒平瓦
3. 丸瓦	4. 平瓦
5. 道具瓦	
第4章まとめ	339
第1節 中世以前	339
第2節 中世	339
1. 区画1とその周辺	2. 区画2
3. 区画2南外側	4. 区画3
5. 区画4	6. 区画5
7. 区画6	8. 区画7
9. 区画8	10. 区画9
11. 区画10	12. 区画11
13. 区画12	14. 区画13
15. 区画14	16. 区画15
17. 区画16	18. 屋敷地配置の変遷
19. 遺物	
第3節 まとめにかえて	342

第III部 III調査区の調査成果

1. 位置	2. 地形環境	
第2節 調査方法		189
1. トレンチの設定	2. 調査の経過	
3. 調査の方法		
第3節 調査成果の概要		192
1. 基本層序	2. 中世以前	
3. 中世	4. 近世	
第2章 中世以前の遺構・遺物		193
1. G地区	2. I地区	
3. J地区		
第3章 中世の遺構・遺物		194
第1節 区画1および周辺		194
1. 溝	2. 建物	
3. 土坑	4. 井戸	
5. 区画1出土遺物	6. 区画1周辺の遺構	
7. 区画1周辺出土遺物		
第2節 区画2および周辺		201
1. 谷	2. 溝・暗渠	
3. 建物	4. ピット	
5. 土坑	6. 井戸	
7. 遺物	8. 8F・9Fトレンチ	
9. 10Fトレンチ	10. 区画2南外側	
第3節 区画3・4		212
1. 区画3	2. 区画4	
第4節 区画5		222
1. 溝	2. 建物	
3. 井戸	4. 遺物	
第5節 区画6・7		239
1. 区画6	2. 区画7	
第6節 区画8・9		253
1. 区画8	2. 区画9	
第7節 区画10		259
1. 溝	2. 井戸	
3. 遺物		
第8節 区画11		260
1. 溝	2. 建物	

3. 井戸	4. 磐の鉢型
5. 小結	
第3節 B地区東部 (1B~3Bトレンチ)	64
1. 建物・ピット群	2. 溝
3. 土坑	4. 土器溜まりB-1
5. 井戸	6. 出土陶磁器
7. 出土瓦質火鉢・瓦質製品	8. 出土石製品・包含層出土遺物
9. 小結	
第4節 B地区西部 (4B~7Bトレンチ)	109
1. 建物	2. 橋
3. ピット	4. 溝
5. 土坑	6. 井戸
7. 堀B-1	8. 土壘
9. 包含層出土遺物	10. 小結
第5節 C地区東部 (8B・9B・1C~3Cトレンチ)	144
1. 遺構・遺物	2. 谷状地形と自然流路C-1
第6節 C地区西部 (4C~8Cトレンチ)	146
1. 建物	2. ピット
3. 溝	4. 土坑
5. 包含層出土遺物	6. 小結
第7節 瓦	(市本) 159
1. 軒丸瓦	2. 軒平瓦
3. 丸瓦	4. 平瓦
5. 道具瓦	
第5章 近世の遺構・遺物	175
第1節 遺構	175
1. 溝	2. 土坑
3. 井戸	
第2節 遺物	182
第3節 小結	182
第6章 まとめ	183

第II部 II調査区の調査成果

第1章 調査の概要と前提	(市本) 187
第1節 位置と地形環境	187

序　調査の概要と遺跡の立地

第1章　調査の概要	(赤木)	1
第1節　発掘調査に至る経過		1
第2節　発掘調査の方法		3

第2章　位置と環境	(鶴柄)	5
-----------	------	---

第I部　I 調査区の調査成果

第1章　調査の概要と前提	(森屋・中村)	13
第1節　位置と地形環境		13
1. 位置	2. 地形環境	
第2節　調査方法		14
1. トレンチの設定	2. 調査の経過	
3. 調査の方法		
第3節　調査成果の概要		16
1. 基本層序	2. 遺構・遺物の概略	
第2章　古墳時代以前の遺構・遺物		21
第1節　旧石器時代～縄紋・弥生時代の遺物		21
1. 旧石器時代の遺物	2. 縄紋・弥生時代の遺物	
第2節　古墳時代の遺構・遺物		24
1. 建物	2. 土器群A-1	
3. 土器群A-1の遺物	4. 小結	
第3章　古代の遺構・遺物		35
第1節　遺構		35
1. 溝		
第2節　遺物		36
第4章　中世の遺構・遺物		37
第1節　A地区東部(3A～5Aトレンチ)		37
1. 溝	2. 土坑	
3. 井戸	4. 小結	
第2節　A地区西部(6Aトレンチ)		46
1. 溝	2. 土坑	

目 次

卷頭カラー写真

1. 空からみた日置莊遺跡（遺跡周辺航空写真）
2. まとまって出土した土器（土器群A - 1）
3. 出土した土器（土器群A - 1出土遺物）
4. 磁の鉄型（A地区包含層出土磁鉄型）
5. 備り金具（溝B - 38出土）
6. 城郭の内部（堀B - 1内の遺構群）
7. 空からみた城郭（堀B - 1と遺構群）
8. 中国から来た青磁器（A地区出土磁器）
9. 空からみたI調査区の周辺（I調査区周辺航空写真）
10. 中世の村と萩原寺（II調査区周辺航空写真）
11. 条里型地割と屋敷（E地区区画2・3およびG地区区画10～14）
12. 溝に囲まれた屋敷（E地区区画3）
13. 溝で囲まれた屋敷群（G地区区画10～14）
14. 梵字を配する軒瓦（G地区出土梵字紋軒丸・軒平瓦）
15. 炉跡が見つかったI地区（I地区航空写真）
16. 銅を溶かす炉のあと（I地区土坑I - 548）
17. 須恵器を焼いた窯（須恵器窯L - 1）
18. 出土した須恵器（須恵器窯L - 1出土遺物）
19. 井戸の底から出土した土器（井戸L - 4遺物出土状況）
20. 溝に囲まれた建物（建物L - 21）
21. 中国から来た青磁の器（土壤墓M - 2出土青磁碗）
22. 鎌倉時代の墓（土壤墓M - 1出土土器）
23. 中世墓から出土した土器（土壤墓M - 1出土土器）
24. 中世墓から出土した土器（土壤墓M - 2出土土器）
25. 空から見た埴輪と須恵器の窯（P地区航空写真）
26. 塩輪の窯あと（埴輪窯P - 1床面III）
27. 塩輪窯の中（埴輪窯P - 1床面I）
28. 塩輪窯の土層（埴輪窯P - 1土層断面）
29. 塩輪窯の床面（埴輪窯P - 1床面II埴輪片除去後）
30. 出土した埴輪（埴輪窯P - 1および灰原出土埴輪）
31. 完成した高速道路（近畿自動車道松原すさみ線 III調査区付近）

序 文

大阪府教育委員会

序 文

大阪文化財センター

例 言

凡 例

付与による無用の混乱をさけるために、基本的に調査時および概報時に付した遺構番号をできる限り踏襲し、それに地区名のアルファベットを付与する方法をとった。ただし、追加調査の多い調査区では新たに遺構名称を付したものも少なくない。各遺構の新旧対照は付表の主要遺構一覧表を参照されたい。

9. 遺構平面図における断面位置は「L」形によって表現している。
10. 挿図および写真図版における遺物番号は、各挿図内で完結する番号を付与している。挿図の番号については、上記の7で示した方法によっており、したがって、I調査区の5番目の挿図である土器実測図中の1番の土器を示す場合には「図I-5-1」という表記方法をとっている。ただ、本文中あるいは付表等で調査区が明記されているなどの前提条件がある場合などは、適宜に、冒頭部分を省略して「1-1」あるいは「1」のみで表記している場合もある。
なお、挿図と写真図版の遺物の対照は、掲載遺物一覧表を参照されたい。
11. 遺物実測図の縮尺は、石器が2/3、土器が1/4、埴輪1/6を基本としている。ただ、一部の遺物では1/2あるいは1/3としたものもあり、必ずしもこの限りではない。各々の縮尺率については、各スケールに縮尺率を明示しているので、そちらを参照されたい。
また、遺物では須恵器・陶器の断面は黒塗りにし、土師器・陶磁器類は断面白抜き、瓦はスクリーントーンで表現している。なお、瓦器・瓦質土器・黒色土器については断面白抜きとしているが、瓦器・瓦質土器は「瓦」、黒色土器A類は「黒A」、黒色土器B類は「黒B」という記号を付して区別している。
12. 引用文献および参考文献は各章の末尾に記した。
13. 土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
14. 本文中の用語、記載方法、あるいは土器実測図の表現方法等において、執筆者の考えを尊重して部分的にあえて統一していないところもある。
15. 本書の編集は各担当者の協力のもと、総編集は江浦が行った。

凡　　例

1. 日置荘遺跡の略称は、H K I (H I K I S Y O U site) である。
2. 付図の遺構全体図の縮尺は、1/200に統一している。遺構は、建物を1/80に縮尺率を統一したほかは、1/10、1/50、1/100、1/200、1/500を基調とし、場合によっては任意とした。各図版のスケールに縮尺率を明示しているので参照されたい。
3. 遺構および断面図中の標高は、東京湾平均海面 (T.P.) からのプラス値である。
4. 遺跡発掘調査に伴う地区割りは国土座標の第VI座標系に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北はいずれも座標北を基準としている。座標の記載は、すべてm単位とする。
5. 調査区ごとの地区設定は、基本的に概要報告と対応しており、東から西にアルファベット順に表記している。本報告と調査時との対応関係は以下の通りである。

調査区	調査時・概要報告時名称	地区名
I 調査区	日置荘（その1・その1-2・その1-3・その5余部地区）	A～C地区
II 調査区	日置荘（その2・その2-2・その2-3・その5原寺地区）	D～J地区
III 調査区	日置荘（その3・その5今池剣池地区）	K～M地区
IV 調査区	日置荘（その4・その5石池谷地区・その6・その6-2）	N～Q地区

6. 本報告書では、I～IV調査区の調査成果を個別に報告することを前提としている。また各調査区の調査成果については時代順に記述している。調査範囲が広域にわたることから検出された遺構・遺物の年代や性格も調査区ごとに多様であり、したがって、各調査区における時代の設定および記述についても、その個性に応じて若干の相違を生じている。
7. 本報告書では、目次に示したように、本文は序を含めて9部構成となっている。本文中の挿図および写真図版の番号は、全体を通しての通し番号をしていない。

本文第I部～第IV部の基礎報告では「図I-1」というようにローマ数字を冠して表記している。これは写真図版についても同様であり、I調査区の写真図版については「図版I-1」というように表記している。

また、序の部分では「序図-1」という表記方法をとり、第V部から第VI部に関しては、例えば第VI部第1章の図1であれば、「VI-1-図1」というキャプションを付している。なお、いずれも章内での本文中では「VI-1」は省略し、「図1」のみで表記している。

なお、この表記方法は挿図・写真図版に限るものではなく、付表・付図にも適用している。通し番号を付与していない点で煩雑となっている部分もあるが、図版番号に冠して表記されたローマ数字によって、いずれの調査区の図版であるのかを、瞬時に判断できるよう便宜を図った表記方法として採用している。

8. 遺構名称および遺構番号は、調査時・概報時とは異なり、各地区ごとに地区名のアルファベットを冠した番号で完結している。本来であれば、通し番号を付与すべきところではあるが、新遺構名称の

—— 遺物整理 ——

浅田尚子・石毛彩子・石田 慎・稻岡知美・上河善子・内山信子・瓜崎恵美子・江藤豊子・奥出利子・
奥野真樹・柏原亜希子・川崎朝子・川田嘉代子・川辺 稔・冠野清美・北山早苗・久禮孝志・小松茂
雄・齊藤小穂・堺 弓子・佐藤洋子・新名 強・高山多美子・伊達佳代・辻村寿満子・豊木真理子・
長尾 恵・中筋英子・永野純子・中村慎子・西口桂子・西田久美・林 一歩・福田優子・堀田 啓・
松村より子・松本昭子・水永貴丸・宮川和幸・宮武府子・村田あかね・森口 光・矢野智子・山崎美
奈・山下君代・山本起美子・山本順治・山本麻弓・山本麻里・吉川長太・吉田誠司・吉房寛子・与那
嶺勉・渡辺俊介

10. 本調査に関わる遺物・写真・カラースライド・実測図等は財団法人大阪文化財センターにおいて保
管している。広く利用されることを希望する。

重鉱物分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

原土分析

井上 嶽〔㈱第四紀地質研究所〕

なお、胎土分析および土壤分析の試料採取に関して以下の関係諸氏ならびに諸機関から御協力を賜った。記して御礼申し上げる（敬称略、団体五十音順、団体内五十音順）。

市川秀之（大阪狹山市教育委員会）、岩瀬 透・中井貞夫（大阪府教育委員会）、岡戸哲紀・西村 歩（財団法人大阪府埋蔵文化財協会）、石田 修・鷗谷和彦・十河稔郁・樋口吉文・藤井克己・森村健一（堺市教育委員会）、森田克行（高槻市教育委員会）、中辻 豊（富田林市教育委員会）、笠井敏光（羽曳野市教育委員会）、上田 瞳（藤井寺市教育委員会）、泉谷博幸・庖丁道明・坂口浩司（美原町教育委員会）

8. 発掘調査および遺物整理作業の過程で次の方々をはじめとする多くの諸氏ならびに諸機関に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である（敬称略、団体五十音順、団体内五十音順）。

乾 哲也・白石耕治（和泉市教育委員会）、都出比呂志（大阪大学）、脇田晴子（大阪外国语大学）、伊藤幸司（大阪市文化財協会）、一瀬和夫・尾上 実・中井貞夫・西川寿勝・広瀬和雄・森屋直樹（大阪府教育委員会）、岡戸哲紀・駒井正明（財団法人大阪府埋蔵文化財協会）、中村 浩（大谷女子大学）、伊藤 晃（岡山県古代吉備文化財センター）、上西節雄（岡山県立美術館）、亀田修一（岡山理科大学）、前川浩一（貝塚市教育委員会）、片桐孝浩・渡部明夫（香川県埋蔵文化財センター）、ト部行弘・坂 靖（樅原考古学研究所）、網野善彦（神奈川大学）、馬瀬和雄（鎌倉市教育委員会）、五十川伸矢・高橋克壽・菱田哲郎（京都大学埋蔵文化財研究センター）、小野正敏・吉岡康暢（国立歴史民俗博物館）、川西宏幸（古代学協会）、浅野晴樹（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）、石田 修・北野俊明・近藤康司・白神典之・十河稔郎・續 伸一郎・樋口吉文・森村健一（堺市教育委員会）、野島 稔（四條畷市教育委員会）、藤原 学（吹田市教育委員会）、南川孝司（攝河泉文庫）、藤沢良祐（瀬戸市埋蔵文化財センター）、木下密運（千手寺）、田中則和（仙台市教育委員会）、大船孝弘・橋本久和・森田克行（高槻市教育委員会）、狭川真一・山本信夫（太宰府市教育委員会）、橋口定志（豊島区教育委員会）、柳本照男（豊中市教育委員会）、宇野隆夫（富山大学）、工藤清泰（浪岡町教育委員会）、市川米太（奈良教育大学）、上原真人・佐川正敏・光谷拓実（奈良国立文化財研究所）、鐘方正樹（奈良市教育委員会）、坪之内 徹（奈良女子大学）、藤澤一夫（四天王寺国際仏教大学名誉教授）、水野正好（奈良大学）、河内一浩・笠井敏光・高野 学（羽曳野市教育委員会）、岩本正二・鈴木康之（広島県草戸千軒町跡遺調査研究所）、篠原芳秀（広島県埋蔵文化財センター）、荻野繁春（福井工業高等専門学校）、飯村 均（福島県文化センター）、坂井秀弥（文化庁）、越田賢一郎（財団法人北海道埋蔵文化財センター）、高橋 学（立命館大学）、真光寺、萩原神社

9. 発掘調査および遺物整理作業の過程では、以下の方々を中心に参加、協力を得た（五十音順）。

——発掘調査——

赤坂有紀子・池辺佳世・石原祐也・稻井俊也・井上正代・今津典彦・岩城潔子・岩崎理香・岩田 康・内山淑子・大川真樹夫・岡崎弘子・奥田康信・葛城大輔・河田智朗・岸本由加・北川和美・北野明子・黒田恵子・小林利光・柴村由利香・杉本昌彦・鈴木淳子・高橋明代・田中千賀・田中秀樹・田村明子・辻 孝夫・出来英美子・寺林和彦・豊田真由美・長谷川喜也・林 章浩・原田耕造・飛高あつ子・日弁祐治・福島規織・福本泰宏・藤田修司・藤原盛秀・古川聰恵・松阪 弘・森 有希・山本龍也・吉田奈緒美・吉村順子・由本雅美・脇谷明紀子

例　　言

1. 本書は、近畿自動車道松原すさみ線並びに都市計画道路松原泉大津線建設工事に伴う日置荘遺跡（ひきしょう　いせき）発掘調査の整理事業に対する本報告書である。なお、日置荘遺跡は大阪府南河内郡美原町余部から堺市日置荘西町および田中町にかけて所在する。
2. 発掘調査およびそれに伴う整理事業は、大阪府教育委員会および財団法人大阪文化財センターが日本道路公団大阪建設局および大阪府鳳土木事務所の委託を受けて実施した。
3. 総括的な整理事業および本書の作成作業は、1991年4月1日から1993年3月31日の3年間にわたって実施し、印刷に関しては1994年度に行った。
なお、整理事業に要した費用303,932,400円は、139,032,490円が大阪府鳳土木事務所、164,899,910円を日本道路公団大阪建設局が負担した。
4. 整理事業および本書作成は、大阪府教育委員会の指導の下に、財団法人大阪文化財センターが実施した。整理事業は、調査課長中西靖人、主幹兼調査第3係長赤木克視の指示の下、調査第3係主任技師森屋美佐子・主任技師入江正則・技師中村淳穂・技師江浦　洋・技師市本芳三が内業整理、主任技師平井貞子・技師立花正治が写真を担当した。
また、整理作業には、技師山口誠治・技師鶴柄俊夫・技師新海正博・技師亀井　聰の協力を得た。
5. 発掘調査は、1986年5～6月の試掘調査を経て、1987年4月1日から1991年3月31日にわたりて実施し、これまでに8冊の概要報告書を刊行している。
6. 発掘調査担当者は、以下の通りである。なお、各年度ごとの調査区および担当者については各調査区の報告の冒頭に調査一覧表を付しているので、詳細はそちらを参照されたい。
調査課長 中西靖人
調査課調査第2係長 國乗和雄
調査課主幹兼調査第3係長 赤木克視
主任技師 小野久隆・村上年生・入江正則・金光正裕・森屋美佐子（遺物整理）
片山彰一・平井貞子（写真）
技　　師 鶴柄俊夫・松山　聰・中村淳穂・江浦　洋・市本芳三・本間元樹・岡本健一
高橋雅子（遺物整理）、立花正治（写真）
7. 自然科学的調査の成果については、以下に記した方々に依頼し、一部、分析結果の遅れるものを除いて、原稿を賜った。記して厚く感謝の意を表する次第である。

胎土分析	三辻利一（奈良教育大学）
	井上　巖〔㈱第四紀地質研究所〕
	パリノ・サーヴェイ株式会社
考古地磁気測定	前中一晃・伊達宗泰（花園大学）
¹⁴ C年代測定	山田　治（京都産業大学）
花粉・珪藻、プランクトン・オパール分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
金属分析	大澤正己（たたら研究会）
画像処理	中谷幸太郎・森脇耕介（大阪府立産業技術総合研究所）

序 文

日置荘遺跡は、堺市東部の日置荘原寺町から日置荘田中町を中心に広がる遺跡である。日置荘を町名に持つ町は、この他にも日置荘西町や日置荘北町があるが、これらの4つの大字は堺市と1958年に合併する前は日置荘村から日置荘町として一つの自治体を形成していた。

日置荘村は1951年に町制を施行するが、町はそれを記念して「日置荘町誌」の刊行を企画する。この本は1954年に発行されるが、第二次大戦後の混乱が収まりきっていない段階で作られた町誌ではあるが、高水準に仕上がっている。行基創建と伝えられる萩原寺（大聖寺）に関する当センター理事の藤澤一夫先生の若き日の論考も収録されている。なお、今回の調査では、その大聖寺に関連すると思われる瓦が検出されているのも何かの縁であろう。そこで、先生にご無理をお願いし、今回の報告書で40数年ぶりに改定版を執筆頂いた。記して感謝の意を表す。

ともあれ、今は名の消えた南河内の小さな町が残した町誌は、日々日置荘町が存在したという記憶が薄れしていく中で、輝かしい記念碑として末代に残りうるものであり、歴史は記されて初めて歴史となりうるという点での恰好の事例と言えるであろう。

考古学も、文字としての記録が残されていない遺構・遺物等の事物を対象として歴史を研究する学問であるが、それが歴史となるにはやはり文字として記述されなければならない。発掘調査を行っても、その成果が報告書として結実されなければ、ただの瓦落多を掘り出したにすぎないのである。その意味で、発掘調査後の十全な整理作業と報告書の作成は、我々に課された重大な使命と言える。

近畿自動車道松原すみ線（旧松原海南線）並びに府道松原泉大津線建設に伴う併設区間の発掘調査は、大阪府教育委員会の指導の下、当センターにより1984年度に真福寺遺跡から着手し、1990年度の小阪遺跡南地区で完了した。この区間の調査は、やはり当センターで実施した中河内の地中深く埋没した低湿地遺跡を対象とした近畿自動車道天理吹田線の調査とは異なり、南河内から泉北丘陵にかけての洪積台地上の遺跡が対象である。中河内の低湿地遺跡は教科書的に下から上に時代順に遺構面が重なるが、この洪積台地上の遺跡は、後世の開発に伴う削平の影響を受けて遺構面の埋没深度がおおむね浅く、同一遺構面上で様々な時期の遺構・遺物が検出される。そのため、遺物の出土しない遺構の時期の認定などで、天理吹田線とは異なる様々な苦労があったようである。

本書で報告する日置荘遺跡の調査は、主要部分を1987～1988年度に実施したが、その後用地問題等で調査出来なかった細切れの残余部分を、調査可能となったものから順次数年かけて実施したものである。

今回の調査では、美原町域の本来余部遺跡とすべき範囲も日置荘遺跡I調査区として調査しており、合わせて全長2kmにも及ぶ長大な調査区となった。本書では、その余部遺跡部分をも含めて4つの調査区に分割し、報告している。それぞれの調査区ごとに様相の異なる遺構・遺物が検出されており、この地域の多様な歴史復元に貴重な史料を提供するものとなった。

これも偏に大阪府教育委員会、大阪府土木部、日本道路公団を始めとする関係各位のご指導・ご協力の賜物と感謝している。今後とも当センターへのご支援を賜るよう切に希望する。

平成7年3月

財團法人 大阪文化財センター
理事長 坪井 清足

序 文

府道松原泉大津線と近畿自動車道松原海南線の建設に先立つ発掘調査は、昭和59年の美原町真福寺遺跡から開始され、平成2年度の堺市小阪遺跡の調査で終了しました。

その結果、各時代の様々な遺構や遺物が出土し、重要なデータも蓄積されてきました。その一部は、調査終了後に速報として概要報告書を刊行し、公開してきました。その後、幸いにも関係諸機関の協力を得て、平成元年度からは本格的な整理作業を開始することとなり、小阪遺跡に統いて平成3年度から3ヶ年の予定で整理作業を進めて参りました。本書は、その整理事業報告書であります。

日置荘遺跡は美原町と堺市にまたがる遺跡であり、全国各地に残る梵鐘などの鉄物を生産した「河内鉄物師」の本拠として広く知られていた地域にあたります。

調査の結果、仏具などの鉄型や溶解炉の跡が検出され、文献や梵鐘などに残る金石文でしかたどることのできなかった河内鉄物師の実態をかなり具体的に復元できるまでに至っています。また、周辺からは古代から中世にかけての集落や寺院の一角とも考えられる建物群が検出され、それに伴って多量の瓦のほか、当時の日常生活を偲ばせる多様な土器などが出土しています。

また、当遺跡西端の谷部では古墳時代の埴輪や須恵器の窯跡が検出され、とくに埴輪窯から出土した埴輪は新しい時期の特徴をもちながらも非常に大型であることを特徴としています。ただし、ここで生産された埴輪がいずれの古墳に運ばれたのかは不明であり、その点は今後の調査研究の課題として残っています。なお、この埴輪窯で生産された円筒埴輪は、関東地方で出土する埴輪との共通性も指摘されており、当時の埴輪の生産体制を考える上でも非常に重要な位置を占めているといえます。

日置荘遺跡の報告書は、上記のように河内鉄物師に関連する中世集落と古墳時代の埴輪や須恵器の窯跡の報告が二つの柱となっています。とくに全国的にも貴重な埴輪窯の調査と河内鉄物師の本拠地の一つを考古学的な調査によって具体的にしたという点で、非常に貴重な報告書となっています。

ここに成果を皆様に示し、調査を担当した大阪文化財センター、日本道路公団、本府土木部、鳳土木事務所などの関係各位の協力に対し、記して感謝の意を表するとともに、これからも文化財保護行政への御理解、御協力を賜りますようお願い致します。

平成7年3月

大阪府教育委員会

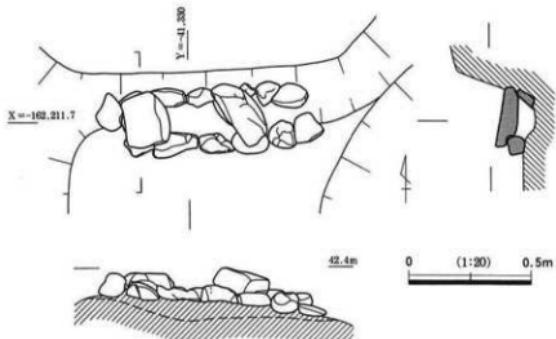
文化財保護課長 田 中 宏

て使用された時期もあったようである。

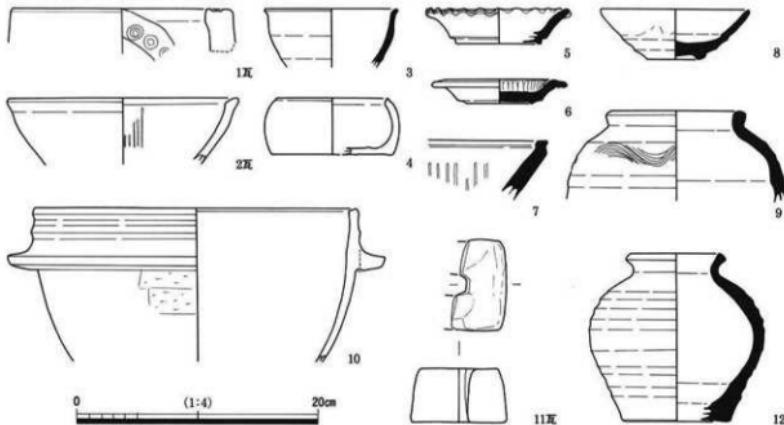
溝の西半部で、人頭大の礫とともに遺物が出土している。遺物は瓦類が多くみられるほか、土師器小皿・甕・羽釜・鉢、瓦質羽釜・鉢、陶磁器なども検出されている（図I-28）。上層からの遺物も多いことから、溝が廃絶する際に、瓦や土器などを人为的に廃棄したものと考えられる。

溝A-1の東部には、底から0.3m程度の浅く掘り残した部分があり、この部分で、礫と瓦で造られた暗渠が検出された。残存状況は比較的良好で、上部の礫が部分的にはずれているものの、ほぼ全形がわかる。長さ約1m、幅約0.3m、高さ約0.2mを測り、掘り残し部分の北側隅に位置する。上部の礫は、かなり大きくしっかりしているのに対し、側面の礫は比較的小さく、細長いものが多く、この部分には転用した平瓦も含まれている。底部には礫や平瓦などを敷いた形跡はなく、特に補強なども施されていない（図I-27、写I-4-3）。石組暗渠内からは遺物は出土しておらず、造られた時期は特定できないが、溝A-1掘削時か使用されていた時期に、付属して設けられたものと考えられる。

また、溝A-1の北側には、地山を掘り残した高さ約0.2mの東西方向の疑似畦畔があり、石組暗渠の部分で直角に曲がり、南へ延びている。畦畔が造られた時期は特定できないが、溝A-1と関連をもって造られたものと考えられる。



図I-27 A地区東部 石組暗渠平面・断面・見通し図



図I-28 A地区東部 溝A-1(1,3,5,7,11)・溝A-2(2,4,6,8~10,12)出土土器・土製品

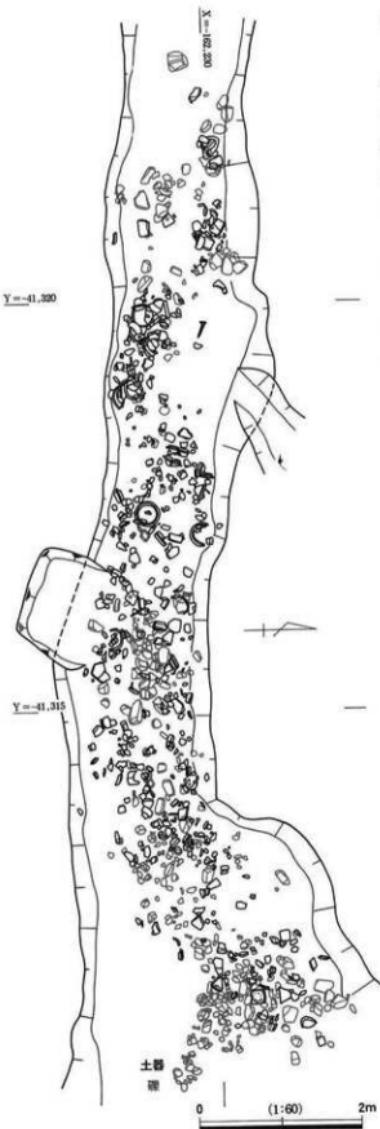


図 I-29 A地区東部 溝A-2 遺物出土状況

(2) 溝A-21 (図I-15, 25, 26、写I-4-2, 4)

石組暗渠をはさんで溝A-1の東側に位置する溝である。幅約6m、深さ約0.4mを測り、底は平坦である。埋土は黄褐色シルトが基本で、底部に細砂が堆積しており、粘土は混入していない。低位段丘東端部でせき止めた形跡が認められなかったことから、排水路として使用されたといえる。

東端部の底面から土師器小皿・羽釜・甕、瓦質羽釜・鉢、陶磁器、瓦類などが多く出土している(図I-28)。遺物の出土状況は、それ以外の部分からはほとんど検出されておらず、ほぼ全域から遺物が出土した溝A-1とは状況が異なる。

溝A-21は、埋土の堆積状況や遺物の出土状況が溝A-1とは異なるが、石組暗渠を通じて旧西除川へ排水をするための一連の溝と考えることができる。

(3) 溝A-2 (図I-25, 26, 29、写I-5)

溝A-1の南側で平行して、低位段丘東端部からほぼ東西方向に調査区を横断する溝である。調査区西端部で北に折れ、約8mほどで終結する。幅2~4m、深さ約0.7mを測り、底部のレベルはほぼ水平で平坦である。

埋土は大きく2層に分かれ、上層はオリーブ褐色シルト、下層は暗オリーブ褐色粘土が基本で、細砂を含む。埋土の堆積状況は溝A-1と似ていることから、当初は同様に水を溜めた堀のような性格をもった区画溝と考えられる。

ほぼ中央部で浅く掘り残した部分があり、周辺から人頭大の礫が多く検出されていることから、原形はとどめていないが、この部分に溝A-1と同様の石組暗渠が設けられていたことが推測される。この浅い部分の東側では、溝の幅は狭くなり、埋土は粗砂が混入する灰黄色粘土で、シルト層がみられなくなるなど、西側と様相が異なる。

遺物は、ほぼ全域にわたって、多くの礫とともに瓦類や土師器小皿・甕・羽釜、瓦質羽釜・火鉢、陶磁器などが検出された。丸瓦や平瓦、土師器羽釜が多く、瓦器碗は出土していない。ある程度まとまって検出されており、羽釜の中には形を復元できるも

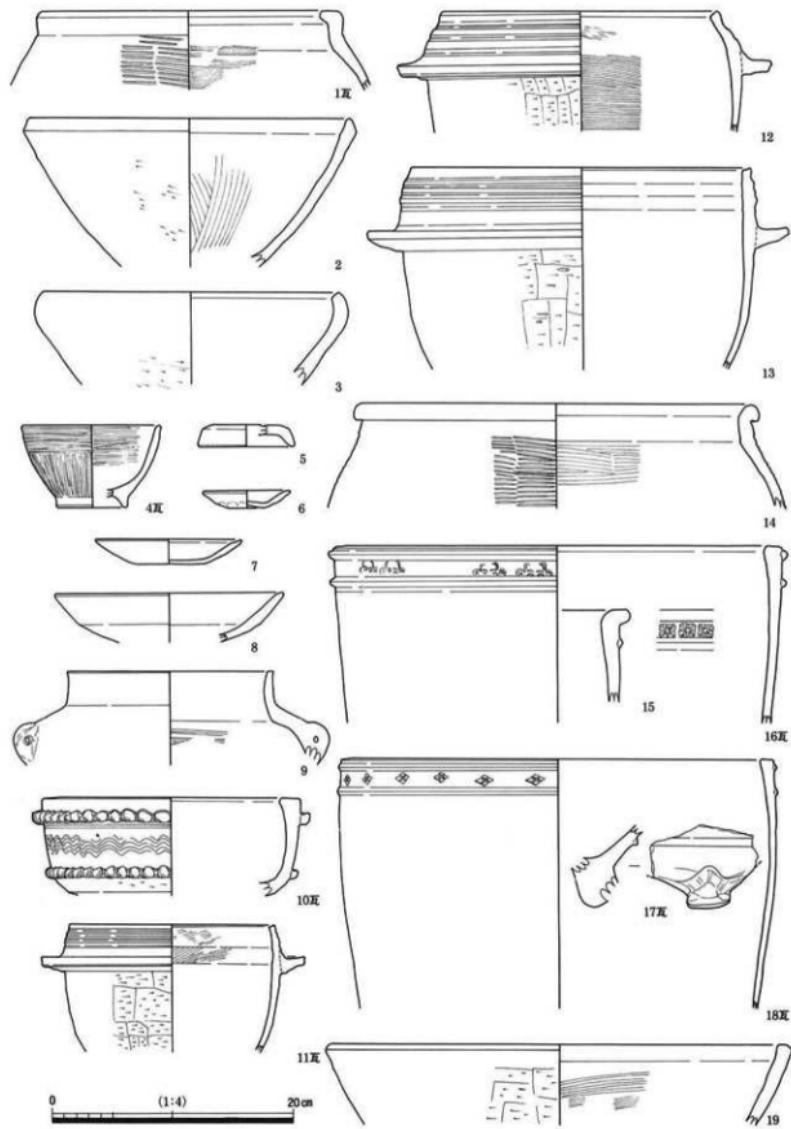


図 I-30 A地区東部 溝A-2出土土器(1)

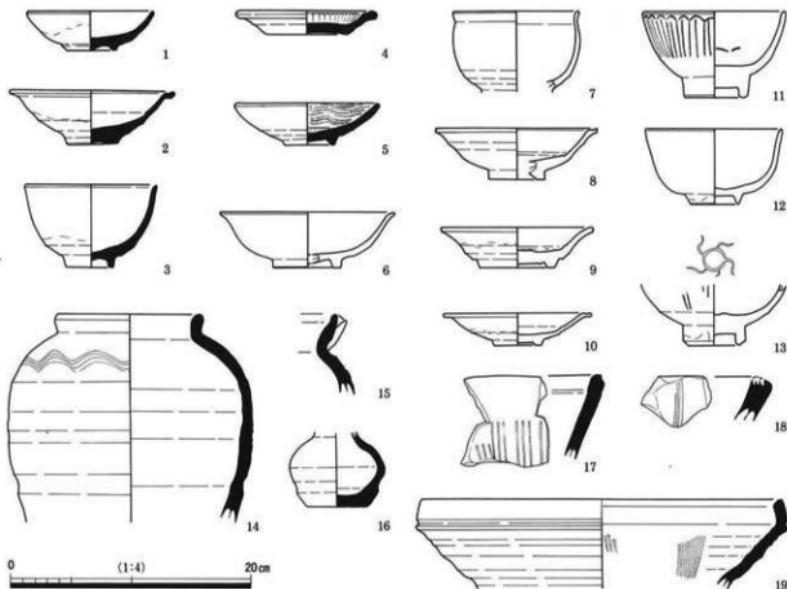


図 I-31 A地区東部 溝A-2出土土器（2）

のがある。また、土師器の中には、茶釜や焼塩壺蓋と考えられるものもみられる。さらに砥石や石臼も出土している。溝A-1と同様に、上層の遺物も多いことから、これらの遺物は溝の廃絶時に一括して廃棄されたものと考えられる。遺物は、15~16世紀代のものがほとんどであるが、近世の染付や渦焼の破片も一部検出されており、溝A-2が近世まで存続していたことを示している（図I-30,31）。

溝A-2の東半部と西半部で、出土遺物や埋土に若干の相違がみられることから、当初は1条であった溝が、16世紀代に東半部が部分的に埋められ、近世には農業用水の水溜として利用されるようになつたことが推測される。

A地区東部で検出された2条の溝は、当初、屋敷か集落を区画するために掘削されたものと考えられ、浅い部分を残して堀のように水を溜めていたようである。溝A-1では、水位を調節するために石組暗渠を設け、旧西除川へ排水を行っていたものと考えられる。溝A-2でも、石組暗渠の存在が推測される。A地区東部では、当該期の遺構はあまり検出されておらず、屋敷や集落は見つかっていない。ただ、溝から瓦類が集中して検出されているため、付近に瓦葺の建物が存在したことは確実である。

溝A-1に沿って疑似畦畔が造られていることや、溝A-2が近世までなんらかの形で存続していることから、中世から近世にかけての時期には、区画としての役割をもっていたものと考えることができる。さらに、畦畔は現代まではほぼ存続しており、耕作地の区画線として残っていたものである。また、溝A-1と溝A-2は平行しており、ほぼ同時期に掘削されていることから、2条の溝で調査区南側に位置する北余部集落の境界線の一部を示していた可能性がある。

2. 土坑

A地区東部では、12世紀代の遺構が検出されているが、13・14世紀代の遺物はほとんどみられず、遺構も断絶する時期がある。遺構の中心時期は14世紀末から16世紀にかけての中世後期である。土坑は単独で検出されており、関連性はあまり認められないが、ほぼ同時期に存在したものと考えられる。廃棄坑と考えられるものが多く、ほとんどが上部を削平されており、底部のみの検出であることから、全体に遺物の量は少ない。

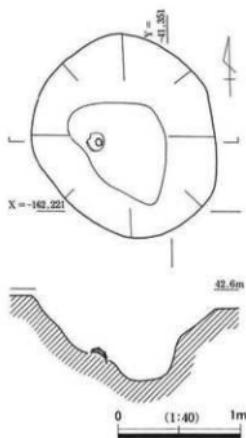
(1) 土坑A-8(図I-25,32、写I-5-5,6-1,2)

調査区北西部の低位段丘上で検出された。楕円形を呈しており、長径1.6m、短径1.5m、深さ約0.7mを測る。断面は鉢状を呈しており、底部のみ、やや掘り下げられている。底部には暗青灰色粘土が堆積しており、井戸の可能性も考えられる。埋土下層および底部から、ほぼ完形の瓦器碗が出土したほか、黒色土器片なども検出されている。付近に同時期の遺構はみられず、遺物の量も少ない。

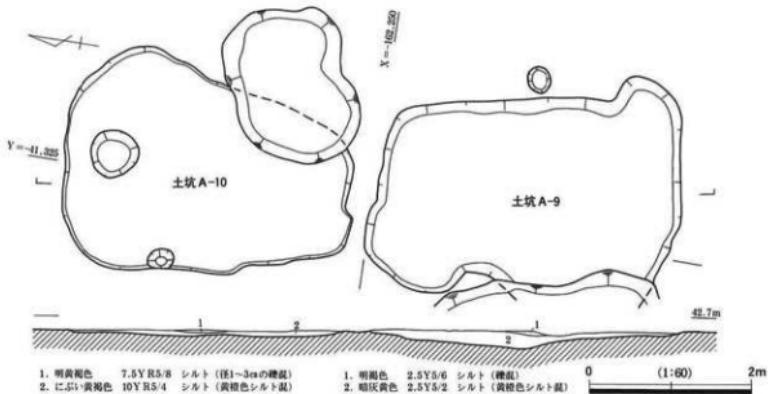
瓦器碗は、2個が重なった状態で検出され、意図的に廃棄されたものと考えられるが、保存状態は良好ではない。12世紀代のものと考えられ、A地区東部で出土した瓦器碗の中で最も古い時期のものである(図I-35-1~4)。新しい時期の遺物は混入していない。

(2) 土坑A-9(図I-25,33)

調査区南部のほぼ中央部で検出され、土坑A-10と隣接する。不定方形を呈しており、長辺3.7m、短辺2.3m、深さ約0.2mを測る。上部を削平されているため、底部のみの検出である。遺物の量は少なく、わずかに土師器皿が図示できたのみである(図I-35-5)。



図I-32 A地区東部 土坑A-8
平面・断面図



図I-33 A地区東部 土坑A-9・土坑A-10平面・断面図

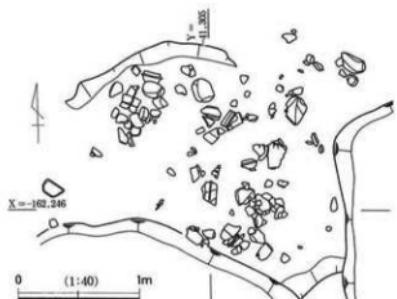


図 I - 34 A 地区東部 土坑A-14遺物出土状況
土坑とを考えることができる。

(4) 土坑A-83 (図 I - 25、写 I - 7-2)

調査区のほぼ中央部で検出された。東半部は攪乱をうけているため、形状ははっきりしないが、現状で長方形を呈している。長辺約5.2m、短辺約2.5m、深さ約0.2mを測り、底は平坦である。底部のみの検出であるが、土師器甕・羽釜、瓦質羽釜・瓦などがまとまって出土している。

同時期の土坑は溝A-2の南側に散在しており、北側では検出されていない。溝による区画で土坑の位置が規制を受けていることも考えられる。ほぼ全域で削平をうけていることから、溝の北側における土坑の存在を否定することはできないが、古墳時代の建物の柱穴が残存している状況では、可能性は低い。全体に出土遺物の量は少ないため、埋土や他の土坑との関連性から時期を推定したものが多い。

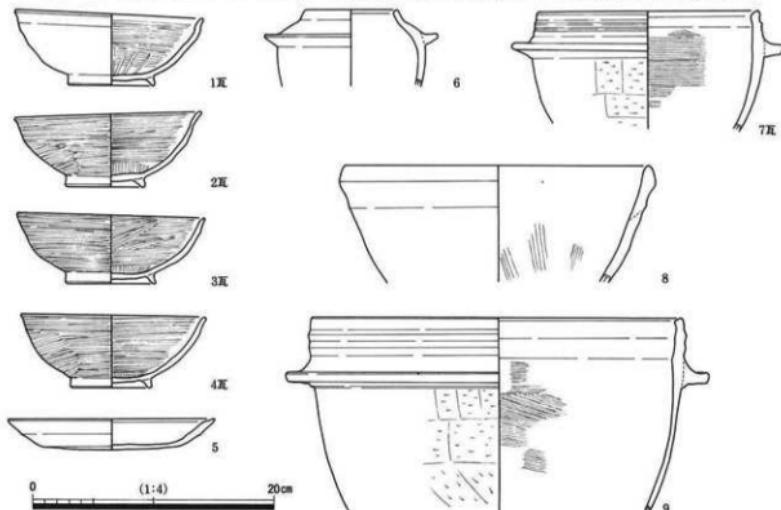


図 I - 35 A 地区東部 土坑A-8(1~4)・土坑A-9(5)・土坑A-14(6~9)出土土器

(3) 土坑A-14 (図 I - 25, 34、写 I - 6-6)

調査区南部の低位段丘東端部で検出された。上部を完全に削平されているため、形状は不明であるが、長径約3m、短径約2mの橢円形を呈していると考えられる。残存状況は悪く、現状で深さ約0.1m程度しか残っておらず、底部のみの検出である。遺物の量は比較的多く、土師器甕・羽釜、瓦質羽釜・瓦、径20cm程度の礫などがまとまって検出されている（図 I - 35-6~9）。廃棄坑と考えられるが、付近に関連する遺構はない。集落の縁辺にあたる段丘東端部で、日常雑器を廃棄した

3. 井戸

他の地区では素掘りの井戸が多いに対し、A地区東部では中世から近世にかけての石組井戸がみられる。

(1) 井戸A-7 (図I-25, 36, 写I-7-4)

調査区西部のほぼ中央部で検出された。上端部の径1.7m、底部の径0.9mではほぼ円形を呈しており、深さ約1.2mの石組井戸である。地山面から約0.2m下がった部分より、径約20cmの礫を用いた石組が始まり、ほぼ垂直に降下する。土坑A-32の内部に位置しており、土坑より後に掘削された井戸と考えられる。

埋土上層はほとんどが暗灰黄色粘土であり、須恵器杯身などの破片が多く混入しており、中には完形のものもみられる。埋土は、古墳時代包含層が運ばれてきたものである。井戸からの出土遺物は少ないが、土師器甕・羽釜、瓦質羽釜・鉢、瓦、青磁碗などの破片がみられる。

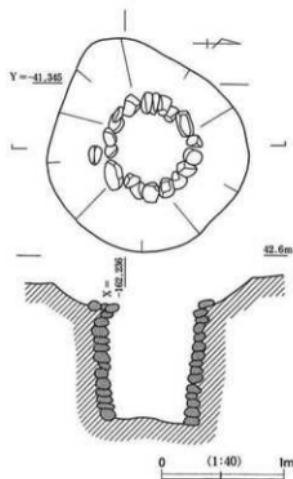
(2) 井戸A-8 (図I-25, 写I-7-5)

調査区中央部のやや南寄りで検出された石組井戸である。近世の土坑や溝によって井戸の上部は破壊されており、当初、井戸の存在が確認できなかった。上部の規模は不明であるが、下半部の径20cm程度の礫を用いた石組は良好に残っている。径約0.5mの円形を呈しており、石組部分はほぼ垂直に降下する。深さは1m以上と考えられる。

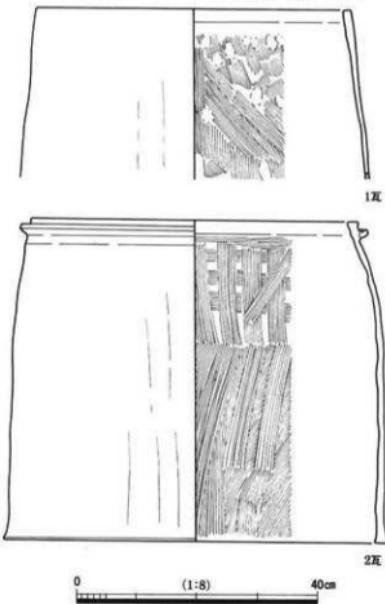
井戸検出時に、破壊された石組とともに瓦質井筒が破片で出土した。据えられた状況での検出ではなかったが、ほぼ完形に復元することができた。ほかに土師器小皿・羽釜、瓦質羽釜・甕・鉢、瓦などが出土しており、時期は14世紀末から15世紀にかけてのものと考えられる。

4. 小結

主として12世紀代と15・16世紀の遺構が検出され、13・14世紀の遺構はあまりみられない。土坑と溝が多く検出されており、建物はみられないが、中央部を横断する溝A-1・溝A-2は、集落を区画するものと考えられ、調査区南側に集落が拡がることが予測される。また、溝A-1・溝A-2には石組暗渠が設けられており、水を溜めて農業用水などを確保していたことがわかる。



図I-36 A地区東部 井戸A-7



図I-37 A地区東部 井戸A-8 出土井筒

第2節 A地区西部（6Aトレンチ）

A地区西部では、ピット・溝・土坑・井戸などがほぼ全域で検出された。A地区東部と隣接しているにもかかわらず、遺構の検出状況はかなり異なっている。北東端部には土坑群が密集した部分があり、狭い範囲内で何度も土坑が掘削されている。また、他の土坑は関連性があまり認められず、井戸と考えられる土坑も多くみられる。なお、これらの土坑を含めて井戸が多く検出されており、出土遺物の時期も比較的連続することから、人々の生活が連續して営まれていたことを示している。ピットは柱穴と考えられるが、掘立柱建物の復原は困難である。井戸のほとんどが調査区縁辺部に位置することなどから、居住区域は調査区外に拡がる可能性もある。

地山は、東半部がA地区東部から続くシルト層、西半部が疊を多く含む粘土層である。西半部は削平をうけているため、包含層はほとんど残存しておらず、耕作土を除去するとすぐに、疊を多く含む地山の粘土層が検出された。東半部は、土坑群の密集した部分で地表面がくぼんでいたため、包含層は比較的残存していた。包含層は暗灰黄色シルトが基本で、これに地山の黄褐色粘土などが混入している部分もある。

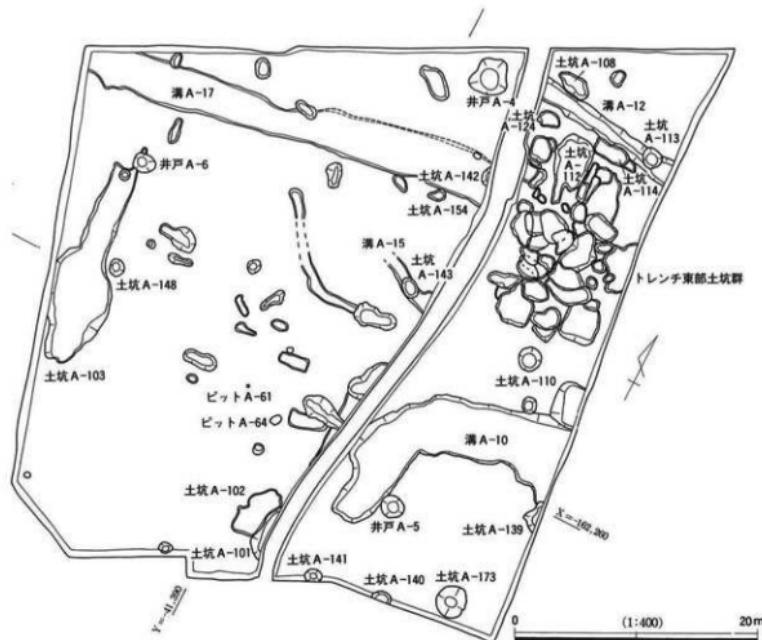


図 I - 38 A地区西部 中世遺構略図

1. 溝

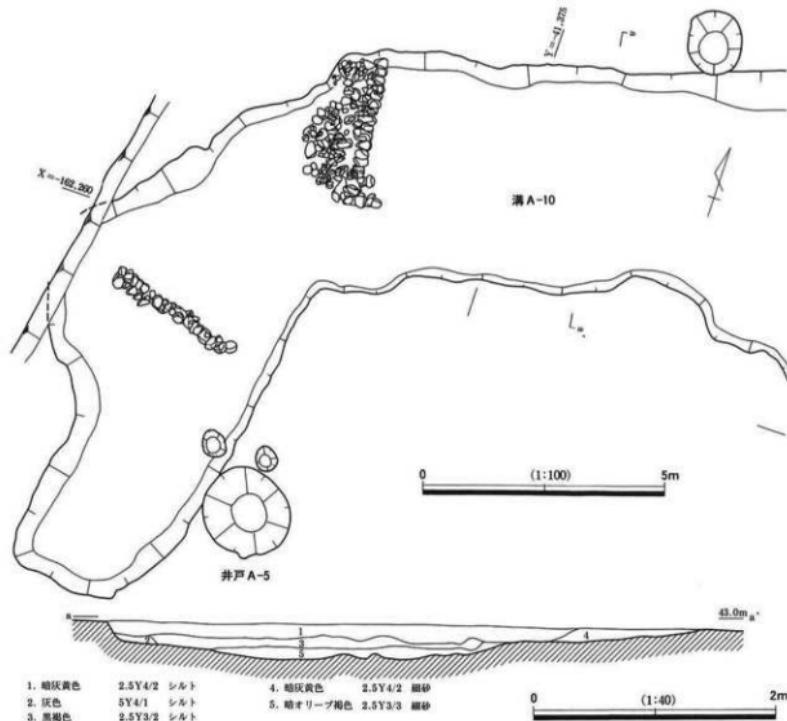
溝は調査区の南東部と北東部で検出されたほか、北部を東西方向に横断する溝もみられる。いずれも区画溝と考えられるが、関連性は認められない。

(1) 溝A-10 (図I-38,39、写I-9-1,2)

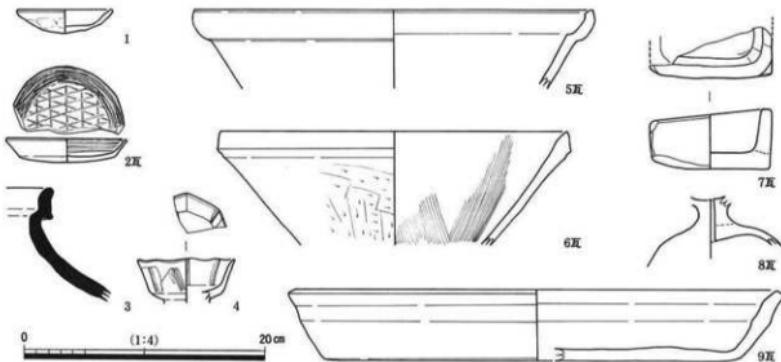
調査区南東部で検出された。上部は削平されており、底部のみの検出である。ほぼ南北方向に走り、途中から東へ約60°傾く溝で、調査区外へ延びるが、道をはさんで隣のA地区東部では検出されていない。現状で幅3~5m、深さ約0.3mを測り、底部はほぼ平坦である。形状から、水を流す水路というよりも区画を示す溝と考えができる。

検出された部分での埋土は2層に分かれ、上層は暗灰黄色シルトと黒褐色シルトが混在しており、下層は暗オリーブ褐色細砂を基本とする細砂層で、粘性がある。溝全体では粘土の堆積があまりないことから、A地区東部でみられた区画溝とは様相が異なる。

溝の屈曲部分で、石組が2ヶ所検出された。いずれも人頭大の礫や平瓦を用いており、溝を横断するかたちで直線状に並んでいる。底部のみの検出であるため、本来の形状ははっきりしない。この石組の



図I-39 A地区西部 溝A-10平面・断面図



図I-40 A地区西部 溝A-10出土土器

性格は不明であるが、石組の間の部分がやや深くなっている。特にこの部分の底部に粘土が多く堆積していたことから、溝を仕切って、この部分に水を溜めていた可能性がある。

内側にあたる溝の南側では、井戸や柱穴が検出された程度で、溝A-10と関連があると思われる遺構はみられない。また、同じ時期の遺構はほとんどない。建物などは復原できなかったが、調査区域外におよぶ屋敷地などは存在する可能性がある。以前に行われた、調査区の南側における大阪府教育委員会の調査で、多くの柱穴や土坑が検出されていることから、溝A-10の南側に広がる建物を区画する溝と考えることもできる。

A地区東部とA地区西部を区切る道は、下高野街道と呼ばれ、中・近世の主要街道の一つであったことから、溝A-10は街道沿いに拡がる集落を区画していたものと推測することもできる。

遺物は、土師器小皿・羽釜・甕や瓦質土器、陶磁器、瓦などが出土している（図I-40）。瓦質土器には、羽釜や擂鉢、鍋などの調理具のほか、火鉢や香炉、火灯などの特殊品もみられる。陶磁器では、常滑焼甕の破片や白磁稜杯などがある。これらは石組付近を中心としてまとまって検出されており、東部ではあまりみられない。土器類で形を復元できるものは少なく、瓦類も平瓦が中心で軒瓦などはほとんどみられない。時期は14世紀末から15世紀頃と考えられる。

（2）溝A-12（図I-38,41,49、写I-9-3）

土坑群の北端に位置しており、ほぼ東西方向に走る溝である。土坑A-108・土坑A-113・土坑A-114と重複している。東部は調査区外へ延びるが、隣のA地区東部では検出されていない。調査区中央部を南北に走る現代の水路の西側でも、井戸A-4に切られている可能性はあるが、溝の西部もはっきりしておらず、全体の形状や規模は不明である。確認された部分で長さ約12.1mを測り、あまり東西方向に延びない溝であることから、水路というよりも区画を示す溝と考えられる。現状で、幅約2.2m、深さ約0.3mを測り、底面は西に向かってやや下がっている。

埋土には全体に焼土が含まれているが、大きく2層に分けることができ、上層は灰色シルトが主体で、にぶい黄褐色系のシルトが混在する。下層は粘土を含む細砂層で、灰黄褐色細砂に黄灰色系粘土などが混在する。人為的に埋められた様相を呈しており、特に上層から炉壁片やスラグが多量に出土している。下層からも炉壁片やスラグが検出されており、自然堆積層はほとんど確認できない。ただ、炉壁片やス

ラグの量に比べて、鋳型はほとんど出土していない。これらの炉壁片やスラグは金属生産に伴うものと考えられ、付近に工房などが存在したことをあらわしている。

遺物は、土師器羽釜・小皿、瓦器椀・小皿、瓦質羽釜・擂鉢、須恵器こね鉢、常滑こね鉢などが出土している（図I-42-1~4）。破片が多いため、形を復元できるものは少なく、瓦器椀・小皿などが復元された程度である。これらの遺物は、12世紀代のものと考えられる。

（3）溝A-15（図I-38）

調査区のほぼ中央部に位置する。東部は現代の水路と重複していることや、西部は攪乱により破壊されているため、全体の規模は不明である。現状で長さ4.7m、幅1.9m、深さ0.2mを測る。ほぼ中央部の底面で、土坑A-143が検出されている。

遺物は、土師器羽釜、瓦器椀・小皿、須恵器こね鉢などが出土している。

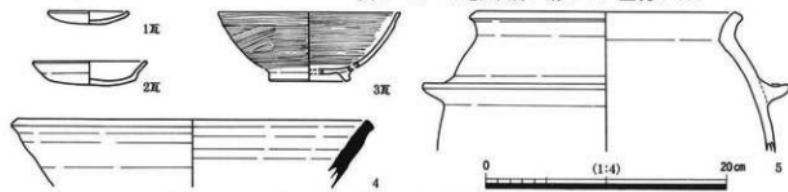
（4）溝A-17（図I-38、写I-9-5）

調査区北部に位置しており、ほぼ東西方向に走る溝である。現代の水路の東側では検出されていないため、土坑群との関係は不明である。また、かなり削平をうけているため、現状で深さ0.3mほどが確認されたのみである。

遺物は、土師器羽釜・小皿、瓦器椀などが出土している。形を復元できるものはほとんどないが、12世紀代のものと考えられる（図I-42-5）。



図I-41 A地区西部 溝A-12・土坑A-114



図I-42 A地区西部 溝A-12(1~4)・溝A-17(5)出土土器

2. 土坑

土坑は、ほぼ全域で検出されているが、調査区東側には土坑群が密集した部分があり、狭い範囲内で何度も土坑が掘削されている。他の土坑は関連性があまり認められず、井戸と考えられる土坑も多くみられる。時期差はあまりなく、A地区東部にくらべて比較的まとまっている。

(1) 土坑A-101(図I-38,43、写I-10-1)

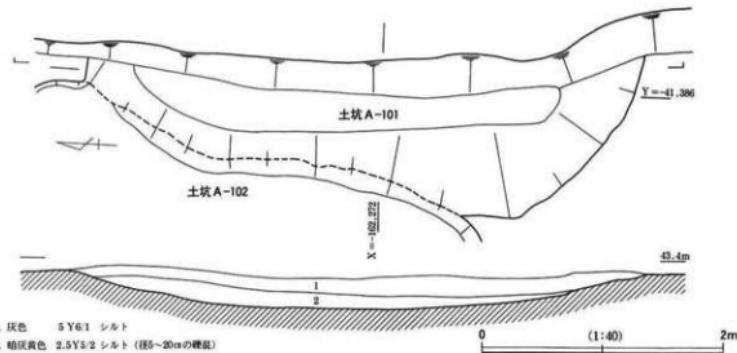
調査区南端の中央部分で検出された。東半部は現在使われている水路の下になるため、西半部の調査のみを行った。全体に削平をうけているため、遺構の残存状況は悪く、底から0.3m程度の部分が残っているのみである。

平面形は南北方向に長い橢円形を呈しており、水路の東側では検出されていないことから、長径4.6m、短径1.3m以内の規模になると思われる。残存部の埋土は大きく2層に分かれ、上層は灰色シルト、下層は暗灰黄色シルトである。西側で土坑A-102(写I-10-1)と重複しており、切り合い関係から土坑A-101のほうが新しい。

出土遺物は軒丸瓦や丸瓦・平瓦などの瓦類が多く、土師器や瓦器などの土器類は破片のみで、形を復元できるものはない。主に瓦類は下層からまとめて検出されており、土器類は残存部の上層から数点みられる程度である。現在使われている水路は、コンクリート製のU字溝で造られており、遺構面まで達していないため、水路の下に瓦類が残存していることがわかる。明確な時期を示す遺物は出土しておらず、土坑A-102からも土器類の破片がみられるのみである。

後述する唇の鉄型が出土した位置付近で検出された遺構であることから、当初は鋳造作業に関連するものと期待されたが、遺物の量は少なく、性格ははっきりしない。

土坑A-101の底からわずかに焼土や炭化物が検出されたため、火を使った作業が行われていたことが推測される。しかし、付近で他に焼土を含むピットや土坑は見つかっておらず、炉壁や鉄型片、スラグなども出土していないことから、この場で鋳造作業などが行われた可能性は少ないようである。ただ、土坑A-101付近でピットが検出されており、建物が建てられていたことが推測できることから、調査区南西部は作業小屋や住居などが建てられていた地域の一部ではあるが、実際に火を使って作業をしていた部分は他にあるものと考えられる。



図I-43 A地区西部 土坑A-101平面・断面図

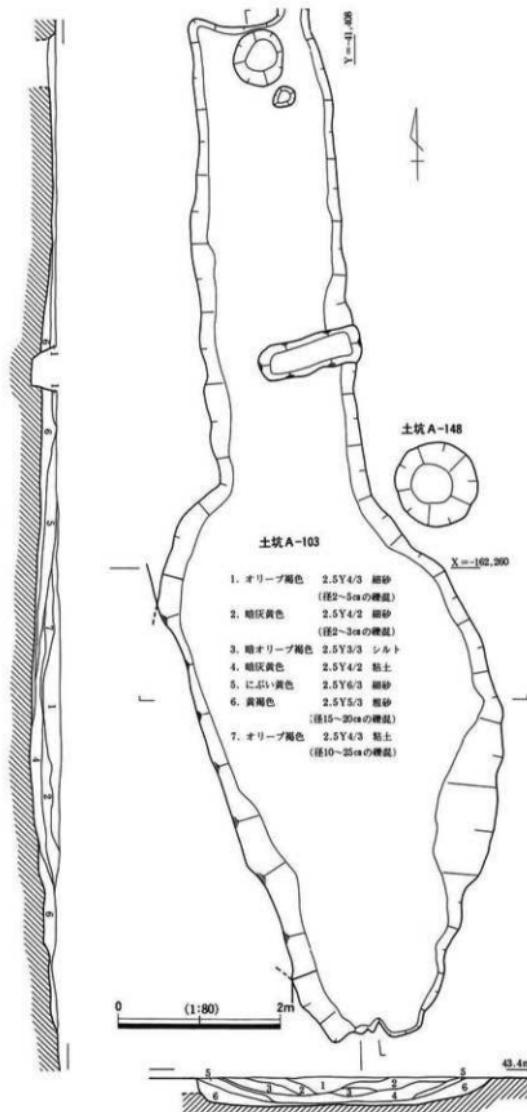
(2) 土坑A-103 (図I-38,
44、写I-10-2~4)

調査区西端部で検出された、瓦溜め土坑である。南北に長く、楕円形と長方形のふたつの土坑が重複した形状を呈しているが、埋土による差ははっきりしないため、ひとつの土坑と考えることができる。

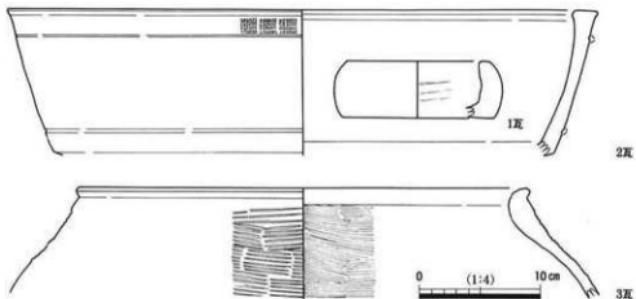
南西部分の一部が調査区外に延びているが、検出面での規模は長辺17m、短辺5mで、楕円形の部分は南北方向約9mを測る。上部は削平をうけており、現状で深さは0.1~0.4mで、楕円形部分がやや深く、底はゆるやかに下がるのに対して、長方形部分は深さ0.1m程度で、底はほぼ平坦である。

埋土は層状をなしているが、人為的に埋められたものと考えられる。上層は暗灰黄色細砂を中心とする細砂層で、下層には黄褐色粗砂が堆積している。また、暗灰黄色粘土層もみられ、ある時期に水が溜まっていたことがわかる。特に下層からは、軒丸瓦や軒平瓦・平瓦・丸瓦・鬼瓦などの瓦類が、疊と共にまとまって検出されており、瓦の廃棄土坑の様相を呈している。

A地区西部では、これらの瓦類と直接関連があると思われる遺構は検出されていない。また、瓦類を多く出土する溝や土坑もあまりみられない。ただ、後述するB地区東部やB地区東部の北側で以前行われた大阪府教育



図I-44 A地区西部 土坑A-103平面・断面図



図I-45 A地区西部 土坑A-103出土土器

委員会の発掘調査で、同様の瓦溜め土坑が數基検出されていることから、土坑A-103はA地区西部からB地区東部にかけて広がる遺構群の一部と考えることができる。

遺物は、多くの瓦類のほか、土師器羽釜・小皿・甕、瓦質羽釜・甕・擂鉢・火鉢、備前擂鉢、常滑こね鉢、青磁などが出土している。瓦類にくらべて、土器類の出土量は少ない。土器類はいずれも細かい破片が多く、復元できるものではありませんが、瓦質火鉢・香炉・甕が図示できた(図I-45)。遺物の時期は幅があるが、14~15世紀のものと考えられる。

(3) 土坑A-110(図I-38,46,49、写I-11-5)

東部土坑群の南側で検出され、土坑群からはやや離れている。東部土坑群の土坑とは様相が異なって

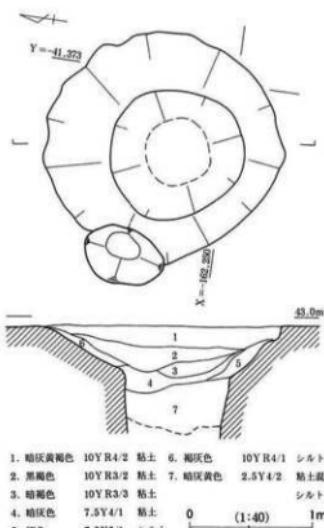
おり、井戸と考えられる。検出面では、径2.0mのほぼ円形を呈しているが、下がるにつれて擂鉢状に径が狭くなり、約0.4m下がったところから径0.8mとなり、垂直に下がる。湧水のため約1m掘り下げたのみで、底までは達していない。

埋土は大きく2層に分かれる。上層は人為的に埋められたもので、黒褐色粘土や暗灰色粘土などが混在している。下層は自然堆積と考えられ、暗灰黄色シルト層が主体で粘土を含む。

下層までは掘りきっていないことから、遺物は上層出土のものが多い。土師器小皿、瓦器碗・小皿、青磁碗、瓦などが出土している。

土師器小皿は完形であるが、表面磨滅が著しく、調整は不明である。瓦器碗は、いずれも底部に平行暗文を施し、小皿はラセン状暗文を施している。青磁碗は龍泉窯系のもので、高台部を欠損している。口縁部が輪花になっており、外縁無紋で、内面に飛雲紋が施されている。

遺物の時期は、13世紀後半と考えられる(図I-48-1~6)。



図I-46 A地区西部 土坑A-110

(4) 土坑A-113(図I-38,47,49、写I-11-3,4,5)

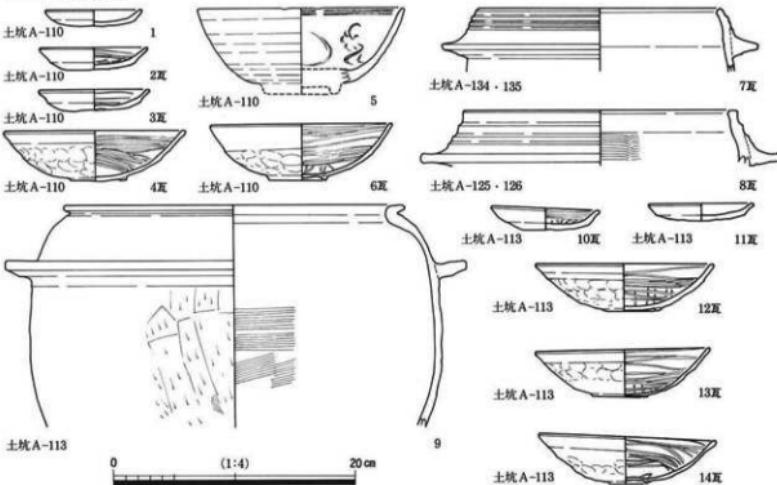
調査区北東端部で検出された。溝A-12と重複しているが、前後関係ははっきりせず、調査時の検出面は溝A-12の底面である。現状で平面形は、径約1.6mの円形を呈しており、やや狭くなりながらほぼ垂直に下がり、深さは約2.0mを測る。井戸と考えられる。

埋土は大きく2層に分かれる。上層は人為的に埋められており、灰黄褐色細砂や褐灰色細砂などが混在している。下層は自然堆積の黒褐色シルトで、粗砂を含む。

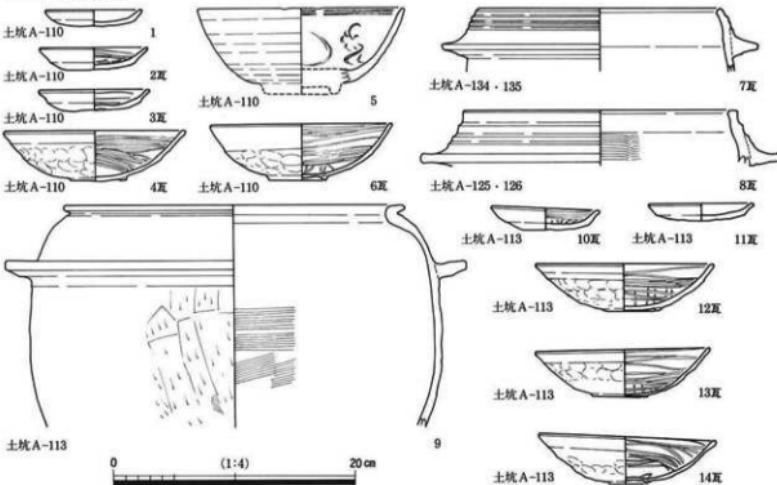
遺物は、上層で径20cm程度の砾とともに、廃棄された状態で土器が多く検出された。まとまって出土しており、本来はもっと多くの土器が存在したものと考えられる。

出土遺物には、土器師羽釜・小皿、瓦器椀・小皿などがある。瓦器椀には完形品が2点あり、いずれも底部内面に平行暗紋を施しているほか、もう1点には鋸齒状暗紋を施している。土器師羽釜は大型で、口縁部が内湾し、口縁端部が外方向に伸び、上端が面をもつ。鉢はわずかに斜め上方に伸びる。時期は、13世紀後半と考えられる(図I-48-9~14)。

出土遺物の検討から、土坑A-113は溝A-12より新しいことが判明した。



図I-47 A地区西部 土坑A-113



図I-48 A地区西部 土坑出土土器

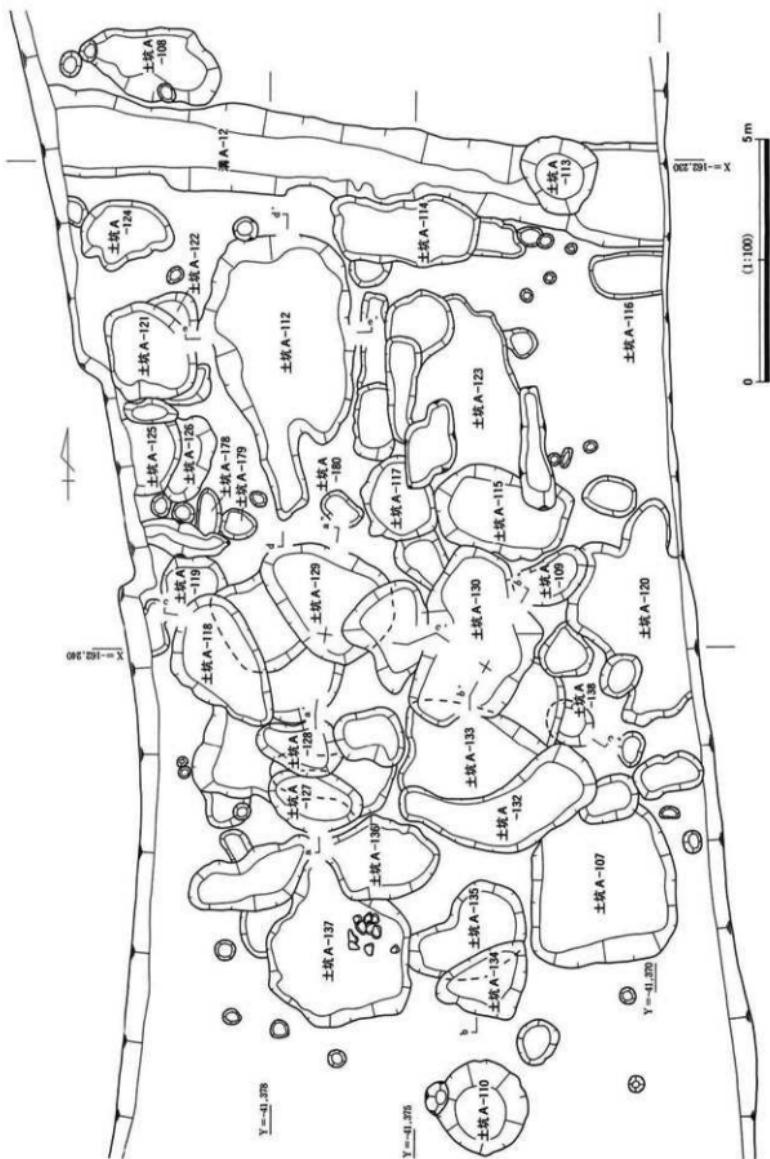


图 I - 49 A 地区西部 東部土坑群平面圖

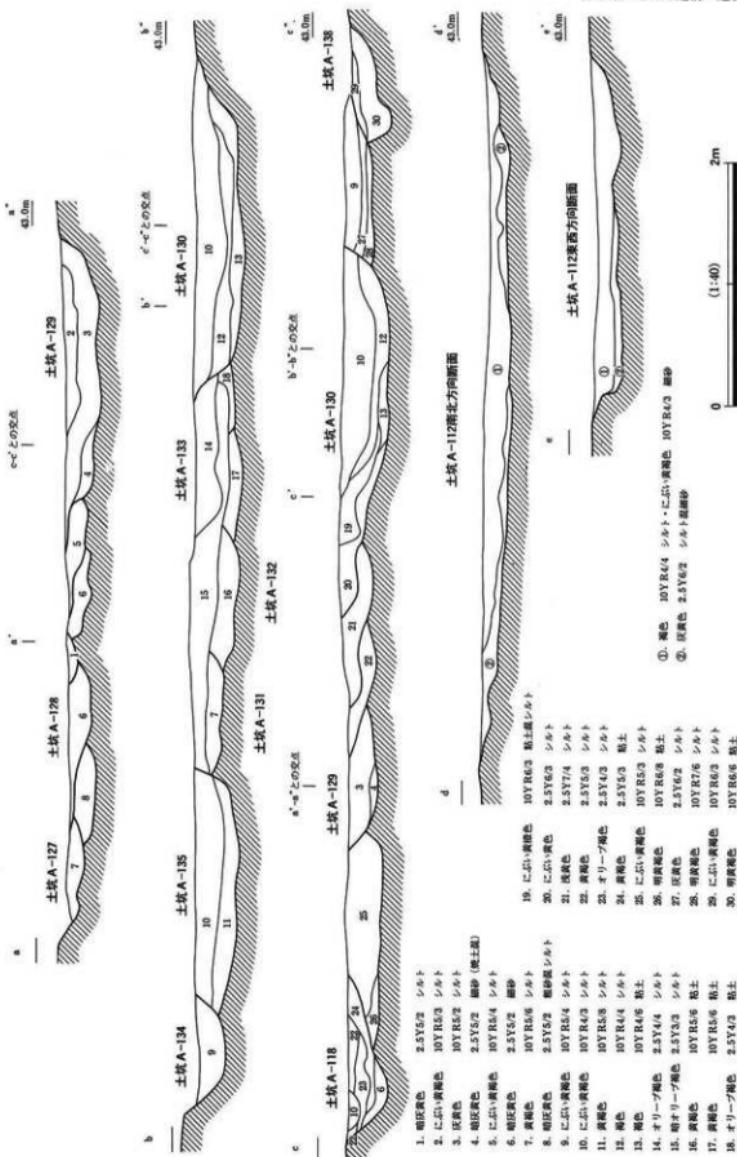


図 I - 50 A地区西部 東部土坑群断面図

(5) 東部土坑群（図I-38,49,50、写I-11-5）

調査区のはば中央部を南北方向に走る現代の水路の東側で、密集した土坑群が検出された。南北25m、東西10mの範囲に30基余の土坑が重なりあっており、何度も掘削されたことによって、地山面が全体に低くなっている。そのため、後世の削平がおよばず、包含層が比較的良好に残っている。包含層からは、全体に炭化物や焼土、炉壁片、スラグなどが多くみられるほか、瓦器碗や土師器皿、羽釜などの破片が出土しているが、形を復元できるものはない。

包含層の下から検出された土坑群の埋土は、基本的にあまり差がなく、遺構面がはっきりしないため、土坑を平面形でとらえることは困難である。さらに、比較的短期間に重複して掘削されたものと考えられ、各土坑間の関連性をみつけることはできない。現地調査においても、土坑群の密集状況が複雑であることがわかったため、変則的ではあるが、なるべく多くの土坑をつなぐ土層観察用のアゼを残し、断面による土坑の重複関係をとらえる方法をとった。このため、土坑群の断面は直線的ではなく、屈曲したものとなっている。かろうじてこの断面図により、土坑の重複関係を知る程度であり、実際にはもっと多くの土坑が、重複して掘削されていたものと思われる。また、断面でのみ判断できる土坑も存在することから、平面形が必ずしも正確なものとして認定できていない。土坑の規模や形状は一様ではなく、規則性などは認められない。

ただ、土坑群全体の検出状況をみると、これらの土坑群を掘削する区域は、何らかの制約をうけているよう、北の溝A-12から南の土坑A-110までの間に密集している。A地区東部や現代の水路の西側では、このような土坑群はまったく検出されておらず、土坑群の範囲は限定されている。特に調査区南部では、溝A-10を境に遺構が急激に減り、井戸や敷基の土坑、ピットが検出されているにすぎない。また、調査区の南側の大坂府教育委員会が調査した地区でも、井戸とピットがみられるのみで、焼土や炭化物などが多く出土した土坑群の部分とは遺構の様相が異なる。

土坑群から出土した土器類はわずかで、形を復元できるものは少なく、各土坑の新旧関係を判断することは困難である。出土遺物は、土師器小皿・羽釜、瓦器碗・小皿、瓦質羽釜・甕・擂鉢、備前擂鉢、常滑窯などである。ただ、出土遺物の検討により、土坑群は13世紀後半～14世紀前半を中心とする時期のものと考えられ、あまり時期差のある遺物はみられない。比較的短期間に、限られた地域で繰り返し掘削されたもので、埋土は何度も移動しているようである。

いずれの土坑の埋土からも炭化物や炉壁片、スラグなどが検出されており、廃棄坑の様相を呈している。しかし、土坑群からの炉壁片やスラグの出土量は、溝A-12の出土量に比べて少ない。また、鋳型もほとんど検出されていない。炉壁も細かい破片のため、溶解炉を復元することは困難であり、ふいごの羽口なども確認できなかった。

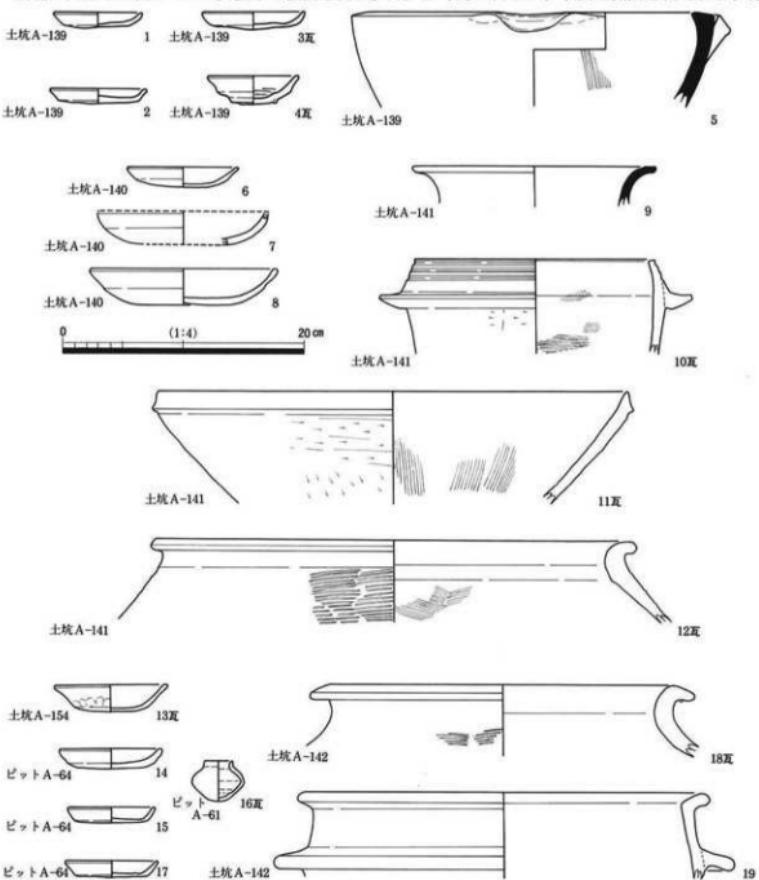
土坑群の性格ははっきりしないが、粘土取り坑などの可能性があるものと思われる。この部分の地山は粘土質であり、何度も掘り返されていることから、鋳型や炉壁などの材料として採取されたことが推測される。土坑群は粘土採取後に、溝A-12のように炉壁片やスラグなどを廃棄したので、さらに、それらの遺物が埋土の移動によって分散してしまったともいえる。これらの遺構群は、13世紀後半～14世紀前半を中心とした中世の鋳造作業にともなうものと考えられるが、調査区内では工房跡などはみられない。ただ、炉壁片やスラグなどがかなり集中して検出されていることから、近接して中世の鋳造作業に関係する工房跡や作業場の遺構が存在することは確かであろう。

(6) 土坑A-143(図I-38,52、写I-9-4)

現代の水路の西側の調査区中央部分で検出された。溝A-15と重複しており、溝のほうが新しい。溝A-15の底面で検出されたため、平面形ははっきりしないが、長径1.7m、短径1.2mの梢円形を呈すると思われる。上部は削平をうけているため、底の部分が残存していたのみで、現状で深さは約0.3mを測る。埋土は暗灰黄色シルトで、焼土や径10cm程度の礫を含む。遺物は、土師器羽釜・小皿、瓦器碗などが底面から出土しており、時期は13世紀初頭頃のものと考えられる(図I-53)。

(7) 土坑A-148(図I-38,44、写I-10-2)

調査区西部の土坑A-103に隣接して検出された。井戸と考えられるが、単独で検出されており、付近

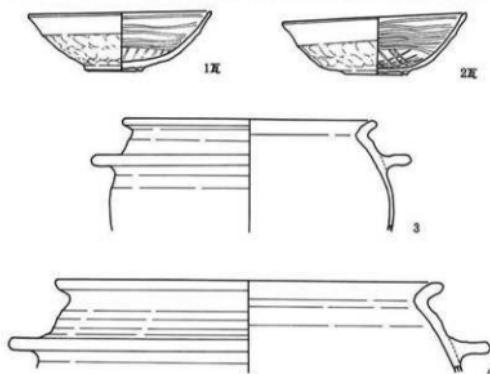
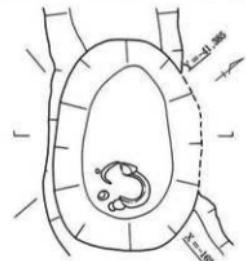


図I-51 A地区西部 土坑・ピット出土土器

には建物跡などはみられない。北側に後述する井戸A-6があり、時期はほぼ同時期であることから、近接した2つの井戸を使用していたことがわかる。検出面で平面形は、長径1.4m、短径1.2mの椭円形を呈しており、やや狭くなりながらほぼ垂直に下がり、深さは3.2mを測る。

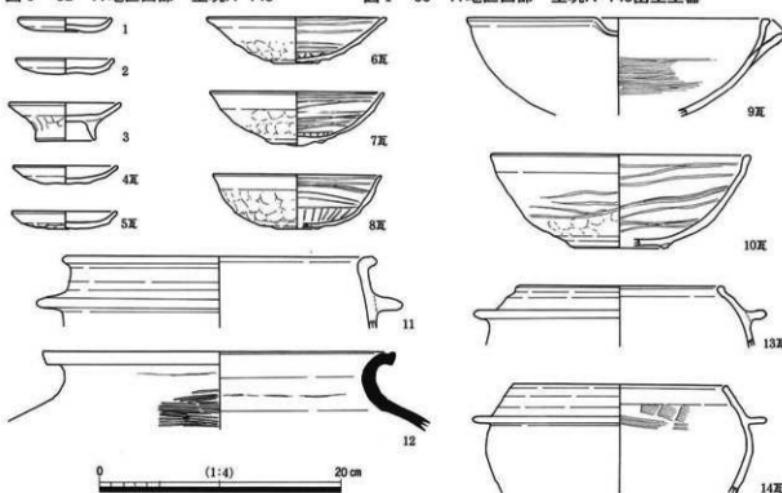
埋土は2層に分かれる。上層は人為的に埋められており、にぶい黄褐色シルトが基本で径2~20cmの礫や粗砂を多く含む。下層は自然堆積の灰色粘土である。

遺物は主に下層から、土師器小皿・羽釜・瓦器椀・小皿・瓦質甕・鉢・須恵器甕・常滑甕、瓦などが



図I-52 A地区西部 土坑A-143

図I-53 A地区西部 土坑A-143出土土器



図I-54 A地区西部 土坑A-148出土土器

多く出土しており、時期は13世紀末から14世紀初頭にかけてのものと考えられる（図I-54）。

(8) 土坑A-173（図I-38,55、写I-12-2）

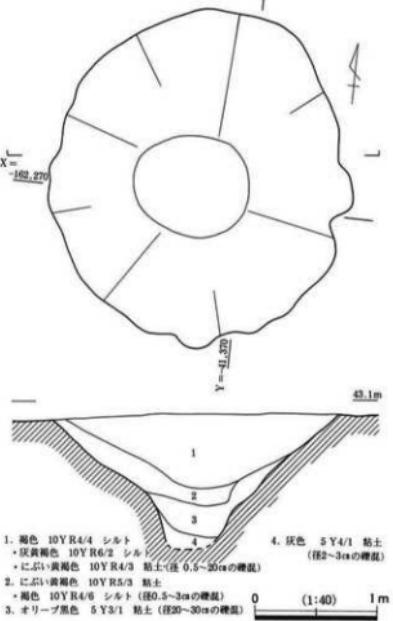
調査区南東端部で検出された。井戸とも考えられるが、底が比較的浅く、廃棄坑の可能性もある。調査区内では付近にピットはほとんどみられないため、調査区南側の集落にともなう遺構と考えることができる。平面形は長径約2.7m、短径約2.5mの梢円形を呈しており、擂鉢状に約0.8m下がったところから長径約1m、短径約0.8mの梢円形となり、垂直に下がる。

埋土は大きく2層に分かれ、上層は人為的に埋められており、にぶい黄褐色粘土や褐色シルトが混在している。下層は自然堆積の灰色粘土が基本で、径2~3cmの礫を含む。

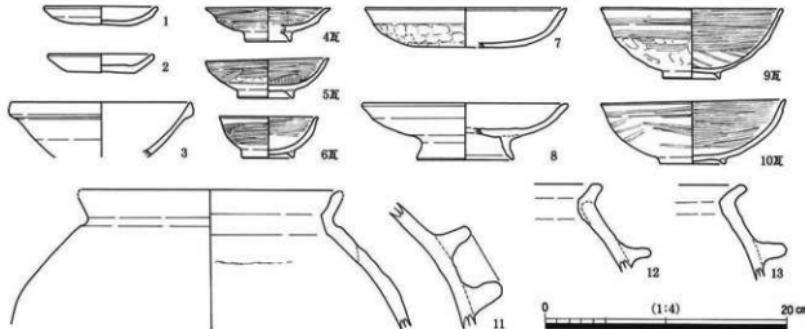
遺物は主に上層から出土したもので、土師器皿・小皿・甕・羽釜、瓦器椀・小皿、白磁碗、瓦などがある（図I-56）。

瓦器椀には、小型のものもあり、いずれも底部内面に平行暗文を施している。土師器皿には、台付きのものがあり、小皿には、底部外面に糸切り痕を残すものがある。土師器甕は在地のものと思われ、肩部に環状の把手が付くと考えられる。土師器羽釜は小破片のもので、内湾する口縁部の端部が短く外反する。白磁碗は小破片で、エ縁状口縁部をもつ。

ほとんどの遺物が、12世紀末に属するが、土師器小皿1点のみ（図I-56-2）が13世紀後半に属すると思われる。



図I-55 A地区西部 土坑A-173平面・断面図



図I-56 A地区西部 土坑A-173出土土器

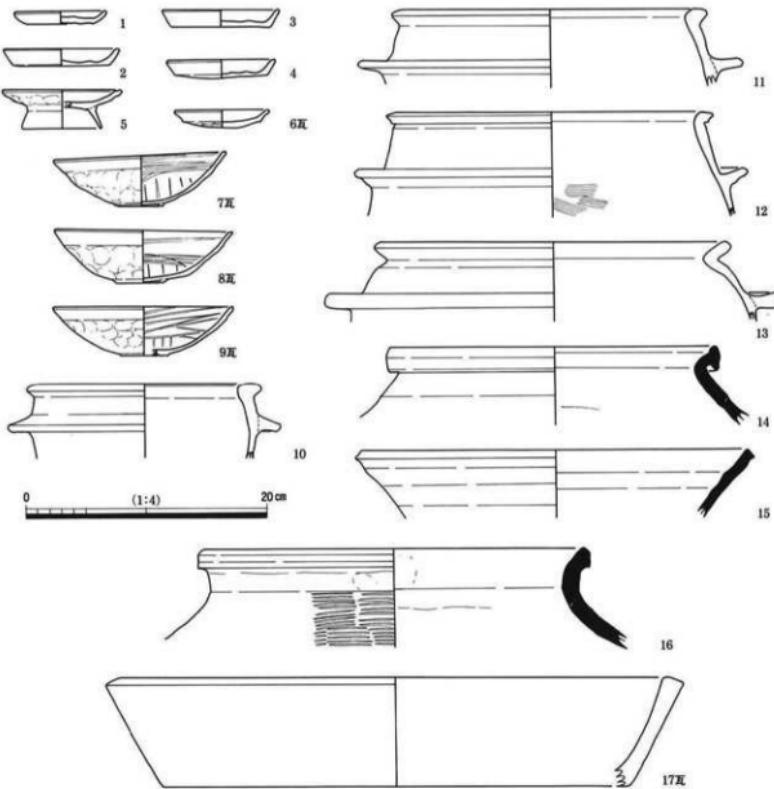
3. 井戸

井戸の可能性が高いと考えられる土坑も含めて、ほぼ調査区全域で多く検出されており、短期間に多くの井戸が掘削されたことがわかる。

(1) 井戸A-4 (図I-38)

調査区北部の現代水路の西側で検出された、素掘りの井戸である。検出面で径約3.3mのほぼ円形を呈するが、調査時に湧水により崩壊したため、正確な規模などは不明である。ほぼ全面にわたって崩壊したため、溝A-12との重複関係もはっきりしない。

遺物は、土師器羽釜・小皿、瓦器椀・小皿、瓦質羽釜・甕・鉢、須恵器甕・こね鉢、常滑甕、瓦などが多く出土している(図I-57)。崩壊のため、層別に分けての検出ができなかったことから、出土遺物の時期差がある程度認められる。遺物の検討により、12世紀中頃～14世紀代の時期が考えられるが、井戸の存続時期は13世紀代と推測され、溝A-12より新しいことが判明した。



図I-57 A地区西部 井戸A-4出土土器

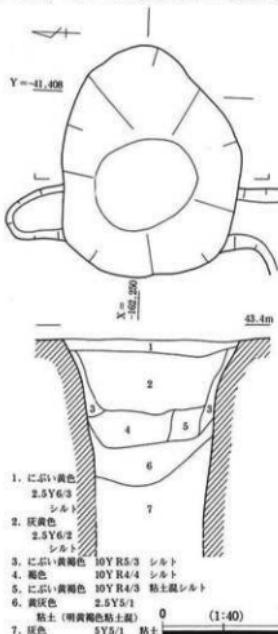
(2) 井戸A-5 (図I-38,39,58、写I-9-1,12-3)

調査区南部で検出された、素掘りの井戸である。検出面では、長径1.8m、短径1.6mの楕円形を呈しているが、播鉢状に約0.6m下がったところから、径約1mの円形となり、壁は垂直に下がる。湧水が多いため、約1.2m掘り下げたのみで調査を打ち切った。

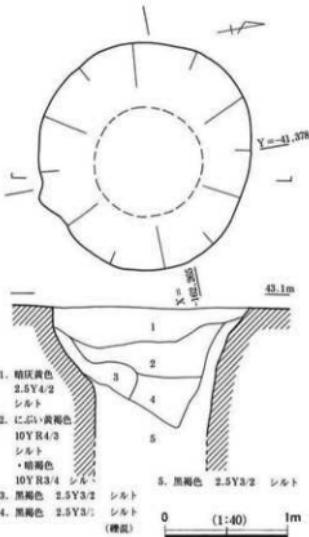
確認できた埋土は2層に分かれ、上層は人為的に埋められた様相を呈しており、暗灰黄色シルトやぶい黄褐色シルトなどが混在する。下層は自然堆積の黒褐色シルトが基本で、礫や粘土を含む。

遺物は主に下層から、瓦器椀・小皿、土師器羽釜・小皿、陶磁器などが出土している。高台は粘土紐を接合しただけの形骸化したものになっているが、瓦器椀の中で高台をもたないものはみられなかった(図I-60-1~11)。

遺物の時期は14世紀中頃のものと考えられ、6Aトレノの井戸の中では最も新しい時期のものといえる。



図I-59 A地区西部 井戸A-6



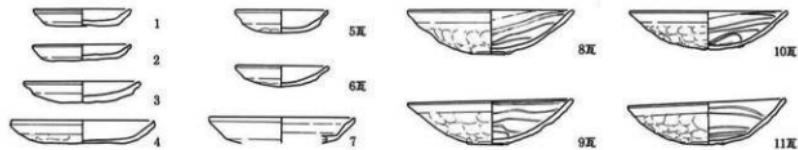
図I-58 A地区西部 井戸A-5

(3) 井戸A-6 (図I-38,59、写I-12-4)

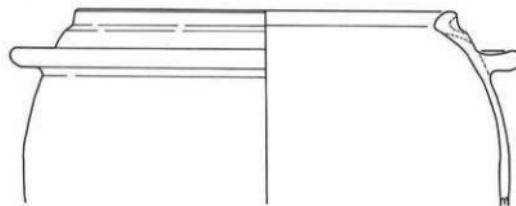
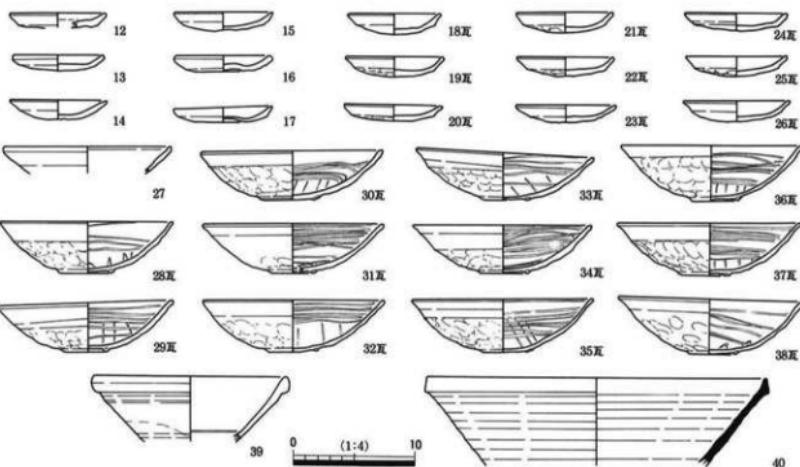
調査区北西部で検出された、素掘りの井戸である。検出面では、長径1.9m、短径1.5mの楕円形を呈しているが、約0.6m下がったところから径約1mの円形となり、ほぼ垂直に下がる。深さは2m以上となるが、湧水はなかった。

埋土は大きく2層に分かれ、上層はにぶい黄色シルトや褐色シルトなどが混在しており、人為的に埋められたものと考えられる。下層は自然堆積の灰色粘土で、有機物が多く残存している。

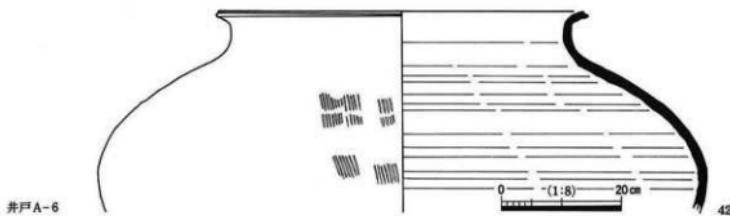
遺物は主に下層から、廃棄された状況で多く検出された。瓦器椀・小皿、土師器小皿、陶磁器などのほか、小型鉄瓶や曲物なども出土している(図I-60,61)。遺物の時期は14世紀初頭のものと考えられる。小型鉄瓶は、胴部最大径8.3cm、口径4.6cm、高さ5.8cmを測り、かなり小型のものといえる。胴部下半部に、熱をうけて溶解した部分があるが、ほぼ完形である。蓋や把手は検出されていないが、把手をつなぐ穴もしっかりとおり、丁寧に作られている。胴部上半部に花紋が配されており、下半部にもはっきりしないが、紋様が施されている。



井戸A-5



41



井戸A-6

図I-60 A地区西部 井戸A-5(1~11)・井戸A-6(12~42)出土土器 ※42のみ1/8

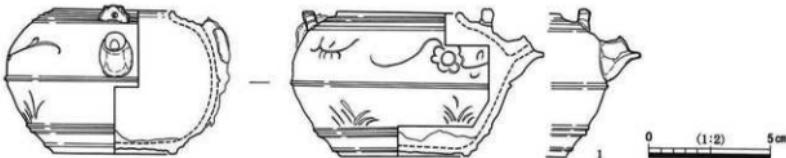


図 I-61 A地区西部 井戸A-6出土鉄瓶

4. 磐の鋳型 (図 I-62、写 I-60-1)

調査区南端中央部の土坑A-101付近で検出された。出土位置は削平をうけている部分で、厚い耕作土の下に薄い床土層と薄い包含層が残っている程度である。調査初期の包含層を除去している際に偶然見つけたもので、遺構に伴うものかどうかははっきりしない。包含層からの出土遺物はきわめて少ないと認められ、明確な時期は不明である。また、付近から鋳型片や金属加工に関する遺物の出土もないことから、後世の混入の可能性もある。

鋳型はかなり丁寧に作られており、約1/3が残存している。残存部は縦8cm、横6.5cm、厚さ約3.5cmを測る。裏面には指ナデや指押さえによる整形が丁寧に施されており、胎土は緻密な細砂混じり粘土である。鋳型は全体に淡赤褐色を呈しており、上げ真土は明灰色を呈する。縁の部分はしっかりしており、紋様はみられない。鉢の部分も残っているが、内部の磨滅が著しく、孔部は明確ではない。比較的残存状況がよく、鋳型を組み合わせる時の合わせ目と思われる刻みまで認められる。鋳型により磐を推定復元すると横幅約14cm、縦幅約4cmになり、かなり小さなものといえる。推定復元した磐の形状から判断すると、紋様のない片面磐であり、平安時代末のものと考えられる。

5. 小結

A地区西部では、検出された遺構・遺物のほとんどが12世紀末～14世紀を中心としたものである。A地区東部とは時期的にずれている。近世以降は耕作地となったようで、遺構はみられず、遺物の出土量も少ない。

調査区内では建物跡は検出されなかったが、調査区外の南側で多くの柱穴が見つかっていることから、集落は調査区外の南側に拡がることが予測される。また、東部土坑群は、炉壁片やスラグが多く出土していることから、鋳造作業に伴う遺構であることは確実である。さらに、調査区内の狭い範囲で、多くの井戸が掘削されていることも特徴的である。

炉壁片やスラグなどが出土する遺構は13世紀を中心とするものであり、この地で鋳造作業が行われていた時期は、あまり長く続かなかったことがわかる。工房跡などは検出されていないが、この地区が北余部集落の北端部に位置することや、南北に走る下高野街道に面していることなどから、付近にまとまつた鋳造関連遺構が存在することが考えられる。

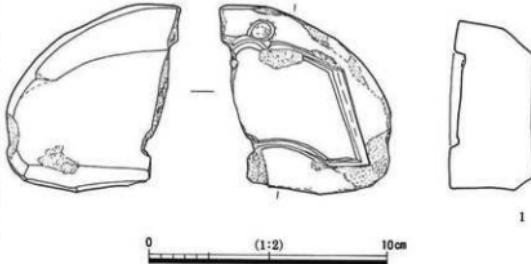


図 I-62 A地区西部 包含層出土磐鋳型

第3節 B地区東部（1B～3Bトレンチ）

全体に比較的平坦な地形を呈しているが、調査区西端部には小規模な南北方向の谷状地形が認められる。現状では、この谷状地形を利用した水路が使われている。

調査区東半部では、地山に達するほどの大規模な現代の擾乱がみられるため、包含層は削平をうけており、遺構の保存状況は良好ではなかった。それに対し、西半部では包含層のほとんどが削平をうけていたが、地山に達するほどの大きな擾乱ではなく、遺構の保存状況は比較的良好であった。出土遺物から、12世紀末～16世紀頃まで遺構が存続したものと思われる。

検出された遺構は、ピット・溝・土坑・井戸などで、ほぼ調査区全体に広がっている。検出状況から、ある程度のまとまりをもった遺構群と考えられる。遺構群は、東半部と西半部の2つに大きく分けることができる。

東半部の北側では、地山面まで達する大規模な削平が行われており、遺物がほとんど出土していないため、遺構の時期ははっきりしない。ピットがみられることから、掘立柱建物群の存在が推定されるが、建物の復原は困難であった。しかし、道路をはさんで東側に位置する、A地区西部のピット群と検出状況が似ており、同じ集落のものと考えることができる。また、南側の瓦や土器類が集中して検出された部分は、大規模な削平をうけているため、遺構の形状は詳しくはわからないが、西半部で検出された溝と同様のものが数条みられ、建物を区画する溝や園池などが考えられる。溝の中からは多量の瓦類や土器が出土したほか、人頭大の礫を丁寧に並べた石組が検出された。

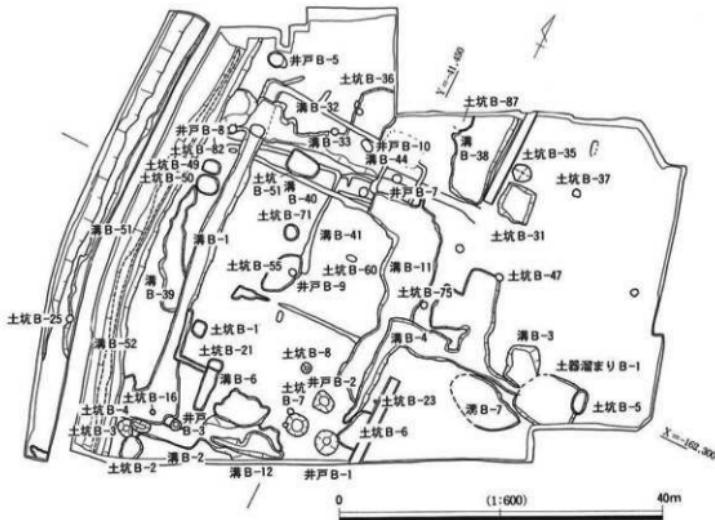


図 I - 63 B地区東部 中世遺構略図

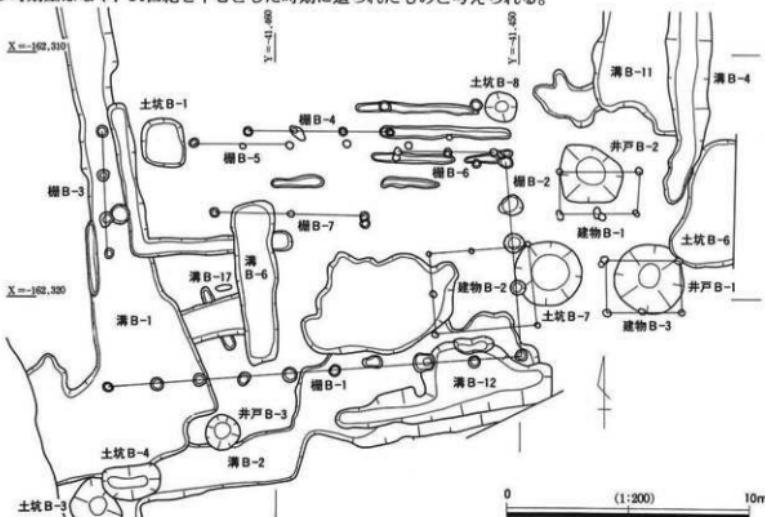
西半部では、東西20m、南北35mの方形区画の内部で、ピット群や土坑、井戸などがまとまって検出され、屋敷地の様相を呈している。ほぼ方位と一致する幅2~6mの溝でまわりを囲まれており、溝からは人頭大の礫と共に多量の瓦類や土器などが出土している。屋敷地内で建物の復原はできなかったが、寺院に関連する礎石建物や石組遺構が造られていた可能性がある。また、方形区画の北でも区画溝と考えられる溝が検出されていることから、やや時期差は認められるものの、屋敷地が複数存在していたことがわかる。

1. 建物・ピット群（図I-64、写I-13）

掘立柱建物の柱穴と考えられるピットは、ほぼ調査区全域に広がって検出された。大きく分けて東半部北側と西半部の方形区画内部の一群に分けられる。方形区画の北でもピット群が検出されたが、大規模な破壊を受けており、掘立柱建物や櫛の復原はできなかった。

東半部北側のピットに関しては、前述したように、大規模な削平をうけているため、かなり消滅したものもあることが推測され、掘立柱建物を復原することは困難であった。この部分のピット内からは、遺物がほとんど出土していないため、時期ははっきりしない。A地区西部で井戸が多くみられたのに対し、ここではほとんどみられない。なお、西半部の遺構群とは明確に区画されているため、別の遺構群と考えることができる。

西半部のピット群は、主に方形区画の内部に集中しており、ほぼ全域に広がっている。規模は大小様々であるが、ほぼ円形で直径約20~60cm程度のものがみられる。ピットの中には柱が沈むのを防ぐため、底に礫や瓦片などを敷いているものもみられる。また、埋土に焼土や炭化物が含まれているものがあり、火災などで消失した掘立柱建物もあったようである。柱穴から遺物はほとんど出土していないが、あまり時期差はなく、14世紀を中心とした時期に造られたものと考えられる。



図I-64 1B トレンチ建物・櫛略図

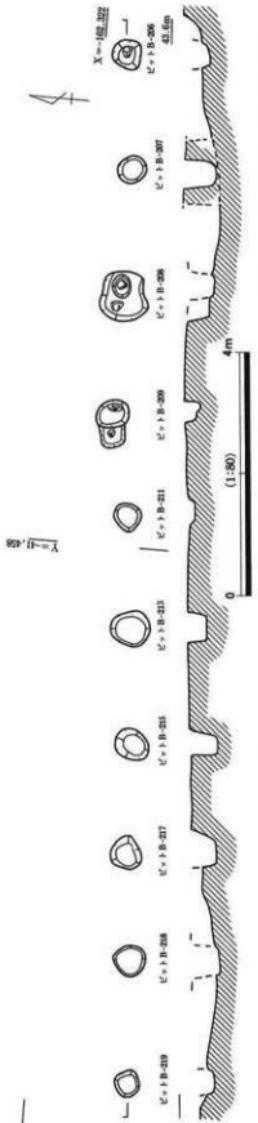


図 I - 65 B 地区東部 棚 B- 1

ピットは、区画内のはば全域に集中しているが、掘立柱建物の復原はかなり困難であり、南側でかうじて柵と推定できるものや小規模の掘立柱建物の復原にとどまる。柵と推定したものの中には、掘立柱建物の一部も含まれている可能性もある。柵や掘立柱建物の方向はほぼ方位と一致している。また、北側に比べ南側では区画溝があまりみられないことから、これらの柵の中には、建物を区画するものも含まれていると考えられる。

ピットが多いため、掘立柱建物の建て替えがかなり行われたことが推測され、多くの戦亂に巻き込まれて何度も破壊されたことがうかがわれる。また、北側の区画溝は何度も掘削されており、区画される範囲も時期によって異なっている。

(1) 柵

西半部南側では、四方を柵で囲まれた方形区画がみられ、南北約10m、東西17mの規模となる。区画の西側には南北に走る溝B- 1、南側には東西に走る溝B- 2・溝B- 12があり、さらに東部では井戸が検出されている。ただ、北側の柵は短く、方向が他の列とやや異なるため、別の時期のものとも考えられる。柵B- 1・柵B- 2は特に規模が大きく、調査区内で同規模の柵は検出されていないことから、これらの柵は区画溝と同様に区画をあらわしていたものと考えることができる。

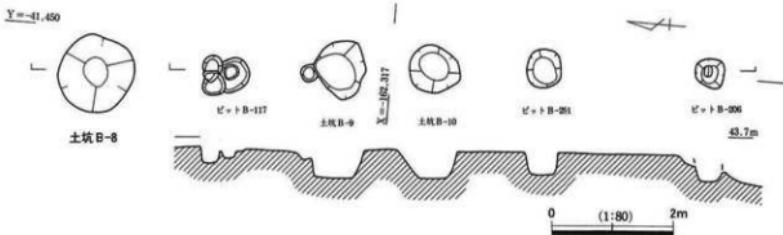
1) 柵B- 1 (図 I - 64, 65)

方位はN-85°-E、9間で長さ17.3m、柱間はほぼ等間隔で、約1.8mを測る。溝B- 1・溝B- 2・溝B- 12と重複しており、それより新しい。検出面は一定ではないが、柱穴はほぼ円形で径約39~64cm、深さ6~56cm前後である。柱穴から土器皿が出土している。時期は溝B- 1を切るために、15世紀代以降と考えられる。

2) 柵B- 2 (図 I - 64, 66)

方位はN-5°-W、4間で長さ7.9m、柱間は一定ではないが、北側3間は約1.7mを測る。しかし、南側の1間分は2.7mと広くなることから、出入口の可能性が推測される。柱穴は円形で、径約24~100cm、深さ10~56cmである。柱穴の中には、一辺15cmの正方形の柱痕がみられるものがあり、正方形の柱を使っていたことがわかる。柱穴から遺物は出土していない。

柵B- 2の時期ははっきりしないが、柵B- 1とほぼ直交しており、L字状を呈するため、関連のあるものと考えられる。ただ、ほかに同規模の柱穴が検出されなかったことから、大規模な掘立柱建物とは考えられず、区画を示すものということができる。柵B- 2の北側には、同じ柱間の間隔で土坑B- 8が位置しているが、直接の関



図I-66 B地区東部 棚B-2

連性は認められない。

(2) 建物 (図I-64)

柱穴と考えられるピットは多く検出されたが、掘立柱建物として復原できたものは、西半部南側で3棟にとどまる。規模は1間×2間や2間×2間程度のもので、柱穴も小さく、住居とは考えられず、作業小屋か小規模な倉庫といえる。建物B-1と建物B-3は、それぞれ井戸B-2と井戸B-1とほぼ重複しているが、前後関係ははっきりしないため、時期は確定できない。また、建物B-2も柱穴の規模がほかの建物と同様であることから、簡単な作業小屋のような建物と推測できる。重複関係から、建物B-2は土坑B-7より古い時期のものと考えられる。

西半部の方形区画の内部では、住居として使われた掘立柱建物の存在が推測されるが、復原には至らなかった。礫が多く検出されていることから、礫石建物の存在も考えられる。

東半部はA地区西部と一連の区域と考えられ、掘立柱建物の存在が推測されるが、ピットの検出が少ないため、復原には至らなかった。

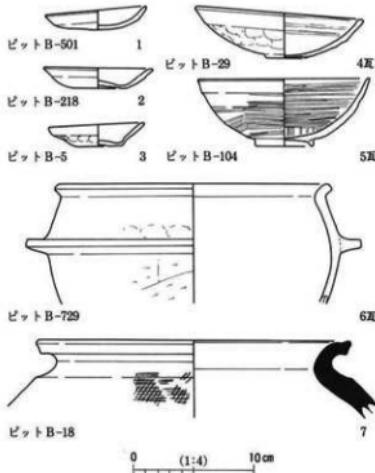
(3) ピット出土遺物 (図I-67、写I-61-1,2,7)

ピットから出土した遺物は全体に少なく、ほとんどが破片であるため、形を復元できたものは、図化したものにとどまる。

ほとんどが西半部南側から検出されたものである。土師器皿は、在地のもののほか、京都系もみられ、13～15世紀のものと考えられる(同図-1～3)。瓦器椀にはやや時期差がみられ、13世紀末～14世紀前半と考えられる(同図-4,5)。須恵器甕は、瀬戸内東部のものと考えられ、12世紀に属するものと考えられる(同図-7)。

西半部の方形区画の内部のものは、ピットB-729出土の瓦質羽釜で、13世紀初頭と考えられる(同図-6)。

出土遺物には時期差がかなりみられるが、ほとんどのピットがつくられた時期は、ほぼ13～15世紀と考えることができる。



図I-67 B地区東部 ピット出土土器

2. 溝

ほぼ調査区全域で検出されており、東半部と西半部の遺構群に分けることができる。いずれも中世に掘削されたものと考えられ、溝B-51以外は近世までには廃絶したようである。

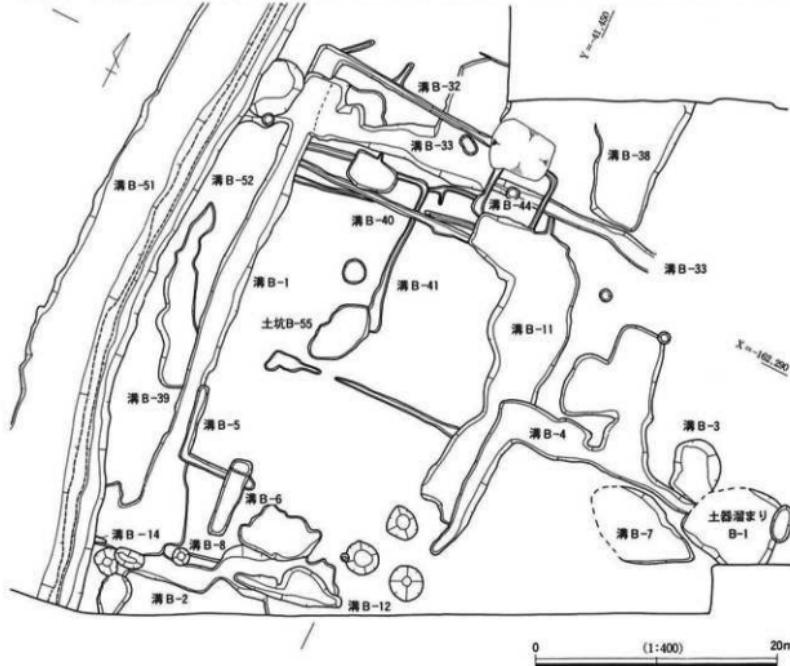
東半部南端では、石組をもつ溝B-4を中心として、溝B-3、溝B-7がまとまって検出されている。削平や攪乱による破壊がかなり進んでおり、形状ははっきりしないが、区画溝か園池の一部と考えられ、人頭大の礫とともに瓦類が多量に出土した。北側では、溝はほとんどみられない。

西半部では、ほぼ方位と一致する溝が多くみられる。屋敷の区画溝と考えられ、中央部分を東西約20m、南北約35mの範囲で区画している。ここでも、人頭大の礫とともに瓦類が多量に出土した。この区画の北側にも別の区画溝がみられる。西端部の溝B-51は、谷状地形を利用した水路で、近世まで使用されていた。現代でもこの部分に水路が残っており、長い期間にわたる区画をあらわしている。

ここでは、変則的であるが、やや時期の古い溝B-39から記述を始め、東半部の溝、西半部の東を区画する溝、区画内部の溝、西半部の別の区画溝、西端部の溝の順に記述を進めていくこととする。なお、西半部の溝に関しては、区画を主体に並べたため、やや時期の前後するものもある。

(1) 溝B-39 (図I-63,68,69、写I-15・16-1,3)

西半部の西端で検出された。南側で溝B-1と重複しており、溝B-1より古い。南北方向に走る溝で



図I-68 B地区東部 溝略図

あるが、不定型で南北部が東に曲がっているほか、南側に比べて北側は幅が狭い。

溝の北半部では遺物量は少なかったが、南半部では溝B-1と同様に、瓦類や土器が疊とともに廃棄された状態で出土した。建物などの区画を示すものと考えられるが、関連する溝や建物群などは見つかっていない。

遺物は、土師器羽釜、瓦器小皿、瓦質羽釜・鉢・須恵器甕・鉢・備前鉢などが出土している（図I-70,71）。遺物の時期差が認められ、12世紀の須恵器甕から14世紀末の瓦質鉢までみられる。遺物の取り上げの際、重複している溝B-1の遺物や後世の遺物が混入したため、時期差が生じたものと考えられる。全体の検討により、13世紀末の遺物が中心といえる。このことから、溝B-1や溝B-11などで区画された屋敷がつくられる以前の建物群の区画溝と考えることができる。

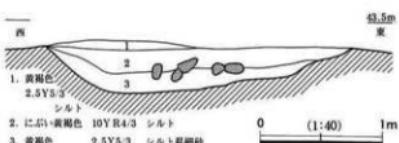
（2）溝B-3 （図I-63,68,72,73、

写I-14-1）

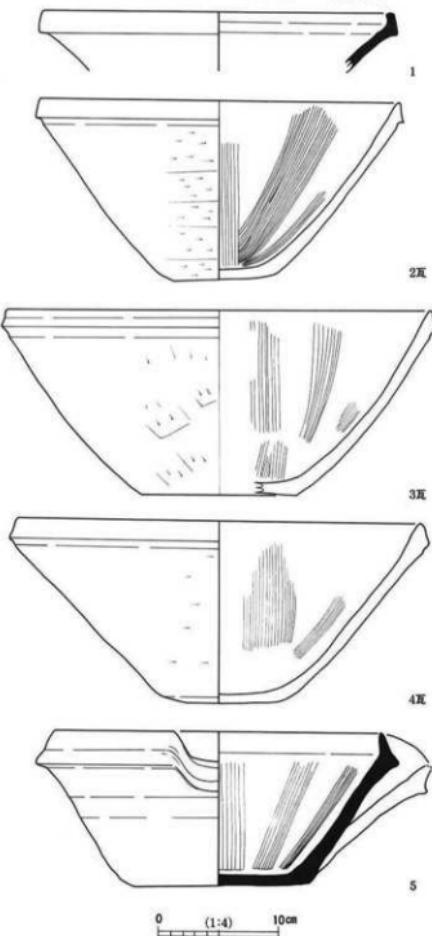
東半部南端で検出された。北側は擾乱で壊されており、南側は溝B-4・土器溜まりB-1と重複しているため、本来の形状ははっきりしない。現状で楕円形を呈しているが、南北方向の溝と考えられる。

内部で、人頭大の疊を積み上げた東西方向の石組が検出され、溝を北部と南部に区切っている。石組は方位と一致しており、疊は底から掘削面まで3~4段に丁寧に積み上げられている。石組で区画された内部からは、大量の瓦類が出土しているが、石組の疊の一部が底で検出されていることから、これらは溝B-3の廃絶と共に廃棄されたものと考えられる。

遺物は瓦類が多くみられるほか、土師器小皿、瓦質羽釜・甕・鉢などが出土している（図I-74）。本来は、溝B-4や溝B-



図I-69 B地区東部 溝B-39断面図



図I-70 B地区東部 溝B-39出土土器（1）

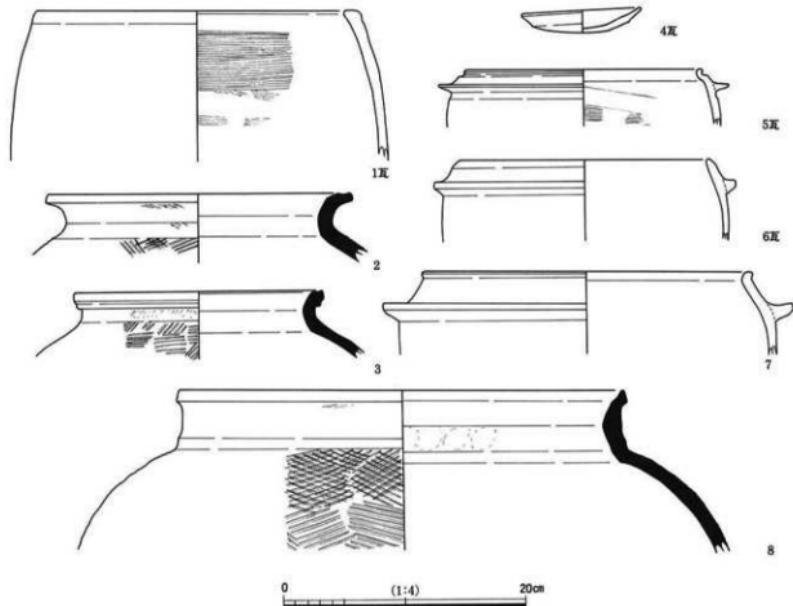


図 I-71 B 地区東部 溝B-39出土土器（2）

7と関連性をもって造られたものと考えられ、同時期に機能していたものといえる。

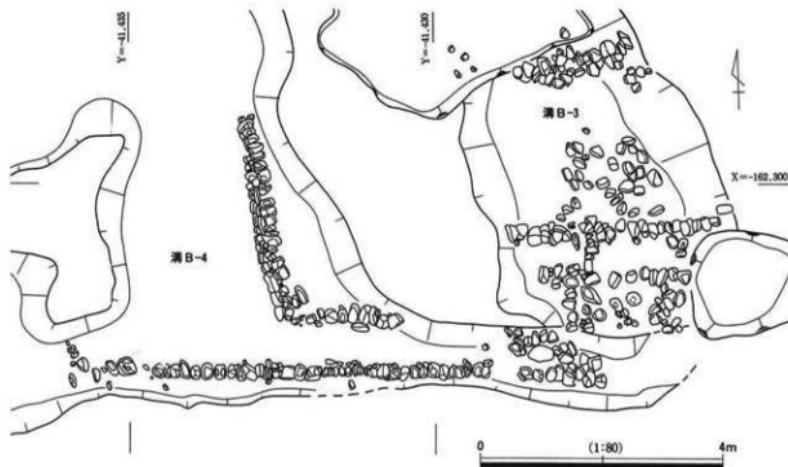
（3）溝B-7（図I-63,68,73,写I-14-1）

東半部の南端で検出され、溝B-3の南側に位置する。ほぼ全面に削平をうけており、擾乱で壊されているため、形状は不明である。東西10.3m以上、南北約5m以上の範囲で、かろうじて底部に残る瓦類や土器が検出されたため、遺構の存在が確認されたものである。検出面で深さ約0.3mを測る。礫はほとんどみられないことから、溝B-4のような石組はなかったようである。

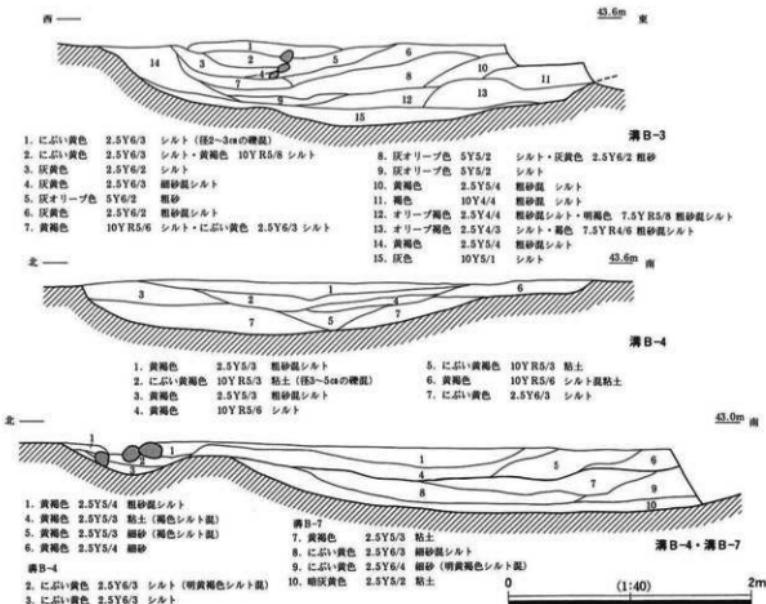
溝の一部と考えられるが、すぐ東側で検出された土器溜まりB-1と同様に、瓦類を中心して廃棄した土坑の可能性もある。最下層には粘土が堆積しているため、滯水状態の時期もあったようであるが、区画溝や水路とは考えられない。出土遺物はほとんどが瓦類で、土器類では土師器羽釜・小皿、瓦器碗・小皿、瓦質羽釜・甕・片口鉢・擂鉢・備前擂鉢・壺などみられる（図I-74）。時期ははっきりしないが、溝B-3や溝B-4などとほぼ同時期に廃棄されたものといえる。

（4）溝B-4（図I-63,64,68,72,73,76,77,写I-14-1~3）

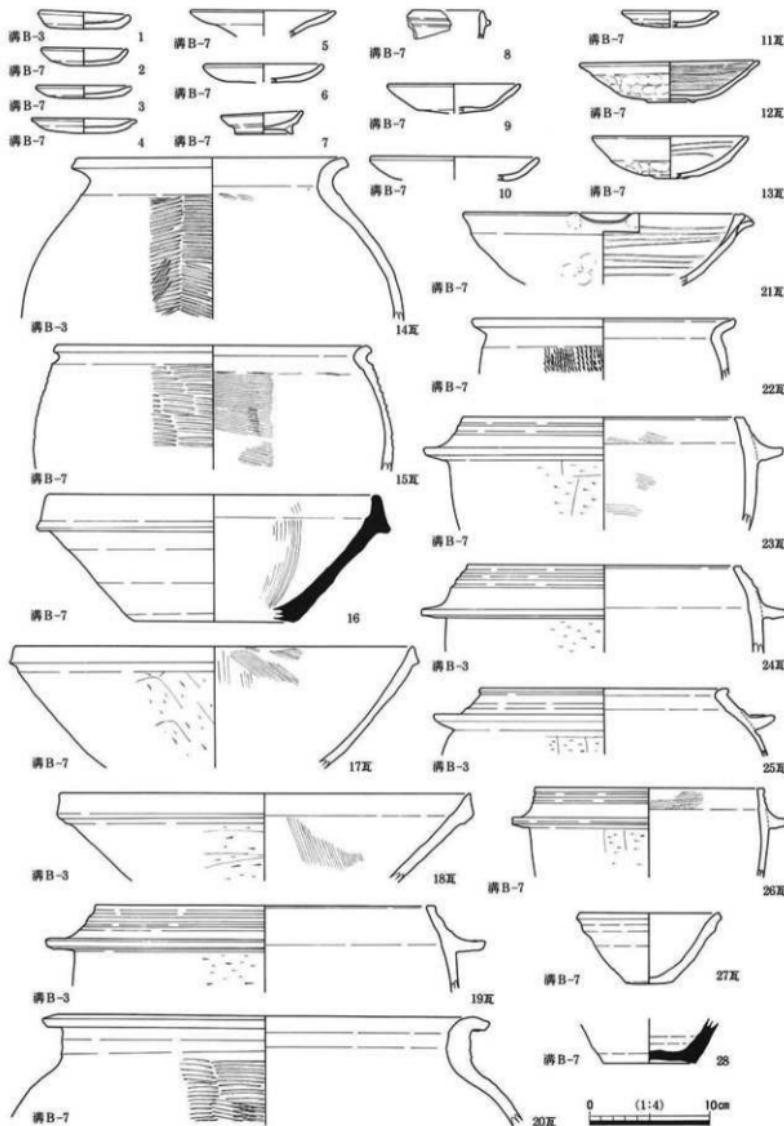
西半部から東半部の南端にかけて検出された。東側で、溝B-3・溝B-7・土器溜まりB-1と重複関係があるほか、西側では、溝B-11と重複関係がある。全体に削平をうけており、さらに北側が擾乱により大規模に壊されているため、本来の形状ははっきりしない。区画溝と考えられるが、現状では溝の西側がL字状に南へ曲がっており、北側には北方向へ延びる溝が接続している。溝の幅は2~6m、深さは0.2~0.4mを測り、一定しない。



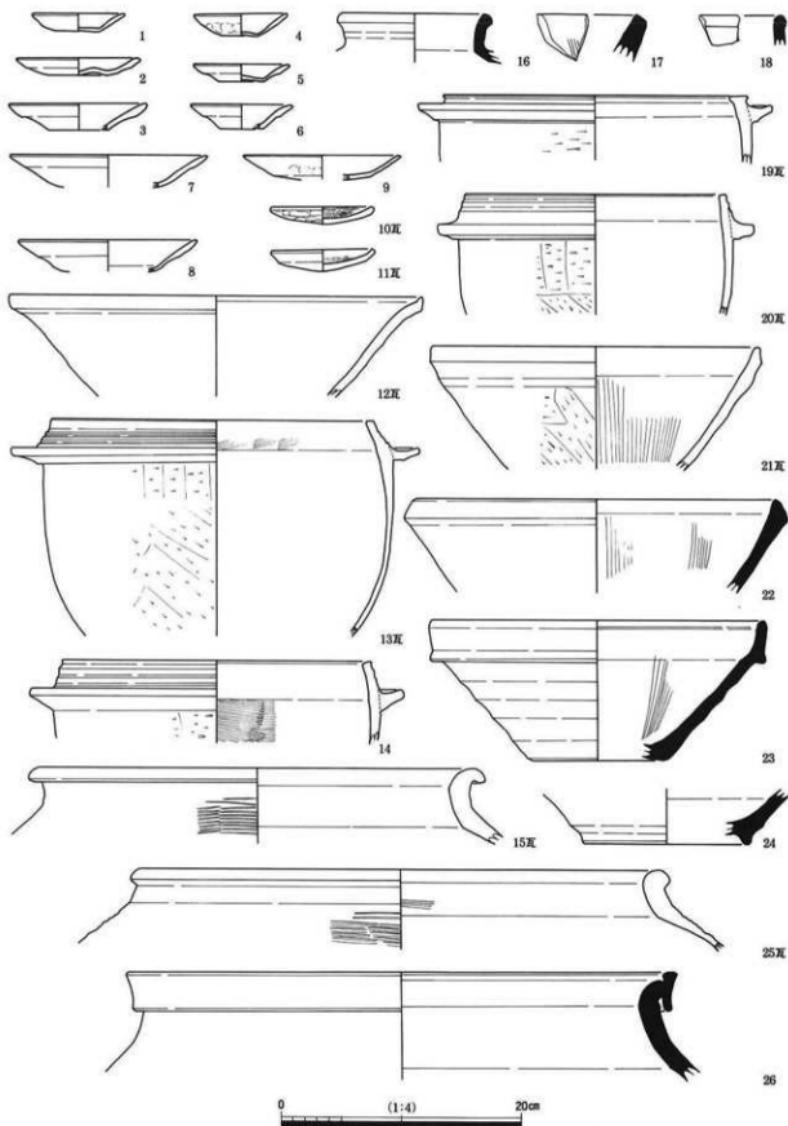
図I-72 B地区東部 溝B-3・溝B-4石組平面図



図I-73 B地区東部 溝B-3・溝B-4・溝B-7断面図

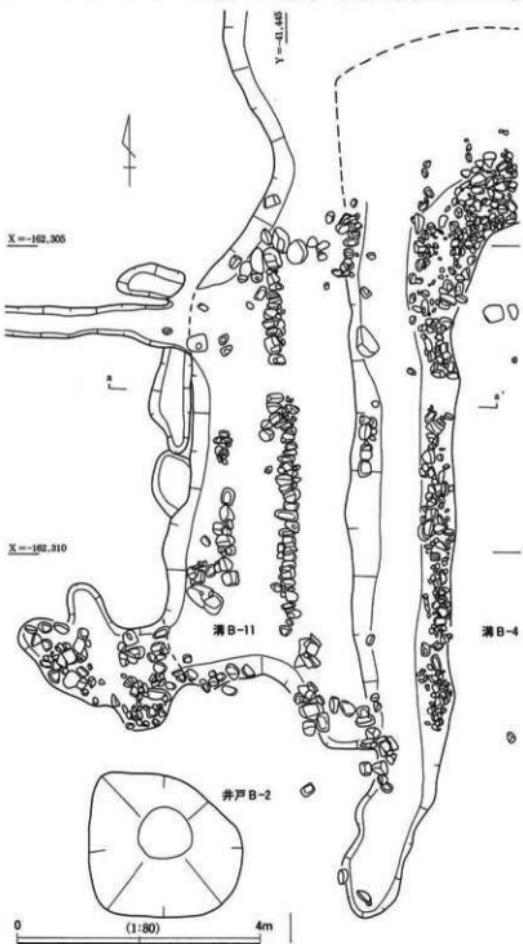


図I-74 B地区東部 溝B-3・溝B-7出土土器



図I-75 B地区東部 溝B-4出土土器

溝の東側では南辺に沿って、径15cm程度の礫が一列に並んだ石組が検出された。石組は2段に積み上げられており、確認された部分は約9mにおよぶ。これに対応する北辺の石組はかなり壊されており、東部で2m程度が確認されたのみである。東西方向の溝の中で、両側の石組が残っている部分では、幅は約1m、深さ約0.2mになり、最も規模が小さくなる。浅い部分には、底に径約10cmの礫が一面に敷き詰められている(図I-72)。また、北辺の石組が北方向へ曲がることから、北側の溝も同時に造られたことがわかるが、この部分では対応する西側の石組はほとんど残っていないため、規模は不明である。



図I-76 B地区東部 溝B-4・溝B-11石組平面図

西側の溝B-11と重複している部分では、石組はほとんどみられないが、東の肩部に径10cm程度の礫が敷き詰められており、前述の石組付近でみられる礫の出土状況に似ている。溝B-11が廃絶した後に造られたものである(図I-76)。

埋土上層は、人為的に埋められており、人頭大の礫と共に多くの瓦類が廃棄された状態で検出された。一気に埋められたようで、特に規則性は認められない。溝の東側では、粘土が混在していることから、水が溜まっていたことが推測される。ほぼ方位に合わせて溝が掘削されているほか、石組も丁寧に並べられているため、規格性をもって造られたものといえる。

遺物は、瓦類が多くみられるほか、土師器羽釜・小皿、瓦質羽釜・甕・こね鉢、備前播鉢・壺、常滑こね鉢・甕などが出土している(図I-75)。土器類は破片が多く、完形になるものはほとんどない。15~16世紀に属する遺物が多くみられることから、16世紀末までには廃絶したものと思われる。

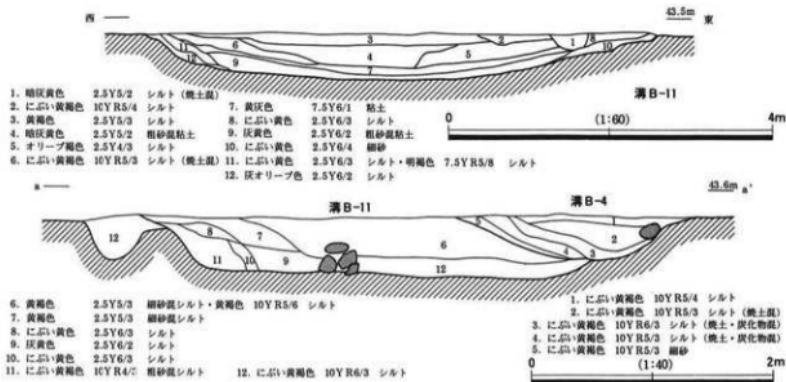


図 I-77 B地区東部 溝B-4・溝B-11断面図

(5) 溝B-11 (図I-63,64,68,76,77、写I-14-2,4,5・15)

西半部の東で検出され、遺構群の東辺を区画する溝である。南北方向に走る溝で、北端部は直角に西へ曲がる。南側は溝B-4と重複しており、溝B-11の廃絶後に東肩部を掘削されている。北側では、小規模な溝を切っている。

南半部で、溝の両側に人頭大の礫を並べた石組が検出されたが、かなり破壊されていた。しかし、東側の石組の残存状況は比較的良好で、長さ約6mにわたって確認され、底から礫が3段積まれていることがわかる(図I-76,77)。両側の石組が残っている部分では、石組の幅1.2m、深さは約0.2mを測り、溝B-4と規模はほぼ同じである。石組は南半部で検出されたのみで、北半部ではまったくみられなかった。

埋土は大きく2層に分かれるが、上層は人為的に埋められたもので、検出された石列の上面におよぶ。北半部では、多くの人頭大の礫と共に瓦類や土器が、廃棄された状態でまとまって検出された。溝が廃絶した際に一気に埋められたものと考えられる。

遺物は、軒平瓦や平瓦、軒丸瓦などの瓦類がほとんどであったが、土師器羽釜・小皿・皿、瓦器碗、瓦質羽釜・播鉢・甕・井筒、備前甕、須恵器甕なども出土している。土器類は、完形になるものはほとんどみられないが、15世紀代を中心とする時期のものと考えられる(図I-78,79)。

また、北西端部の底付近から瓦質像の頭部が出土した。付近からは関連する遺物は見つかっておらず、胴体などは検出されなかった。像は右側頭部や鼻、左耳が一部欠損しているが、ほぼ完形で他の部分はほとんど損傷をうけていない(図I-122-1)。顔のつくりは比較的単純で、曲線のみで目や口を表現している。頭部に螺旋髪がみられないことから、仏像ではなく、僧形と考えられる。

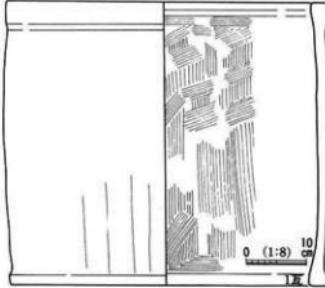


図 I-78 B地区東部 溝B-11出土井筒

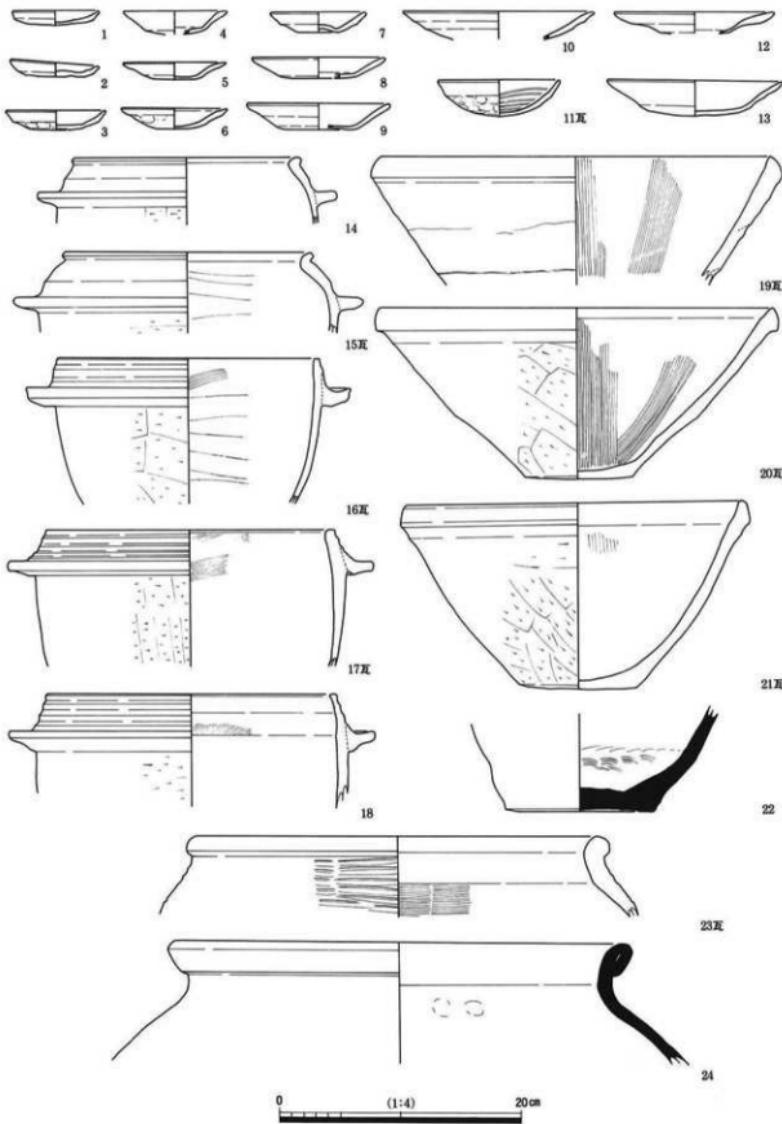
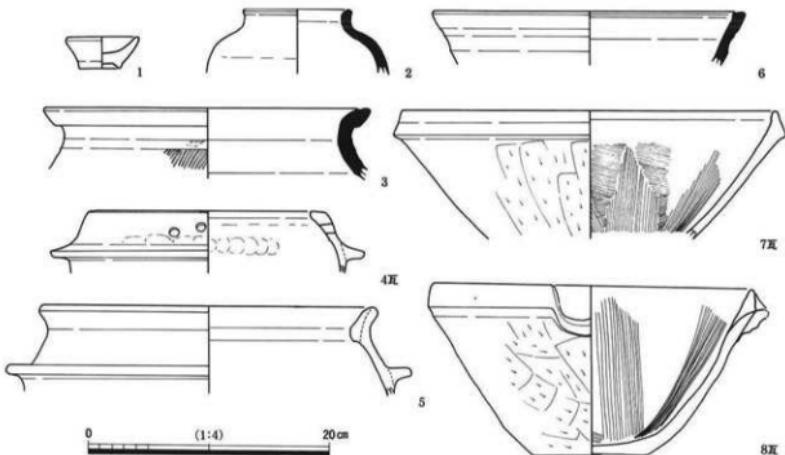


図 I - 79 B 地区東部 溝B-11出土土器



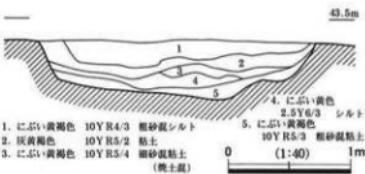
図I-80 B地区東部 溝B-1出土土器

(6) 溝B-1 (図I-63, 64, 68, 81、

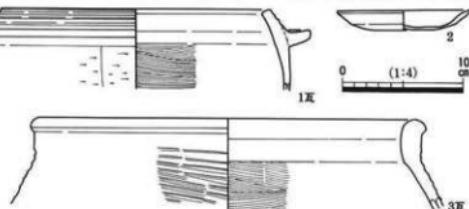
写I-15・16・1~4)

西半部の西で検出され、遺構群の西辺を区画する溝である。南北方向に走る溝で、北は溝B-33、南は溝B-2と重複している。南半部は、調査区西側の谷状地形に沿ってやや東に曲がるため、形状は直線ではない。溝の東側には土坑や柱穴群が密集しているが、西側では土坑B-49・土坑B-50がみられるのみである。中央部で人頭大の礎と共に瓦類や土器が集中して検出されており、溝B-11などと同様に、溝の廃絶の際に一気に埋められたものといえる。瓦を用いた建物群が、区画された内部に存在したものと推測され、溝B-1は溝B-11とともに屋敷地の東側と西側を区画していたものと考えられる。また、瓦類の検出状況も似ていることから、建物の廃絶と共に区画溝も同時に廃絶したものといえる。埋土下層に粘土やシルトがレンズ状に堆積していることから、流水状態と滯水状態が繰り返されていたことがわかる。

遺物は瓦類が多いが、土師器羽釜・皿、瓦質羽釜・擂鉢、備前壺、常滑こね鉢、須恵器甕なども出土している。土器類は、完形になるものはほとんどないが、13~14世紀代に属するものが多くみられる。しかし、15世紀代の遺物も多く検出されていることから、遺物の混入の可能性があるものの、溝B-11と同時期に存続したものと考えることができる（図I-80）。



図I-81 B地区東部 溝B-1断面図



図I-82 B地区東部 溝B-32出土土器

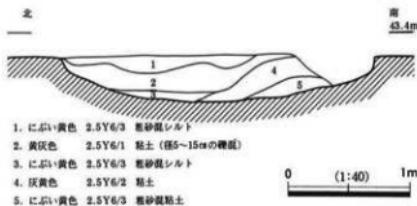


図 I - 83 B 地区東部 溝B-33断面図

い。このため、溝B-1がつくられた際には、すでに廃絶していた可能性がある。

溝B-33の北側でも柱穴が検出されているため、本来は溝の北側に広がる集落を区画するために造られた溝と考えられる。西部で一段浅く、広がる部分がみられることから、後に溝を広げたか、新たな土坑がこの部分に造られたことも考えられる。溝B-1や溝B-11で検出されたような、人頭大の礫や瓦類はほとんどみられない。

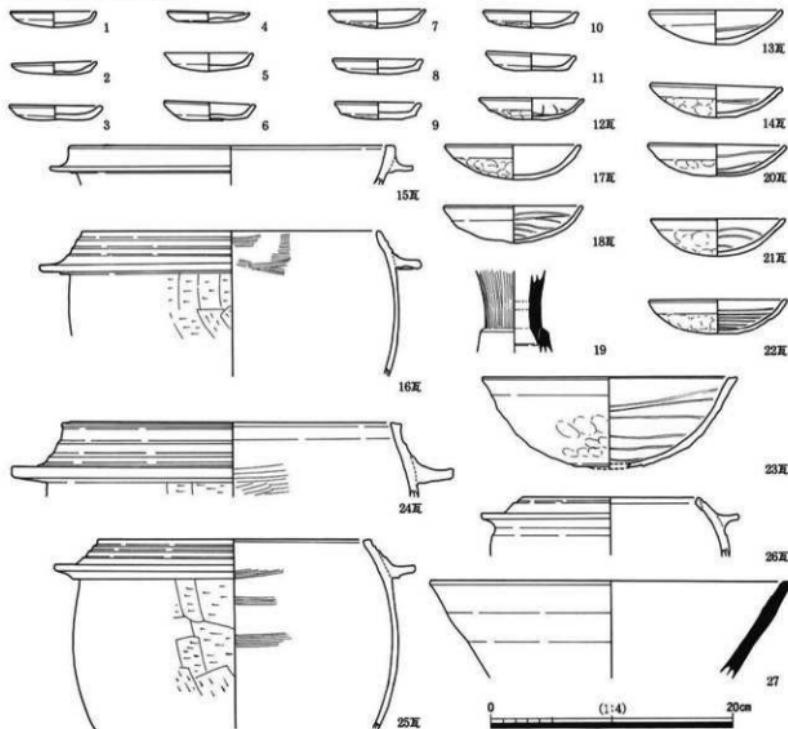


図 I - 84 B 地区東部 溝B-33出土土器 (1)

(7) 溝B-33 (図 I - 63, 68, 83,

写 I - 17-3, 4)

西半部の北で検出され、遺構群の北辺を区画する溝である。東西方向に走る溝で、溝B-1、土坑B-36、井戸B-8・井戸B-10と重複しており、西部の区画溝の中では古いものである。溝B-11に切られている溝B-32に切られることか、溝B-11と同時に存在したとは考えられない。

ら、溝B-11と同時に存在したとは考えられない。

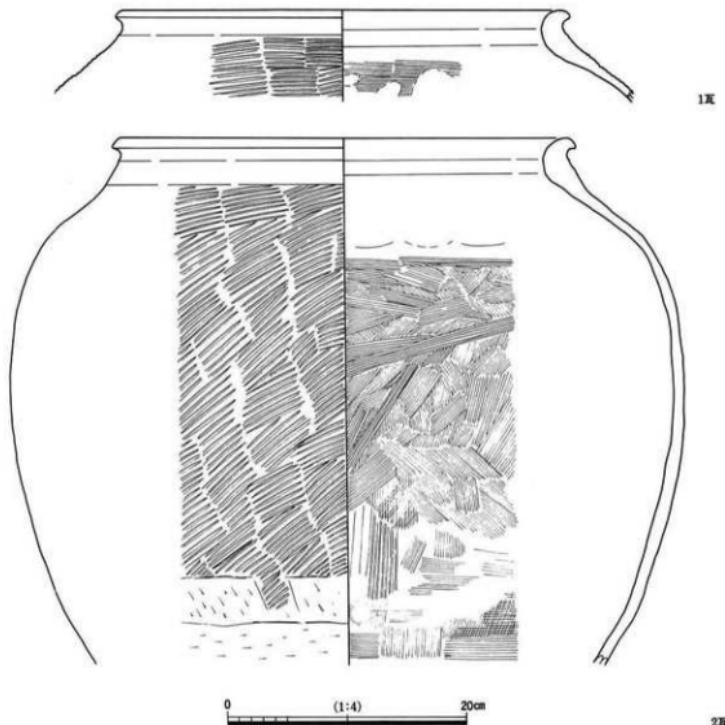


図 I-85 B地区東部 溝B-33出土土器（2）

溝の東部は攪乱をうけているため、全体の形状ははっきりしない。この部分は規模が異なることから、別の溝の可能性も考えられる。埋土には粗砂が多く含まれることから、流水状態の時期もあったようである。底のレベルが西へ向かって下がることから、排水を西の谷状地形に流す溝と考えることができる。また、土坑B-36ともつながっているが、検出段階で前後関係ははっきりせず、あまり時期差もみられないことから、同時につくられた可能性もある。溝B-33と土坑B-36によるL字状の区画は、北に拡がる集落の南東隅と考えられる。

土坑B-36とつながる部分で、底付近から土師器皿・小皿、瓦器挽・小皿などを中心とした土器群が検出された。完形のものが多く、検出状況から廃棄されたも

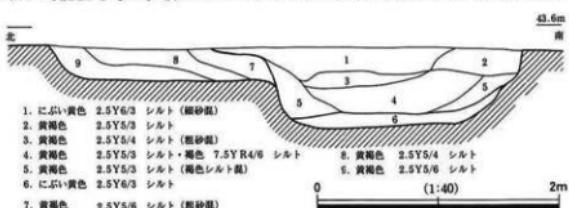


図 I-86 B地区東部 溝B-12断面図

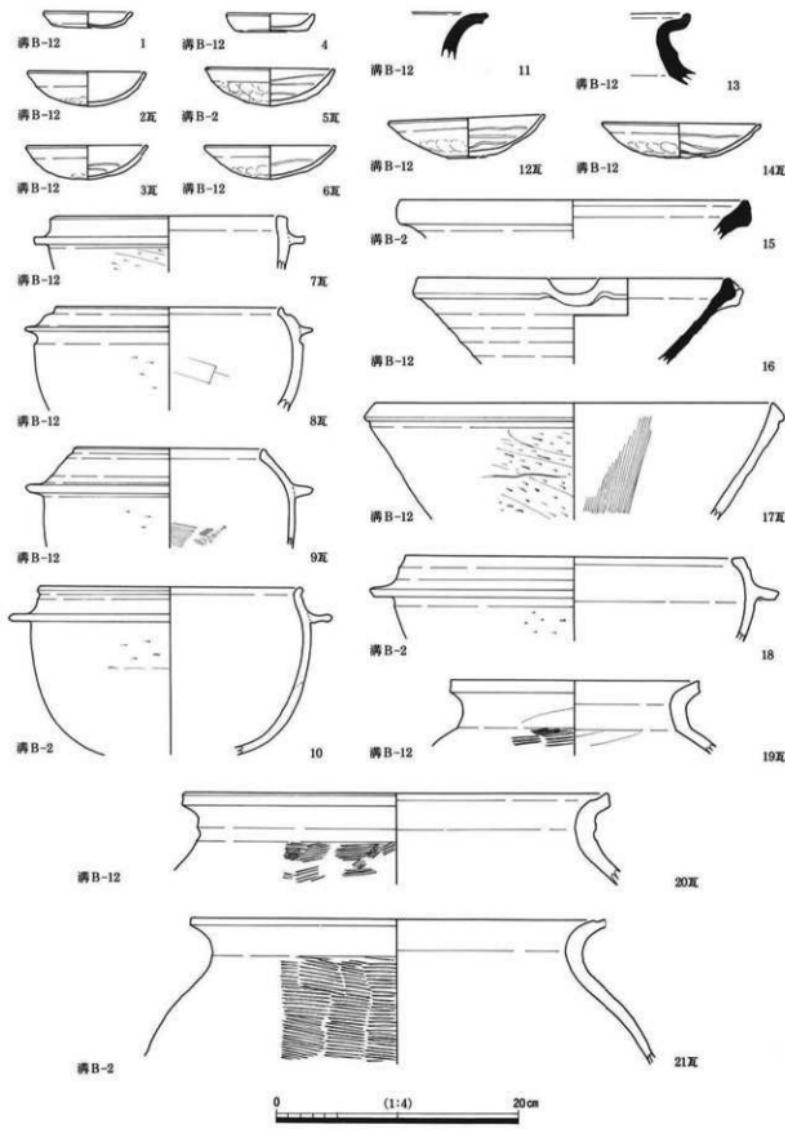


图 I - 87 B 地区东部 满 B- 2 • 满 B- 12 出土土器

のというより、意図的に据えられたものということができる。さらに、溝の西側では、瓦質羽釜がほぼ4個体分まとめて検出された。付近からあまり土器は出土しておらず、人為的に据えられた様相を呈しているが、性格は不明である。しかし、土器の検出状況から祭祀に用いられた可能性もある。出土遺物の時期は、14世紀前半を中心としたものと考えられる。

(8) 溝B-2・溝B-12 (図I-63,64,68,86)

西半部の南端で検出され、遺構群の南辺を区画する溝と考えられる。溝B-2・溝B-12は、ほぼ重なって東西方向に走る溝である。西端は溝B-1や土坑B-4などと重複しており、東端は調査区外へ延びる。溝の北側にはピットが密集している。

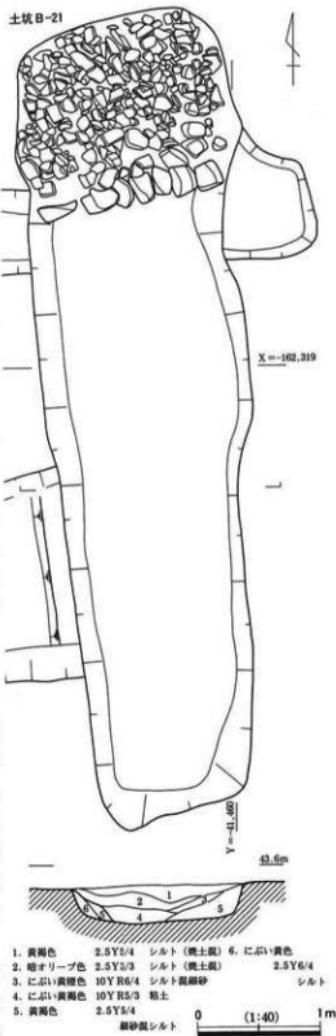
調査時には2条の溝が判別できなかったため、東部の深い部分を溝B-12として調査を行った。2条の溝の規模は確定しないが、検出された溝の東部は、幅4.0m、深さ約0.6mで、二段掘りになる。西部は深さ0.2~0.4mを測り、東部に比べて一段浅くなっている。土層断面の観察により、溝B-12が溝B-2を切っていることが判明した(図I-86)。

遺物は、土師器羽釜・小皿、瓦器椀、瓦質羽釜・甕・擂鉢、常滑窯、須恵器こね鉢などが出土した。時期は大きく2期に分かれるようで、13~14世紀前半のものと14世紀後半~15世紀を中心とするものがみられる。遺物検出時に混入したものもあることから、必ずしも所属する遺構が正しいとはいえないが、溝B-2は14世紀前半、溝B-12は15世紀代のものと考えることができる(図I-87)。

(9) 溝B-6・土坑B-21 (図I-63,64,68,88、写I-18-2,19-2)

西半部の南西で検出された。土坑B-21は、溝B-6の北端部を人頭大の礫を1列に並べた石組でふさぎ、南北1.5m、東西1.9mの範囲に瓦類を集中して埋めたものである。内部には平瓦を中心とする瓦類が、ほぼ隙間なく詰め込まれており、計画的に埋められたものといえる。調査区内でほかに瓦類が集中して検出された土坑は、土坑B-1のみである。上面は削平を受けていたため、検出面で既に瓦類が露出しており、本来の形状は不明である。

溝B-6はほぼ方位と一致しており、区画溝の一部と考えられるが、土坑B-21との関連ははっきりしない。埋土は黄褐色系シルトが主体であるが、粘土も混在することから、滯水状態の時期もあったことが推測される。また、上図I-88 B地区東部 溝B-6・土坑B-21



層には焼土が混在している。

遺物のほとんどは瓦類であるが、土師器羽釜・小皿、瓦質鉢などもみられる。いずれも破片のみで形を復元できるものはないが、15世紀以降のものと考えられる。

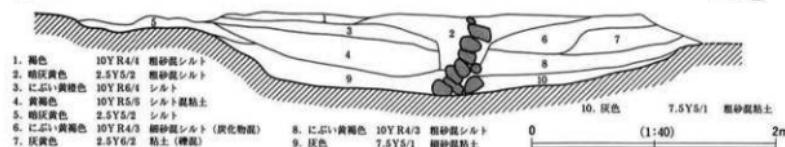
(10) 溝B-38（図I-63,68,89、写I-17-1,2）

西半部の北東端で検出された。溝B-33をはさんで溝B-11の北側に位置しており、ほぼ南北方向に走る。南部のみの検出で、北側は調査区外に延びる。以前に調査区北側で、大阪府教育委員会による発掘調査が行われた際、溝B-38の続きと考えられる、多量の瓦類が出土した溝が検出されているため、さらに北方向にまっすぐ延びることがわかる。

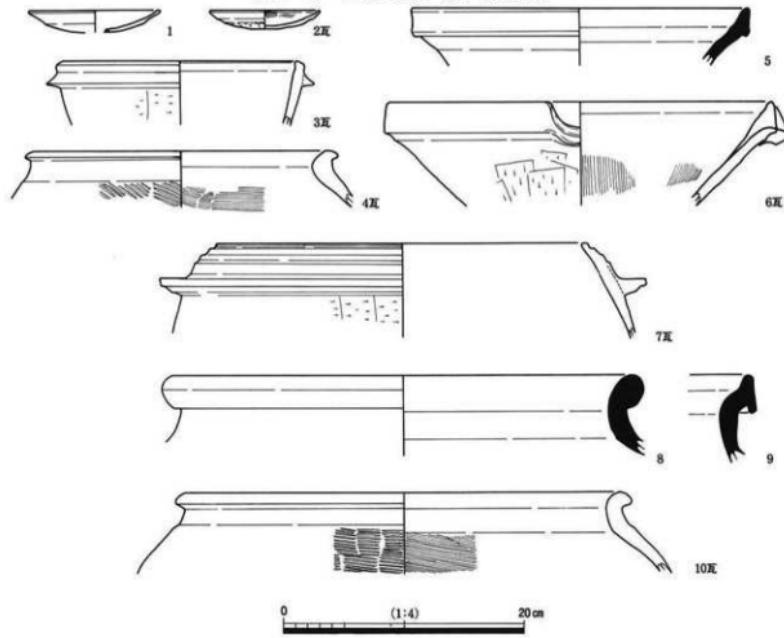
溝B-33を南限とする集落や、調査区の北側に拡がる遺構群の東限を示す区画溝と考えられる。内部

西——

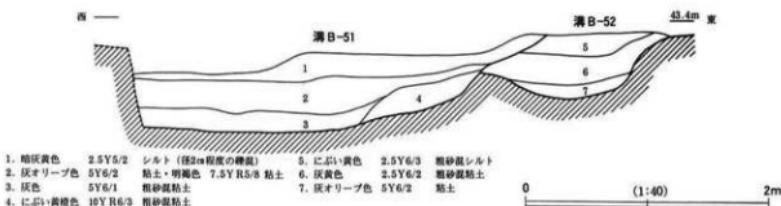
43.5m 東



図I-89 B地区東部 溝B-38断面図



図I-90 B地区東部 溝B-38出土土器



図I-91 B地区東部 溝B-51・溝B-52断面図

に溝B-4と同様の疊を積んだ石組がみられ、石組間の幅は約2mを測る。石組は底から積まれているが、東側に比べて西側の残存状況が悪く、ほとんど痕跡程度しか認められない(写I-17-1)。最下層には粘土が堆積していることから、滯水状態であったことが推測される。また、溝B-11と同じ並びになることから、互いに関連性をもって造られた溝の可能性もある。他の石組溝のように、疊と共に多量の瓦類が廃棄された状態で出土している。

遺物は瓦類のほか、土師器小皿、瓦質羽釜・甕・擂鉢、備前甕、常滑甕、須恵器こね鉢などが出土している(図I-90)。また、厨子側面の飾金具と考えられる、金属製品も出土している(写I-17-2)。

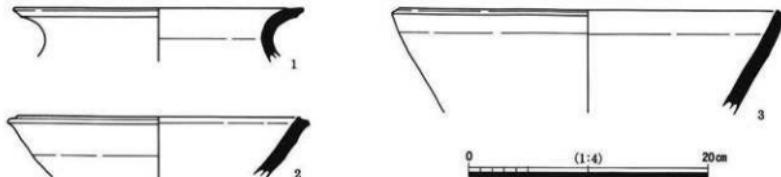
遺物の時期は14~15世紀と考えられる。青磁や白磁、瓦質火鉢などが出土することから、溝B-1や溝B-11などとほぼ同時期に機能していたものということができる。

(11) 溝B-51・溝B-52(図I-63,68,91)

調査区西端部で検出された。ほぼ南北方向に走っており、溝B-51と溝B-52はほとんど重複してつくられている。溝B-52を改修して、新たに溝B-51を掘削したものといえる。また、西側の城郭の東辺を区画する堀とはほぼ平行していることから、防衛のために溝を拡げた可能性も考えられる。

溝B-52は、浅い谷状地形を利用して掘削されたものと考えられ、南部でやや東に屈曲する。本来は、自然流路であったものに手を加えたものといえる。溝B-51と西側で重複していることから、西肩部は検出できず、全体の規模ははっきりしないが、幅約1.6m、深さ約0.5mと推定される。遺物の出土量が少ないため、時期は特定できないが、14世紀代の遺物がみられる(図I-92)。

溝B-51は、西肩部が3Bトレーナーにおよんでおり、幅約5.0m、深さ約0.8mを測る。溝B-52に沿って掘削されており、南部でやや東に屈曲している。遺物の出土量が少ないと後世の掘削が下層にまでおよんでいるため、掘削時期は特定できない。ただ、中世の遺物がみられることから、城郭の堀と共に新たにつくられたものと考えることができる。南から北へ流れる水路で、城郭が廃絶した後も現在まで再掘削を繰り返しながら、存続していたものといえる。



図I-92 B地区東部 溝B-52出土土器

3. 土坑

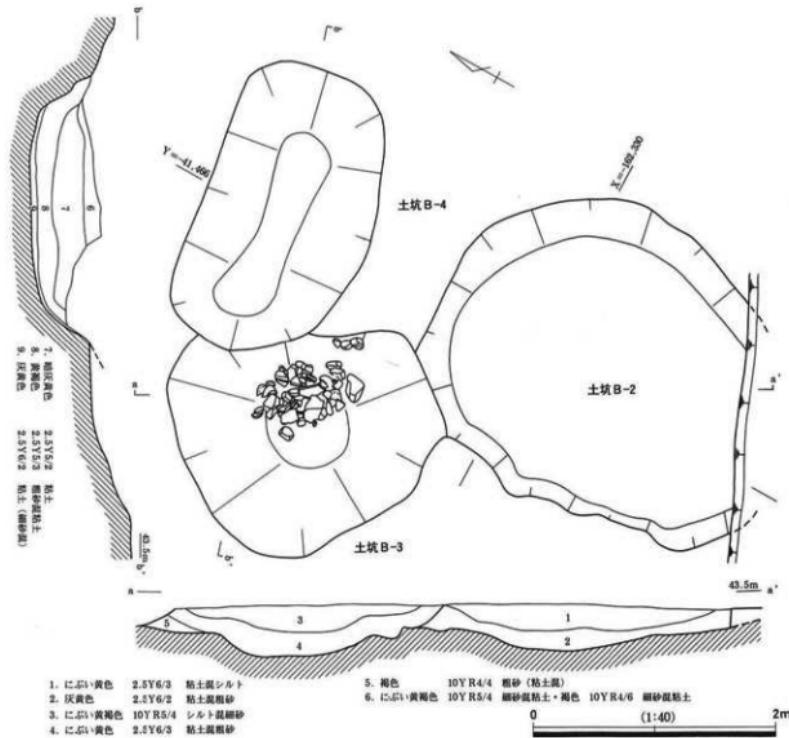
ほぼ調査区全体で検出されたが、西半部の方形区画の縁辺部に比較的多くみられる。井戸と考えられるものや埋土に焼土の入ったものなどもある。土坑からは磚や瓦類はあまり検出されていない。

(1) 土坑B-1 (図I-63,64、写I-19-3)

西半部の溝B-1の東側で検出された。長辺2.0m、短辺1.7mの隅丸方形を呈しており、底は平坦で深さ約0.2mを測る。埋土には焼土や炭化物が含まれており、平瓦を中心とする多量の瓦が出土した。遺物には瓦質火鉢や白磁がみられるが、土器類はあまり出土しておらず、時期ははっきりしない。

(2) 土坑B-2 (図I-63,93)

西半部の南西端で、土坑B-3・土坑B-4とともに検出された。北西端部で土坑B-3と重複しており、南部は調査区外に延びる。検出段階では、土坑B-3との前後関係は明確ではなかった。上部は削平をうけており、現状では椭円形を呈する。出土遺物は、瓦や瓦器碗、瓦質壺・鉢、中国製天目茶碗などであるが、小破片のみで形を復元できるものはなく、時期は確定できない。

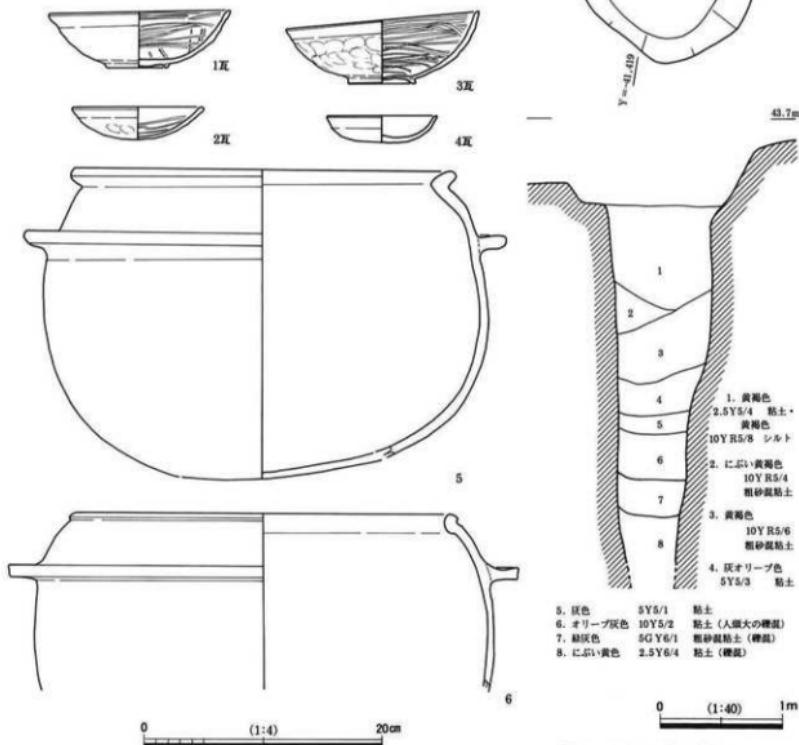


(3) 土坑B-3 (図I-63,64,93、写I-19-4)

現状ではほぼ円形を呈しており、深さ0.4mを測る。溝B-1や溝B-2と重複しているほか、東部を土坑B-4に切られている。断面は橢鉢状を呈しており、底部のみやや掘り下げられている。遺物は、主に下層から形を復元できる土師器羽釜、瓦器碗・小皿などがまとまって検出されている(図I-94)。上層からも土師器羽釜などが出土しているが、後世の遺物が混入しており、下層の遺物との時期差が認められる。土坑B-3の時期は下層出土遺物から、13世紀前半頃と考えられる。

(4) 土坑B-4 (図I-63,64,93)

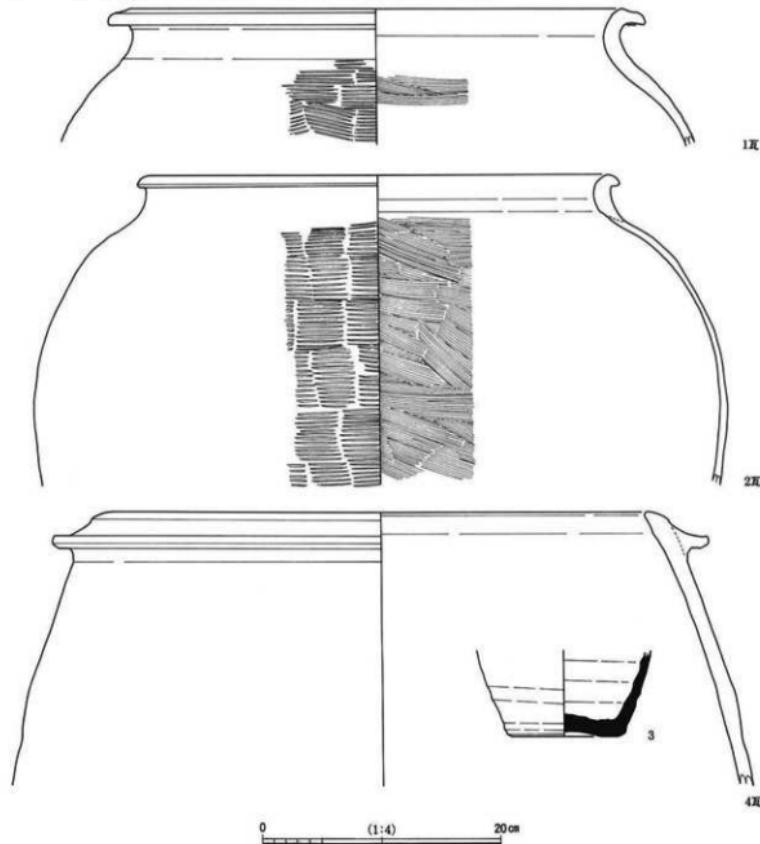
現状で梢円形を呈しており、西側で土坑B-3と重複している。溝B-1と溝B-2の合流部に位置しているため、重複関係ははっ



きりしないが、溝の底面で検出されたものである。埋土下層で粘土がみられることから、水溜と考えられる。遺物は、瓦や土師器羽釜、瓦器椀・小皿などが出土している。土坑B-3と同様に、上面の溝の遺物が混入している可能性もあるが、13世紀後半のものと推定される（図I-94-6）。

（5）土坑B-5（図I-63,95）

東半部の南東端で検出された。検出面では橢円形を呈しているが、上面は攪乱をうけているため、本来の形状ははっきりしない。壁が垂直に下がっていることから井戸と考えられる。深さ約3mまで掘り下げたが、底には到達できず、湧水はなかった。人為的に埋められており、埋土下層に疊が多く含まれている。遺物は、瓦類や土師器羽釜、瓦器椀・小皿、瓦質羽釜・甕・擂鉢、陶磁器などが出土している（図I-96）。中には、瓦質井筒や中国南方系の褐釉壺もみられる。



図I-96 B地区東部 土坑B-5出土土器

(6) 土坑B-7 (図I-63,64,98)

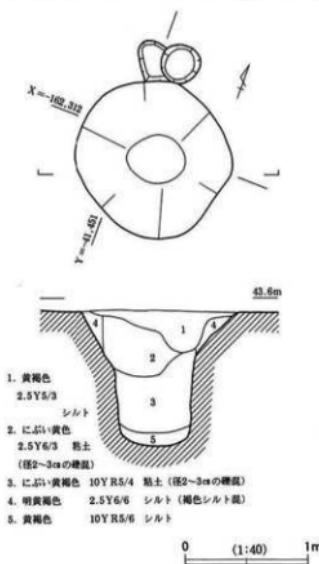
西半部の南東端の井戸B-1・井戸B-2の西側で検出された。平面形は径2.7mのはば円形を呈しており、深さ約1.5mである。上部は掘鉢状で、底部は径約0.6mの円形となり、壁はほぼ垂直に下がる。井戸と考えられ、近接して検出された井戸B-1・B-2との関連が考えられる。狭い範囲に井戸が集中していることから、屋敷内で井戸が掘られる場所が限定されていたことが推測される。

埋土は大きく2層に分かれ、掘鉢状の上層と壁が垂直に下がる部分の下層とに分けることができる。上層はレンズ状に堆積しており、シルトが主体である。下層は粗砂や粘土が混在しており、人為的に埋められた様相を呈している。

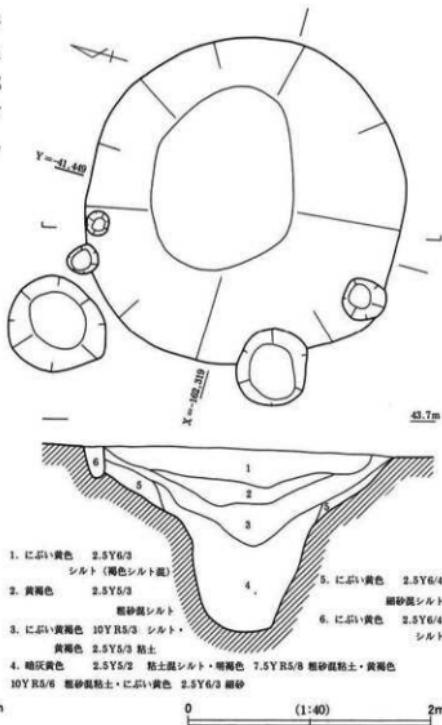
遺物は、主に下層から瓦器碗・小皿などがまとまって出土したほか、土師器羽釜・小皿、瓦質羽釜・足釜、須恵器こね鉢などもみられ、多様な遺物が検出されている（図I-99-1~6,9~18）。土師器小皿や瓦器碗・小皿には、完形のものが多くみられる。時期は下層出土遺物から、13世紀後半～14世紀前半を中心とするものと考えられる。

(7) 土坑B-8 (図I-63,64,66,97)

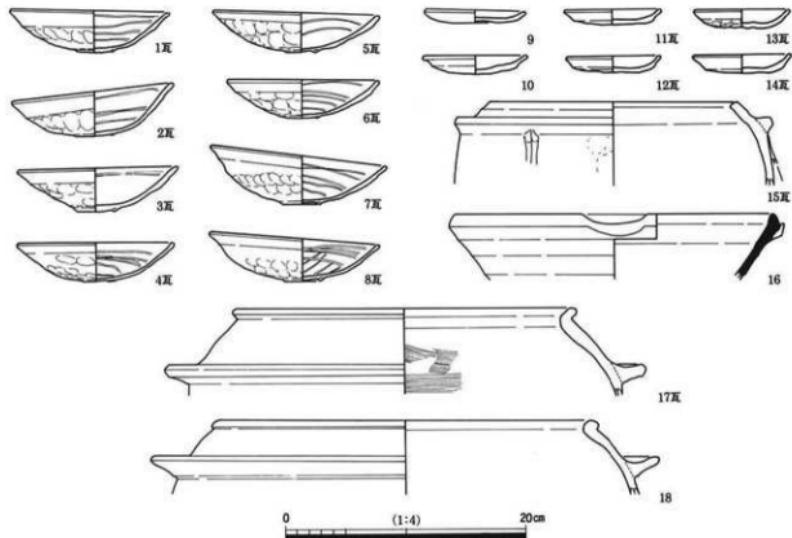
西半部の溝B-11の西側で検出された。平面形はほぼ円形を呈しており、深さ約1.1mを測る。上部はやや掘鉢状を呈するが、底部は径0.6mの円形となり、壁はほぼ垂直に下がる。埋土は人為的に埋められた様相を呈し



図I-97 B地区東部 土坑B-8



図I-98 B地区東部 土坑B-7



図I-99 B地区東部 土坑B-7(1~6,9~18)・土坑B-8(7,8)出土土器
ており、黄褐色シルトやにぶい黄色粘土などが混在している。

遺物は下層から瓦器碗・小皿などが出土しており、ほぼ完形のものもみられる(図I-99-7,8)。時期は下層出土遺物から、14世紀初頭を中心とするものと考えられる。

(8) 土坑B-49・土坑B-50(図I-63、写I-20-4)

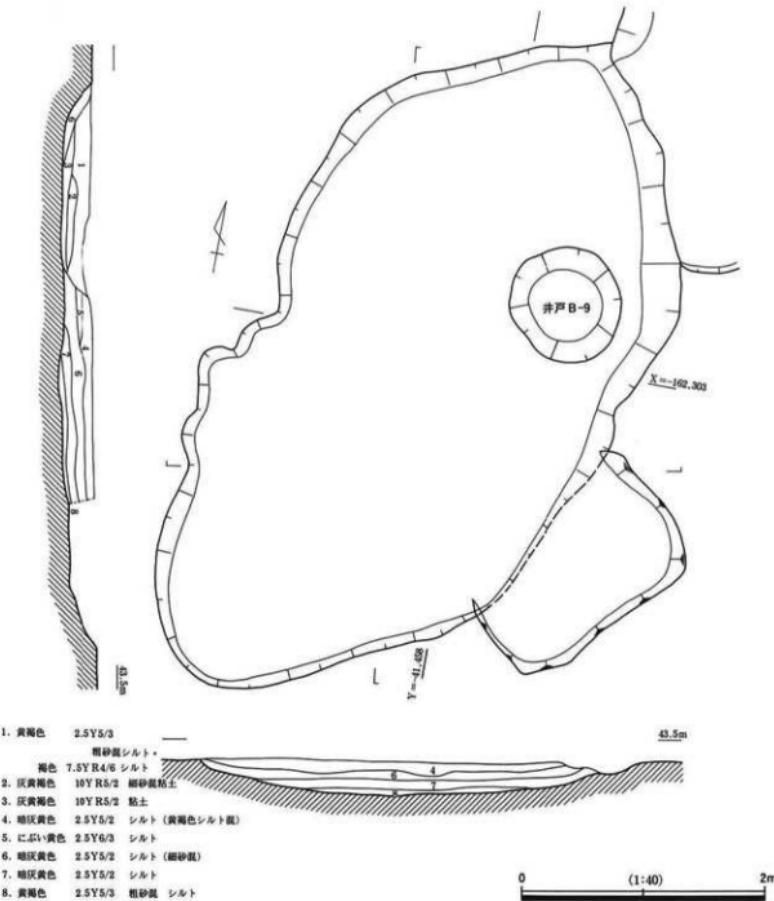
西半部の西端で検出された。平面形は現状で両方とも不整円形を呈しており、土坑B-49が長径2.1m、短径1.7m、深さ0.1m、土坑B-50が長径3.0m、短径2.5m、深さ0.3mを測る。土坑B-50の埋土には、焼土や炭化物が含まれておらず、特に底部付近で焼土塊が多く検出されているが、スラグや炉壁片などはみられない。工房跡の可能性もあるが、性格は不明である。遺物は瓦器や土師器の小破片のみで、形を復元できるものはないため、時期ははっきりしない。

(9) 土坑B-55(図I-63,68,100、写I-15)

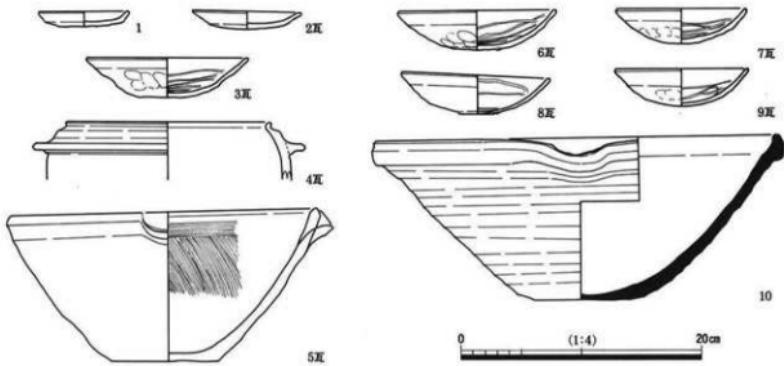
西半部のほぼ中央で検出された。平面形は現状で椭円形を呈しており、深さ約0.3mである。北東部で溝B-41と重複関係があるほか、底部からは井戸B-9が検出された。土坑の検出面が全体に削平を受けていることや擾乱をうけているため、本来の形状をあらわしているとはいえない。埋土は暗灰黄色シルトが主体である。南北方向の土層断面で、北半部に切り合い関係のある土坑の存在が認められるが、掘削段階では平面形は確認できず、判別はできなかった。

溝で区画された部分のはば中央部に位置している。周辺にはピットが比較的少ないため、建物との関連は不明である。また、北東部につながる溝B-41は、遺物が少ないとから時期ははっきりしないが、ほぼ同時につくられた可能性もあり、関連性があるものといえる。性格は不明であるが、方形区画の中で意味をもったものと考えることができる。

遺物は、底面付近から土師器羽釜・小皿、瓦器碗・小皿、瓦質羽釜・擂鉢、須恵器こね鉢などが出土している（図I-101）。特に瓦器碗は、多量に出土しており、高台がわずかに残るものと、小型化して高台のないものが、ほぼ同量ある。（図I-101-3）は、本来高台が付く器種にもかかわらず、施されていないものである。（同図-5）の瓦質擂鉢は片口で、斜め外方へ伸びる口縁部の端部が丸みをもつ。内面のカキメは、放射状に施され、カキメというよりは紋様のようである（写I-71-4'）。内面の体部下半から底部にかけてカキメがすり減っている。（同図-10）の須恵器こね鉢は、片口ではば完形である。



図I-100 B地区東部 土坑B-55平面・断面図



図I-101 B地区東部 土坑B-55出土土器

遺物の時期は、13世紀後半から14世紀後半にかけてのものである。

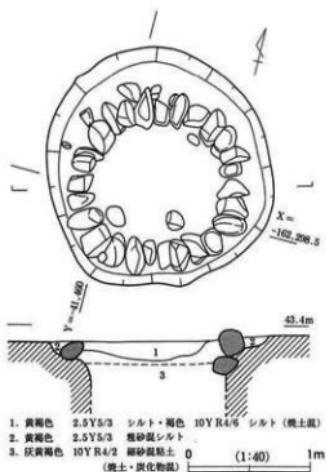
(10) 土坑B-71 (図I-63, 102, 写I-21-4)

西半部の土坑B-55の北側で検出された。平面形は現状で長径2m、短径1.8mの梢円形を呈しており、内側に径1.5mの円形石組をもつ。上面は削平を受けていたため、円形石組がほとんど露出して検出されたが、本来は地表面より下がった部分から石組が積まれていたものと推測される。壁がほぼ垂直に下がるため、石組井戸と考えられるが、地山が砂質で危険であったため、約1m掘り下げたところで調査を止め、底までは到達しなかった。

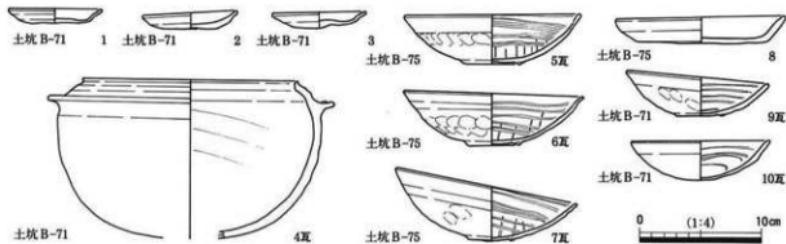
石組内の埋土は人為的に埋められたもので、上面にはほぼ全体に焼土や炭化物、焼土塊が含まれている。ただ、石組には火を受けた形跡があまり認められないことから、他の場所で焼かれた際の焼土などを、まとめて井戸を埋めるために使ったものということができる。

他の井戸はほとんどが遺構群の周辺部に位置しているのに対し、土坑B-71や井戸B-9は溝で区画された内部で検出されている。また、B地区東部で検出された井戸のうち、石組をもつ井戸は、井戸B-1と、この土坑B-71だけである。付近に柱穴が多く検出されていることから、生活用水を得ていた井戸と考えることができる。ただ、井戸の廃棄の際に焼土や炭化物などを多く埋めていることから、作業用水を得るために井戸の可能性もあり、付近で火を使う作業が行われていたことが推測される。

遺物は、埋土上層から土師器小皿、瓦器碗、瓦質羽釜などが出土している。出土遺物の時期が掘削時期をあらわしていないため、土坑の時期ははっきりしないが、遺物の時期はほぼ14世紀中頃を中心とするものと考えられる（図I-103-1～4, 9, 10）。



図I-102 B地区東部 土坑B-71



図I-103 B地区東部 土坑B-71・土坑B-75出土土器

(11) 土坑B-75 (図I-63、写I-20-5)

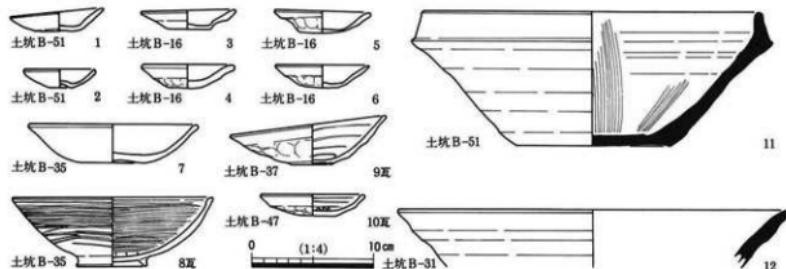
西半部の溝B-11の東側で検出された。平面形は現状で径約0.8mのはば円形を呈しており、内部は擂鉢状で深さ約0.3mを測る。底部付近で、ほぼ完形の瓦器碗が3個重なって検出されたほか、土師器皿などもみられる。溝B-4と溝B-11の間に位置しており、瓦器碗が人為的に底にえらべられていることから、なんらかの祭祀に使われたものと考えることもできる。時期は瓦器碗から13世紀中頃のものと考えられる(図I-103-5~8)。

(12) その他の土坑出土遺物 (図I-63)

このほかに土坑から出土した遺物のうち、図化できたものをまとめておく。

土坑B-16は、西半部の溝B-1の底面から径0.6mの範囲に土師器小皿がまとまって検出されたもので、土坑の形態はしていない。溝の底に土師器小皿がまとめて置かれたものと考えることができる。これらは完形のものが多く、時期は14世紀と考えられる(図I-104-3~6)。土坑B-51からは、土師器皿・小皿・備前鉢などが出土しており、時期は14世紀と考えられる(同図-1,2,11)。

土坑B-31は、東半部北側で検出された。現状で長辺4.5m、短辺4.2mの方形を呈しており、深さ0.6mを測る。出土遺物は少ないが、常滑こね鉢の破片1点が図化できた(同図-12)。土坑B-35は、土坑B-31の北に隣接する。擾乱をうけているため本来の形状は不明であるが、現状で椭円形を呈しており、長辺2.3m、短辺2.2m、深さ0.6mを測る。出土遺物は少ないが、土師器皿と瓦器碗が図化できた。時期は13世紀と考えられる(同図-7,8)。土坑B-37からは、瓦器碗が出土しており、時期は14世紀と考えられる(同図-9)。土坑B-47からは、瓦器皿が出土しており、時期は13世紀と考えられる(同図-10)。



図I-104 B地区東部 土坑出土土器

4. 土器溜まりB-1 (図I-105,68、写I-14-1・19-1)

東半部の南端で検出された。瓦器碗や土師器小皿を中心とした土器群が、地山面で一面にわたって検出されたものである。範囲は南北3.5m以上、東西7m以上であるが、南側は調査区外におよんでいるほか、北側は攪乱により壊されているため、本来の範囲は不明である。西部で溝B-3や溝B-4と重複しているが、この部分に攪乱をうけているため、前後関係ははっきりしない。ほぼ同時期に廃絶したものと考えられるが、遺物の時期からは溝B-3・溝B-4より古いことも推測される。

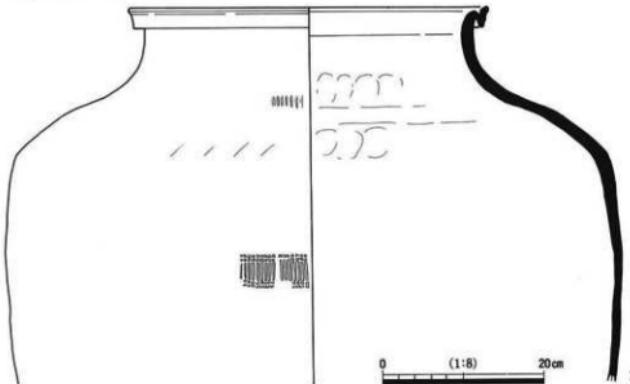
上面は削平されており、現状での深さは約0.2mほど残存していたのみであったが、本来深く掘られたものではなかったことが推測され、検出された土器はあまり重なりあってはいなかった。出土遺物のうち、土師器小皿・瓦器碗はほぼ完形のものが多くみられ、まとめて一ヵ所に置かれた状態であった。ほぼ全面に土器が散乱しているが、特に西半部に集中している。また、埋土からわずかながら炭化物や焼土なども検出されている。

遺物は、瓦器碗や土師器小皿が中心であるが、軒丸瓦や鬼瓦などの瓦類や陶磁器もみられる（図I-105,106）。瓦器碗は、遺物全体量の過半数を占め、完形のものが多量に出土している。13世紀後半のものが約20点点みられるほか、高台がわずかに残るものと無いものが100点を越える。土師器皿・小皿も完形で多量に出土しており、全体量の4割近くを占める。

他の器種は少量であるが、瓦質鉢・羽釜・甕、土師器羽釜、須恵器壺・甕・こね鉢、常滑甕や青磁・白磁碗、鑄型破片（写I-75-2）なども出土している。須恵器壺（図I-106-31）は、口縁端部および底部を欠損するもので、産地が不明のものである。（同図-19）の須恵器こね鉢は、赤褐色に焼かれた東播系のものである。（同図-20）の須恵器甕は、外面の平行叩き目が縦および横方向に重ねて施されている。

常滑甕は大型のもので、口縁部が3点あり、いずれも（図I-105）と同様の形態をしており、体部のスタンプ紋は、（写I-75-4～8）のように5種類のものがある。

時期は、古いもので12世紀にはいるものがあるが、瓦器碗や白磁などから、14世紀後半から15世紀前半のものが主体を占めるものと思われる。



図I-105 B地区東部 土器溜まりB-1 出土土器 (1)

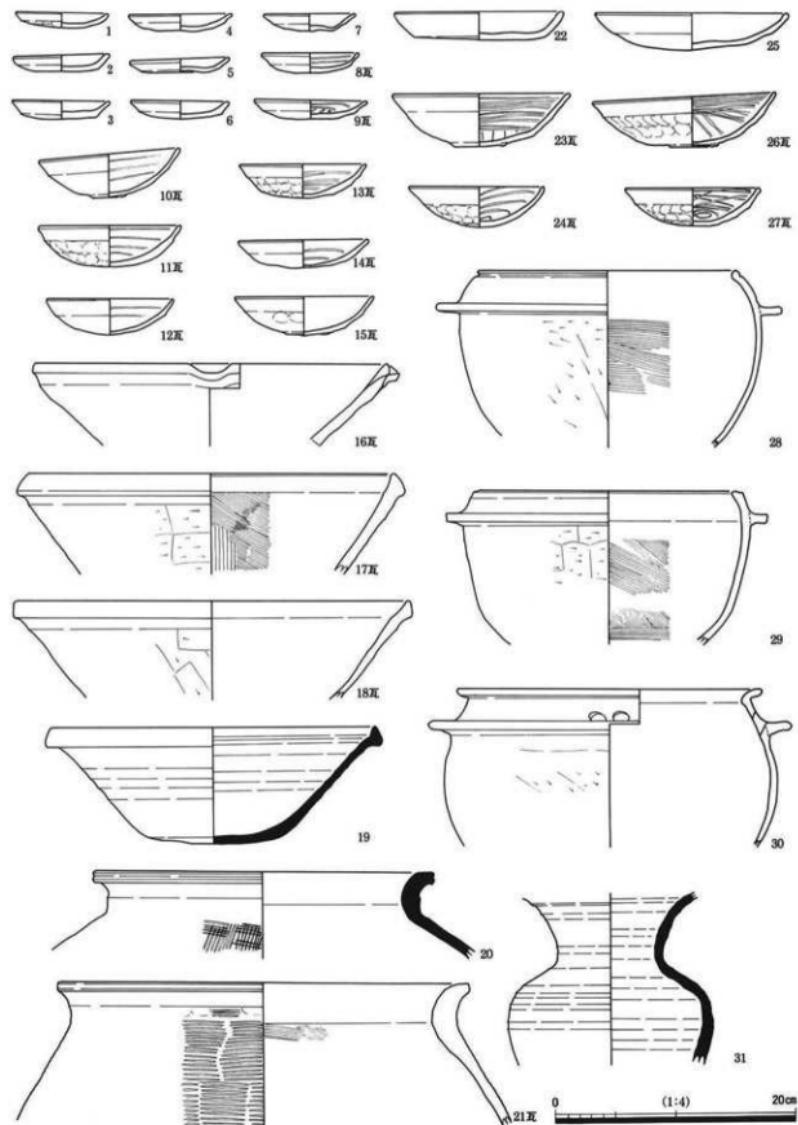


図 I - 106 B 地区東部 土器溜まりB-1出土土器 (2)

5. 井戸

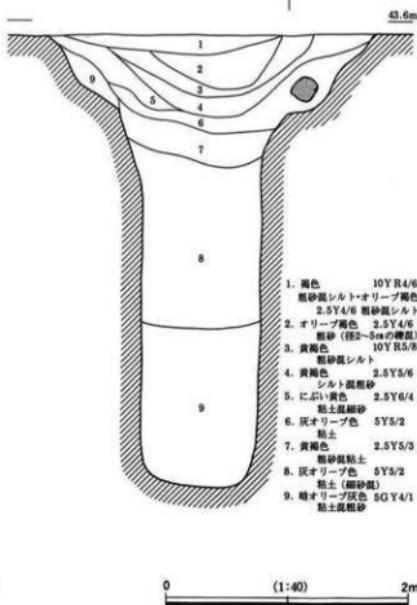
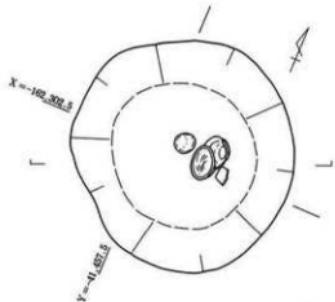
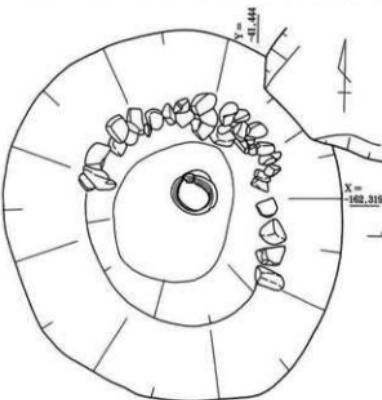
西半部の周辺で多く検出されており、方形区画の内部では井戸と考えられる土坑が2基みられるのみである。石組をもつ井戸B-1・土坑B-71以外はすべて素掘りの井戸で、井戸枠をもつものは検出されていない。深さ2m以上のものが多く、底まで掘削できたものはほとんどなかった。

(1) 井戸B-1 (図I-63,64,108、

写I-20-2,3)

西半部の南東端で検出された。溝で囲まれた区画の南東隅に位置しており、溝が途切れている部分にあたる。時期は少し異なるが、近接して井戸B-2や井戸と思われる土坑B-7が掘削されており、生活用水を得る場所に位置していることがわかる。

平面形は径2.9mの円形を呈しており、深さ約3.7mである。上部は擂鉢状で、底部は径約1mの円形となり、壁はほぼ垂直に下がる。壁



図I-107 B地区東部 井戸B-9平面・断面図 図I-108 B地区東部 井戸B-1平面・断面図

が垂直に下がる部分で、径20cm程度の礫を用いた石組が検出されたが、南半部は崩れており、残っていなかった。石組はほぼ1段で、上部のみに施されていたようである。上層は人為的に埋められているが、石組の礫は下層からも検出されたため、石組は井戸の使用中にすでに崩れていたものといえる。底からは土師器小皿・羽釜、瓦器碗・小皿、須恵器甕などが出土した。これらの下層出土遺物から、井戸の時期は14世紀後半と考えられる（図I-109-1～3,14,15）。

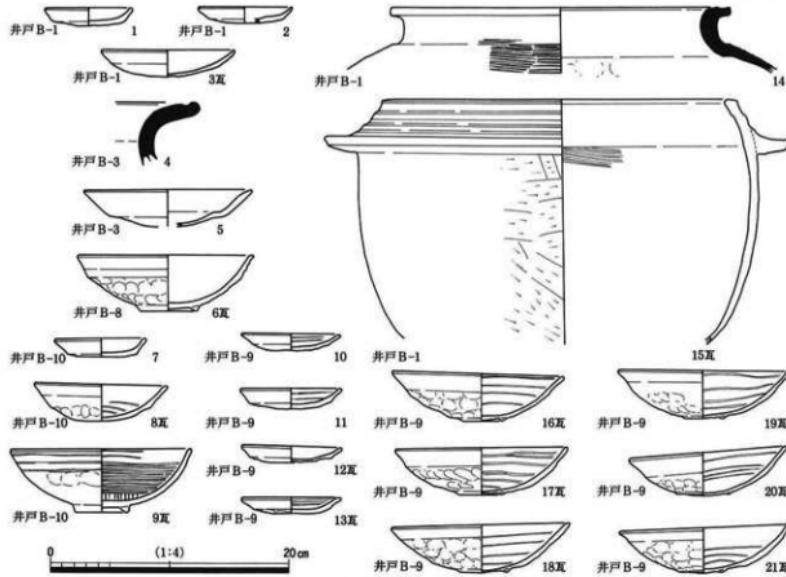
（2）井戸B-8（図I-109-3）

西半部の北西端で検出された。溝B-52と溝B-33の合流部に位置しており、溝の底部から検出された。検出面での平面形は径1.0mの円形を呈しており、壁はほぼ垂直に下がる。上層では埋土に径15cm程度の礫が含まれており、人為的に埋められた様相を示している。上層からは瓦器碗や土師器小皿などが出士した。底まで掘削していないため、井戸の時期ははっきりしないが、上層出土土器は13世紀末～14世紀にかけてのものと考えられる（図I-109-6）。

（3）井戸B-9（図I-63,100,107、写I-21-2）

西半部の土坑B-55の底部で検出された。この井戸は、方形区画内の建物に生活用水を供給していたものと考えられる。検出面での平面形は径1.0mの円形を呈しているが、底に向かってやや狭くなっている。検出面から約0.5m下がった部分で、土師器小皿と瓦器碗・小皿がまとまって出土した。ほぼ完形のものが多く、単に廃棄されたものというよりも人為的に置かれたものと考えることができる（図I-109-10～13,16～21）。時期は、13世紀～14世紀中頃のものと考えられる。

西半部の北端で検出された井戸B-10からは、土師器皿や瓦器碗が出土しており、13世紀初頭～14世



図I-109 B地区東部 井戸出土土器

紀後半のものと考えられる（図I-109-7～9）。石組井戸と推測される土坑B-71を含めて井戸からの出土遺物は、ほとんどが13世紀初頭～14世紀後半を中心としたものであることから、検出された井戸は、ほぼ同じ時期かそれ以前から連続して使用されていたことが推測される。

6. 出土陶磁器（図I-110～113、写I-77～83）

B地区東部から出土した陶磁器には、遺構の項で述べた備前掘鉢・甕・常滑こね鉢・甕などのほか、中国製天目茶碗・青磁碗・壺・鉢・白磁碗・皿・壺・褐釉壺・瀬戸美濃水滴・花瓶・鉢などがある。総点数は、破片も含めると130点をこえるが、完形のものはほとんどみられない。ほかの遺構と接合するものもみられることから、遺構別ではなく、地区全体の陶磁器を種類別にまとめた。

中国製天目茶碗は数点あり、井戸B-5から出土したもの（図I-110-2）は、完形である。

青磁は、陶磁器の全体量の7割強を占める。壺の体部破片が2点、鉢が1点、皿が3点みられるのみで、他は碗である。碗には、連弁を施すものが多く、雷紋や無紋のものがある。（図I-111-4）は、龍泉窯系のものである。白磁には、四耳壺が2点、合子が1点あり、他は碗・皿である。皿の底部に墨書きを施すものが2点出土している。

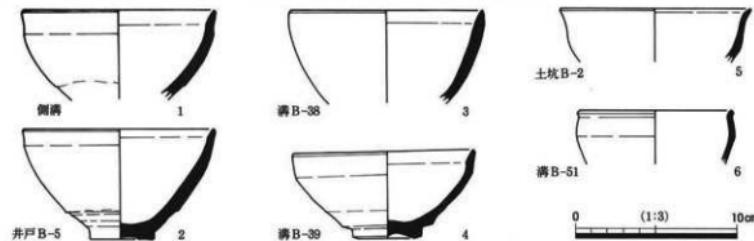
瀬戸美濃では、水滴・仏花瓶・土瓶・合子が各1点ずつ出土しており、他は鉢である。

7. 出土瓦質火鉢・瓦質製品（図I-114～122、写I-84～93）

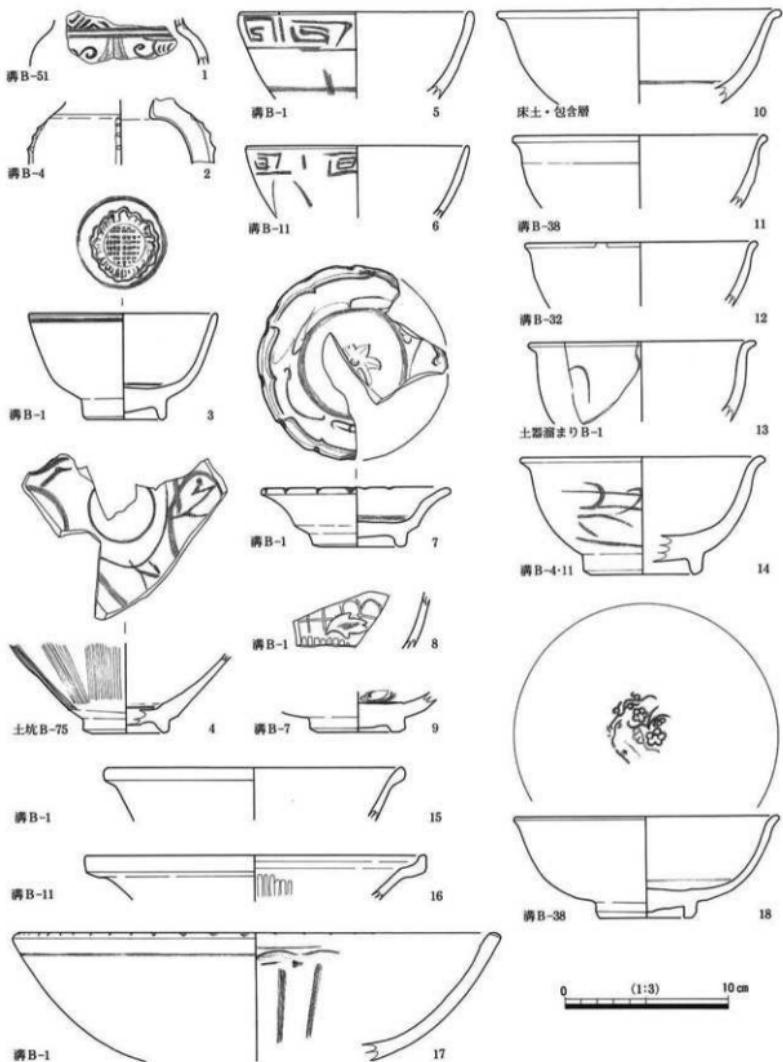
B地区東部から出土した中世の瓦質火鉢は、接合後個体確認をした結果、総数150点以上を数える。ここでいう瓦質火鉢とは、火鉢、いわゆる風炉・火炉の類および香炉などを総称したものである。陶磁器と同様に、ほかの遺構と接合するものが多くみられることから、遺構別ではなく、地区全体の瓦質火鉢・瓦質製品を種類・器種別にまとめた。以下のように形態などにより、細分することができる。

口径が30cm前後の大型火鉢には、器高20cm以下の浅鉢形火鉢と器高30cm前後の深鉢形火鉢がある。浅鉢形火鉢には、円形のものと方形のものがあり、ほとんどのものに脚がつく。円形のものには、口縁部が直口のものと内湾するものの2種類があり、直口のものには、梅形のものがある。深鉢形火鉢には、円形のものがあり、円筒形と風炉形の2種類に分類できる。円筒形のものには台形の脚がつき、風炉形のものには、獸足を模したものがつく。風炉形の肩部には透かし孔が穿たれている。

香炉は、口径10cm前後の小型のもので、円形のものと方形のものがある。また、その蓋と思われるものがある。円形のものには、直口のものと受け部をもつものがあり、直口のものには脚がつかない。方形のものは1点のみ出土しており、脚はつかない。さらに、口径20cm前後の中型のもので、火鉢とも香炉ともいえるものがあり、無紋の浅鉢形で口縁部が内湾するものと、直口のもの、屈曲して水平に伸びる口縁部をもつものがある。手焼り形火鉢は、1点のみ、小型のものがある。



図I-110 B地区東部出土 陶磁器（1）〔中国製天目茶碗〕



図I-111 B地区東部出土 陶磁器(2) [青磁]

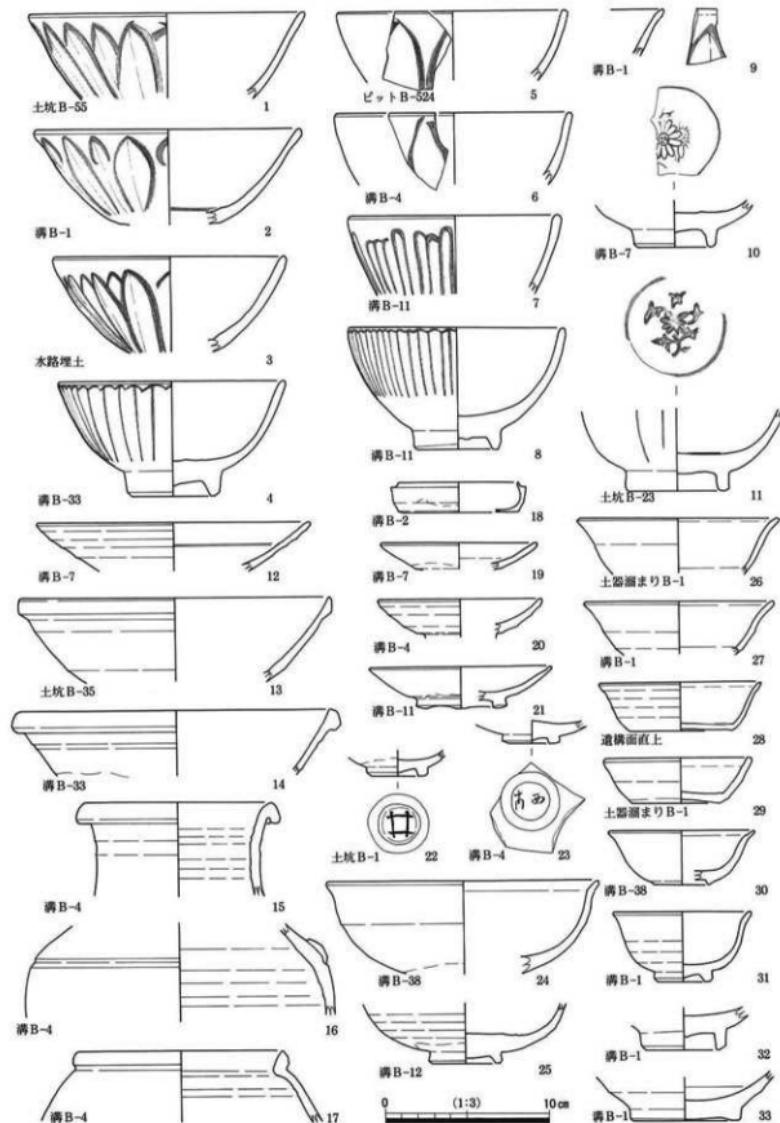
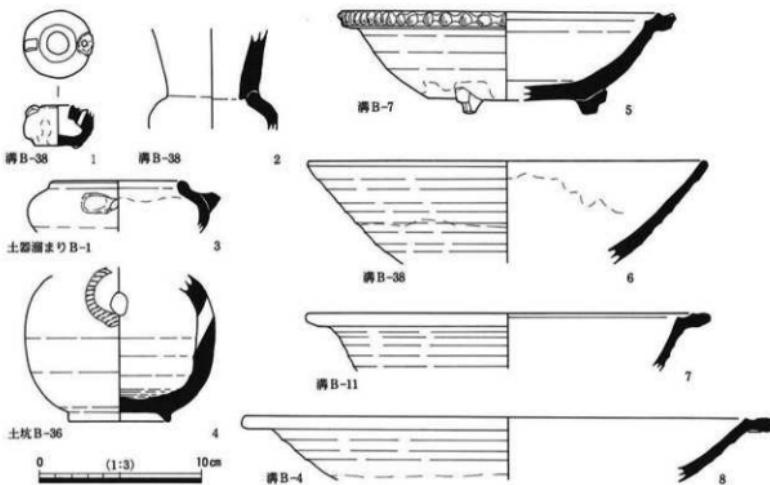


図 I - 112 B 地区東部出土 陶磁器 (3) [青磁・白磁]



図I-113 B地区東部出土 陶磁器(4)【窓戸・美濃焼】

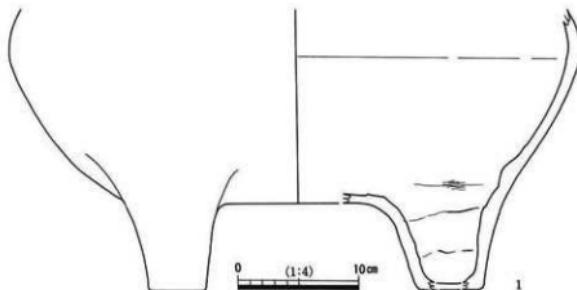
火燈は、全体形のわかるものは無い。1点のみ、天井部破片がある。

その他の瓦質のものには、護摩鉢、仏花瓶、僧形像頭部、人物像胸部、灯明台台座、十能、用途不明品などがわずかに出土している。

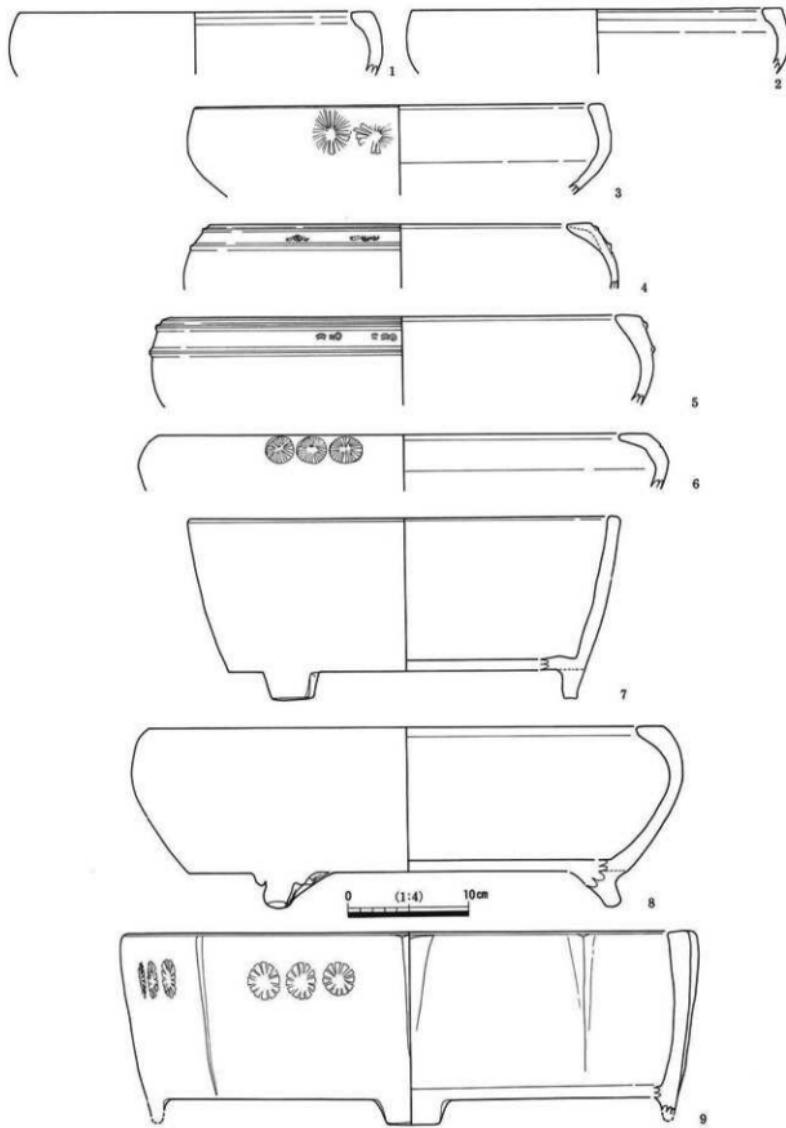
以上の瓦質火鉢および瓦質製品は、I調査区内の他地区においては散見されるものであるが、特にB地区東部においては多量に出土した。それらの出土状況が青磁・白磁の出土状況と同様で、溝の中から多量の瓦に混じって出土した。また、他の遺構出土のものと接合するものがあることから、一度廃棄されたものが遺構の削平とともに、再堆積したものと考えられる。

8. 出土石製品・包含層出土遺物

出土遺物のなかには、土器のほかに石製品もみられる。硯、片口鉢、砥石などがわずかに出土している(図I-123)。溝B-4から硯と石製片口鉢、土器窓まりB-1から砥石が2点検出された。



図I-114 B地区東部出土 瓦質火鉢(1)



図I-115 B地区東部出土 瓦質火鉢(2)

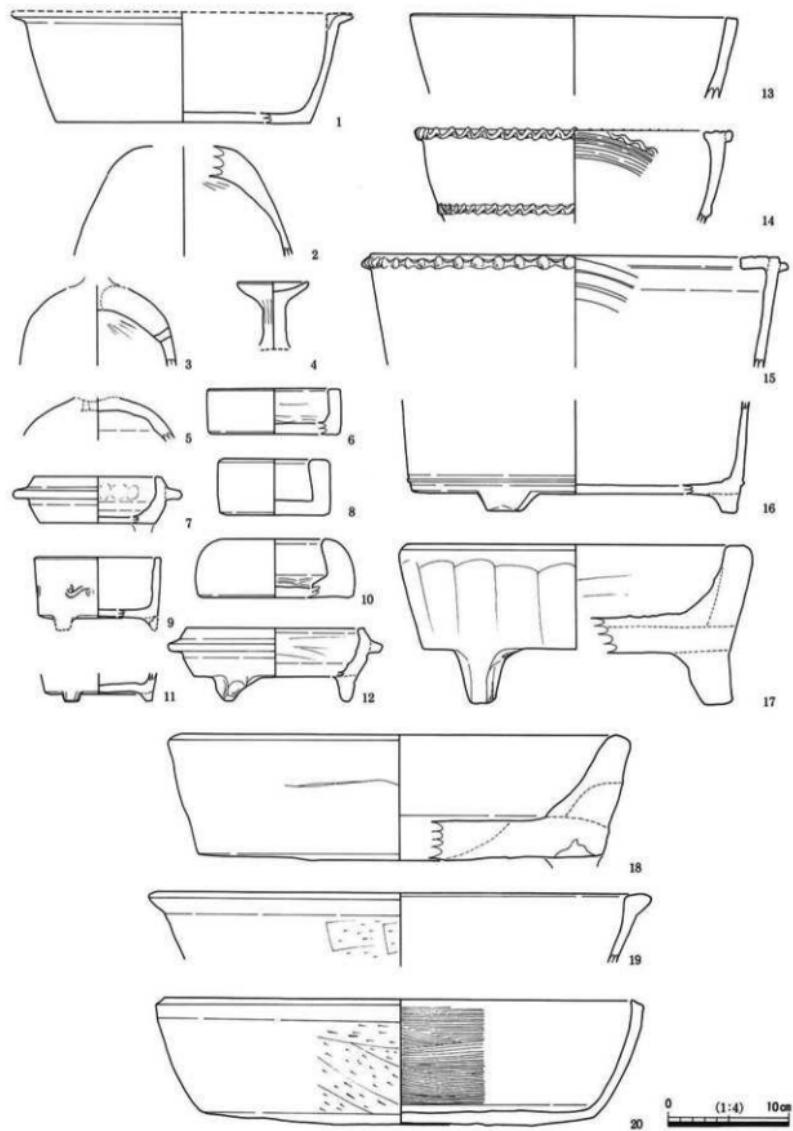


図 I-116 B地区東部出土 瓦質火鉢(3)

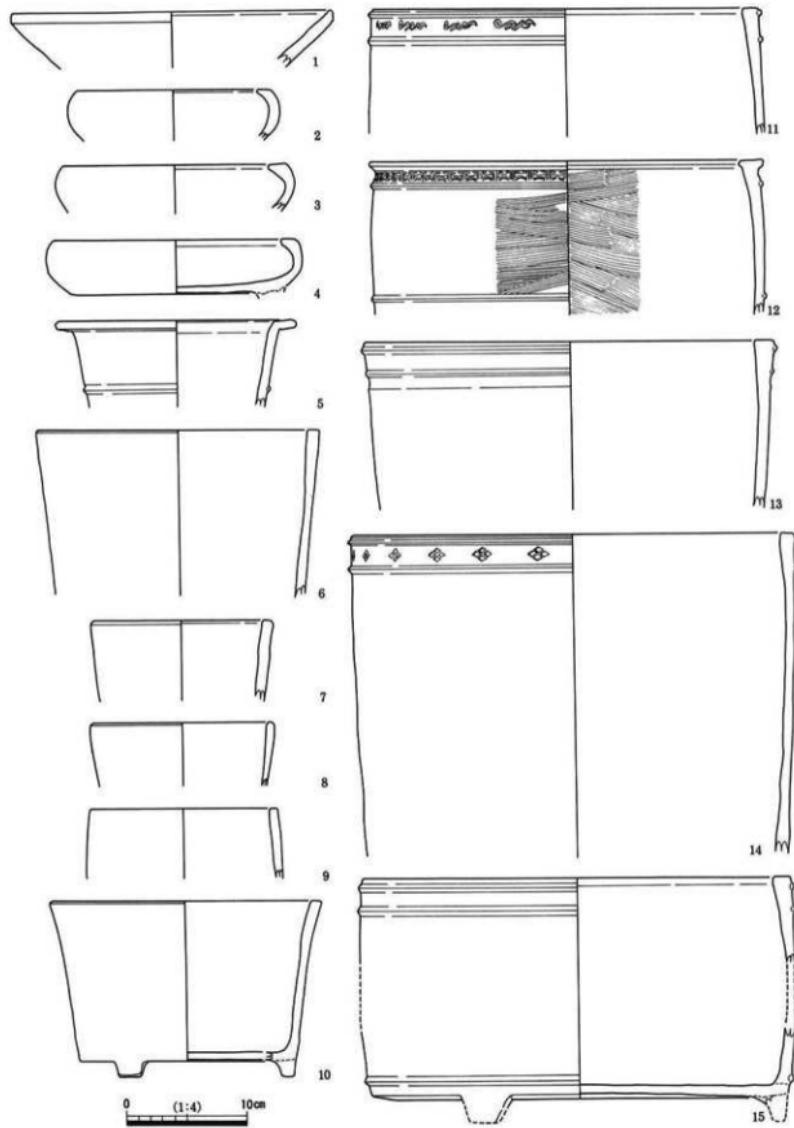


図 I-117 B地区東部出土 瓦質火鉢 (4)

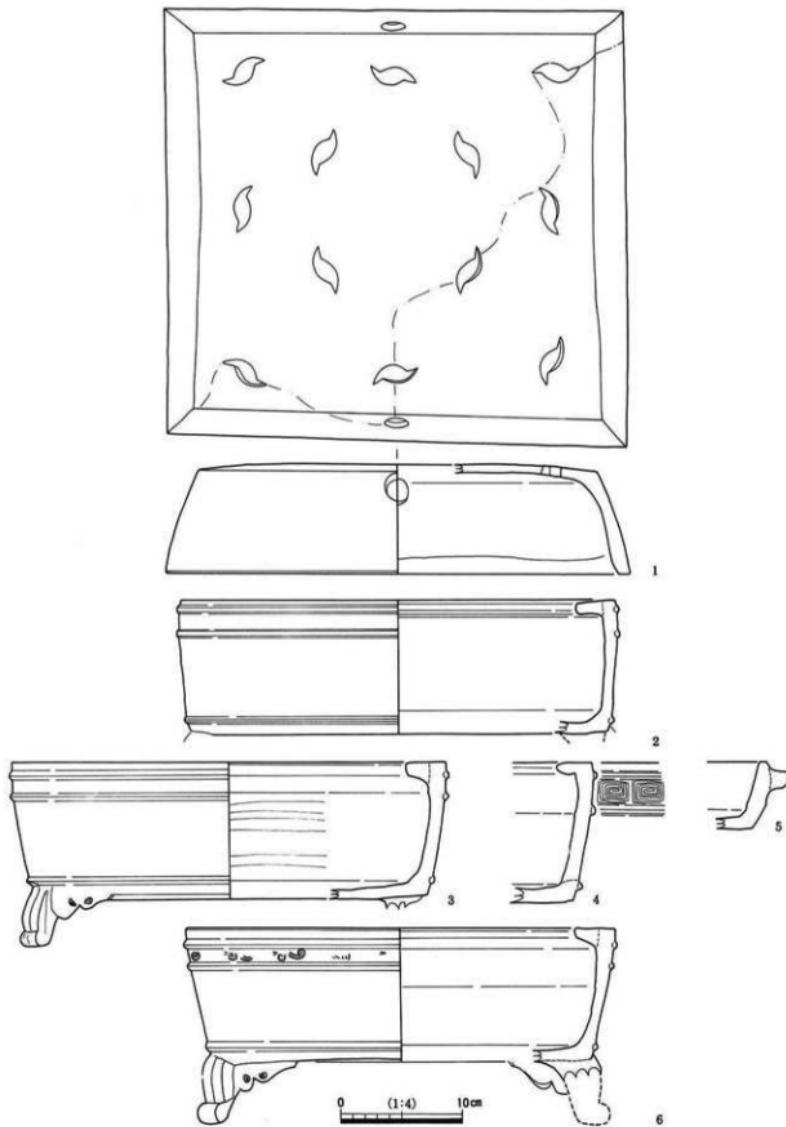


図 I - 118 B 地区東部出土 瓦質火鉢 (5)

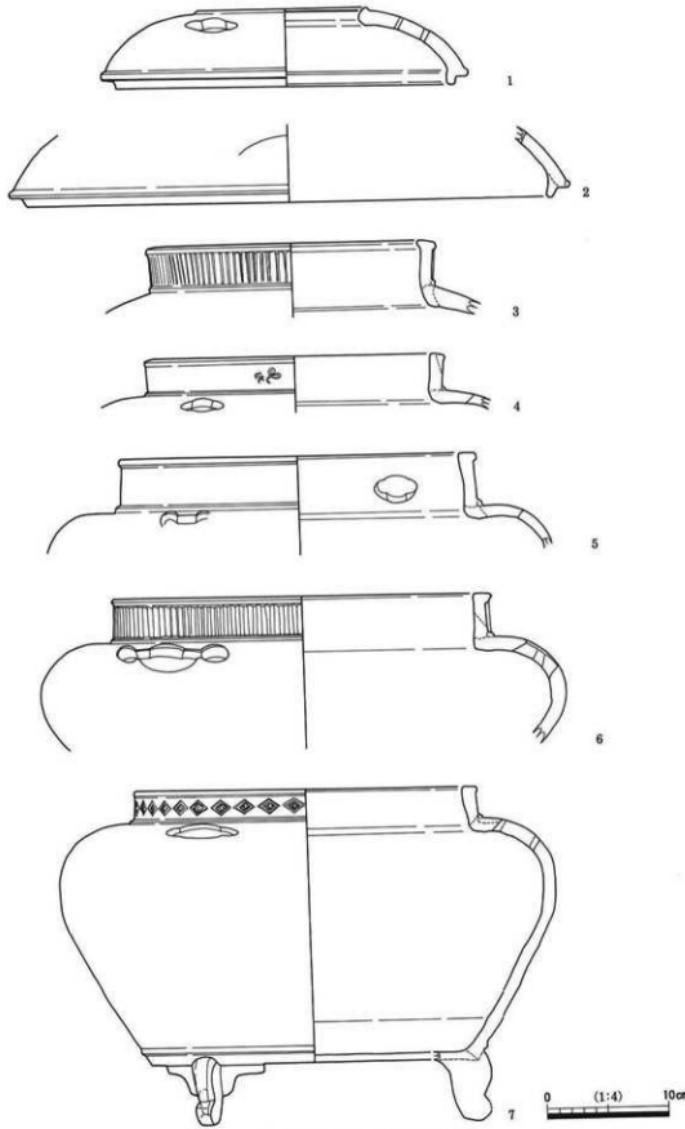
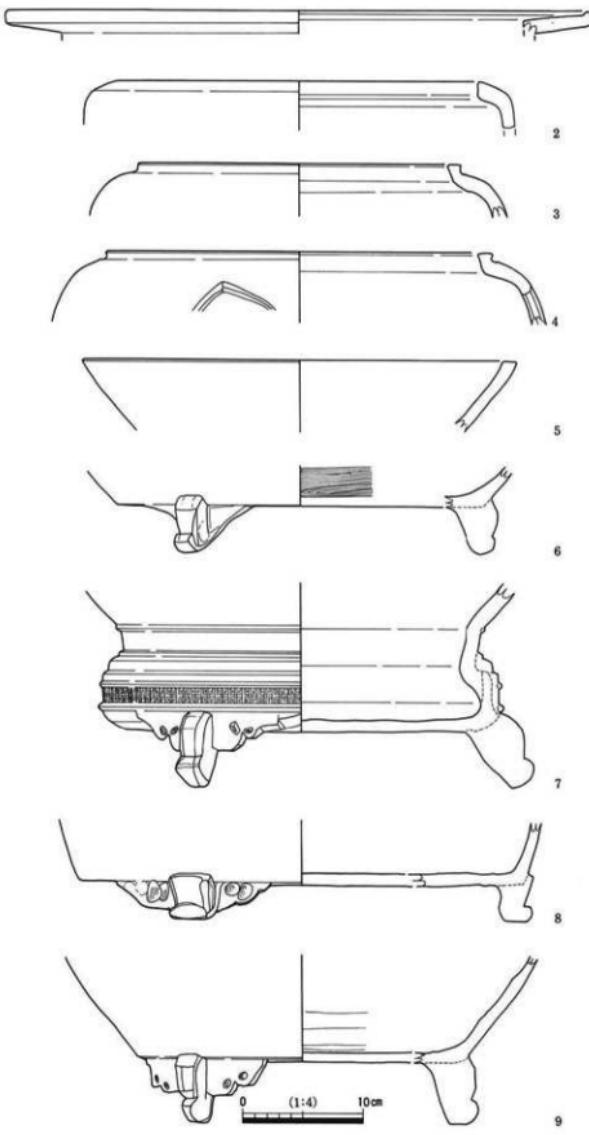


図 I - 119 B 地区東部出土 瓦質火鉢 (6)



図I-120 B地区東部出土 瓦質火鉢(7)

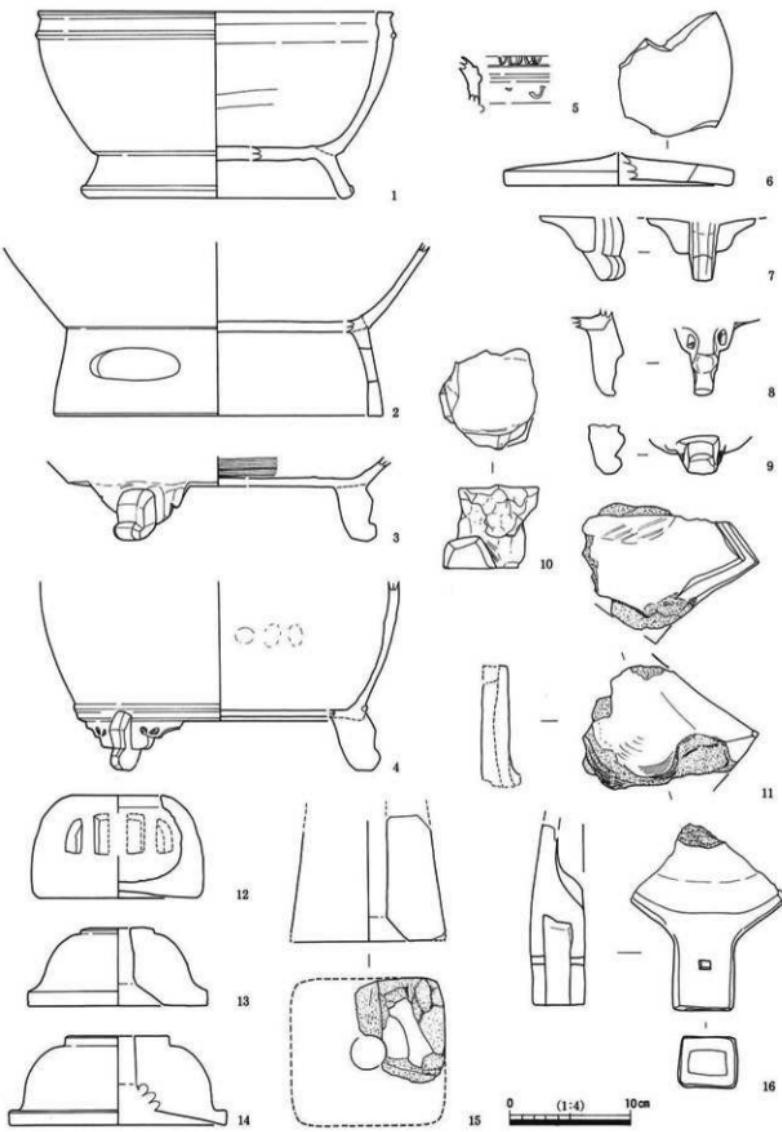


図 I-121 B 地区東部出土 瓦質火鉢 (8)・瓦質製品 (1)

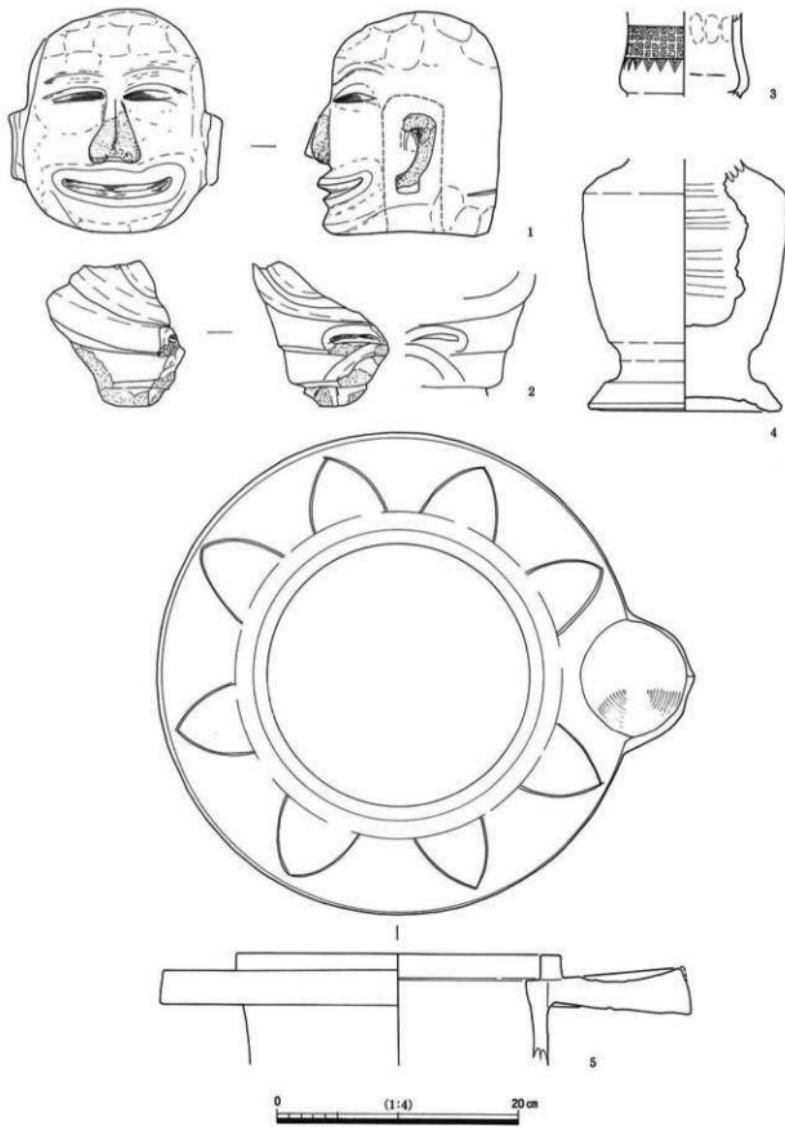


図 I - 122 B 地区東部出土 瓦質製品（2）※ 1,2は縮1/2

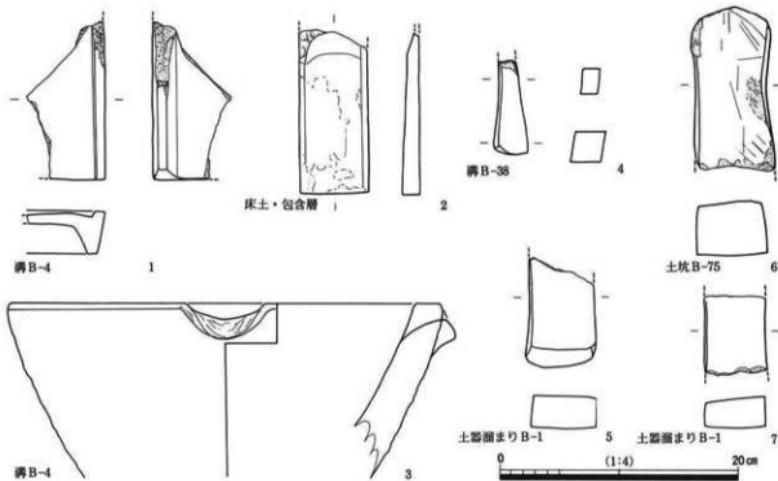


図 I-123 B地区東部出土 石製品

9. 小結

B地区東部では、溝による区画が検出され、遺物では土器のほか、多量の瓦が出土した。また、土器の中には、瓦質火鉢や陶磁器類が比較的多い割合で見つかった。瓦質の灯明台座や仏花瓶、僧形像、護摩鉢などもみられることから、寺院関連の建物の存在が推測される。瓦や瓦質火鉢などは、多くの区画溝の間で接合するものがあることから、寺院の廃絶とともにこれらの遺物は、溝に廃棄されたものと考えられる。

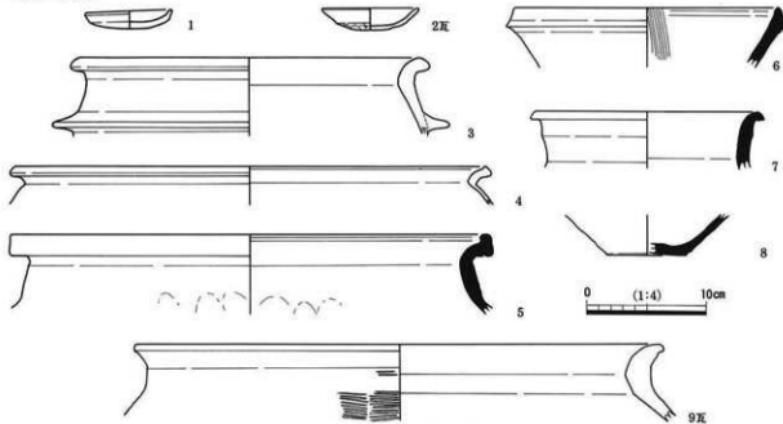


図 I-124 B地区東部 包含層出土土器

第4節 B地区西部（4B～7Bトレンチ）

B地区西部では、幅約7m、深さ約1.5mの堀を伴う城郭跡が検出された。城郭は、東側に段丘崖、西側に谷を臨む段丘面上に立地しており、地形を利用している。規模は、小字の範囲から推定すれば、東西約70m、南北約100mのほぼ方形となり、その南半分が発掘調査によって明らかになったこととなる。堀は、小字の『城ノ山』地区の西端や南端と一致しており、周辺には隣接して『城ノ前』『惣福』『馬場の脇』などの字名もみられる。なお、調査区北側の水田において、レーダー探査による堀の確認作業をおこなった結果、堀がめぐることが判明し、城郭の範囲が小字の『城ノ山』の範囲とほぼ一致することがわかった。

遺構は、ほぼ調査区全面で検出されている。ただ、堀の外側では、南東端部のみに遺構が造られており、ほかの部分では遺構はほとんどみつかっていない。城郭内部では、溝の方向や土坑の配置などに一定の規則性が認められるほか、多くの複雑な重複関係がみられ、頻繁な遺構の変遷を示している。堀のすぐ内側には堀と同じ幅の平坦部が認められ、土壙の存在が推測される。城郭の存続時期については、おおむね13世紀中頃には出現し、16世紀には廃絶したものと考えられる。

今回発見された城郭については、『日本城郭体系12』において、小字名の調査などによって以前よりその存在が指摘されていた。しかし、これまでのところ古文書等の文献資料の中には、この城郭についての記録は見つかっていない。

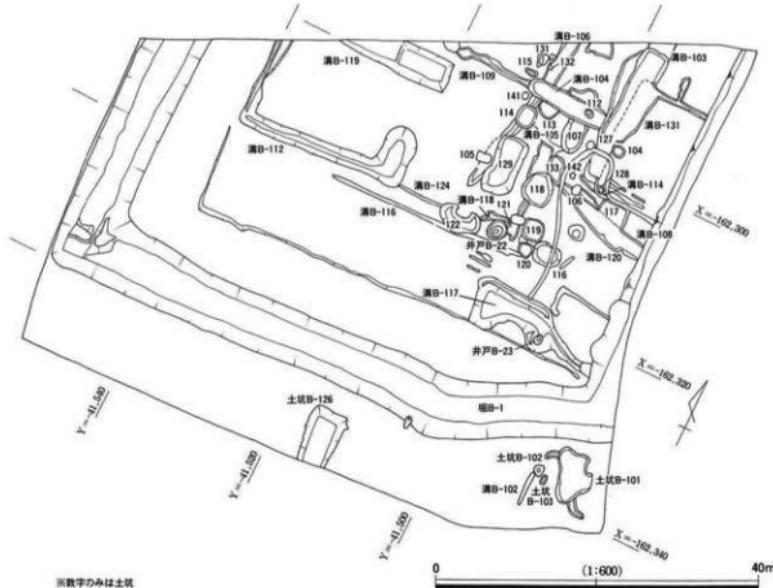


図 I-125 B地区西部 中世遺構略図

調査区南東端部の遺構群は、さらに調査区南側に拡がるものと考えられる。溝や土坑、ピットなどが検出されており、中には扁平な砾を丁寧に敷き詰めた特殊な土坑もみられた。これらの遺構は、城郭と同時期に存在したものと考えられる。堀をはさんで対岸に位置しており、はっきりしないが、城郭と関連のある遺構群といえる。

1. 建物

多数のピットの中から計11棟の建物が復原された。さらに多くの建物の存在が考えられるが、復原は困難であった。建物の棟方向には若干のズレがあるものの、ほぼ東西・南北方向に一致している。また、ピットの集中する範囲もほぼ限定されることなどから、建物の配置に際しては、当初から規則性があったものと考えられる。ピットの中には、瓦や10~20cm大の砾が底から検出されたものがみられ、これらを根固めか、敷石の代わりに用いた建物が存在していたものと推測される。

(1) 建物B-11(図I-126)

調査区北端部のはば中央で検出された。建物B-12・建物B-13・建物B-15と重複し、建物B-13より新しい。規模は東西3間(9.5m)×南北4間(8.7m)で、主軸方向はN-6°-Wである。東西列の柱間が長く、平均は東西3.2m、南北2.2mで、面積は約82.7m²である。柱穴掘方は径31~68cm、深さは9~46cmを測る。遺物は、瓦、瓦器碗・小皿、瓦質羽釜、炉壁などの細片が出土している。

(2) 建物B-12(図I-126)

建物B-11、建物B-13と重複しているが、新旧関係ははっきりしない。規模は東西2間(4.7m)×南北2間(5.4m)で、主軸方向はN-6°-Wである。南北列の柱間がやや長く、平均は南北2.6m、東



図I-126 B地区西部 建物・櫛略図

西2.4mで、面積は約25.4m²である。柱穴掘方は径24~46cm、深さは7~42cmを測る。遺物は瓦や瓦器など細片が出土している。

(3) 建物B-13

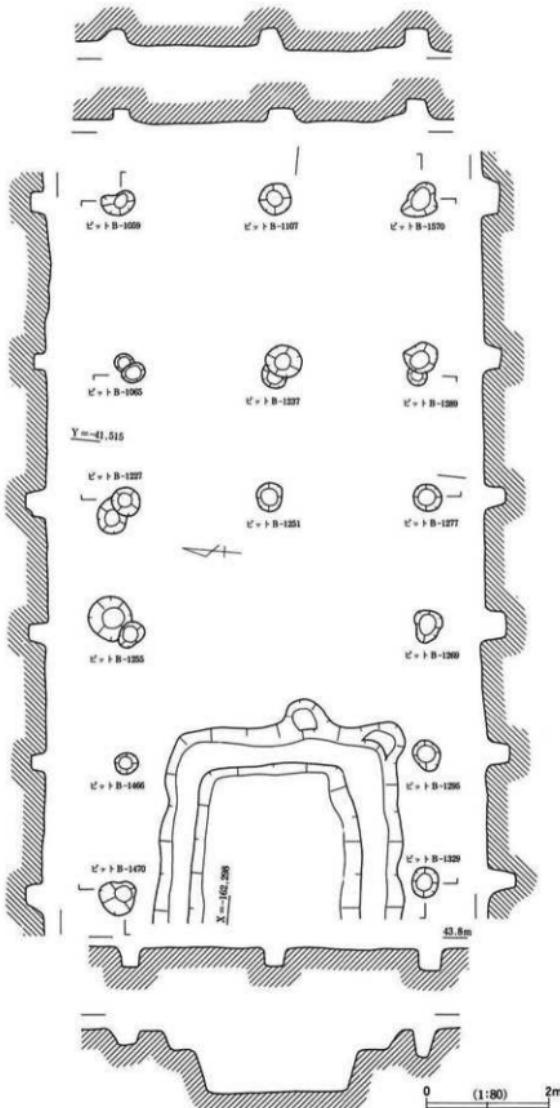
(図I-126,127)

調査区北端部の中央で検出された。溝B-119と重複しており、溝より古い。規模は南北2間(4.9m)×東西5間(11.4m)で、主軸方向はN-85°-Eである。柱間は、東西列の東端1間が2.6mと長くなるほかはほぼ等間隔で、平均は東西2.2m、南北2.5mを測り、面積は約55.8m²である。柱穴掘方は径27~69cm、深さは18~56cmを測る。柱穴の中には、径15cmの柱根が残存するものや、10~15cmの大の礫を根石とするものがみられる。遺物は、瓦器碗や白磁碗が出土しており、時期は15世紀と考えられる(図I-132-21,32,33)。

(4) 建物B-14

(図I-126,128)

調査区東部で検出された。土坑B-118と重複しており、土坑より古い。規模は東西2間(5.2m)×南北2間(4.7m)で、主軸方向はN-3°-Wである。東西列の柱間がやや長く、平均は東西2.6m、南北2.4mで、面積は約24.4m²である。柱



図I-127 B地区西部 建物B-13平面・断面図

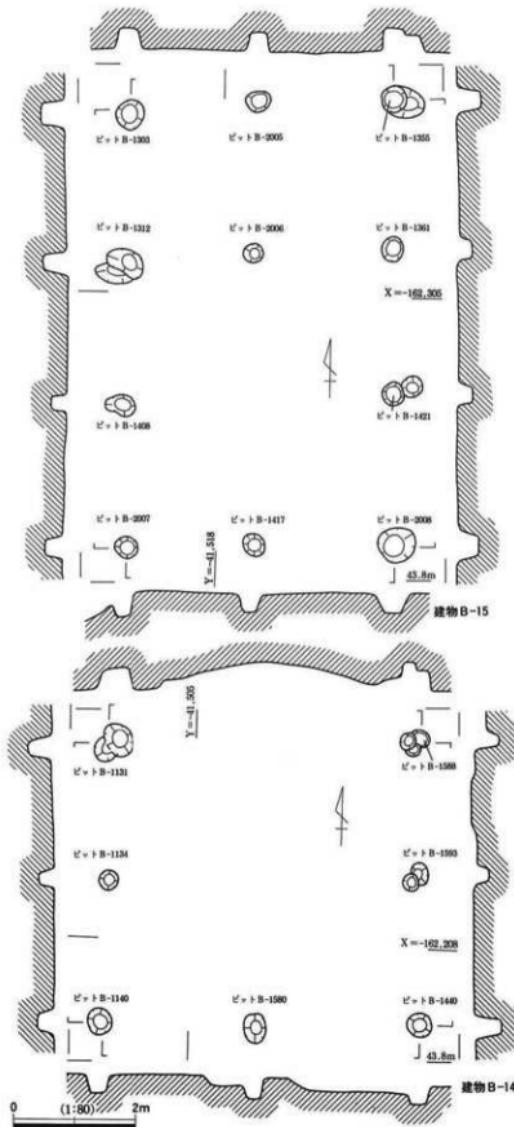


図 I - 128 B 地区西部 建物B-14・建物B-15平面・断面図

穴掘方は径28~62cm、深さは22~40cmを測る。遺物は、土師器小皿が出土している。

(5) 建物B-15

(図 I - 126, 128)

建物B-13の南に隣接する、東西2間(4.3m)×南北3間(7.1m)の建物である。溝B-112と重複し、溝よりも古い。主軸方向はN-2°-Wで、建物B-13とはほぼ直交する。桁行方向の柱通りは、建物B-13の西側から2・4列目の梁行の柱通りと一致する。南北列の柱間がやや長く、平均は南北2.4m、東西2.2mを測り、面積は30.5m²である。柱穴掘方は径30~60cm、深さは18~44cmを測る。10~20cm大の礫がみられるものもあるが、遺物は出土していない。

(6) 建物B-16

(図 I - 126, 136、写 I - 25-1)

調査区北西部の溝B-112と溝B-119に囲まれ、東側に開口部がある区画内で検出された。柱穴の遺存状況は悪く、未検出の柱穴が多い。柱穴掘方が浅いことや、溝B-112より20~40cm大の礫が多く出土していることなどから、礎石建物であった可能性が考えられる。規模は東西4間(7.2m)、南北3間(4.5m)で、面積約32.4m²と推定される。北側には南北1間(1.4m)×東西3間(3.8m)の張り出し部が付く。周辺では数個のピットが検出されており、底がつく可能性も考えられる。柱穴掘方は径24~46cm、深さは4~22cmを測る。遺物は、土師器皿が出土

しており、時期は15世紀代と考えられる。

(7) 建物B-17(図I-126、写I-25-2)

調査区中央部で検出され、建物B-20と重複しているが、新旧関係は不明である。規模は南北2間(3.9m)×東西5間(9.9m)で、主軸方向はN-89°-Eである。柱間は不揃いで、東西列の西側2間分が約2.2m、東側3間分が1.8mで、南北列も北側1.5m、南側2.4mを測る。面積は約39.0m²である。柱穴掘方は径28~56cm、深さは16~28cmを測る。遺物は瓦器碗が出土しており(図I-132-40)、時期は14世紀末と考えられる。

(8) 建物B-18(図I-126,129、写I-25-3)

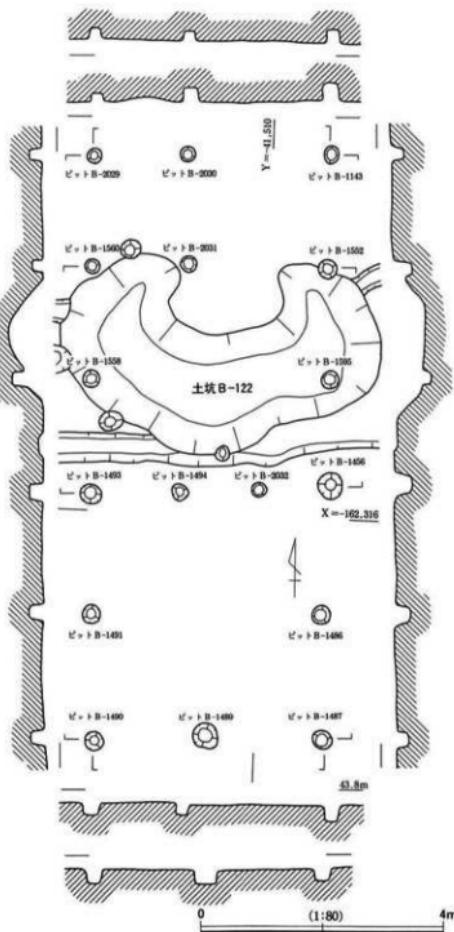
調査区中央部で検出された。規模は東西2間(3.9m)×南北5間(9.6m)で、主軸方向はN-3°-Wである。面積は約37.4m²である。柱穴掘方は径22~47cm、深さは4~40cmを測る。遺物は、須恵器こね鉢が出土しており、時期は14世紀前半と考えられる(図I-133-1)。

柱間は、南北列の北側3間分が1.8m前後、南端が2.1m前後、東西列は南端が1.8m前後のほか、北では西側が1.5m前後、東側が2.3m前後を測る。北側の東西列が不揃いなので、3間と考えることもできる。このことから、調査時には2間×5間の1棟の建物としていたが、北側が3間×3間、南側が2間×1間の2棟の建物の可能性も考えられる。

建物B-18は、建物B-13・建物B-17とともに特異な形態や構造から、厩舎のような建物と推定される。これらの建物は、城郭内の比較的遺構の少ない部分に位置しており、居住域とは離れている。また、建物B-17・建物B-18が、L字形に配置されていることも示唆的である。

(9) 建物B-19(図I-126,130、写I-25-4)

建物B-17の西約1mの地点に隣接する。建物B-20と重複しているが、新旧関係は不明である。規模は東西2間(3.2m)×南北2間(4.3m)で、主軸方向はN-4°-Wである。南北列の柱間が長く、



図I-129 B地区西部 建物B-18平面・断面図

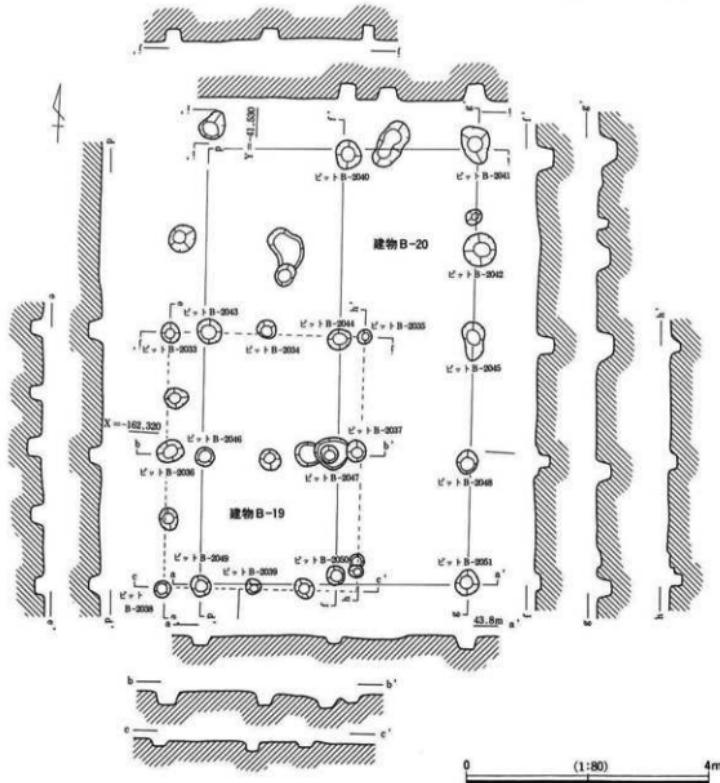
柱間の平均は南北2.1m、東西1.6mを測り、面積は約13.8m²である。柱穴掘方は、径24~44cm、深さは6~21cmを測る。遺物は出土していない。

(10) 建物B-20(図I-126,130、写I-25-4)

東西2間(4.3m)×南北4間(7.2m)の建物で、主軸方向はほぼ方位と一致する。柱間は、南北列のうち北側2間が約1.6m、南側2間が約2.0m、東西列の平均は2.1mを測り、面積は約31.0m²である。柱穴掘方は、径32~64cm、深さは12~26cmを測る。遺物は出土していない。

(11) 建物B-21(図I-126,149)

調査区東部で検出された。建物B-14、土坑B-118、溝B-105と重複しているが、それより新しい。東西2間(3.3m)×南北2間(3.8m)の建物で、主軸方向は、N-5°-Wである。南北列の柱間が長く、平均は南北1.9m、東西1.6mを測り、面積は約12.5m²である。柱穴掘方は、径18~44cm、深さは8~50cmを測る。遺物は、瓦質羽釜が出土しており、時期は14世紀代と考えられる(図I-133-9)。



図I-130 B地区西部 建物B-19・建物B-20平面・断面図

2. 棚

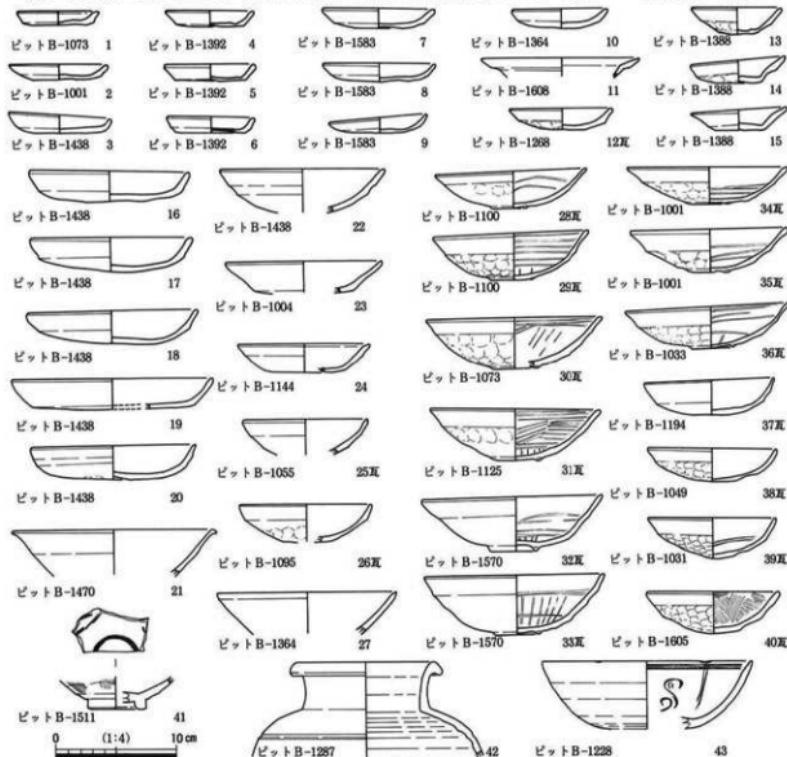
多数のピットの中から計9列の棚が復原された。いずれも方位とほぼ一致する。復原するにあたっては、建物の位置関係や方向などを考慮したが、建物と同様にお検討の余地を残している。

(1) 棚B-11・棚B-12(図I-126)

調査区北部で検出された。建物B-11から建物B-15を中心とする、東西約23m、南北21m以上の空間を区画すると考えられる。柱間はやや不揃いで、棚B-11が2.3~2.7m、棚B-12が2.4~2.7mである。柱穴掘方は径約15~32cm、深さは2~27cmを測る。柱穴からは遺物は出土していない。区画の南東部で途切れることから、この部分に出口が想定される。

(2) 棚B-13(図I-126)

棚B-11と棚B-12の中間で、これらとはほぼ平行して南北方向に7間分(約15m)



図I-132 B地区西部 ピット出土土器(1)

m) が検出された。さらに調査区北側に延びるものと考えられる。柱間はほぼ等間隔で、約2.0~2.2mである。柱穴掘方は径30~60cm、深さは17~51cmを測る。柱穴からは遺物は出土していない。

(3) 構B-15(図I-126)

建物B-16の東側に接して、南北方向に4間分(5.9m)が検出された。建物B-16との関連性は不明である。柱間は1.4~1.6mで、柱穴掘方は径22~40cm、深さ8~13cmを測る。遺物は出土していない。

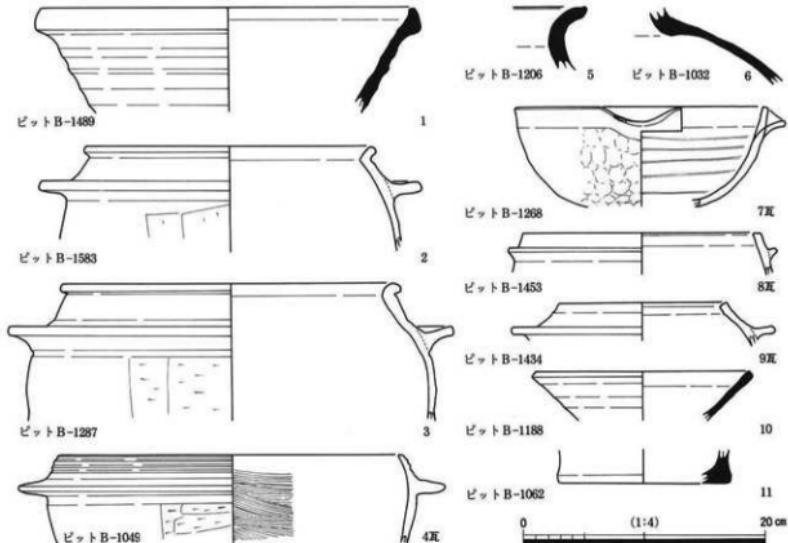
3. ピット(写I-26)

多くのピットが検出され、多くの遺物が出土している。ほとんどが柱穴と考えられるが、ほぼ完形の土師器皿や瓦器碗がまとまって出土したものもあり、土器埋納ピットといえるものもみられる。

ピットB-1438は、土器埋納ピットと考えられ、検出面で径32cm、深さ13cmを測る(図I-131)。ほぼ完形の土師器皿が6枚以上と、灯明皿と考えられる土師器皿が1枚重なった状態で検出された。土師器小皿の小片も多く出土している。時期は13世紀のものと考えられる。ピットB-1388からも土師器小皿が数枚出土しており、時期は14世紀末のものと考えられる。また、ピットB-1100からは、瓦器碗が2点出土しており、時期は13世紀末~14世紀初頭と考えられる。

ピット出土遺物は、土師器小皿・皿・羽釜、瓦器小皿・碗、瓦質鉢・羽釜、陶磁器などである。

土師器小皿・皿は、前述した土器埋納ピットからの出土が多く、時期はほぼ13~14世紀におさまる。瓦器碗も、土器埋納ピットから出土するものは完形が多く、13世紀後半~14世紀末のものがほとんどである。瓦質羽釜は、出土量が少ないが、時期は14~15世紀である。陶磁器は、時期幅があり、12世紀代のものから15世紀代のものがみられる。全体に13~14世紀におさまる遺物が多くみられることから、この時期に建物が頻繁につくられたことが推測される。



図I-133 B地区西部 ピット出土土器(2)

4. 溝

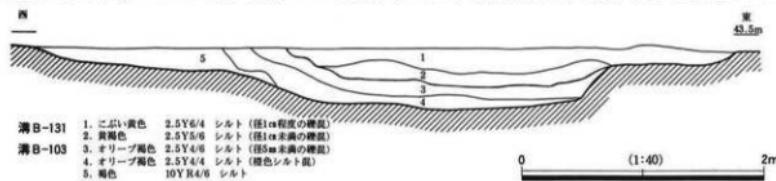
調査区東部でまとまって検出されており、方位と一致するものが多い。調査区北西部の溝B-112と溝B-119は、城郭の中で区画を形成している。建物群を区画するものや雨落ち溝などがある。その中で溝B-108と溝B-117は特異な形態を示している。

(1) 溝B-102 (図I-125, 143)

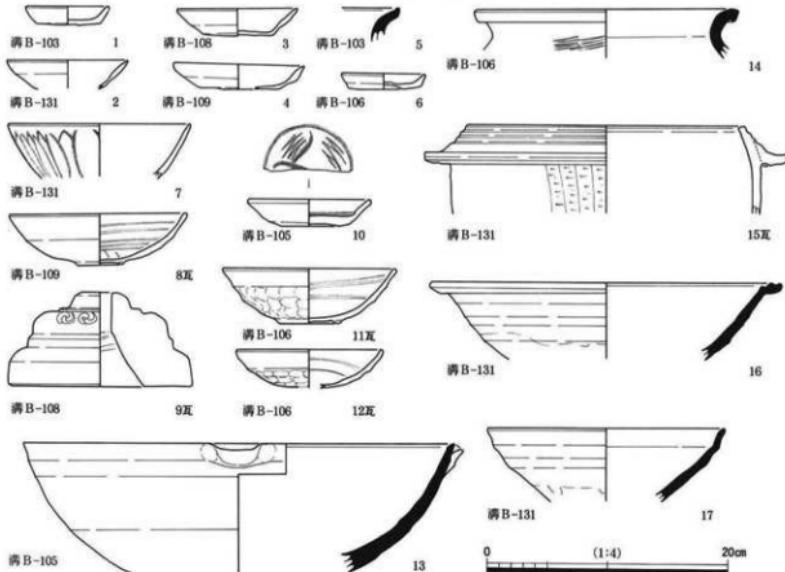
調査区南東端部の城郭外で検出され、長さ約4.3mである。幅0.5m、深さ0.1mを測る。北端は土坑B-102に続く。ピットの存在から、東側建物の雨落ち溝と考えられるが、建物は復原できなかった。遺物は、瓦器や土器類の細片が少量出土している。

(2) 溝B-103・溝B-131 (図I-125, 134)

調査区北東端部で検出された。溝B-103は、南北方向の溝で、北端は調査区外に延びる。溝B-108と重複しており、溝B-108より古い。溝B-104と接しているが、新旧関係ははっきりしない。長さ12.1m



図I-134 B地区西部 溝B-103・溝B-131断面図



図I-135 B地区西部 溝出土土器

以上、幅4.7m、深さ0.5mを測る。東半部は幅3.0m、深さ0.2mの規模で掘り下げられている。調査時には1条の溝としていたが、埋土や出土遺物の検討から、2条の溝が重複したものと考えられるため、東側部分を溝B-131とした。溝B-131は、長さ約7.8m以上、幅3.6m、深さ0.3mを測る。溝B-131の埋土は、溝B-103がオリーブ褐色シルトを主体とするのに対し、黄褐色シルトを主体としている。

溝B-103からは、瓦、瓦器椀・小皿、瓦質鉢・片口鉢・羽釜・甕、土師器小皿・羽釜、須恵器甕・こね鉢、青磁、陶器など多くの遺物が出土している（図I-135-1,5）。溝B-131からは、5~10cm大の礫とともに瓦質羽釜・灰釉陶器鉢などが出土した（図I-135-2,7,15~17）。出土遺物の時期は、13~15世紀のものと考えられ、時期幅がみられる。重複関係から、溝B-103が13世紀代、溝B-131が15世紀代につくられたものと考えられる。

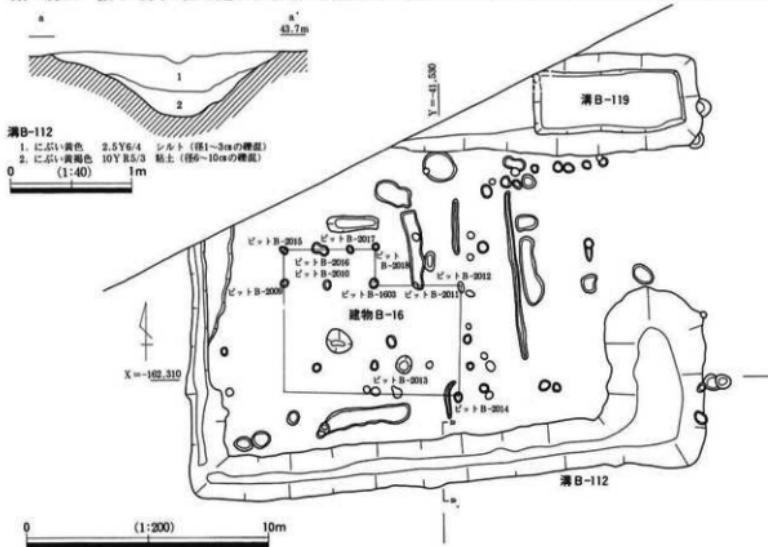
（3）溝B-104・溝B-109（図I-125）

溝B-104は、東西方向に延びる溝で、西端は溝B-109に続く。土坑B-107と重複し、土坑よりも新しい。長さ10.0m以上、幅2.6m、深さ0.2mを測る。溝B-109と接する付近で、20~30cm大の礫が多数投棄された状態で出土した。礫は肩部のみで検出されており、溝の内部からは見つかっていない。遺物は少ないが、瓦器椀・小皿、瓦質片口擂鉢、土師器羽釜、白磁の細片が出土した。

溝B-109は、溝B-104の延長上にあり、西端は調査区外に延びる。建物B-11・建物B-12と重複し、建物より新しい。長さ約7.6m以上、幅1.7m、深さ0.3mを測る。断面U字形の溝で、東側は徐々に浅くなり、溝B-104の方が低い。遺物は、瓦器椀や土師器小皿が出土している（図I-135-4,8）。

（4）溝B-106（図I-125）

東へ約15°振って真っ直ぐ延び、北端は調査区外に延びる。溝B-104や土坑B-114と重複しており、



図I-136 B地区西部 溝B-112周辺平面・溝B-112断面図

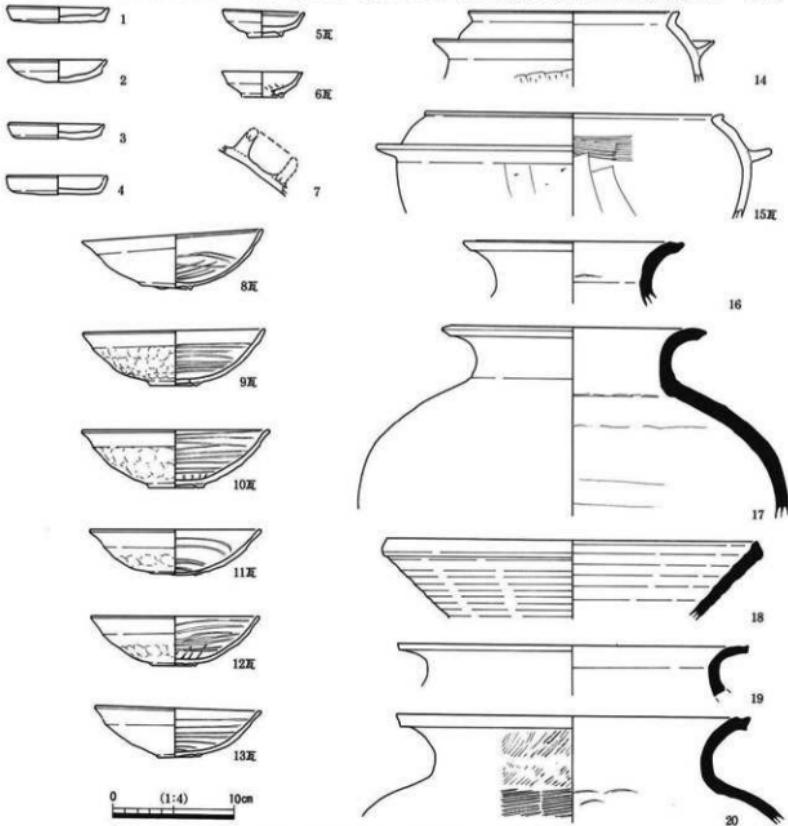
それより古い。南端は土坑B-129に続くが、新旧関係は明らかでない。長さ20m以上、幅1.5m、深さ0.4mを測る。瓦器椀・小皿、土師器小皿・羽釜、常滑甕、須恵器こね鉢等が出土している（図I-135-6,11,12,14）。遺物の時期は、13~14世紀のものと考えられる。

(5) 溝B-108（図I-125,147）

溝B-117から北上し、土坑B-107付近で北東へ曲がり、溝B-103と重複する部分でさらに南へ屈曲した後、土坑B-128の東側を通り、東へ折れて調査区外に出る。長さ約30m、幅0.6m以上、深さ0.1mを測る。埋土は粗砂、礫の1層である。瓦器椀・小皿、瓦質鉢・甕、土師器小皿・甕・羽釜、常滑甕、須恵器甕、青磁鉢、瓦質灯明台座などが出土している。時期は、15世紀代のものと考えられる。

(6) 溝B-112（図I-125,126,136、写I-27-2）

建物B-16の位置する部分を区画する凹字形の溝である。各辺で規模が異なり、西側は幅0.6~1m、



図I-137 B地区西部 溝B-112出土土器（1）

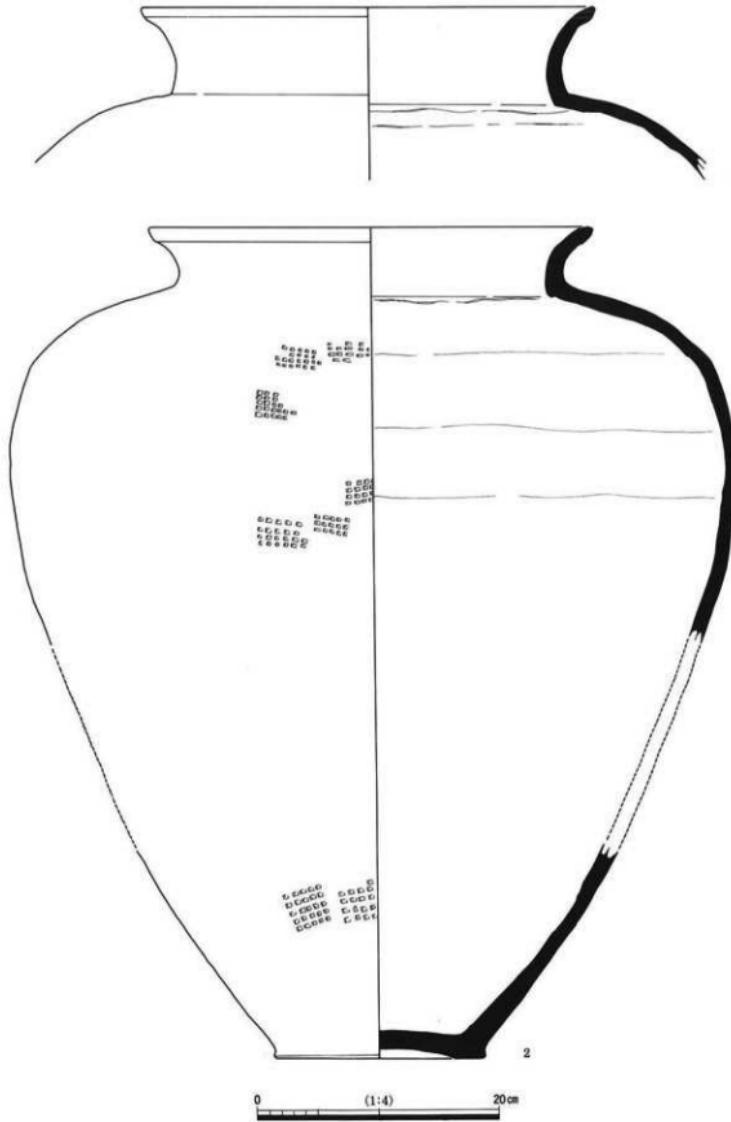


図 I - 138 B 地区西部 溝B-112出土土器 (2)

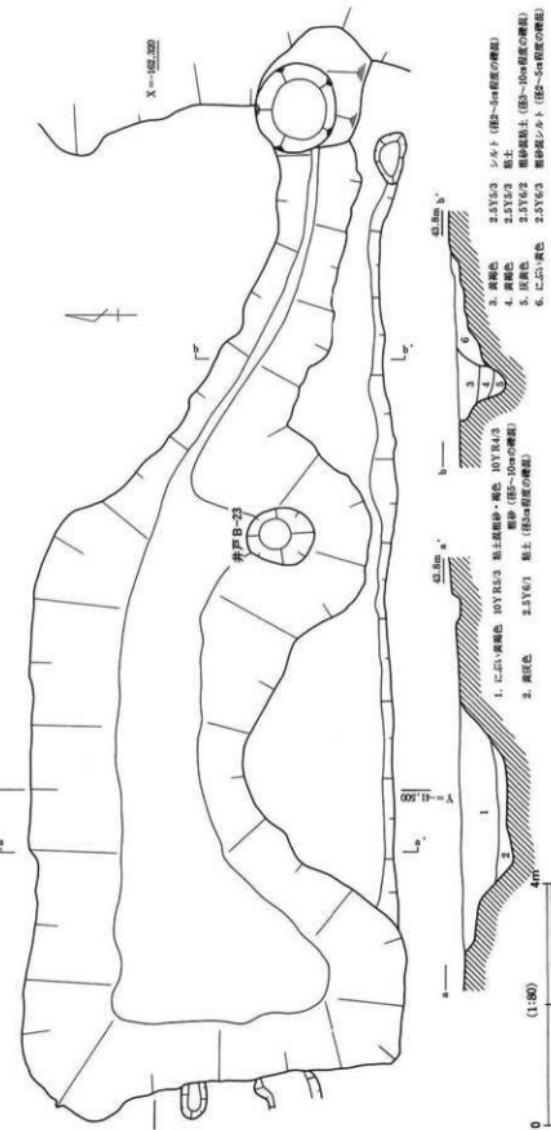
深さ0.13~0.3mと規模が小さい。南側は断面V字形を呈しており、幅1.8~2.0m、深さ0.3m、長さ21mを測る。東側では幅4.0m、深さ0.6m、長さ7.4mを測る。溝の西側には土塁があったものと推定され、東側には開口部がある。南側の西端と東端には20~40cm大の礫が多く出土していることから、内部の建物B-16は礎石建物であった可能性が考えられる。

遺物は、礫と共に土師器小皿・羽釜・甕、瓦器椀、瓦質羽釜、常滑窯・壺などが多く出土している(図I-137, 138)。礫の出土状況と同様に、南側でまとまって検出された。遺物の時期は、12~14世紀のものと考えられ、時期差がみられるが、13世紀後半~14世紀初頭を中心とする遺物が多い。

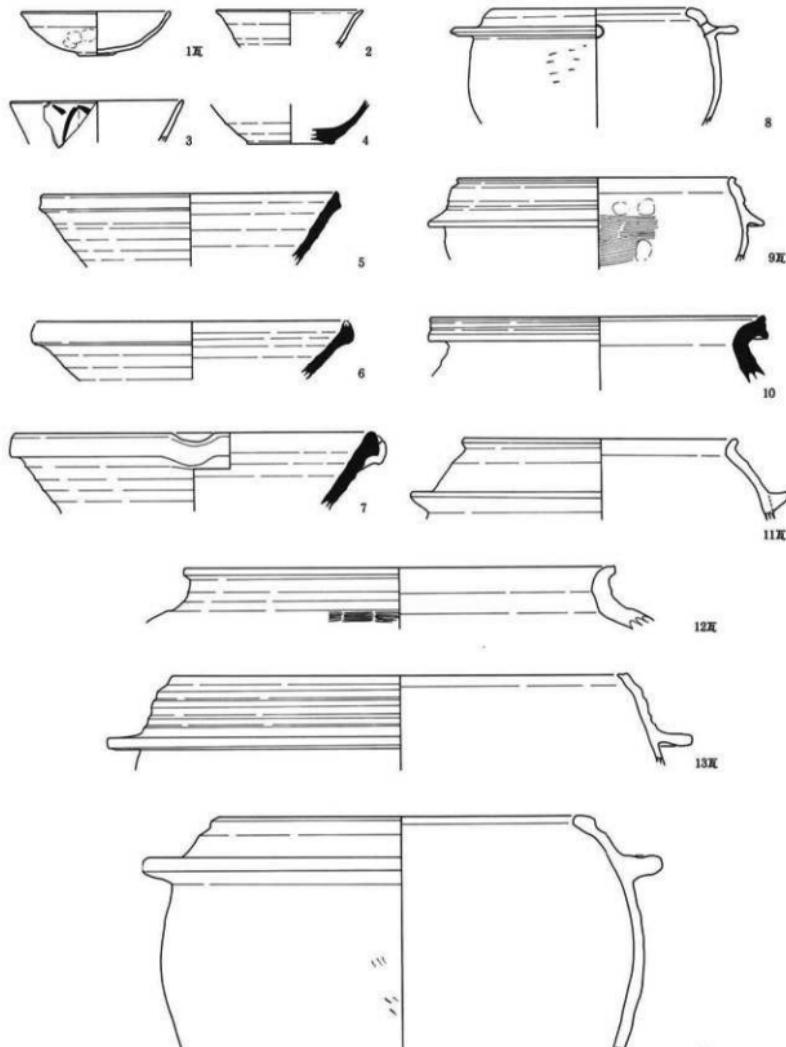
溝B-112の南側で、ほぼ平行して東西方向に延びる柵B-14が検出された。溝と関連をもって造られたものと考えられるが、遺物が出土していないため、時期ははっきりしない。

(7) 溝B-117(図I-125, 139, 写I-27-3)

調査区東部で検出された。東西方向の溝で長さ15.5mを測り、東端はさらに調査区外に延びる。東西10m、



図I-139 B地区西部 溝B-117平面・断面図



0 (1:4) 20cm

図 I - 140 B 地区西部 溝B-117出土土器

南北最大幅6.3mの逆凹字形の東側から、幅1.1m、長さ5.5mの溝が東へ延びる。くびれ部は幅3.5mで、その東側には井戸B-23が位置する。底面はほぼ平坦である。壁は2段になって立ち上がり、特に北側では、

底面から0.6mの所で、幅約0.6mのテラス面を形成する。深さは西側で約0.8mを測る。

埋土は小礫を多く含む粗砂層であるが、西側部分の底面には粘土が堆積しており、水が溜まっていたことを示している。埋土や特異な形態などから水利に関連する施設の可能性が考えられる。南側約3mには、北へ屈曲してくる堀B-1の内側のラインがあり、両者を延長すると調査区外で交差する。堀が機能していた時期には水をたたえていたことを示しており、溝の機能を考える上で示唆的である。

遺物は、瓦器碗・小皿、瓦質羽釜・甕、土師器小皿・羽釜、須恵器こね鉢、陶磁器などが多く出土している（図I-140）。遺物の時期は、13～15世紀のものと考えられ、時期差が認められる。

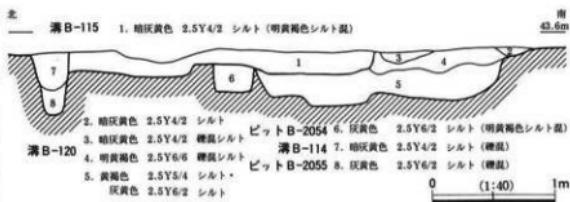
また、溝B-117の南側と西側をL字状にめぐる、柵B-17が検出された。溝と関連をもって造られたものと考えられるが、遺物が出土していないため、時期ははっきりしない。

（8）溝B-119（図I-125, 126, 136）

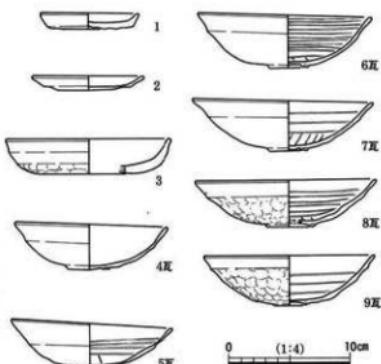
建物B-16の位置する部分を溝B-112とともに区画する東西方向の溝である。建物B-13と重複し、建物より新しい。長さ12.0m以上、幅4.2m、深さ1.1mを測る。底面は平坦であるが、東側が深くなる。底面から0.8mのところで幅0.35mのテラスを形成した後、壁がまっすぐに立ち上がる。埋土は礫を含む粗砂層の1層である。溝B-112と溝の東端が揃っていることから、関連性が考えられるが、形態・規模ともに様相が異なるため、はっきりしない。遺物は、瓦器碗、瓦質火鉢、土師器小皿・羽釜、陶磁器類などが少量出土しているが、時期は確定できない。

（9）溝B-120（図I-125, 141）

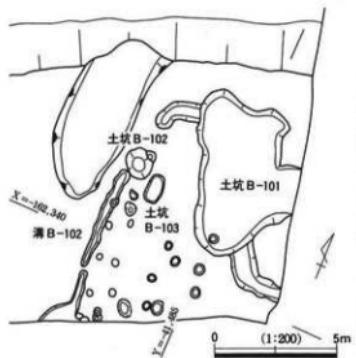
調査区東部で検出された。やや北西から南東方向に延びる溝である。東端部は調査区外に延びる。西端部で溝B-108と重複し、溝B-108より古い。また、平面でははっきりしなかったが、断面の検討により、溝B-115より古いことが判明した。長さ13.2m以上、幅2.6m以上、深さ0.5mを測る。埋土は2層に分かれ、上層は地山の粘土がブロック状に混入して固く繋まり、人為的な堆積状況を示している。西端付近では約0.1mの掘り込みがなされ、南側の壁の立ち上がりはきつい。西端部から、ほぼ完形の土師器小皿や瓦器碗がまとめて出土している。時期は13～14世紀中頃のものと考えられる（図I-142）。



図I-141 B地区西部 溝B-120・その他断面図



図I-142 B地区西部 溝B-120出土土器



図I-143 6Bトレーン東部遺構平面図
は3基検出された。

5. 土坑

城郭内の土坑は、調査区東側で集中して検出された。土坑の立地には、ある程度の規制があったものと考えられ。西側ではまったく検出されなかった。溝B-112と溝B-119に囲まれた区域内でも、遺物の出土する土坑は見つかっていない。形態や規模、埋土は一様ではなく、中には井戸と考えられるものもある。遺物の出土状況にも規則性はなく、多種多様の様相を呈している。

城郭外では、調査区南東端部で、土坑や溝、ピットがまとまって検出された。堀の外側に位置することから、調査時には城郭と直接関係のない遺構群と推定されていた。ただ、遺物の検討により、城郭の存続した時期に並行して造られていたことが判明した。この部分で、土坑

(1) 土坑B-101 (図I-125, 143)

調査区南東端部で検出され、東側は調査区外に広がる。土坑B-102・土坑B-103の東2mに位置する。平面形は不定形で、検出面での規模は長辺約6.8m、短辺4m以上、深さ約0.4mを測る。底面と壁の境は不明瞭で、断面船底状をなし、壁はゆるやかに立ち上がる。調査区外へ延びる部分は、溝状であることから、土坑と溝が重複している可能性も考えられるが、調査時には判別できなかった。埋土は炭化物・焼土を含む褐灰色シルトである。

遺物は、土師器羽釜、瓦器椀、瓦質羽釜・足釜、須恵器こね鉢などが出土している。出土遺物の時期は、13世紀後半～14世紀のものと考えられる(図I-144)。

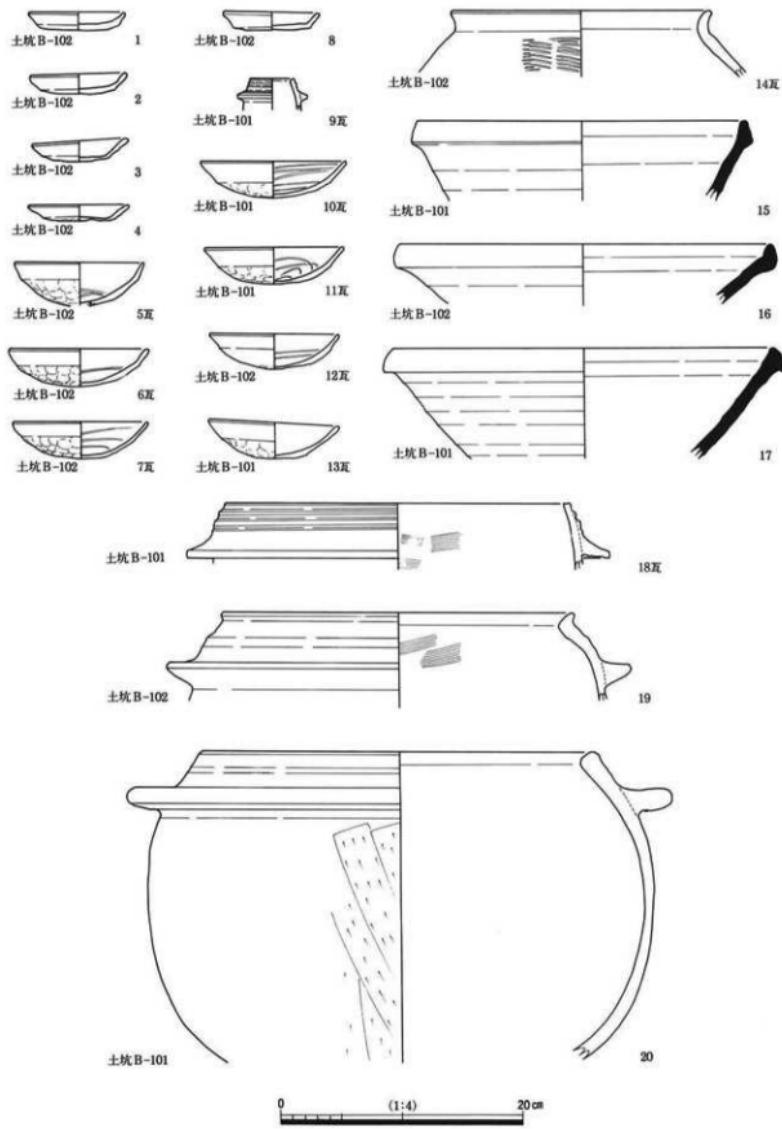
(2) 土坑B-102 (図I-125, 143)

土坑B-101の西2m部分に位置しており、溝B-102の北端部と接している。検出面では円形を呈しており、規模は径約1.3m、深さ約1mである。底面は平坦で径1mの円形を呈し、壁は底面から0.5mまでは垂直に立ち上がる。埋土は2層に大別され、上層は炭化物・焼土を含む褐灰色シルト層で、下層には滯水状態であったことを示す青灰色系の粘土が堆積している。底面が礫層に達していることから、井戸の可能性が考えられる。

遺物は、上層から土師器と瓦器の小皿が多数出土したほか、下層から土師器小皿・羽釜、瓦器椀、瓦質甕、須恵器こね鉢などが出土している。土師器小皿や瓦器椀は、ほぼ完形のものが多く、まとまって検出されている。出土遺物の時期は、14世紀後半のものと考えられる(図I-144)。

(3) 土坑B-103 (図I-125, 143、写I-27-5)

土坑B-102の南東部分に隣接する。上部は削平をうけているため、本来の形状ははっきりしない。検出面では隅丸方形を呈しており、規模は長辺1.2m、短辺0.7mである。底部のみの残存で、検出面から深さ0.05m以内で、礫の上面が検出された。底面には全体に10～15cm大の扁平な礫が丁寧に敷かれている。礫の上面では、南半部分を中心に0.4×0.5mの範囲で炭化物が検出された。この部分で火を燃やしたことなどが考えられる。礫を除去すると、平坦な底面に達する。現状での底面までの深さは約0.2mを測る。遺物は、瓦器や土師器の細片が少量出土している。



図I-144 B地区西部 土坑B-101・土坑B-102出土土器

(4) 土坑B-104 (図I-125、写I-28-1)

調査区北東部で検出された。溝B-103の東側に隣接する。検出面で円形を呈しており、径約1.5m、深さ約0.9mである。底面も径0.8mの円形を呈しており、井戸の可能性が考えられる。壁は垂直に立ち上がり、上端付近で開く。埋土は2層に大別され、上層は暗灰黄色シルトや黄褐色粘土が混在しており、さらに褐色シルトがブロック状に含まれているため、人為的な堆積状況を示している。下層は暗青灰色粘土層である。

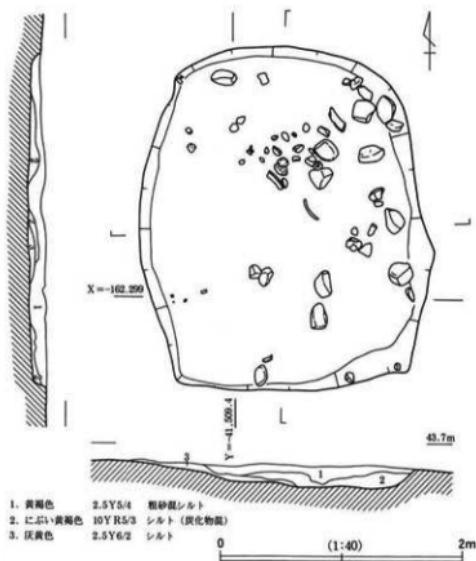
遺物は主に下層から出土しており、瓦器甕・土師器甕・羽釜などがみられる(図I-148-9)。遺物の時期は、おおむね13世紀後半～14世紀初頭ものと考えられる。

(5) 土坑B-107 (図I-125)

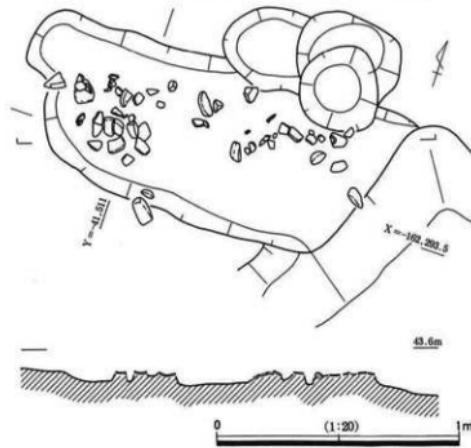
調査区北東部で検出された。溝B-104と重複し、溝より古い。隅丸方形を呈しており、規模は長辺4.5m、短辺2.6mである。現状での深さは0.4mを測る。底面と壁との境ははっきりしておらず、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は黄褐色シルトが主体で、灰黄色シルトが混在しており、2～3mmの大の小礫が多く含む。遺物は土師器小皿・甕・羽釜、瓦質甕・鉢、常滑窯、信楽焼などが細片で出土している。

(6) 土坑B-112 (図I-125)

調査区北東部の溝B-104の底面で検出された。検出面で円形を呈しており、規模は径1.2m、深さ0.7mである。壁は垂直に立ち上がり、上端付近で開く。埋土は2層に大別され、上層はいぶい黄褐色粘土、下層は灰黄褐色粘土が堆積している。全体に1～10cmの大の礫が多く含まれており、底面付近には灰色粘土が堆積している。遺物は少なく、



図I-145 B地区西部 土坑B-114平面・断面図



図I-146 B地区西部 土坑B-115遺物出土状況図

土師器小皿・甕、瓦器碗などの破片がみられる程度である（図I-148-8,17）。遺物の時期は、13世紀末～14世紀初頭のものと考えられる。

（7）土坑B-114（図I-125,145、写I-28-2）

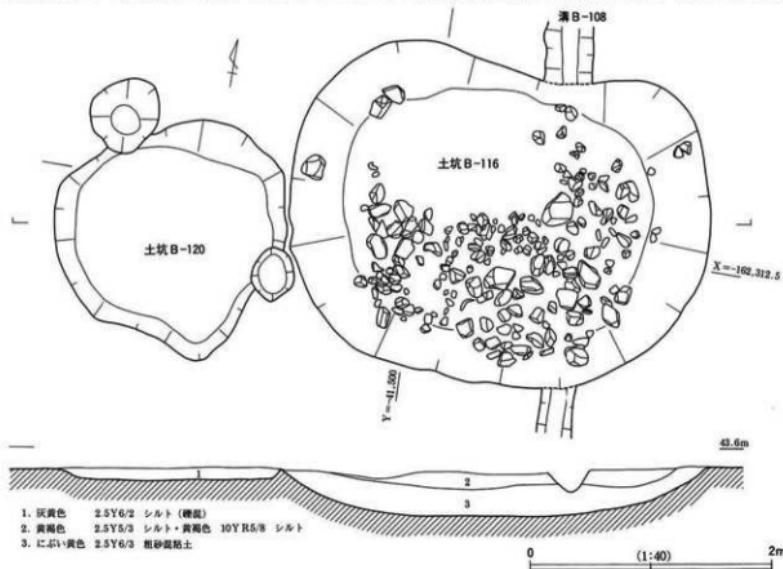
調査区北東部で検出された。溝B-106と重複しており、溝より新しい。検出面では方形状を呈している。上面は削平をうけているが、規模は長辺2.8m、短辺2.4m、深さ0.2mを測る。底面は平坦である。埋土は0.5～1cm大の礫を多く含む黄褐色シルト層で、炭化物・焼土が若干混入する。遺物は、人頭大的礫とともに土師器小皿・甕、瓦器碗、須恵器こね鉢などが出土している（図I-148-1～3,5,6,15）。土師器小皿は、ほぼ完形でまとめて検出された。遺物の時期は、14世紀のものと考えられる。

（8）土坑B-115（図I-125,146、写I-28-3）

調査区北端部で検出された。東側は溝B-104と重複していると考えられるが、間に形状のはっきりしない掘り込みがあり、これに切られていることから、新旧関係は不明である。検出面で隅丸方形を呈しており、規模は長辺1.5m、短辺0.7mである。上部は削平をうけており、底部のみ残存していることから、深さはわずかに約0.1mを測るのみである。遺物は底面にまとめていたものと考えられ、炭化物・焼土とともに、瓦器碗・小皿・羽釜、瓦器鉢、土師器小皿などが細片で出土している（図I-148-4,14）。遺物の時期は、13世紀代のものと考えられる。

（9）土坑B-116（図I-125,147）

調査区東部で検出された。溝B-108と重複しており、溝より古い。西側には、隣接して土坑B-120が検出されている。検出面ではやや椭円形を呈しており、規模は長径3.5m、短径2.5m、深さ0.4mを測



図I-147 B地区西部 土坑B-116・土坑B-120平面・断面図

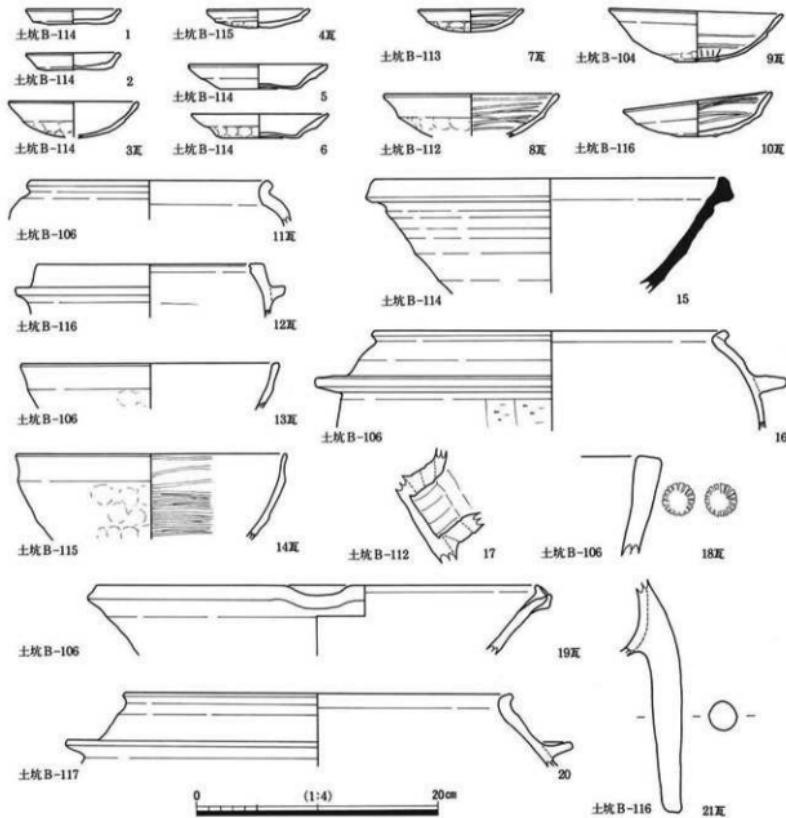


図 I-148 B 地区西部 土坑出土土器

る。埋土は 2 層に分けることができ、上層は黄褐色シルト、下層はにぶい黄色粗砂混じり粘土である。廐棄坑と考えられるが、粘土の堆積がみられることから、水溜として使用されていたことも推測できる。底面で多くの 20~30cm 大の礫が、投棄された状態で検出されているが、近接した土坑からは礫はあまり出土していない。遺物は、瓦器椀・小皿、瓦質羽釜・足釜、青磁、瓦などが出土している（図 I-148-10, 12, 21）。遺物の時期は、14~15世紀のものと考えられる。

(10) 土坑B-117（図 I-125）

調査区東端部で検出された。溝B-120と重複しているが、平面では新旧関係ははっきりしなかった。検出面では方形を呈しており、規模は長辺 3.7m、短辺 2.3m 以上、深さ約 0.4m を測る。底面は平坦で、壁はまっすぐ立ち上がる。遺物は、瓦器や土師器羽釜などの小片が数点出土しているのみである（図 I-148-20）。遺物の時期ははっきりしないが、13世紀中頃~14世紀のものと考えられる。

(11) 土坑B-118・溝B-105(図I-125,149)

調査区東部で検出された。土坑B-118と溝B-105は重複しているが、調査時には新旧関係ははっきりしなかった。

土坑B-118は、検出面ではほぼ梢円形を呈しており、規模は長径4.0m、短径3.6m、深さ0.4mである。底面はやや丸みをもっており、壁との境は不明瞭である。埋土はにぶい黄褐色シルト層で、礫を含んでいる。

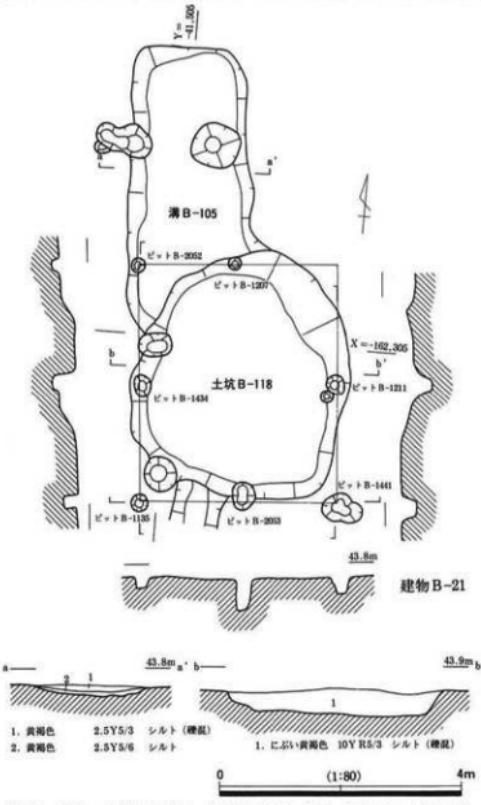
土坑B-118の遺物は、土師器羽釜、瓦器小皿・椀・鉢、瓦質甕、須恵器甕・こね鉢、常滑甕、中国製陶器などが出土している(図I-150)。小破片がほとんどであり、図上復元したものである。この中で、常滑甕がやや古い時期のもので、12世紀前半のものと考えられるが、ほかの遺物は、13~14世紀におさまるものといえる。時期差はあるものの、中心は13世紀後半~14世紀前半と考えられる。

溝B-105は、ほぼ南北方向に延びる溝と考えられるが、南側は土坑B-118と重複しているため、全体の形状は不明である。上面は削平をうけているため、現状で、南北4.6m、東西2.0m、深さ0.2mを測る。埋土は2層に分かれるが、いずれも黄褐色シルトが主体である。上層には褐色シルトが混在するほか、小砾が含まれている。

溝B-105の遺物は、少量であったが、同安窯系の青磁皿や片口の付く常滑焼大平鉢などがみられる(図I-135-10,13)。12~13世紀のものと考えられるため、溝B-105は13世紀末までには廃絶したものと推定される。

遺物の検討から、溝B-105は土坑B-118よりやや古いことが判明した。溝B-105の廃絶後に、土坑B-118が造られたことが想定される。ただ、時期差があまり認められないことから、溝B-105を含めて、ひとつの土坑となっていた可能性もある。

土坑周辺のピットにより、建物B-21が復原された。土坑B-118を覆う形状を示しているが、直接の関係は不明である。重複関係では、建物B-21は土坑B-118、溝B-105よりも新しいが、時期差はあまりないものと



図I-149 B地区西部 土坑B-118・溝B-105平面・断面図

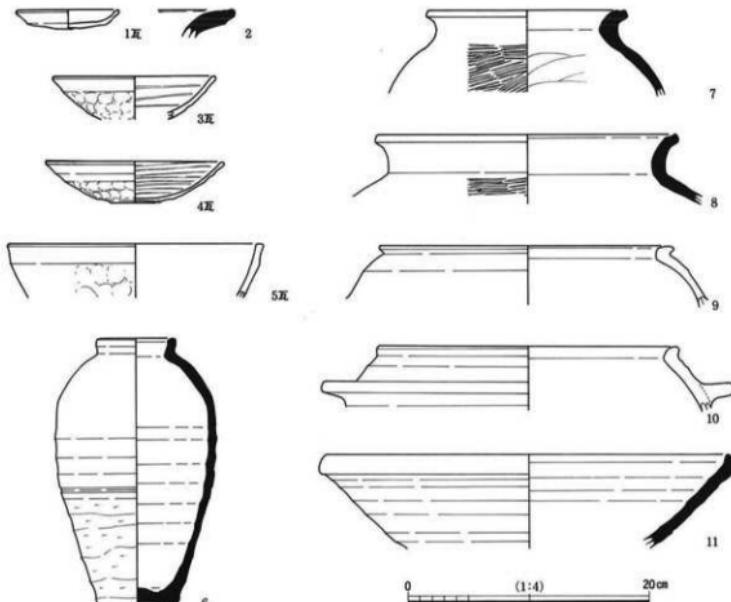


図 I-150 B地区西部 土坑B-118出土土器

考えられ、同時に存在していた可能性もある。建物B-21の柱穴掘方から、14世紀代の瓦質羽釜が出土していることから、遺物の点においても時期差は、ほとんどみられない。

(12) 土坑B-119（図I-125）

土坑B-116の北西に隣接する。平面形は隅丸方形を呈しており、一辺約2.7m、深さ0.4mを測る。底面は平坦で、壁はまっすぐ立ち上がる。埋土は2層に大別され、上層はにぶい黄褐色シルト層で、径2～3cmの礫を含む。下層は、にぶい黄色シルト層である。遺物は少なく、細片が多いため、時期は確定できない。

(13) 土坑B-120（図I-125, 147）

土坑B-116の西側に隣接する。平面形はやや隅丸方形を呈しており、一辺約1.9m、深さ0.1mを測る。埋土は、焼土・炭化物を多く含む灰黄色シルト層で、径約10cmの礫が数個出土している。遺物は少なく、時期は確定できない。

(14) 土坑B-121（図I-125）

土坑B-119の西側約0.3mの地点に隣接する。溝B-118・井戸B-22と重複し、溝より新しい。平面形は隅丸方形を呈しており、長辺2.1m、短辺1.5m、深さ0.1mを測る。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は黄褐色シルト層である。遺物は瓦、瓦器碗、土師器皿、陶器片などが少量出土しているが、時期は確定できない。

(15) 土坑B-122(図I-125,129,151、写I-28-4)

調査区のやや中央部で検出された。井戸B-22の西側約1mの地点に隣接する。溝B-116・溝B-124と重複しており、それよりも新しい。また、建物B-18とも重複しているが、土坑B-122のほうが古い。平面形は北向きの凹字形を呈しており、特異な形態の土坑である。規模は、長辺5.2m、短辺3.4m、深さ0.4mを測る。

埋土は2層に大別される。上層は、暗灰黄色シルト混じり粘土で疊を含んでいる。下層は、黄灰色粗砂混じり粘土である。底付近の粘土の堆積から、水溜として利用されていたことが考えられる。また、上層の上面には、粗砂・小礫層が堆積している。

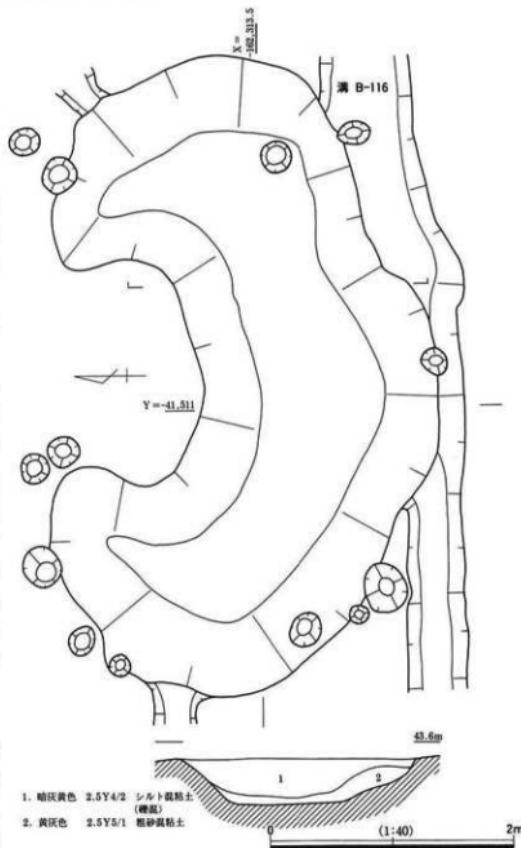
全体に遺物の出土量は少ない。東側突出部の底面付近から、ほぼ完形の瓦器碗2点が出土したほか、土師器小皿が出土している。瓦器

碗は13世紀末~14世紀初頭のものと考えられ、時期の同じものがまとまってみられる。また、土師器小皿も同時期のものと考えられる(図I-152-1,5~9)。

重複関係のある建物B-18の柱穴から、14世紀前半の須恵器こね鉢が出土しているため、出土遺物の点からは、建物B-18のほうが、土坑B-122よりもやや新しいといえる。少ない遺物から判断することはむずかしいが、同時に存在したことは考えられないため、土坑B-122の廃絶後に、建物B-18が造られたことが推測される。なお、上層上面の粗砂・小礫層は、北側に位置する土坑B-129から土坑B-122にかけての東西約4m、南北約5mの範囲を中心として堆積しており、性格は不明であるが、建物B-18に伴うものの可能性も考えられる。

(16) 土坑B-126(図I-125)

城郭外の調査区南端部の中央で検出された。南部は調査区外へ広がる。検出面で隅丸長方形を呈しており、規模は長辺7.5m、短辺4.5m、深さ約0.3mを測る。底面



図I-151 B地区西部 土坑B-122平面・断面図

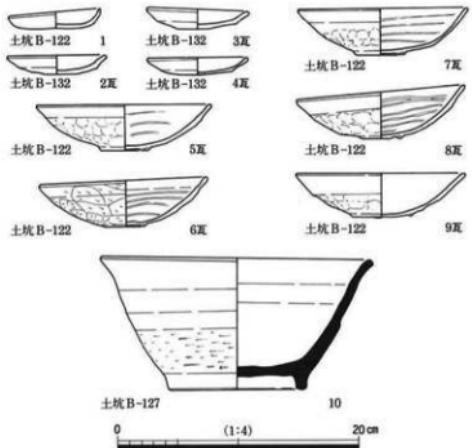


図 I-152 B 地区西部 土坑出土土器

(17) 土坑B-127 (図 I-125、写 I-29-4)

調査区東側で検出された。溝B-103の南西部に位置しており、溝B-103によって東上半部が削平されている。検出面ではほぼ円形を呈しており、規模は径約0.9m、深さ0.7mである。底面は平坦で、径0.6mの円形を呈しており、壁はほぼ垂直に立ち上がる。

埋土は2層に大別される。上層は暗灰黄色シルトが主体で、2～5cmの礫が多く含まれているほか、黄褐色粘土のブロックが多数混入しており、人為的な堆積状況を示している。下層は青灰色シルトが主体で、青灰色系の粘土質シルト層が薄く堆積している。底面は礫層に達しており、井戸の可能性も考えられる。下層上面からは常滑焼こね鉢が、ほぼ完形で出土した(図I-152-10)。この他には遺物は少なく、瓦器の細片が数点出土しているのみである。出土遺物の時期は、12世紀後半のものと考えられる。

(18) 土坑B-128・溝B-114 (図 I-125, 141, 153、写 I-29-1, 3)

土坑B-128は、溝B-103の南側1mの地点に位置しており、東側上端部で溝B-108が接している。また、西側から南側にかけては、溝B-114と接しており、遺構の密集する部分に存在している。検出面ではほぼ円形を呈しており、規模は径0.8m、深さ約1mである。底面は平坦で、径約0.5mの円形を呈しており、壁は垂直に立ち上がる。底面は礫層に達しており、またその形態から井戸の可能性が考えられるが、湧水はなかった。

埋土は3層に大別される。上層は暗灰黄色シルト、中層は灰黄色シルトが主体で、いずれも明黄褐色シルトがブロック状に混在しており、人為的な堆積状況を示している。また、下層は土坑が機能していた時期の青灰色粘土である。

上層から中層にかけては、径20～40cmの礫が多数投棄された状態で出土しており、この礫とともに多くの遺物が、まとめて出土している。下層でも礫が検出されたが、上層に比べて量は少ない。下層からも多くの遺物が見つかっている。これらの礫や遺物は、まとめて廃棄されたものと考えられる。

遺物は、土師器小皿・皿・羽釜、瓦器碗・小皿、須恵器類などが出土している(図I-154)。土師器

は平坦で、壁は2段に立ち上がる。埋土は2層に大別され、上層にはぶい黄色シルト、下層には黄褐色シルトが堆積しており、埋土中には小礫が多く含まれている。軸方向は、ほぼ南北方向に一致する。

城郭外にあるものの、溝B-112・溝B-119の東辺と溝B-104・土坑B-129の西辺を、南へ延長した2本の線間のほぼ中に位置している。これらの遺構との直接の関係は不明であるが、城郭内部の遺構配置にみられる規則性がうかがわれるため、城郭と関連のある遺構と考えることができる。遺物の量は少なく、時期は確定できない。

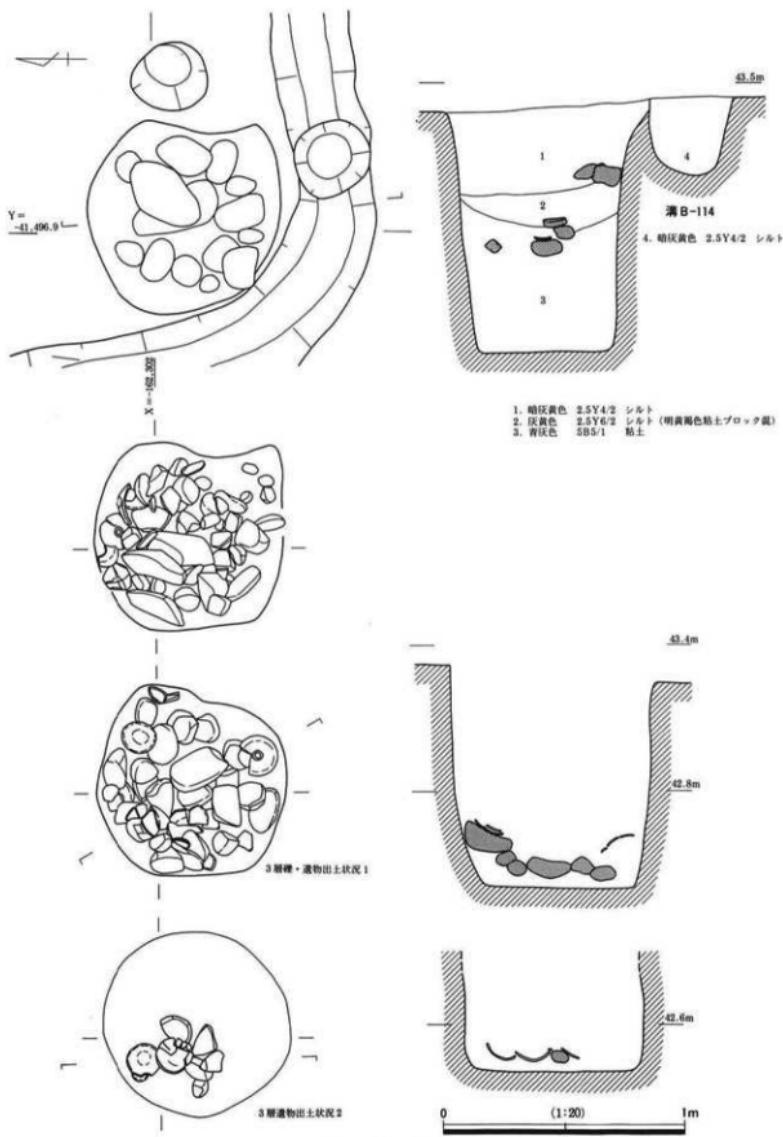


図 I - 153 B地区西部 土坑B-128平面・断面図

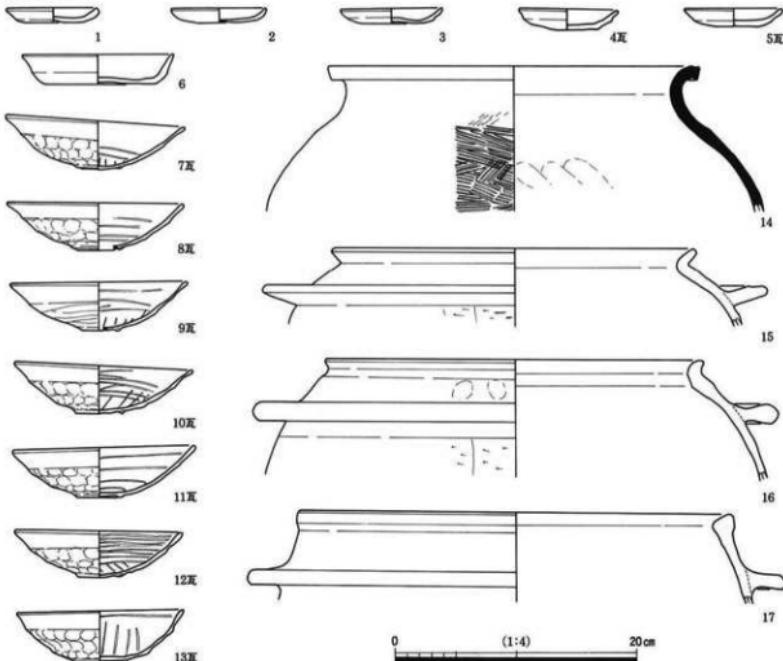
小皿・皿や瓦器小皿は、完形のものが多く、13世紀代のものと考えられる。土師器羽釜は、口縁部のみの破片であるが、12～13世紀のものがみられる。瓦器椀はほとんどが完形で、時期差はありません、13世紀後半～14世紀初頭のものと考えられる。

溝B-114は、溝B-103の南端部から南へ延び、土坑B-128に沿って屈曲し、東へ向かい、溝B-108に合流する。溝B-103・溝B-108との新旧関係ははっきりしない。検出された部分の規模は、長さ約3.5m、幅約0.4m、深さ約0.3mを測る。断面はU字形を呈しており、埋土は暗灰黄色シルト層である。遺物は少なく、時期は確定できない。

(19) 土坑B-129（図I-125）

調査区東部のやや中央寄りで検出された。溝B-106と重複しており、溝よりも新しい。大型の土坑で、平面形は隅丸方形を呈しており、長辺7.4m、短辺3.4m、深さ約0.6mを測る。軸方向はほぼ南北に一致する。底面は平坦であるが、壁との境は不明瞭で壁はゆるやかに立ち上がる。

埋土は3層に大別される。上層はオリーブ褐色シルト、中層は黄褐色系のシルトが主体で、いずれも固く縮まっており、人為的な堆積状況を示している。下層はオリーブ褐色シルト層であるが、最下層には部分的に青灰色粘土が堆積しており、水が溜まっていたことを示している。遺物は少なく、時期は確定できない。



図I-154 B地区西部 土坑B-128出土土器

(20) 土坑B-131(図I-125)

調査区北端部で検出された。土坑B-115の北約1mの地点に位置する。検出面で、平面形は不定形を呈しており、規模は長辺1.7m、短辺1.1m、深さ0.5mを測る。底面と壁の境ははっきりしておらず、断面は椀形を呈する。埋土は2層に大別される。上層にはぶい黄褐色シルト層で、下層は黄褐色シルトや灰黄色シルトが混在している。遺物は、土師器や瓦器の細片が出土しているが、時期は確定できない。

(21) 土坑B-132(図I-125)

土坑B-131の東側に隣接する。溝B-106の肩部から底面にかかる部分で検出された。溝によって東側上部を削平されている。検出面で、平面形は東西に長い梢円形を呈しており、長径0.6m、短径0.5m、深さ0.3mを測る。埋土は2層に大別される。上層には黄褐色シルト、下層にはぶい黄褐色シルトが堆積しており、全体に径2~3cmの礫と炭化物・焼土が含まれている。遺物は、底部付近から、瓦器椀・小皿、土師器皿などの細片が少量出土している。瓦器小皿は完形のものがあり、時期は13~14世紀と考えられる(図I-152-2~4)。

(22) 土坑B-133(図I-125)

調査区東部で検出された。溝B-105の東側に隣接する。溝B-108に東側を切られているため、形状ははっきりしない。平面形は不定形を呈しており、現状の規模は長辺約3.5m、短辺2.1m以上、深さ0.1mである。埋土は2層に大別される。上層にはぶい黄褐色シルトが主体で、明黄褐色シルトが混在している。下層には、ぶい黄褐色細砂が堆積している。全体に2~3cm大の礫が多く含まれている。下層上面で、径20cmの礫がまとまって検出された。遺物は、土師器甕・羽釜、瓦器椀・小皿、陶器などの細片が出土しているが、時期は確定できない。

(23) 土坑B-141(図I-125, 155, 写I-30-1, 2)

調査区北東部で検出された。土坑B-114の北側、溝B-104の西端の南側肩部で、東西1.4m、南北1.4mの範囲内に、礫・炭化物・焼土とともに遺物が集中して検出された。

検出面はほぼ地山上面で、礫や遺物除去後の底面は平坦である。一応、土坑として扱っているが、調査時には掘り込みは確認できず、平面形は不明である。本来は、土坑の形をとらず、礫や遺物をまとめてこの部分に廃棄したものの可能性もある。

遺物の一部は、包含層上面に露出していた。溝B-104の西端部で検出された礫群と一連のものと考えられる。遺物は、土師器小皿・羽釜、瓦器小皿・椀・鉢などが細片となって出土している(図I-156)。土師器小皿と瓦器小皿は、完形のものが多く、時期は14世紀のものもみられるが、ほとんどが13世紀代のものと考えられる。土師器羽釜は、12世紀のものもみられるが、13世紀代のものが多い。瓦器椀は、

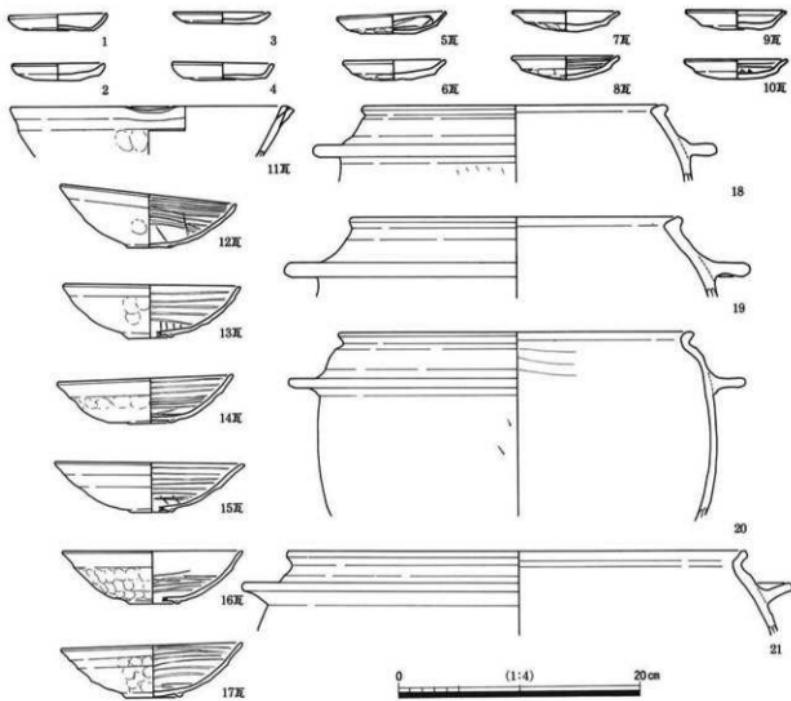


図 I - 156 B 地区西部 土坑B-141出土土器

やや時期差は認められるものの、13世紀中頃～14世紀初頭におさまるものと考えられる。やや古い遺物もみられるが、14世紀初頭頃に形成されたものと考えられる。

(24) 土坑B-142 (図 I - 125, 157、

写 I - 30-3, 4)

調査区東部で検出された。溝B-120の西端上面に位置する。溝B-120埋没後の深さ約0.1mの窪地状となった部分に、長辺約2.3m、短辺約2.0mの範囲で、10～30cm大の礫が多く集積して出土したものである。土坑B-141と同様に、調査時には掘り込みはほとんど確認できなかった。

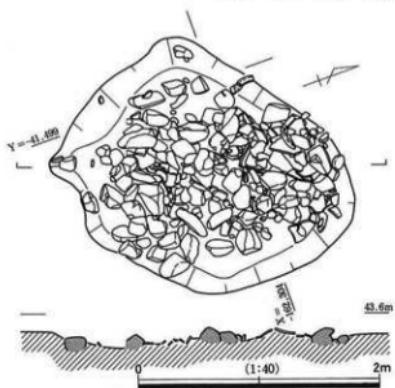
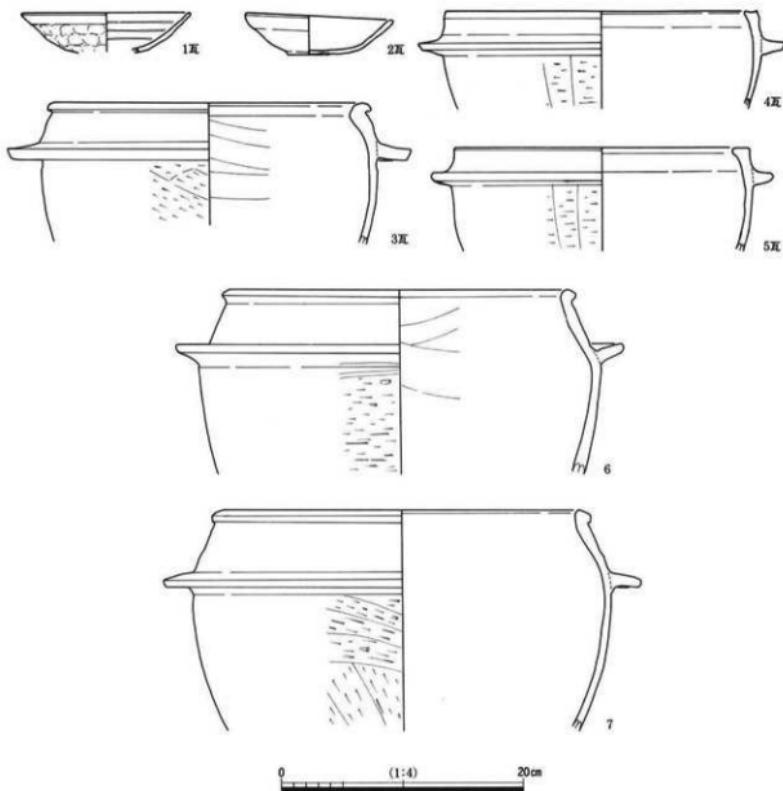


図 I - 157 B 地区西部 土坑B-142遺物出土状況図 磚は、比較的大型のものがまとまっている。す



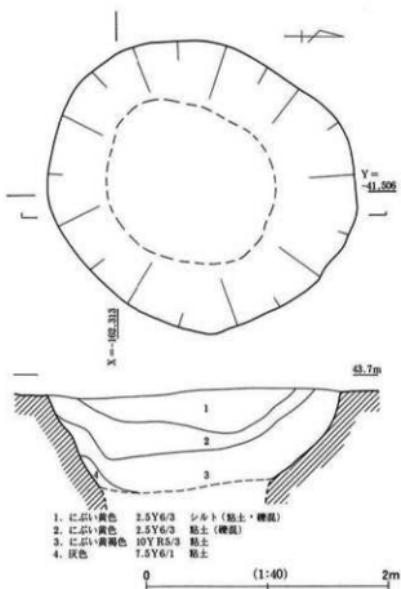
図I-158 B地区西部 土坑B-142出土土器

べて亜角縞で、扁平な面をもつものが多く、他の遺構からはあまり検出されていないものである。中には面が浅くくぼみ、条痕が認められることから、砥石と考えられるものもみられる。廃棄された縞群は、他の場所から運ばれて来たものと考えられ、城郭内の建物の柱の礎石や敷石、根固めなどに使用されたことが推測される。

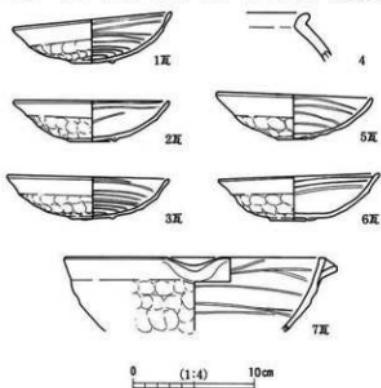
遺物は、土師器小皿・羽釜、瓦器椀・小皿、瓦質羽釜（図I-158）、常滑焼大甕（写I-101-9）などが出土している。土師器羽釜は口縁部破片のみであるが、時期は13世紀のものと考えられる。瓦質羽釜は、14~15世紀のものがみられる。瓦器椀は時期差が認められ、13世紀後半のものと14世紀中頃のものがみられる。常滑焼大甕は、粉碎された状態で出土したが、ほぼ完形に復元された。大きさは、口径55.5cm、器高86.0cmである。14世紀のものと考えられる。甕の底部下端には、ひび割れ部分を漆で補修した跡が3カ所みられる。飲料水などを貯蔵していたものと推定される。出土遺物には、時期差がみられるが、15世紀代にこれらの遺物や縞が廃棄されたものといえる。

6. 井戸

城郭内から検出された井戸は2基である。井戸と考えられる土坑もみられるが、B地区東部に比べると、井戸の数は少ない。さらに、建物が継続して複数棟存在していたことが考えられるため、城郭内部で生活用水を得ようとするには、井戸の数が少ないといえる。このため、B地区東部から生活用水を得ていたことも推測される。いずれの井戸も石組や井戸枠などは検出されておらず、素掘りの井戸である。



図I-159 B地区西部 井戸B-22平面・断面図



図I-160 B地区西部 井戸B-22出土土器

写I-29-2)

調査区東部で検出された。土坑B-122の東側約1mの地点に位置する。溝B-118と重複しており、溝より新しい。平面形は円形を呈しており、検出面で上端部径約2.6m、深さ1.0m以上を測る。井筒の痕跡は認められなかった。上面から擂鉢状に約0.8m下がったところから、壁は垂直に下がる。約1.7mまで下げたが、湧水のため調査を打ち切った。埋土は2層に大別される。上層は、にじい黄色シルトが主体で、20~30cm大の礫を含んでいる。黄褐色粘土のブロックなどが混入しており、人為的な堆積状況を示している。下層は灰色粘土が堆積している。

遺物は主に下層の粘土層から出土した。瓦や瓦器碗・片口鉢、土器小皿・羽釜・甕、須恵器甕、陶器類などが出土している(図I-160)。土器器羽釜は口縁部小片で、12世紀のものと考えられる。瓦器片口鉢も破片であるが、13世紀のものと推測される。瓦器碗は、ほぼ完形のものが多く、時期差あまり認められず、14世紀前半頃のものと考えられる。

遺物の間に時期差がみられるが、土器器羽釜と瓦器片口鉢は上層出土のもので、他の場所から運ばれてきたものと考えられるため、井戸の時期を示しているとはいえない。瓦器碗は、下層から出土したものであり、ほぼ完形に近いものが多く検出されていることから、井戸の存続時期をあらわしているといえる。このことから、井戸の廃絶時期は、14世紀中頃と考えることができる。

(2) 井戸B-23(図I-125,139)

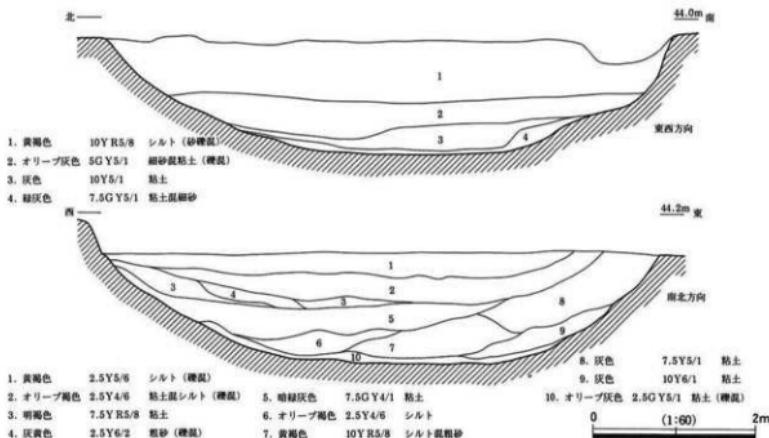
調査区東端部で検出された。溝B-117と重複しており、底面で確認されたものである。検出面で円形を呈しており、上端部径1.1m、深さ1.7mを測る。溝B-117の底面レベルより下約1.5mの壁は垂直に下がる。底面も径0.6mの円形を呈する。埋土上層は、溝B-117と同一の粘土・礫混粗砂層で、その区別は困難であるため、調査時には、遺物も溝B-117出土のものと区別できなかった。下層からは瓦器碗の細片が1点出土したのみで、井戸の時期は確定できない。溝B-117では、時期差は認められるものの、13~15世紀の遺物がみられるため、井戸B-23はそれより古い段階の時期と考えることができる。

7. 堀B-1(図I-125,126,161、写I-24)

城郭を画する堀B-1は、西側と南側が確認され、ほぼL字状を呈している。方向はほぼ方位と一致している。検出された部分は、東西約70m、南北約29mを測り、幅約6.5m、深さ約1.4mの規模である。西側の堀は、調査区の西辺に沿っており、北部は調査区外へ延びる。南部は、調査区内で東へ直角に屈曲する。南側の堀は、南西端部から東へ約50mのところでやや北へ屈曲する。このため、西側の堀は直線的であるが、南側の堀は直線状ではなく、城郭の南東部でさらに一辺が形成されている。

調査区南東端部では、削平をうけているものの、わずかに南東端の屈曲部分が検出された。東側の堀は、現在使われている水路と重複しているため、堀の両肩部を検出したのみで、底部は確認できなかつた。水路の改修に伴う後世の掘削などによって、西肩部が削平をうけているが、屈曲部分では北方向に伸びていることが判明した。浅い谷を利用したものと考えられるが、西側や南側部分と同様に、方位を意識して造られたことがわかる。復原による東側の堀の幅は約7mとなり、南側の堀とほぼ同規模となる。

底面はほぼ平坦であるが、南西端部で溝を横切るような形状の、幅約1.5mの掘り残し部分が認められ、約0.2mの段差がみられる。また、底面のレベルは、西側の堀では北端が南端よりわずかに低く、南側の堀では西端より東端が約0.3m低い。断面は基本的には椀状であるが、底面から0.3m上がったと



図I-161 B地区西部 堀B-1断面図

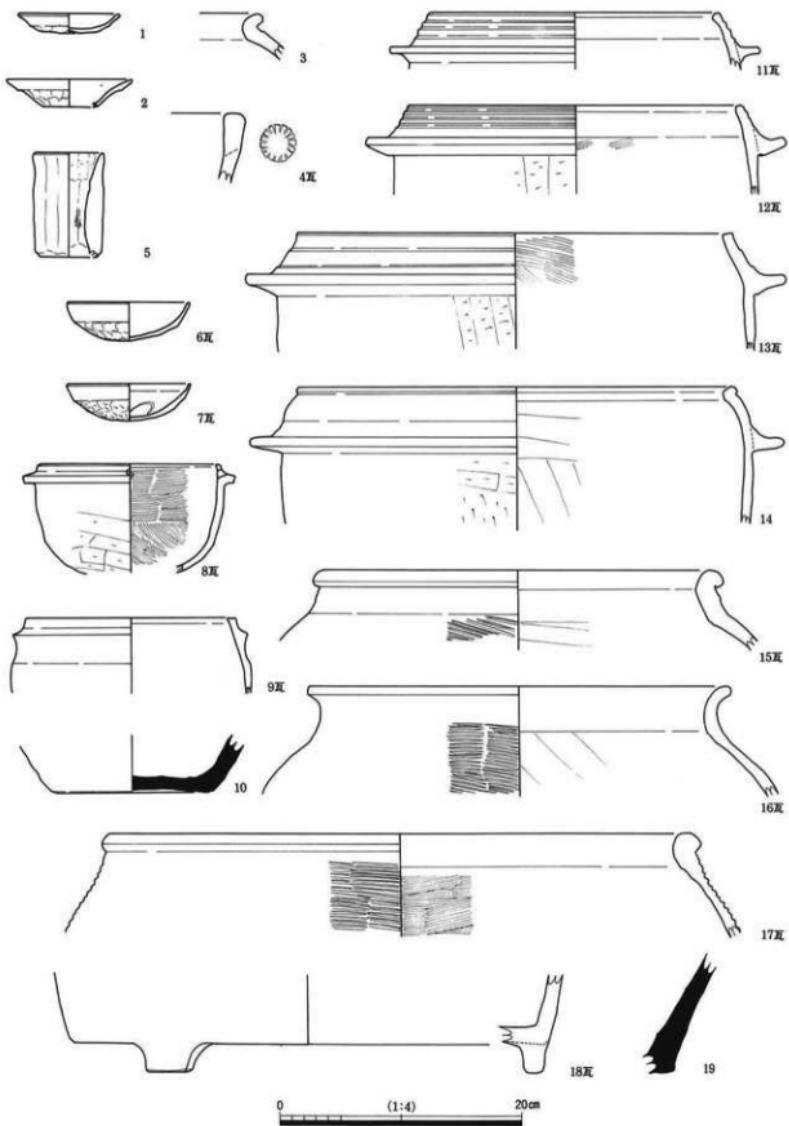
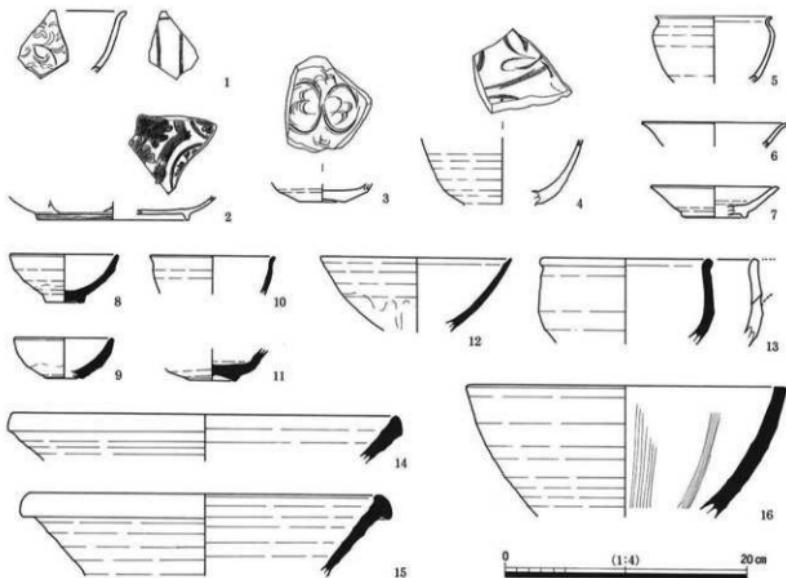


图 I - 162 B 地区西部 塬 B - 1 出土土器 (1)



図I-163 B地区西部 堀B-1出土土器(2)

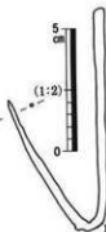
ころで、幅0.5mのテラス面をなし、壁がややまっすぐに立ち上がる部分もみられる。

埋土は2層に大別される。上層は黄褐色シルトが主体で、疊や地山の黄褐色シルトがブロック状に多く含まれている。かなり大規模の人為的な堆積状況を示している。城郭廃絶時に、土墨を壊して塁を埋めたことによるものと考えられ、検出面では、地山との判別が困難なほどであった。下層は、暗緑灰色粘土や灰色粘土を主体にした粘土層がかなり厚く堆積しており、長期間にわたって水が溜まっていたことを示している。

遺物の量はコンテナ6杯分で、その規模からすると比較的少ない。出土した遺物は多種にわたっているが、ほとんどが破片で、完形のものはみられない。土師器小皿・羽釜・塩壺、瓦器小皿・椀、瓦質羽釜・甕・鍋・火鉢、須恵器甕・甕・こね鉢、陶磁器、金属製品などが出土している(図I-162, 163, 164)。

土師器や瓦質土器、瓦器などは、時期差がみられるものの、ほぼ13~15世紀におさまるものである。須恵器や備前播鉢は、12世紀代のものと考えられ、遺物の中ではやや古い時期のものである。陶磁器では、青磁碗や白磁皿、瀬戸美濃平碗などが、ほぼ13~15世紀におさまるものと考えられる。また、瀬戸美濃天目茶碗は、16世紀のもので、遺物の中ではやや新しい時期のものである。さらに、17世紀代の中国製染付や唐津焼などもみられるが、これらは混入品と考えられる。金属製品は、青銅製金具で先端が針状に尖っているが、用途は不明である。

遺物の時期は、13~17世紀のものまでみられ、かなりの幅が認められるが、堀の上

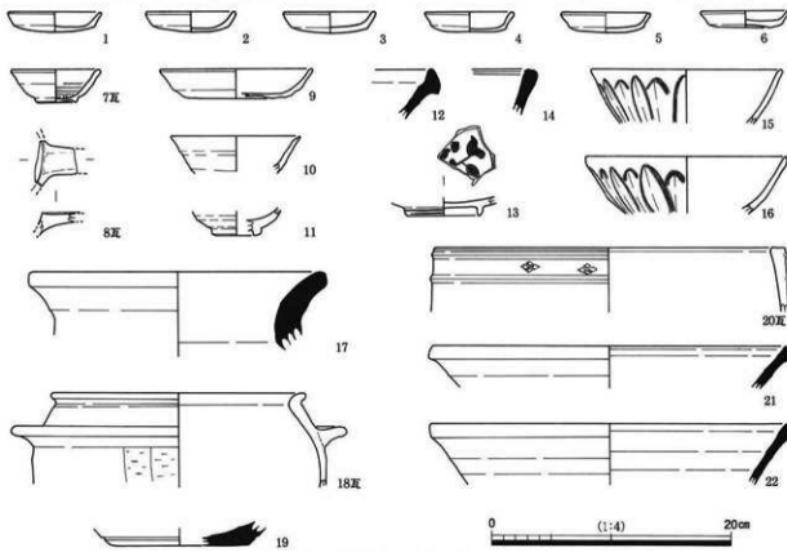
図I-164
B地区西部
堀B-1出土
金属製品

面の遺物を除外し、城郭内部の遺構の時期幅を考慮すれば、堀の存続時期は13~15世紀におさまるものと考えられる。堀は13世紀中頃には掘削され、16世紀までには廃絶したものと推測される。

東側の堀付近は、攪乱をうけているため、土橋状の掘り残し部分や橋脚跡などの遺構は検出されなかつた。このため、城郭の東部では入口を確認することはできなかった。ただ、城郭の東側に隣接して、ほぼ同じ時期に存在したと考えられる、寺院関連の遺構群が検出されていることから、この方向に入口を想定することができる。

一方、南側の堀の屈曲部付近の南側テラス面で、ピットが3基検出された。ピットの規模は径25~40cmで、約1.2mの間隔で並んでいる。さらに、そのすぐ上の堀の肩部に3基のピットをはさむように、2ヵ所の掘り込みが認められた。掘り込みの間隔は約2.2mで、規模は東西0.8~1.0m、南北約1.5mを測る。対岸の肩部付近でも、同様の掘り込みが検出されている。掘り込みの形状や規模は一定ではなく、詳細は不明であるが、この部分に橋がかけられていた可能性が考えられる。このため、調査時に堀の北側テラス面や底面を入念に精査したが、ピットは検出できなかった。しかし、橋脚の基礎が礎石であったり、その痕跡を残さない構造も考えられ、橋の存在はなお否定できない。さらに、城郭の南側部分の小字名が『城ノ前』であることから、南向きに入口があった可能性も考えられる。

発掘調査では、城郭の南半部を検出したのみであり、堀も全体を確認していない。このため、堀の範囲を確認する目的で、調査区北側において、レーダー探査を実施した。堀の規模がかなり大きいことから、探査は比較的良好に進み、ほぼ城郭北半部の堀の広がりを知ることができた。この結果から、西側の堀は直線状に北へ延びており、南西端部と同様に直角に東へ屈曲する。また、北側の堀は北西端部から東へまっすぐ延びるが、南側の堀と同様に約50mのところでやや南へ屈曲することが判明した。



図I-165 B地区西部 土器群B-1(1~6)・包含層(7~22)出土土器

発掘調査とレーダー探査による堀の確認作業で、城郭の形状は、北東部と南東部に一辺が形成される六角形を呈していることがわかった。

8. 土塁

土塁の痕跡はほとんど認められなかったが、堀B-1の内側には、幅約7mの範囲で、当該期の遺構が検出されない平坦部があり、この部分に土塁が存在していたことが推測される。堀掘削に伴う廃土を、そのまま内側に盛りあげて土塁を構築したものと考えられる。堀の埋土上層が、地山とほとんど同じで、土塁を壊した土で人為的に埋められたことが推測されるためである。

西側では、溝B-112の西辺の延長線と堀の間で、遺構がほとんど検出されない部分があり、この幅約7mの範囲に土塁が造られていたことが考えられる。

南側では、堀が屈曲する付近は平坦部が狭くなっているが、西部は堀と平行に幅約7mの範囲で、遺構の検出されない部分が認められる。東部は、溝B-117が近接していることから、この付近には土塁は存在しなかったことが推測される。

東側では、北東部の溝B-131の東側で同様の平坦部が存在しており、ここにも土塁が存在したものと想定される。ただ、土坑B-104・溝B-131や櫛B-19の位置関係から、土塁基底部のラインは溝B-131の東辺より東側にあったものと考えられる。溝B-120の南側では、遺構がさらに東へ広がることから、この部分には土塁は存在していないといえる。

のことから、土塁の規模などは不明であるが、発掘調査によって検出された城郭南半部のうち、かなりの部分に土塁が造られていたことが推測される。ただ、遺構の分布状況によると、南東端部には土塁が存在していないことがわかる。

9. 包含層出土遺物

包含層は、かなり削平されているため、残存状況は良好ではないが、多種の遺物が出土している。主なものは、土師器小皿・皿・羽釜、瓦器碗・小皿、瓦質羽釜・鉢・十能、須恵器甕・こね鉢、陶磁器などである（図I-165-7～22）。いずれも破片であるが、時期差がかなり認められ、12～17世紀と考えられる。13～15世紀の遺物は、城郭内の遺構出土のものと同じ時期である。陶磁器では、14世紀代の青磁碗や15世紀代の白磁皿・碗などがみられる。

このうち、城郭の南側の土塁が存在したと考えられる部分から、ほとんど完形の土師器小皿が1カ所にまとまって出土した（図I-165-1～6）。ピットや土坑のような掘り込みは認められなかったため、土器群B-1とした。性格は不明であるが、祭祀にともなう土器群の可能性もある。土師器小皿は、ほとんど同じもので、時期差も認められず、13世紀代のものと考えられる。

10. 小結

B地区西部では、大規模な堀に囲まれた城郭が検出され、多くの遺構がまとまっている。柱穴と考えられるピットも1000基近く見つかっており、ある一定の範囲内に多くの建物が、何度も造られたことが推測される。また、溝や土坑も重複関係が多くみられ、遺構の検出状況は非常に複雑である。遺構の時期は、13～15世紀が中心であり、遺物も多く出土した。B地区東部の遺構群とはほぼ同時期に併存したものと考えられる。ただ、遺物の種類は異なっており、特にB地区東部で多量に検出された瓦類は、ほとんど出土していない。遺構の性格などについては、まとめで詳述するが、B地区東部の寺院関連遺構とB地区西部の城郭が併存していたことは、当時の社会状況を反映するものといえ、ひとつの拠点としてこのような構造をもつものが造られていたことを示している。

第5節 C地区東部（8B・9B・1C～3Cトレンチ）

C地区東部では、地山に達するほどの大規模な擾乱や削平などは認められないが、遺構はほとんど検出されず、中央部分を縦断する自然流路C-1のはかは溝やピットがみられるのみである。包含層も部分的に残存していたが、全体に遺物量は少なく、瓦器や土師器の小破片がみられる程度で、形を復元できるものはなかった。中世の遺物が多く、古代や近世の遺物はほとんどみられない。

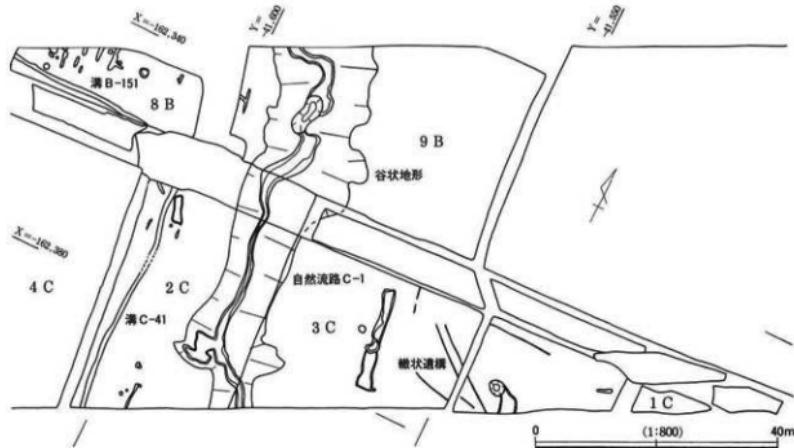
1. 遺構・遺物

1Cトレンチでは、足跡と思われる不定形のピットが数個検出されたのみで、遺物はほとんど出土していない。3Cトレンチでは、足跡と思われる不定形ピット、轍状遺構（写I-31-1）、土坑などが検出された。轍状遺構は、幅約0.2m、深さ約0.1mの溝が、約1.5mの間隔で平行に南東から北西方向に延びている。不定形ピットは遺物が出土していないため、時期ははっきりしないが、付近では集落跡なども見つかっていないことから、B地区西部の城郭に関係した人々の足跡の可能性もある。

2Cトレンチでは、西半部の平坦面で、溝やピットが数基みられる。溝C-41はほぼ南北方向に走っており、幅1.3m、深さ約0.4mを測る（図I-166）。埋土は褐色粘土で、径5mm程度の礫を含む。自然流路C-1の谷状地形と同一方向に掘削されており、2Cトレンチ西側に広がる遺構群を区画する溝と考えられる。埋土からは土師器や瓦器の破片が検出されたのみで、時期ははっきりしない。

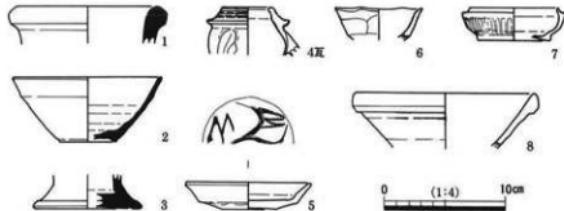
8Bトレンチは全体に削平をうけており、包含層はほとんど残存していない。遺構は、溝やピットが数基みられる程度である。トレンチ南部をほぼ東西方向に走る溝B-151は、幅約0.7m、深さ約0.2mを測る。遺物は、土師器や瓦器の破片がみられる程度で、時期ははっきりしない。区画溝と考えられるが、南側の4Cトレンチ北半部には遺構がみられないことから、北側に広がる遺構群を区画しているものと思われる。調査区の北側に、集落などの存在が推測される。

9Bトレンチ東半部はほぼ平坦であるが、西半部では幅約20mにおよぶ自然流路C-1の谷状地形が



図I-166 C地区東部 中世遺構略図

あり、さらに西端部から西の8Bトレンチにかけては、ふたたび平坦面となる。3Cトレンチと同様に、平坦面ではほとんど遺構は検出されず、谷状地形でも人為的な地形変更などはほとんどみられない。



図I-167 C地区東部 包含層出土土器

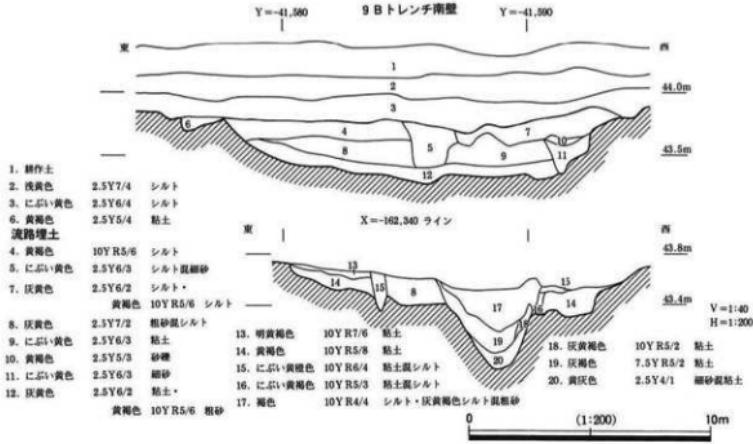
中央部を東西方向に横切る現代の道路部分も、細分したトレンチ調査を行ったが、水道管などの埋設管敷設による擾乱が多く、遺構面はほとんど残存していなかった。

2. 谷状地形と自然流路C-1（図I-166, 168）

谷状地形は、幅約20m、深さ約2mを測り、ほぼ調査区を南北方向に縦断している。底部に自然流路C-1を伴っており、部分的に深くなっている場所もある。自然流路C-1は谷状地形の中で、かなり蛇行を繰り返しているため、平面で流路を時期別に確認することはできなかった。谷状地形付近では柱穴や土坑などは検出されず、人々の生活の痕跡がみられない。

自然流路C-1は遺物の出土が少ないため、流水状態の時期を特定することはできない。ただ、第3章で述べたように、底から奈良時代の遺物が出土していることから、この時期にはすでに流路としての機能をもっていたことがわかる。

埋土は大きく2層に分かれる。下層の砂層堆積状況から流水状態が長く続いた様子ではなく、谷状地形の中で滞水状態と流水状態の時期が繰り返されていたことがわかる。上層には、ほぼ全体に整地層と考えられる均一な堆積層があることから、流路としての機能は失っていたものといえる。上層からは中世を中心とした遺物が検出されているため、流路は中世までには廃絶していたものと思われる。



図I-168 C地区東部 自然流路C-1断面図

第6節 C地区西部（4C～8Cトレンチ）

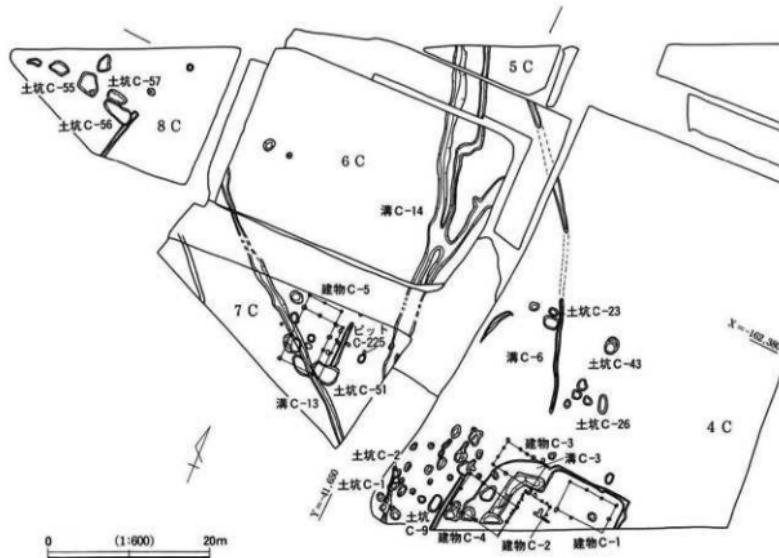
C地区西部は、谷状地形の西側平坦面にあたるが、全体に削平を受けており、包含層の残存状況は悪い。遺構は南部に集中しているが、それ以外の部分では、ほぼ南北方向に調査区を縦断する溝C-14が検出されているほかは、全体に土坑やピットは少なく、まとまっていない。

調査区南部の7Cトレンチと4Cトレンチ南端部では、狭い範囲にピットや土坑が集中しており、調査区南側に拡がる集落の一部と考えられる。建物が復原されたほか、遺物が比較的まとまって検出された土坑などがみられる。7Cトレンチ西半部では、遺構の検出は少ない。

8Cトレンチでは包含層は削平をうけているが、遺構は比較的良好に残っている。主な遺構は土坑とピットである。土坑の中には埋土に焼土や炉壁片、スラグ、鋳型片などを含むものがみられる。

1. 建物

4Cトレンチ南端部のピット群から計4棟の建物が復原された。南北方向に延びる溝C-2を境にして、西側に径60cm前後の比較的大きなピットが集中している。この溝C-2西側のピット群は、埋土や規模などから7Cトレンチ東端部のピット群と一連のものと考えられ、建物の復原はできなかったものの、その規模から比較的大きな建物群の存在が予想される。復原された建物は溝C-2の東側にあり、重複関係はみられるが、ほぼ主軸方向を同じくする建物がみられる。7Cトレンチでは、4Cトレンチの建物群とやや主軸方向の異なる、庇をもつ掘立柱建物1棟が復原できた。



図I-169 C地区西部 中世遺構略図

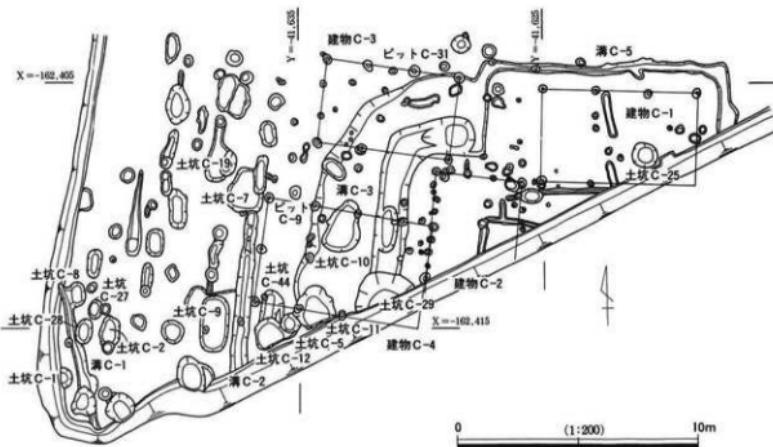


図 I-170 4C トレーナー南部平面図

(1) 建物C-1 (図I-169, 170、写I-33-1)

調査区南端部で検出され、南東部は調査区外へひろがる。溝C-3と溝C-5に囲まれた、南北2間(3.8m)×東西3間(6.4m)の建物と推定される。主軸方向はN-87°-Wで、ほぼ東西方向に一致する。東西列の柱間がやや長く、平均は東西2.1m、南北1.9mで、面積は約24.3m²である。柱穴掘方は径24~44cm、深さ3~48cmを測る。柱穴から遺物は出土していない。

(2) 建物C-2 (図I-169, 170、写I-33-1)

建物C-1と同様に、西側と北側を溝C-3と溝C-5に囲まれた区画内にあり、その南西に位置する。南部は調査区外に拡がる。東西3間(3.5m)×南北2間(3.3m)以上の建物で、主軸方向はN-5°-Eである。南北列の柱間が長く、平均は南北1.6m、東西1.2mで、面積は約11.6m²以上である。柱穴掘方は径20~39cm、深さ8~33cmを測る。柱穴から遺物は出土していない。

(3) 建物C-3 (図I-169, 170, 171、写I-33-2)

建物C-1の西側に位置しており、溝C-3と重複する。溝C-3より新しい。南北3

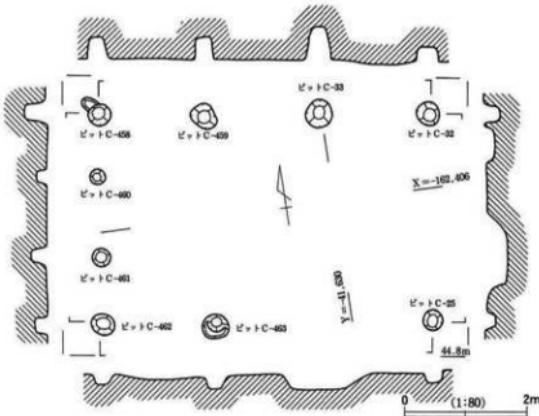
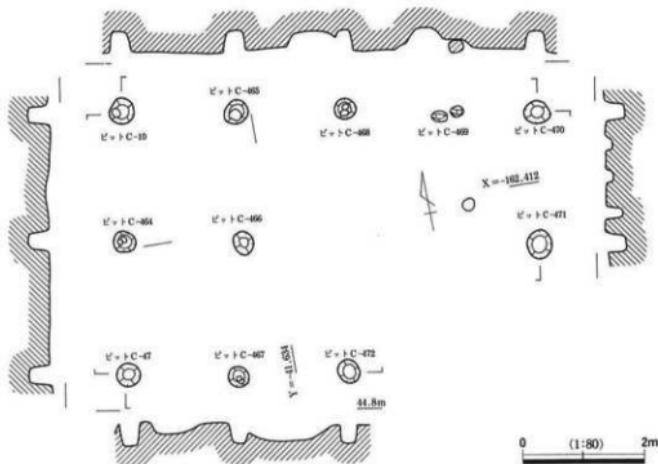


図 I-171 C地区西部 建物C-3平面・断面図



図I-172 C地区西部 建物C-4平面・断面図

間(3.5m)×東西3間(5.5m)の建物で、主軸方向はN-81°-Wである。東西列の柱間が長く、平均は東西1.8m、南北1.2mを測り、面積は約19.3m²である。柱穴掘方は径24~46cm、深さ11~56cmを測る。

(4) 建物C-4 (図I-169, 170, 172、写I-33-2)

建物C-3の南側に位置し、南東部は調査区外へ拡がる。南北2間(4.3m)×東西4間(6.9m)の建物と考えられ、主軸方向はN-80°-Wである。溝C-3・土坑C-10などと重複し、それより新しい。建物C-3とほぼ方向が同じで、建物C-3の西端の南北列の柱通りが、建物C-4の西から2列目の柱通りと一致する。南北列の柱間が長く、平均は南北2.1m、東西1.7mを測り、面積は約29.7m²である。柱穴掘方は径28~46cm、深さ4~40cmを測る。

(5) 建物C-5 (図I-169, 173、写I-35-2)

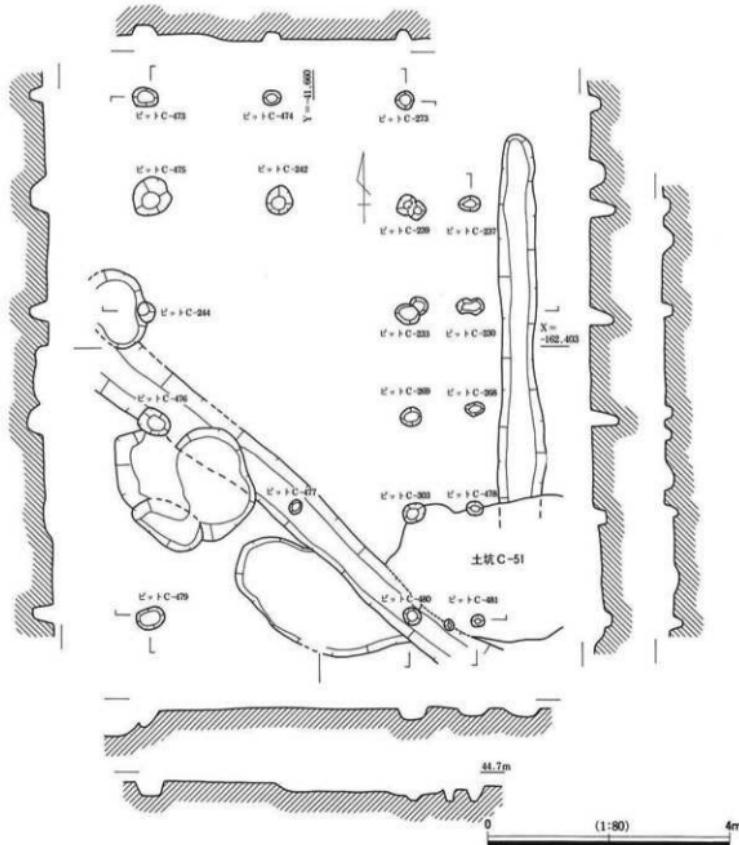
7Cトレンチのはば中央部に位置し、南部は土坑C-51や溝C-13と重複しているため、一部柱穴が確認できないが、規模は東西2間(4.3m)×南北4間(6.8m)と推定される。北側と東側に庇をもっており、東側庇の外側に雨落ち溝と考えられる溝が検出されている。主軸方向はN-1°-Eで、ほぼ南北方向に一致する。東西列の柱間が長く、平均は東西2.1m、南北1.8mを測り、面積は約29.2m²である。庇の柱間は母屋と同じ長さであるが、庇と母屋との間隔は異なり、北側で1.7m、東側で1.0mを測る。柱穴掘方はほぼ円形を呈しており、母屋は径24~46cm、庇は20~47cmを測り、あまり差はないが、深さの方は母屋の平均32cm、庇の平均14cmと倍以上母屋が深い。

柱穴の埋土は、基本的に粘性のない灰黄色シルトと、粘性のある灰黄褐色シルトが混在しており、堅緻な堆積状況を示している。柱穴からは、瓦器碗や土師器の破片がわずかに出土する程度で、形のわからものはあまりなく、時期ははっきりしない。その中で、時期の確定できるものとして、建物C-5の柱穴のピットC-273から出土した瓦器小皿・碗は、13世紀末のものと考えられる(図I-174-5, 27)。

2. ピット（図I-169）

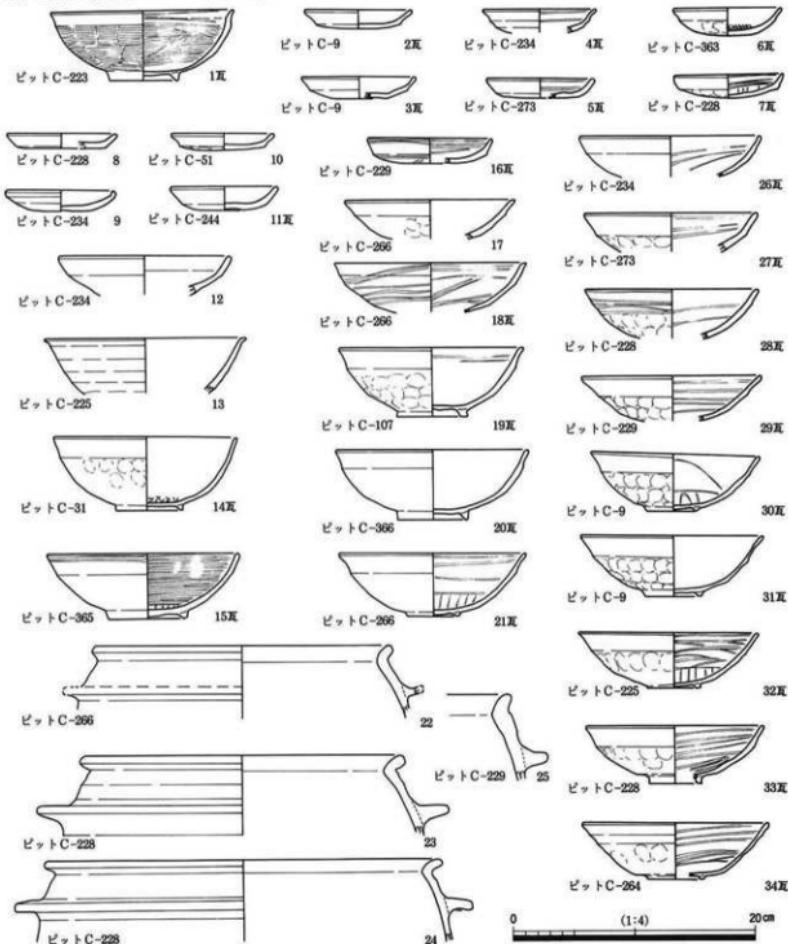
ピットは、調査区南部の狭い範囲に集中している。西部の6Cトレンチや8Cトレンチでは散在する程度で、遺物もほとんど出土していない。また、4Cトレンチ北部では、削平をうけていることも関係しているが、ピットがほとんどみられない。さらに、土坑や溝も検出されていないことから、この部分には建物が存在していなかったことも考えられる。

調査区南部のピットはほとんどが柱穴と考えられ、底に石や瓦（ピットC-225など）などを敷いたものが多くみられた。復原できた建物は、前述した5棟にとどまるが、この部分でさらに多くの建物が存在したことが推定される。4Cトレンチ南部では、建物の柱穴から出土した遺物として、瓦器や土師器の細片が出土しているが、時期ははっきりしない。



図I-173 C地区西部 建物C-5 平面・断面図

他のピットからは、瓦器碗・小皿、土師器羽釜・小皿などの破片が出土しており、時期は12~14世紀におさまるようである。13世紀を中心とした遺物が多いが、中には12世紀代の瓦器碗や土師器羽釜が出土したピットもみられる。このようなピットはほぼ全域にみられることから、この時期から建物が存在したことが推測される。また、14世紀代の遺物を出土したピットは比較的少なくなることや7Cトレチに限られてくることから、13世紀を中心とした短い期間に調査区南部で、数棟の掘立柱建物が建てられ、生活が営まれたことがわかる。



図I-174 C地区西部 ピット出土土器

3. 溝

4 C トレンチ南半部で、計5条の溝が検出された。そのうち溝C-3と溝C-5は、建物C-1・建物C-2を区画する溝である。また、調査区のはば中央部を南北に縱断する溝C-14が検出されている。

(1) 溝C-1 (図I-170, 176)

4 C トレンチ南西端を南北方向に延びる。幅0.3~0.5m、深さ約0.2mを測る。埋土は灰褐色シルトに地山の粘土がブロック状に混入する。遺物は少なく、図示できるものはなかった。

(2) 溝C-2 (図I-170, 写I-33-3)

建物C-4の西側に隣接する南北方向の溝である。総延長9.0mを検出したが、南側は調査区外に延びる。土坑C-7と重複し、土坑よりも古い。幅約0.7m、深さ0.2~0.5mを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面には深く掘り込まれた部分がある。遺物は土師器皿、瓦器碗、青磁片、炉壁、スラグなどが出土した。土師器皿・瓦器碗は13世紀におさまるものと考えられる(図I-175-1~3)。

(3) 溝C-3 (図I-169, 170, 写I-33-3)

建物C-2の西側と北側を区画する。南端部は土坑C-11・土坑C-29に切られているが、さらに調査区外へ延びる。東端で溝C-5に続くが、新旧関係は明らかではない。幅3.0m~4.0m、深さ0.3mを測る。底面は平坦であるが、東端部と西側中央は深く掘り込まれている。壁は2段に立ち上がり、外側が浅くなる。掘り込み部分は地山の粘土がブロック状に混入し、固く縮まっており、人為的な堆積状況を示している。東端の平坦部から13世紀前半の瓦器碗が重なって出土した(図I-175-4, 5)。

(4) 溝C-5 (図I-170)

建物C-1の北側と東側を区画する、幅約0.4m、深さ約0.1mの深い溝である。埋土はオリーブ褐色シルトの1層で、遺物の量は少なく、図示できるものはなかった。

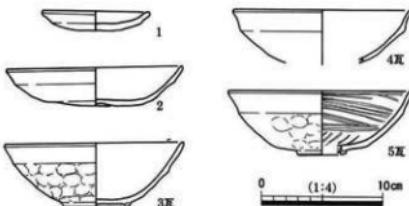
(5) 溝C-6 (図I-169)

4 C トレンチ北西端から南東方向にまっすぐ延びる溝である。中央部は削平を受けているため、ほとんど確認できないが、北端は5 C トレンチ部分で溝C-14に続くものと考えられる。埋土は灰褐色シルトの1層である。遺物の量は少なく、図示できるものはなかった。

(6) 溝C-14 (図I-169, 写I-34-4)

5 C ~ 7 C トレンチをほぼ南北方向に縱断する溝で、数条の溝がつながっている。6 C トレンチで南からの2条の溝が合流し、さらに3条に分かれて北に延びている。幅1m前後、深さ0.2~0.4mを測り、底部は平坦である。埋土はにぶい黄色シルトが基本で、黄褐色シルトが混在する部分もある。埋土からは土師器や瓦器の破片が出土しているが、形を復元できるものはなく、時期ははっきりしない。

人為的に掘削されたものであるが、規則性などはみられず、性格は不明である。底のレベルはほぼ一定であるため、水路と考えた場合には、流れの方向ははっきりしない。5 C・6 C トレンチでは、溝C-14の東側で柱穴が検出されていることから、区画を示す溝とも考えられる。ただ、道路をへだてて東側の4 C トレンチでは、これらの柱穴と関連のある遺構は見つかっていない。



図I-175 C地区西部 溝C-2(1~3)・溝C-3(4,5)出土土器

4. 土坑

土坑も他の遺構と同様に調査区南部で多く検出されている。特に4Cトレンチ南端部に集中するほか、7Cトレンチ東部や8Cトレンチでもまとまっている。形態・規模・位置関係に規則性は認められないが、中には炭化物、スラグ、焼土が出土したものがあり、これらは鑄造関係の遺構と考えられる。

(1) 土坑C-2 (図I-169, 170, 176)

4Cトレンチ南西端部で検出された。現状で南北方向に長い楕円形を呈しており、長径1.0m以上、短径0.8m、深さ0.1mを測る。埋土は1層で、遺物は瓦器、土師器の細片が少量みられる程度である。出土した瓦器碗は、14世紀初頭のものと考えられる(図I-178-1)。

(2) 土坑C-7 (図I-170)

4Cトレンチ南西部で検出された。溝C-2と重複しており、溝よりも新しい。現状で楕円形を呈しており、長径1.8m、短径1.5m、深さ0.2mを測る。埋土には地山の粘土がブロック状に混入する。遺物は瓦器や土師器羽釜の細片が出土している。

(3) 土坑C-8 (図I-170, 176)

4Cトレンチ南西端部で検出された。溝C-1と重複しており、溝よりも古い。現状で楕円形を呈しており、長径1m、短径0.6m、深さ0.3mを測る。埋土はオリーブ褐色シルト層で、焼土が若干混入する。

炉壁や瓦器の細片が少量出土しているが、時期ははっきりしない。

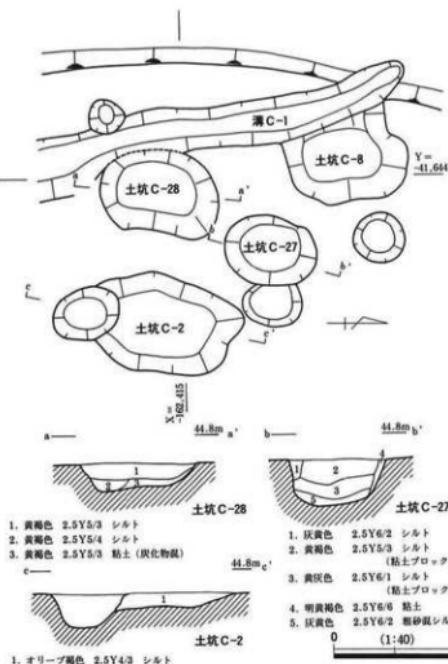
(4) 土坑C-9 (図I-169, 170, 177)

4Cトレンチ南西端部で検出され、土坑C-2の東4mに位置する。現状で南北方向に長い楕円形を呈しており、長径2.3m、短径1.2m、深さ0.2mを測る。埋土は、暗灰黄色粘土混シルトの1層である。遺物は、瓦器や土師器が少量みられる程度である。瓦器碗は14世紀初頭のものと考えられる(図I-178-3)。

(5) 土坑C-10

(図I-170, 177、写I-33-4)

4Cトレンチ南端部で検出され、溝C-3・建物C-4と重複する。溝より新しく、建物より古い。現状で南北方向に長い楕円形を呈しており、長径2.1m、短径1.2m、深さ0.4mを測る。埋土は大きく2層に分かれる。上層には炭化物や焼土が含まれており、スラグが多く出土している。下層は灰黄褐色粘土が主体であるが、地山の粘土がブロック状に多く混入しており、固く縛まっている。底面は

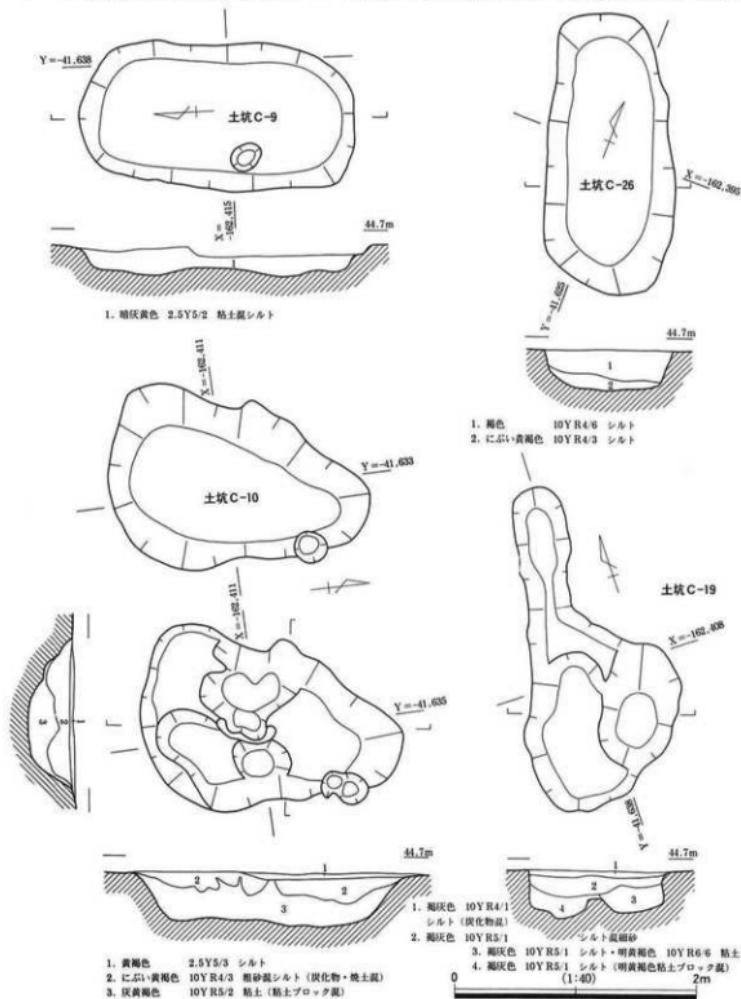


図I-176 C地区西部 土坑C-2・土坑C-27・土坑C-28

平坦で壁はゆるやかに立ち上がる。遺物は、瓦器の細片が少量出土したのみであるため、時期ははっきりしない。

(6) 土坑C-5 (図I-170)

4Cトレンチ南端部で検出された。土坑C-11・土坑C-12と重複しており、それより古い。ほぼ円



図I-177 C地区西部 土坑C-9・土坑C-10・土坑C-19・土坑C-26平面・断面図

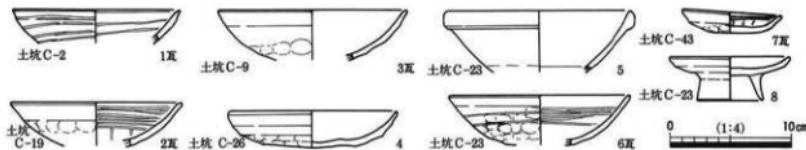


図 I-178 4 C トレンチ土坑出土土器

形を呈しており、径0.8m、深さ0.3mを測る。埋土には焼土、炭化物、スラグが多く混入している。遺物は、瓦器碗や土師器羽釜の細片が少量出土したのみである。

(7) 土坑C-11(図I-170)

建物C-4と重複しており、建物より古い。南半部は調査区外に拡がる。現状で、長辺1.8m、短辺1.6m、深さ0.2mを測る。底面と壁の境ははっきりしておらず、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土には地山の粘土がブロック状に混入している。

(8) 土坑C-12(図I-170)

土坑C-44と重複しているが、新旧関係は明らかではない。南半部は調査区外に拡がる。現状で、長径1.3m、短径1.0m以上、深さ0.3mを測る。埋土中には、土坑C-5と同様に炭化物、焼土、スラグが多く混入している。瓦器碗や土師器などの細片が少量出土している。

(9) 土坑C-19(図I-170, 177)

4 C トレンチ南西部で検出され、溝C-2の先端部にある土坑C-7の北西部に位置する。現状で北側が溝状に延びる不整形を呈しており、規模は長辺2.7m、短辺1.2m、深さ約0.4mを測る。底面は、東側と西側が掘り込まれており、平坦ではない。壁はほぼまっすぐに立ち上がる。

埋土は大きく2層に分かれ。上層は褐色シルト混細砂が主体で、炭化物が含まれる。下層も褐色シルトが主体であるが、地山の粘土がブロック状に混入し固く締まっている。遺物の量は少なく、瓦器や土師器の細片が出土したのみである。瓦器碗は14世紀初頭のものと考えられ(図I-178-2)、土坑C-2や土坑C-9出土のものとほぼ同時期である。

(10) 土坑C-25(図I-170)

4 C トレンチ南端部で検出され、建物C-1の中に位置しているが、新旧関係は明らかでない。現状で径1.0m、深さ0.4mを測る。底面は平坦で円形を呈しており、壁は垂直に立ち上がる。埋土には地山の粘土がブロック状に混入しているが、比較的均質なシルト層である。遺物の量は少なく、瓦器碗、土師器の細片が出土したのみである。

(11) 土坑C-27(図I-170, 176)

4 C トレンチ南西端部で検出された。梢円形を呈しており、長径0.8m、短径0.6m、深さ0.4mを測る。埋土は3層に分かれ、上層と中層には地山の粘土がブロック状に多く混入している。瓦器碗・皿、土師器の細片が少量出土した。

(12) 土坑C-28(図I-170, 176)

4 C トレンチ南西端部で検出された。溝C-1と重複し、溝よりも古い。ほぼ梢円形を呈しており、長径1.0m、短径0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は黄褐色シルトが主体で、下層には炭化物、焼土が少量混入する。瓦器碗、土師器の細片が少量出土した。

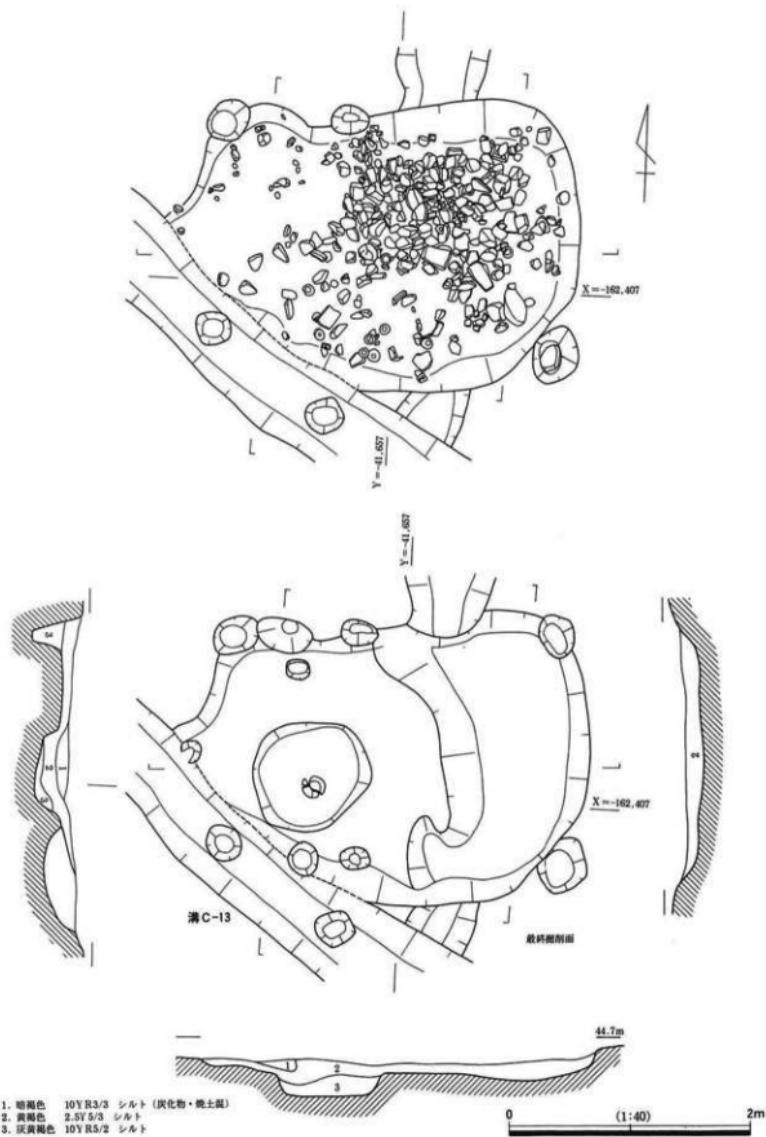


図 I-179 C地区西部 土坑C-51平面・断面図

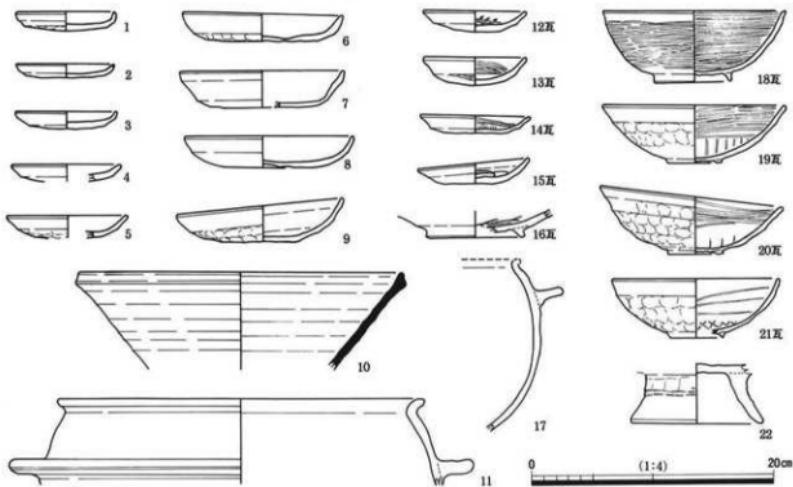


図 I-180 C地区西部 土坑C-51出土土器

(13) 土坑C-29 (図 I-170)

4 C トレンチ南端部で検出された。溝C-3・建物C-4と重複しているが、新旧関係については明らかではない。南半部は調査区外に拡がる。ほぼ円形を呈するものと考えられ、現状で長径2.7m、短径1.2m以上、深さ0.6mを測る。底面と壁の境界ははっきりせず、壁は断面鉢鉢状に立ち上がる。井戸あるいは水溜などの可能性が考えられるが、底面は疊層にまで達していない。

(14) 土坑C-23 (図 I-169)

4 C トレンチ西端部の溝C-6の西側で検出された。東西方向に長い椭円形を呈しており、長径1.1m、短径0.8m、深さ0.3mを測る。遺物は、瓦器や土師器などが出土している。瓦器碗や土師器小皿は13世紀末～14世紀のものと考えられる (図 I-178-5, 6, 8)。

(15) 土坑C-26 (図 I-169, 177)

4 C トレンチの中央部で検出された。南部の遺構集中部からは約9m北に位置する。現状で南北方向に長い椭円形を呈しており、長径2.3m、短径1.1m、深さ0.3mを測る。埋土は2層に分かれるが、南部の土坑とはやや異なる土層である。遺物の量は少なく、瓦器や土師器の細片が出土したのみである。土師器皿は13世紀のものと考えられる (図 I-178-4)。

(16) 土坑C-43 (図 I-169)

4 C トレンチの中央部で検出された。土坑C-26の約7m北に位置する。南北方向に長い椭円形を呈しており、長径2.0m、短径1.5m、深さ0.2mを測る。遺物の量は少なく、瓦器や土師器の細片が出土したのみである。瓦器小皿は13世紀末のものと考えられる (図 I-178-7)。

(17) 土坑C-51 (図 I-169, 173, 179、写I-36-1~3)

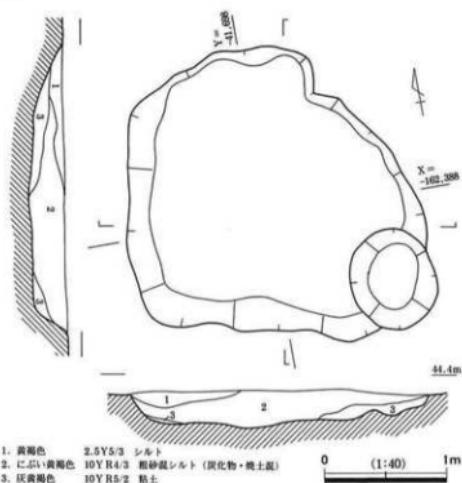
7 C トレンチのほぼ中央部に位置しており、建物C-5・溝C-13と重複している。柱穴の重複関係から、建物C-5より古いと考えられ、溝C-13より新しい。平面形は東西方向が長い隅丸方形を呈してい

ると推定される。規模は長辺3.2m以上、短辺2.3m、深さ0.15~0.3mを測る。埋土は黄褐色シルト層が基本で、地山の土がブロック状に混在する。

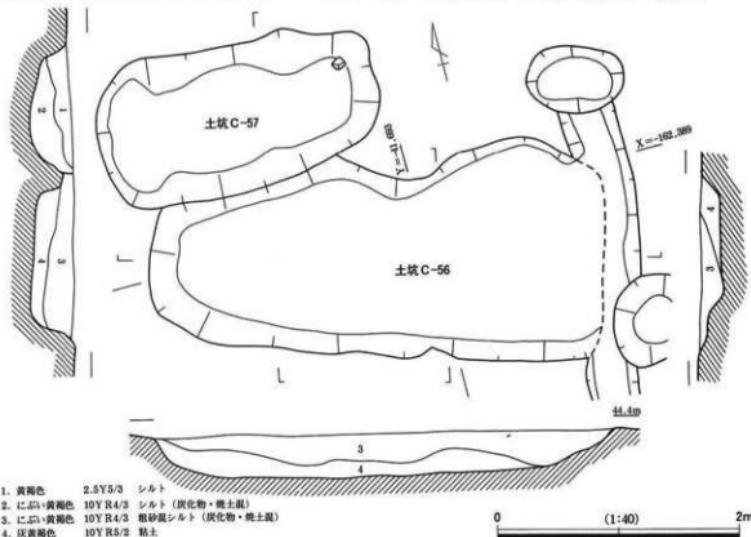
径20cm前後の礫や瓦、瓦器、土師器などが廃棄された状態で多く検出されている。また、焼土や炭化物、炉壁片などが含まれる部分があり、鋳型も出土していることから、付近で鋳造作業が行われていたことが推測される。

遺物は、土師器皿・小皿・羽釜、瓦器小皿・椀・鉢、須恵器こね鉢などが出土している。時期は13~14世紀のものと考えられる（図I-180）。

底部で径約0.9m、深さ0.2mの円形落ち込みが検出された。遺物の量は少ないが、底から瓦器椀1点が置かれた状態で見つかった（図I-180-18）。12世紀中頃のものと考えられ、他の遺物とは時期が異なるため、この落ち込みは土坑C-51に切られた土坑ということができる。



図I-181 C地区西部 土坑C-55平面・断面図



図I-182 C地区西部 土坑C-56・土坑C-57平面・断面図

(18) 土坑C-55(図I-169,181、写I-37-3)

8 Cトレント西部で検出された。不定形を呈しており、長辺2.5m、短辺2.3m、深さ0.3mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト層が主体で、粗砂が混在している。底部に灰黄褐色粘土が堆積する。焼土や炉壁片、スラグ、鋳型片などが出土しているが、土器類は瓦器の破片が少量みられる程度で、時期は特定できない。また、鋳型片には紋様がなく、製品を特定することは困難である(写I-106-7)。

(19) 土坑C-56・C-57(図I-169,182、写I-37-1)

8 Cトレント中央部で検出された。土坑C-56は北西端部を土坑C-57に、東部を溝に切られている。土坑C-57は土坑C-56より後に掘削されているが、埋土はほぼ同じで、同時に埋められているため、土層による新旧の差は認められない。

土坑C-56は、隅丸方形を呈しており、長辺3.8m、短辺1.7m、深さ0.3~0.4mを測る。埋土は土坑C-55と同様に、にぶい黄褐色シルト層が主体で、粗砂が混在している。西半部が一段下がっており、底部に灰黄褐色粘土が堆積する。

土坑C-57も隅丸方形を呈しており、長辺2.4m、短辺1.2m、深さ0.4mを測る。埋土は他の土坑と同様に、にぶい黄褐色シルト層が主体で、粗砂を含む。いずれも埋土から、焼土や炉壁片、スラグ、鋳型片などが出土しているが、土器類は少なく、時期は特定できない。

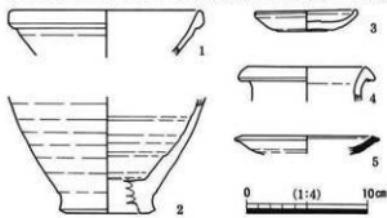
8 Cトレントの土坑群(土坑C-55・C-56・C-57)は、形や規模は異なっているが、ほぼ一列に並んでおり、なんらかの規則性をもって掘削された土坑群といえる。いずれも埋土は基本的に同じで、炉壁片やスラグ、鋳型片などが出土している。このため、これらの土坑は中世の鋳造作業とともに廃棄坑と考えることができる。ただ、地山が良好な粘土であることから、鋳型などの材料となる粘土の採掘坑の可能性もある。8 Cトレント内では、柱穴はほとんど見つかっておらず、工房跡などは確認されていない。4 C~7 Cトレントでも、鋳造関係の遺構は検出されていないが、調査区外の近接した地域で、中世に鋳造作業が行われていたことは確かであろう。

5. 包含層出土遺物

包含層はほとんど削平されているため、全体に出土遺物は少ないが、4 Cトレントから白磁が出土している。後世の混入の可能性もあるが、12~13世紀の白磁四耳壺や13世紀代の白磁碗などがみられる。また、地山直上からは11~12世紀の完形の土器小皿が出土している。さらに、6 Cトレントでは15世紀代の瀬戸美濃おろし皿が出土している(図I-183)。

6. 小結

C地区西部は全体に削平をうけており、包含層はほとんど失われていたが、ほぼ13世紀を中心とする遺構や遺物が検出された。調査区の中央部から北部にかけては遺構がほとんど検出されず、C地区東部



図I-183 C地区西部 包含層出土土器

の状況と似ている。建物や土坑などの遺構は特に調査区南部にかたよっており、さらに調査区の南側に拡がるようである。また、炉壁片やスラグ、鋳型が比較的多く出土していることから、工房跡などは見つかっていないものの、この地区でも鋳造作業が行われていたことが考えられる。調査区の南側を東西方向に走る、富田林街道沿いの集落の一部ということができる。

第7節 瓦

瓦は一つの範から同一紋様を多量に生産し、また前時代の瓦も使用可能なものは再利用するという性格がある。よって瓦については本文内の個々の遺構の項目で説明を加えるのではなく、この節において、各紋様の瓦を説明することとする。個々の瓦の概略は掲載瓦一覧(62~67)を作成しているので、ここではそれ以外の特徴等を記述し、分布状況、紋様・技法の変遷等についてはII調査区を含めて、基礎分析の項目において記述している。

発掘調査終了直後の概報の刊行に際してはII調査区出土瓦のみ型式番号を与えたが、今回の報告書作成にあたって、I・II両調査区に共通のものが多数あり、新たに新型式番号を与えた。I調査区の概要報告書では分類番号は設定していない。

瓦の出土地区はおおよそA地区東部の溝A-1・2、A地区西部の溝A-10、土坑A-103、B地区東部溝B-1・4・7・11・38、土器溜まりB-1である。12~16世紀に至るものが出土しており、軒丸・丸瓦では1,734.44kg、軒平・平瓦が3,348.15kg、道具瓦270.29kgの重量である。

1. 軒丸瓦

A型式は複弁と単弁を交互に配置する蓮華紋である。A-1bの中房は隆起がなく、凸線で表す。蓮弁は複弁間の下部に重ねるように単弁を配置する。A-2の複弁と単弁は重複することなく交互に配置する。

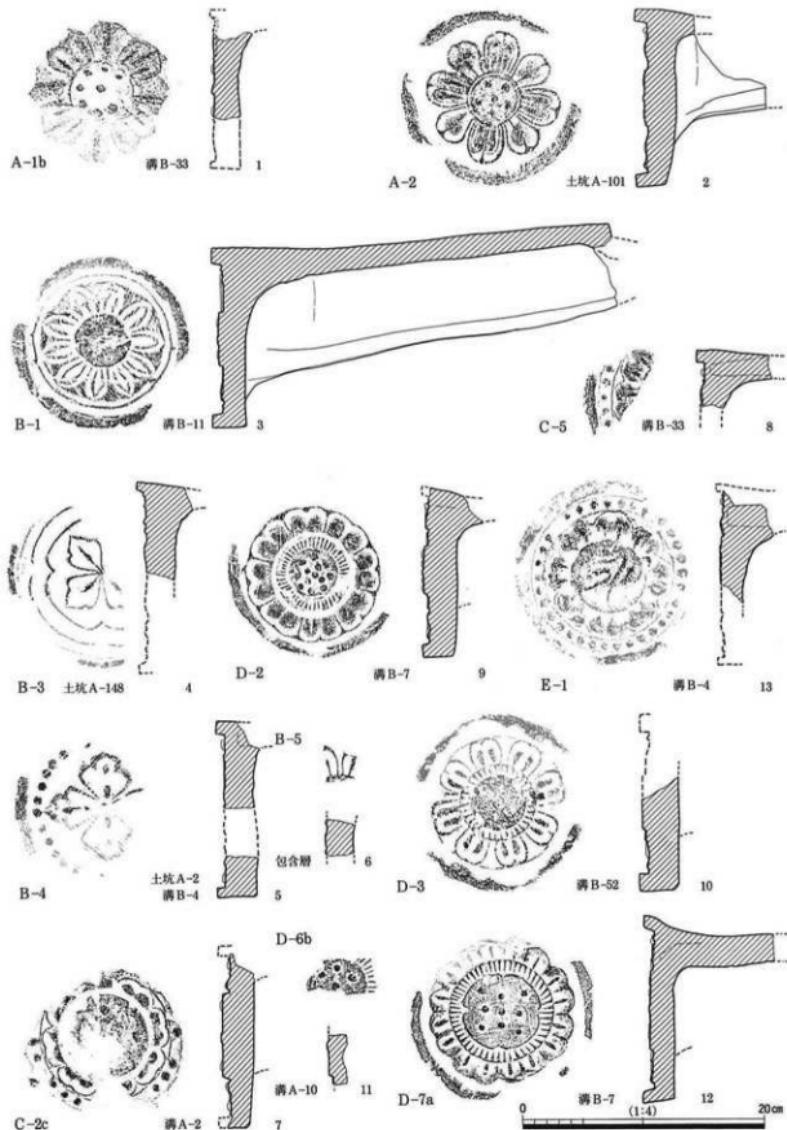
B型式は単弁蓮華紋である。B-1の蓮弁外の圓線と外縁の間に範傷が多くみられる。丸瓦部は瓦当裏面に深く被っており、接合部のナデは粗い。玉縁部分の粘土の補充は少量である。釘穴は焼成後の穿孔である。凹面布目痕に布袋の綴じ縫いが観察される。B-3・B-4は外形線と中央に稜線が伸びる形態の蓮弁を4葉配置する。B-3は外縁との間に2本の圓線が蓮弁間の位置で窪みを有しながら巡る。B-4は珠紋帯が巡り、弁子は途中で途切れる。B-5は蓮弁部分のみの残存である。

C型式は複弁蓮華紋である。C-2cの中房は大きく、2・3点を1単位とした珠紋帯が巡る。C-5はC-2cと紋様形態は同一であるが、蓮弁の長さに違いがみられる。

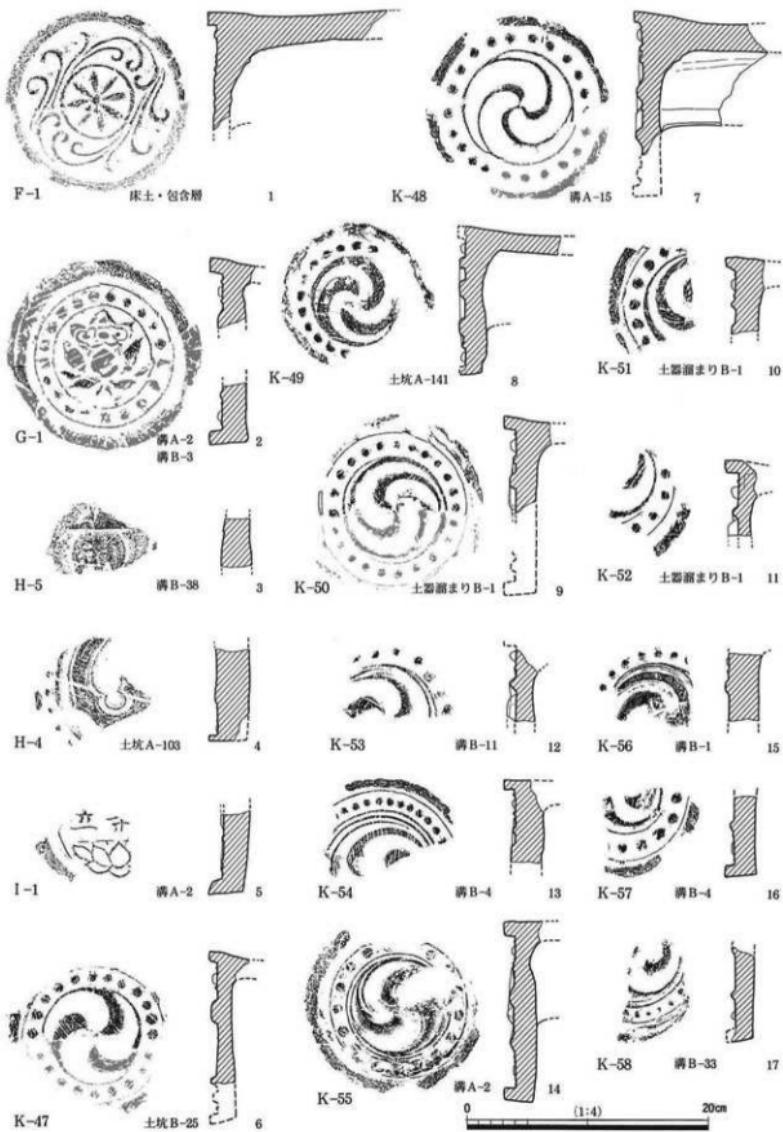
D型式は雄蕊帯を有する複弁蓮華紋である。D-2の八葉蓮華は連続した紋様であるが、界線により1単位を表す。雄蕊帯の凸線は一部中房に対して垂直になっておらず、やや雑な造りを呈している。蓮弁と外縁の間に範傷がみられる。27点の出土点数を数える。D-3はII調査区出土のE-2~4型式の蓮

表 I - 2 I 調査区軒瓦出土点数表

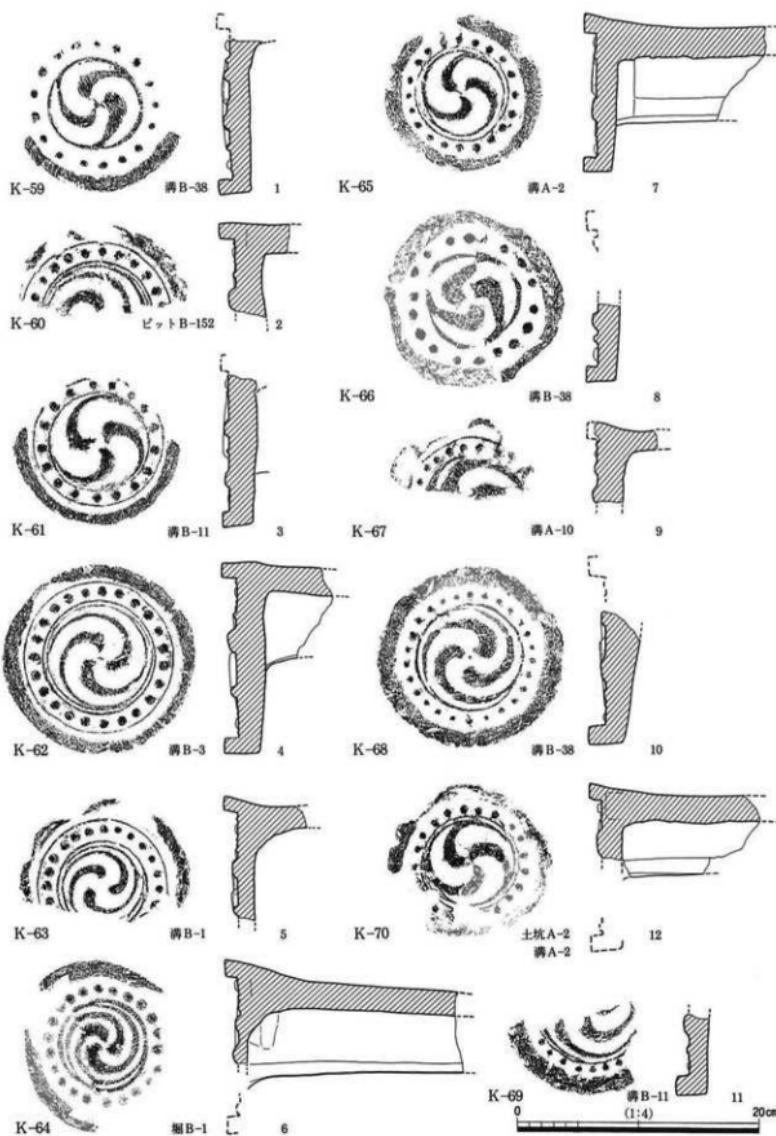
軒丸瓦 出土点数										軒平瓦 出土点数									
型式	數	型式	數	型式	數	型式	數	型式	數	型式	數	型式	數	型式	數	種類	數		
A-1b	1	D-7	4	K-62	1	K-64	1	K-76	2	K-88	5	B-1	2	J-2	6	N-7	1	S-26	3
A-2	1	E-1	1	K-63	1	K-65	1	K-77	2	K-89	1	B-2	2	J-3	2	N-8m	3	S-27	1
B-1	1	F-1	1	K-54	4	K-66	1	K-78	1	K-90	1	C-1	12	J-4	3	N-12	1	S-28	1
B-3	3	G-1	2	K-65	2	K-67	1	K-79	12	K-91	1	C-2	5	J-5	1	N-13	1	S-29	1
B-4	2	H-4	1	K-56	1	K-68	4	K-80	4	K-92	2	C-3	1	J-6	16	N-14	1	S-30	1
B-5	1	H-5	1	K-57	1	K-69	1	K-81	7	K-93	1	D-2	1	J-7	5	O-1	19	S-31	1
B-6	1	I-1	1	K-58	1	K-70	1	K-82	3	計	169	E-1	2	L-1	16	O-2	1	S-32	1
C-2c	1	J-1	1	K-59	1	K-71	3	K-83	1	G-2	1	M-2	1	O-4	2	S-33	1	鰐頭瓦	28
C-5	1	K-47	3	K-59	1	K-71	3	K-83	1	G-3	1	N-2	1	P-1	3	S-34	1	櫛板瓦	46.25
D-2	27	K-48	6	K-60	2	K-72	3	K-84	3	G-4	1	N-4	1	R-1	1	S-35	2	蟹斗瓦	28
D-3	1	K-49	2	K-61	5	K-73	1	K-85	1	G-5	1	N-5	1	S-24	13	S-36	2	堆	146
D-6b	1	K-50	2	K-62	4	K-74	1	K-86	1	H-1	8	N-5	1	S-37	2	總合計	1863.5		
D-7a	12	K-51	1	K-63	1	K-75	1	K-87	1	I-2	1	N-6	1	S-25	1	計	153		



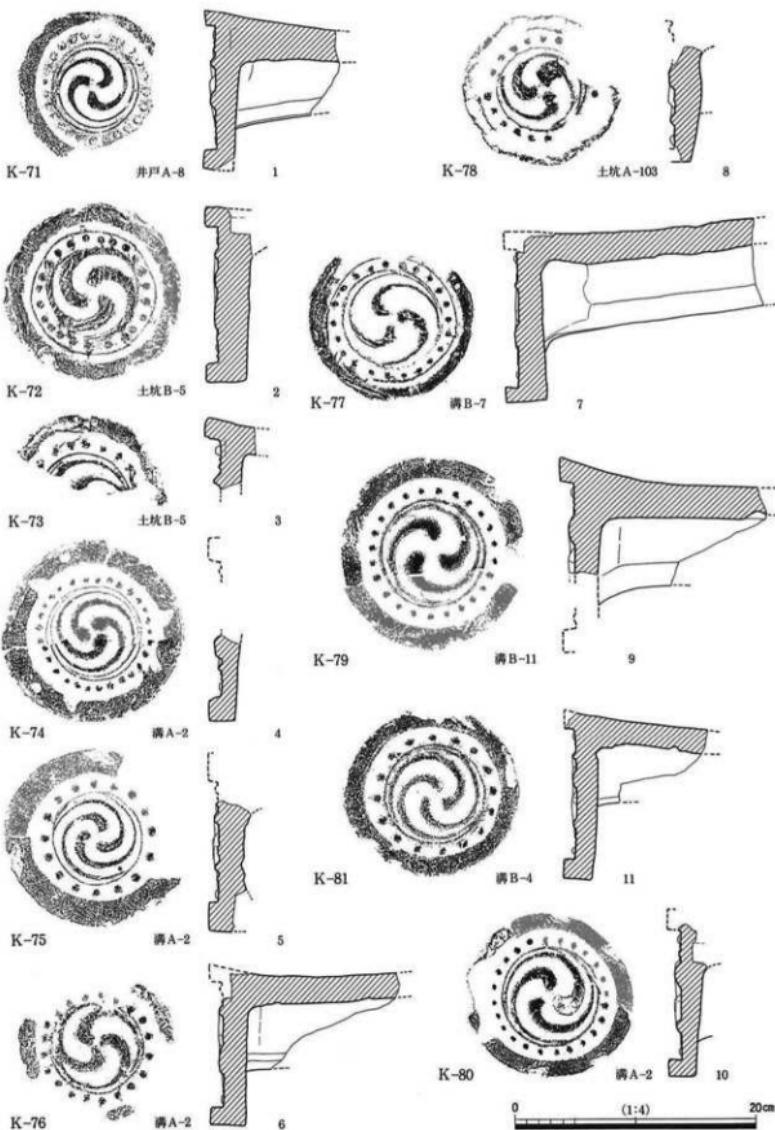
図I-184 軒丸瓦(1)



図I-185 軒丸瓦(2)



図I-186 軒丸瓦(3)



図I-187 軒丸瓦(4)

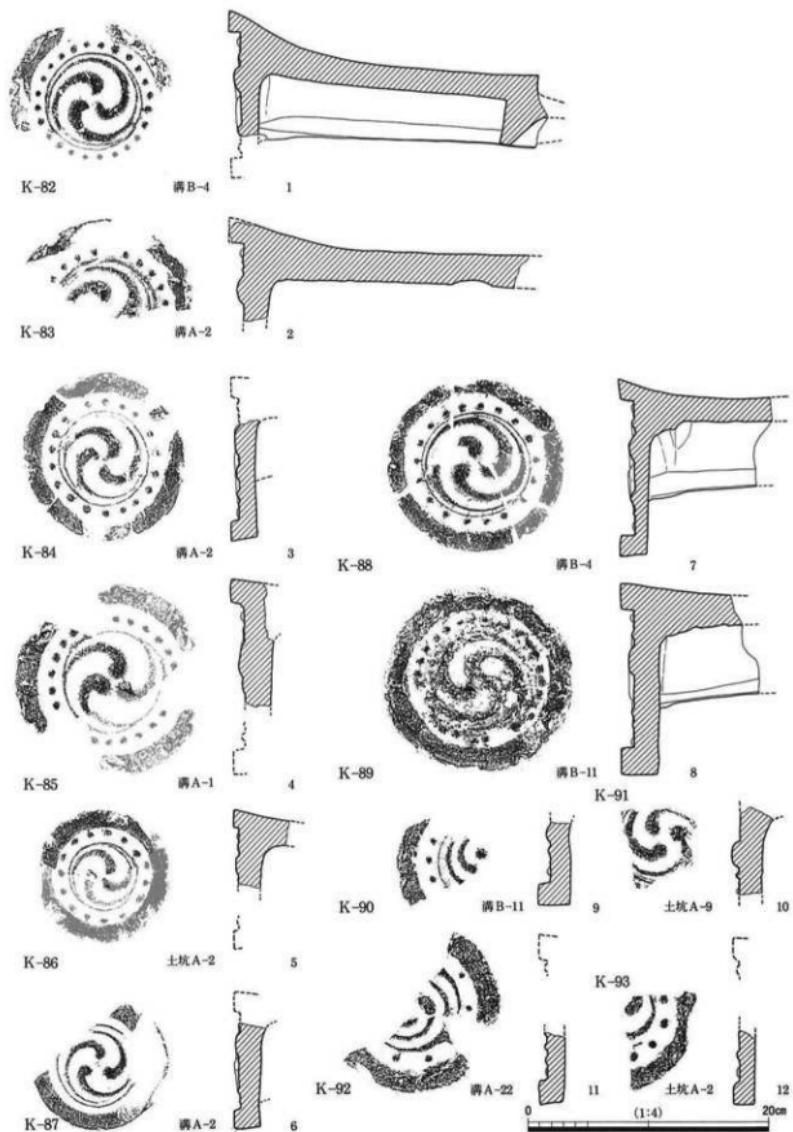


図 I-188 軒丸瓦 (5)

華紋と類似する。中房部分は残存不良のため、蓮子あるいは梵字かは不明である。D-7aの中房の四方には窪みを有する。雄蕊帯の凸線は一部、垂直に伸びず、やや乱雑である。12点の出土点数を数える。

E型式は中房に梵字を配する複弁蓮華紋である。

F型式は蓮華唐草紋である。F-1の八葉蓮華紋は中房が隆起せず、周囲の唐草と共に同一面に刻まれている。

G型式は横からみた蓮華紋であり、内外に圓線を施す珠紋帯を有する。

H型式は仏具等の紋様である。H-5は五輪塔を中央に配し、水輪部分に梵字の「アン」あるいは「キリーク」を置く。右端に圓線が残存する。H-4は三鉢杵の先端部分を紋様とする。珠紋帯の内側

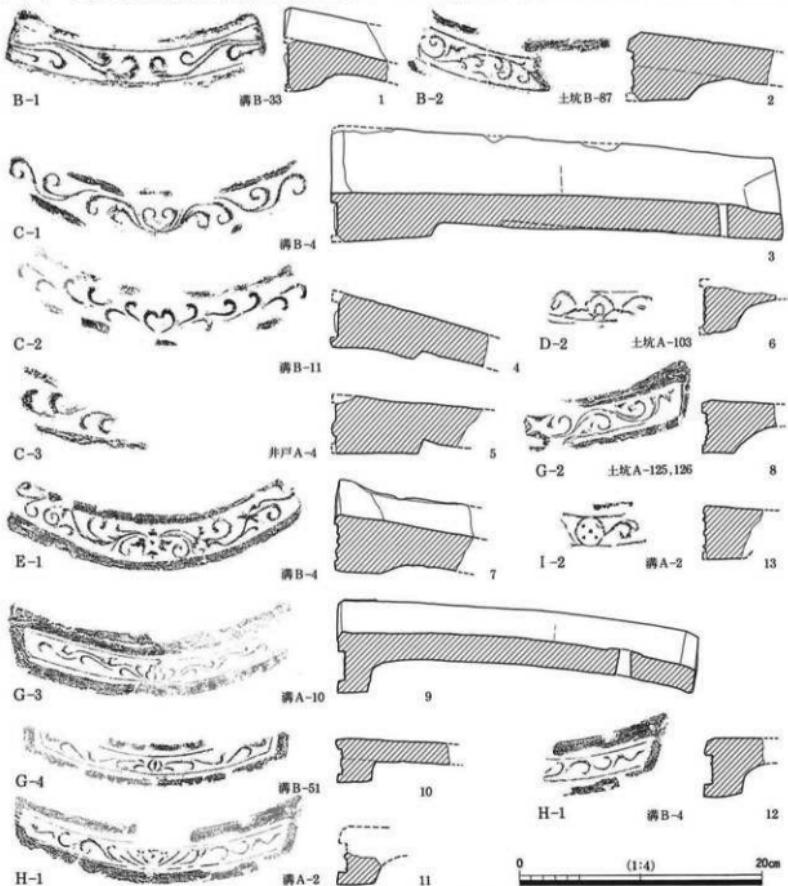


図 I-189 軒平瓦 (1)

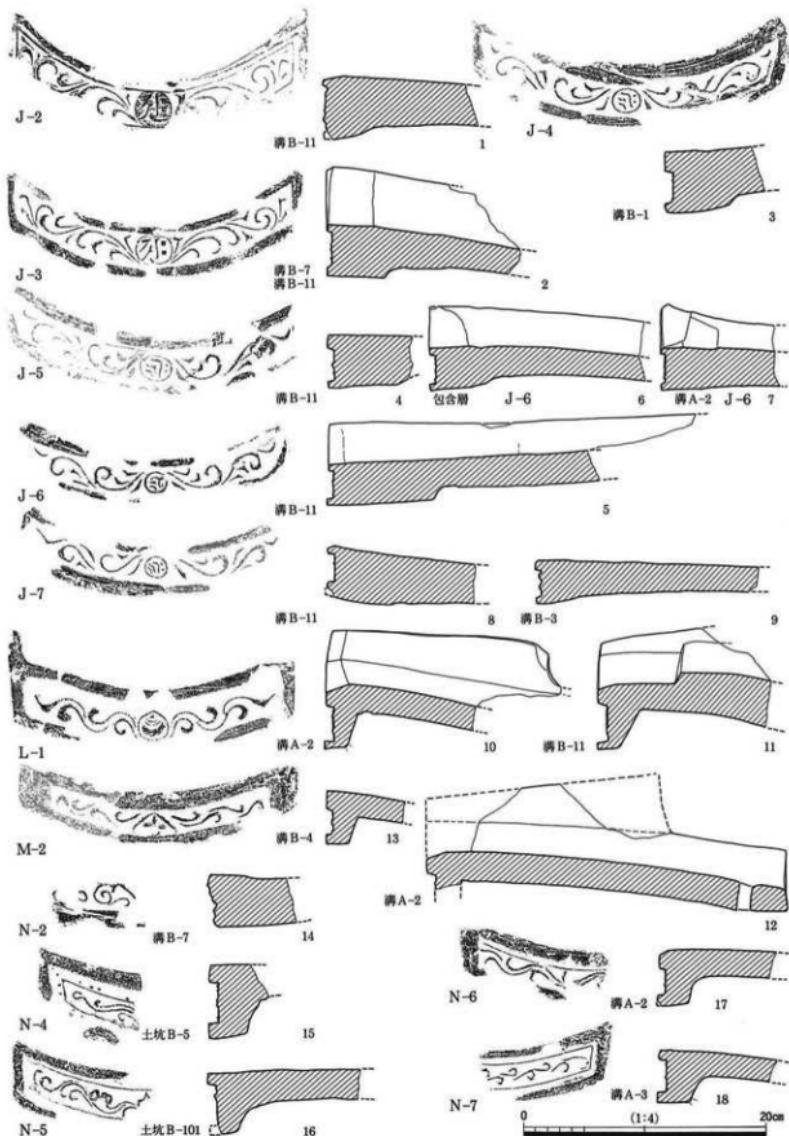


图 I - 190 轩平瓦 (2)

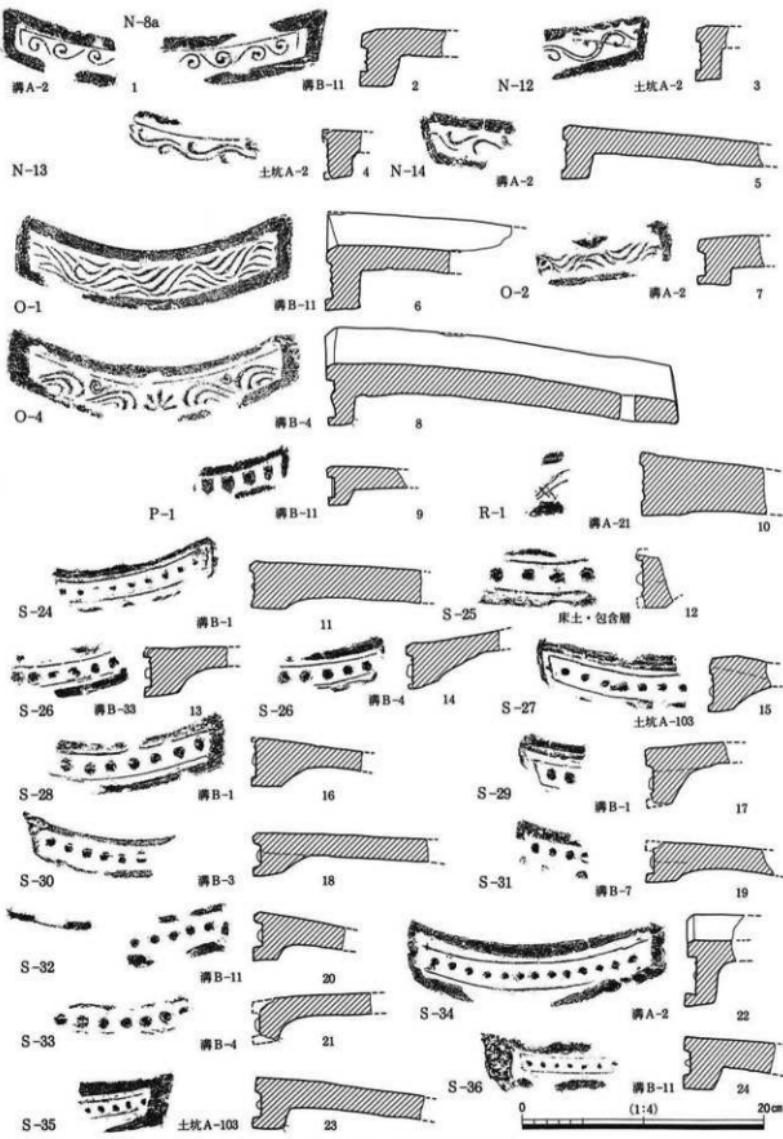


図 I-191 軒平瓦 (3)

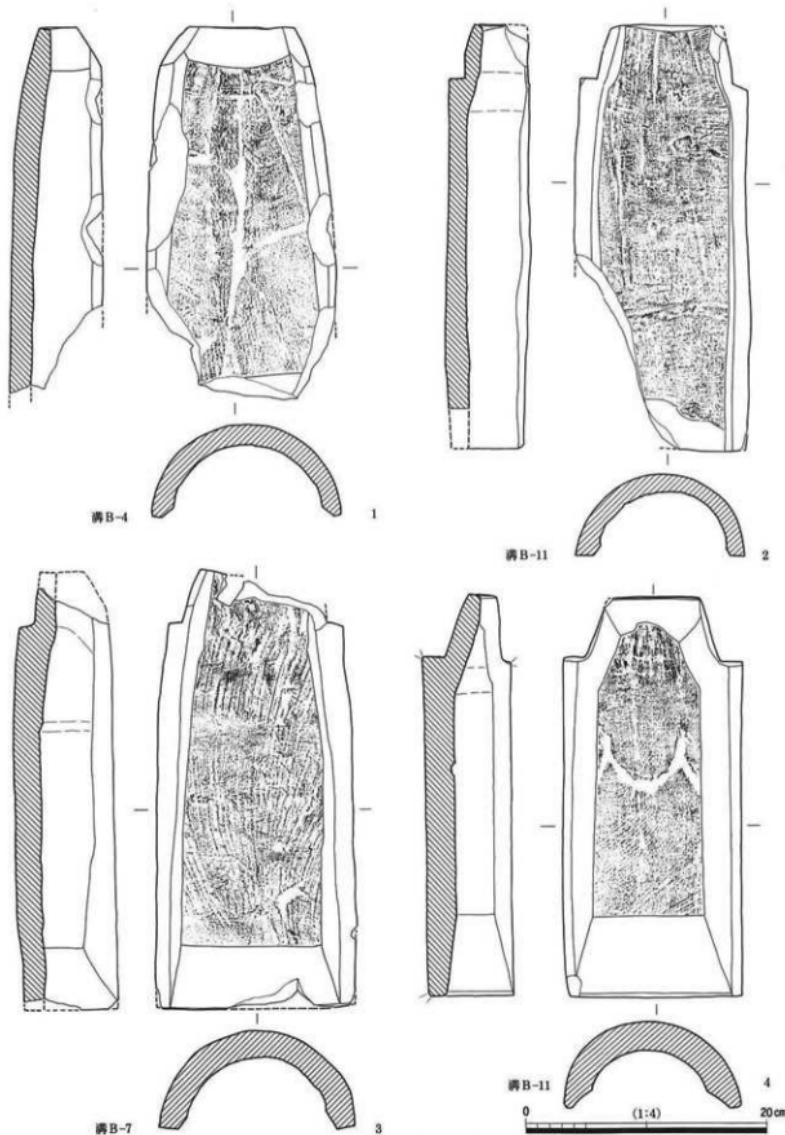


図 I - 192 丸瓦 (1)

には圓線が巡る。外縁の幅は狭い。

I型式は文字を紋様としたものである。横からみた蓮華の上部に文字を配する。「立」・「寺」の文字のみが確認できるが、他は不明である。縦横3列ずつの文字配列が推定される。

K型式は巴紋である。K-1～46まではII調査区出土のものであり、47以降をI調査区出土のものにあてた。47・48は頭部が尖り、密着する。尾は圓線と連なる。49の巴は太く、珠紋共に断面四角形である。50・51は珠紋帶の外側に圓線を有する。52は紋様の隆起が大きい。54は紋様の隆起は小さいが、巴の尾は長く伸び、珠紋帶の内圓線とは独立する。珠紋は密に配する。59の巴は太く、尾は圓線と連なる。珠紋の隆起も大きい。61の巴の隆起は大きく、珠紋の隆起は小さい。66の紋様は全体に太い。68の外縁は高い。71の巴頭部はやや丸みを帯び、尾は圓線と独立する。珠紋は密である。74の巴頭部は丸く、くびれるが、尾は長く伸びる。外縁は幅広く、高さは低い。75の瓦当裏面の下部には粘土剝離面が確認でき、丸瓦状のものが付着していた可能性があり、鳥食瓦とも推定される。79の瓦当面には離れ砂が付着している。丸瓦凸面は丁寧なナデである。丸瓦先端の側面と瓦当裏面は内側にばち状に広がる。82の丸瓦凸面は丁寧に縫位になる。丸瓦先端と瓦当の接合は大きく反る。丸瓦先端の側面と瓦当裏面は内側にばち状に広がる。丸瓦凹面には滑り止めA類が接合する。丸瓦胴部後端に面取りが存在する。83の丸瓦先端の側面と瓦当裏面は内側にばち状に広がる。丸瓦凹面には吊り紐E類が残る。85の巴頭部は丸く、くびれを有し、巴頭部が接近している。86の巴頭部はやや尖り、尾は圓線と連なる。89の瓦当面は2次火熱による付着物で覆われている。巴頭部は丸く、くびれをもつ。珠紋は密に配されている。

2. 軒平瓦

B型式は対向式唐草紋である。B-1の凹面中央部は磨滅が著しい。

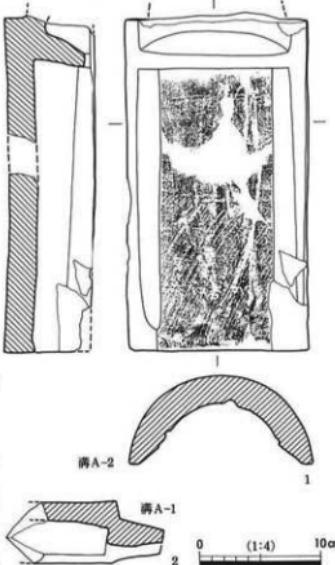
C型式は均整唐草紋である。C-1の頭形態は(図I-189-3)の幅広の段頭の他、II調査区の(図II-192-2)が存在する。(図I-189-3)の平瓦凸面の2か所には、縦位に幅約3cmの窪みが観察される(写I-112-3')。凹面には葺足の痕跡が約19.5cmあり、重複を認め、両側縁の丸瓦重ね合わせの痕跡もみられる(写I-112-3')。釘穴は凹面から凸面向かって穿つ。C-2とC-3は短い唐草紋が左右に展開するが、巻き込み方向に相違がみられる。

D型式は宝相華均整唐草紋である。

E型式は蓮華を上部より見た中心飾りをもつ唐草紋である。

E-1は播磨系の軒平瓦にみられる紋様である。また、右後部が斜めに打ち欠いており、隅切瓦として使用されていたことが考えられる。

G型式は蓮華唐草紋である。G-2の凹面には縦位の平行線があり、凹面成形時の叩き痕と考えられる。G-3の凹面には葺足痕跡がある。両側縁には丸瓦重ね合わせの痕跡もある(写I-113-3')。平瓦側面の凹面側の角は丸くなっている。釘穴は凸面から凹面向かって穿ち、凹面に径3cmの盛



図I-193 丸瓦(2)

り上がりがみられる。凸面は未調整であるが、頸裏面から約5cmは頸接合のために縦位になんでる(写I-113-3")。

H型式は蓮華唐草紋である。(図I-189-11)の上部残存面は頸貼り付け接合面である。

I型式は上から見た蓮子を中心飾りとする唐草紋である。

J型式は梵字を中心飾りとする唐草紋である。梵字部分がJ-2からJ-7に退化しており、J-4～J-7の退化以前の形態はII調査区において出土している。J型式にはそれぞれに別種の頸形態が存在する。

L型式は宝珠唐草紋である。(図I-190-10)の平瓦狭端部は焼成後に打ち欠いており、隅切瓦であることが考えられる。(同図-11)も隅切瓦と考えられる。凸面の布目痕は凹面成形時によるものであろう。

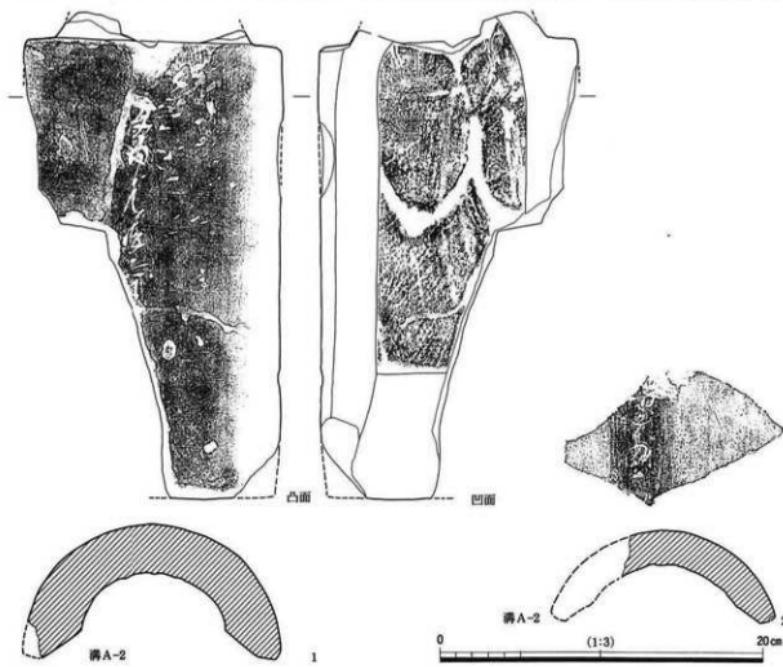
M型式は半截花菱唐草紋である。M-2の左右外縁は幅広である。

N型式は中心飾りが不明な唐草紋である。N-12型式の(図I-191-3)の唐草紋は外縁にまで達しており、範の縮小が推定される。

O型式は水波紋である。(写I-116-10')では頸貼り付け技法が観察される。

P型式は劍頭紋である。

S型式は連珠紋である。界線が巡るもの(S-24, 27, 29, 36)、上下のみのもの(S-25, 26, 28, 34, 35)、界線が存在しないもの(S-30～33)がある。S-33, 35の頸凸面裏面縁は工具による面取りがなされている。



図I-194 丸瓦(3)

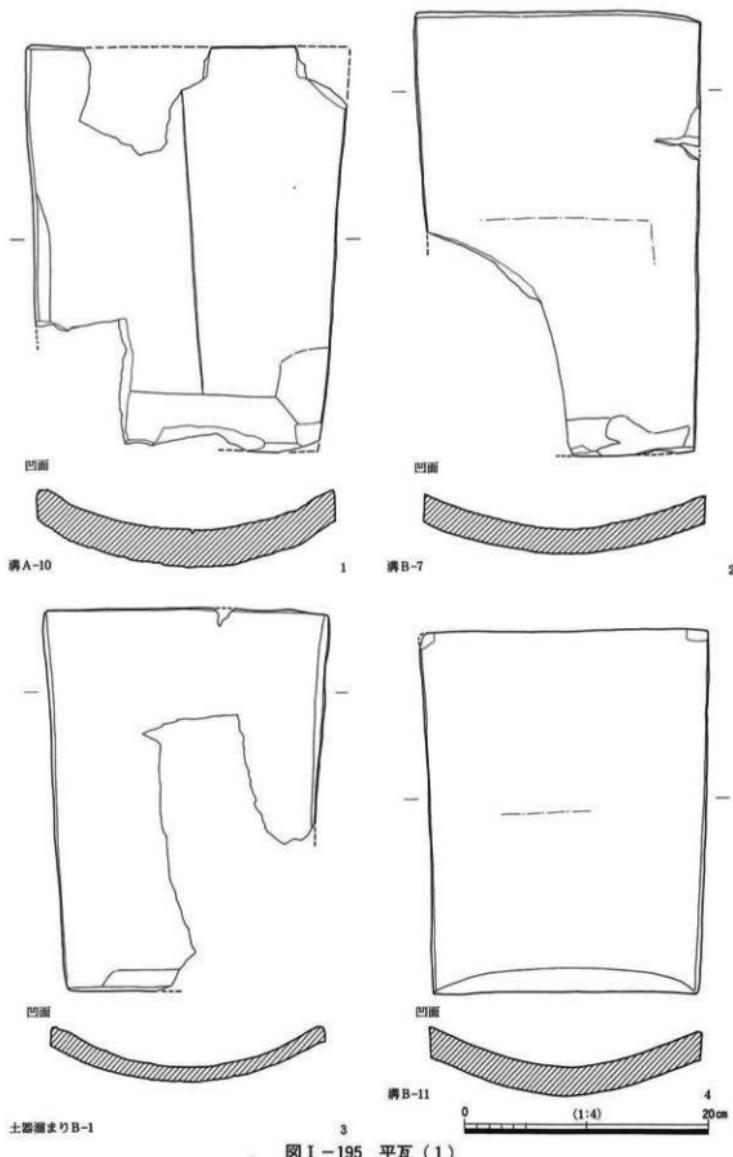
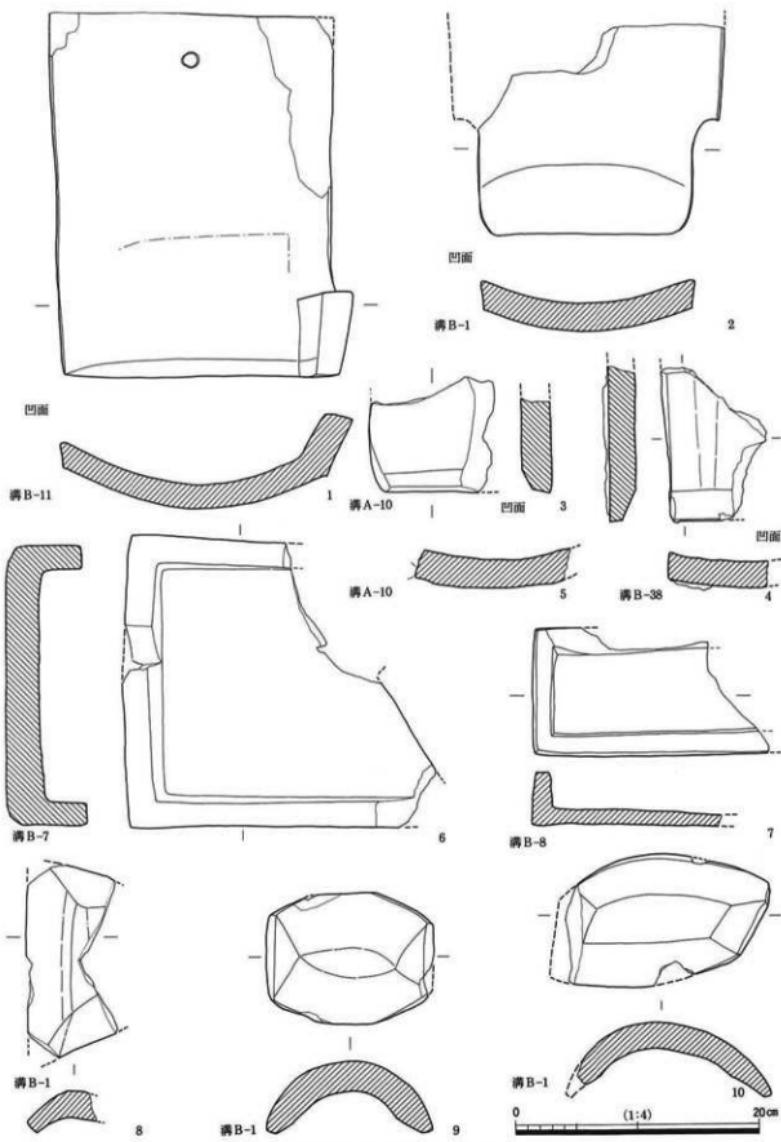


図 I - 195 平瓦 (1)

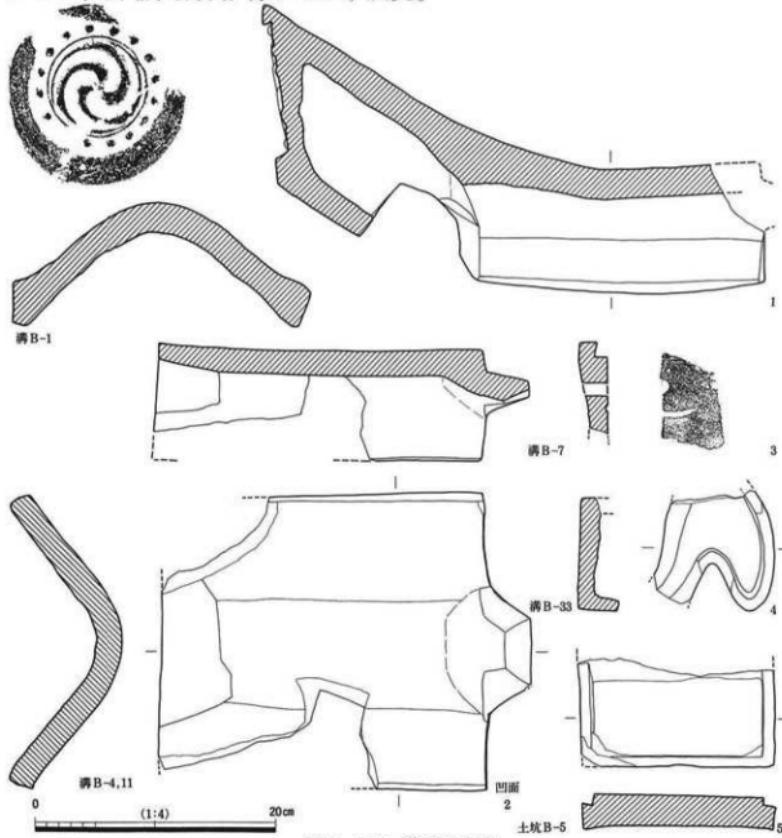


図I-196 平瓦(2)・道具瓦(1)

3. 丸瓦

(図I-192-1)は行基葺丸瓦であり、凸面に縄叩きが残存し、凹面の布目痕は粗い。狭端部側面を取りする。(図I-192-2~4、193)は本瓦葺丸瓦である。192-2の玉縁は胸部側面に平行しており、中より内弯する。凹面の布目痕は残存良好であり、側縁の面取り幅は狭い。192-3は大型品に属する。凹面胸部の広端部から約20cmに段を有し、中型用の模骨を使用したことが推定される。192-4の凸面は丁寧に縦位にならる。凹面の胸部広端縁・狭端縁・玉縁端の縁辺を2mm幅で面取りする。玉縁部側縁の凸面側の面取りが胸部狭端に及ぶ。吊り紐はE-2類であり、玉縁部には刺縫い状痕跡が4段観察される。

(図I-193-1,2、写I-120-6,7)は滑り止めの資料である。(同図-1)は玉縁からやや離れた位置に壁を作り、(同図-2)は玉縁と一体となっている。丸瓦との接合方法は、丸瓦に平行の刻み目(写I-120-6)と、格子の刻み目(写I-120-7)がある。



図I-197 道具瓦(2)

(図 I -194-1,2、写 I -120-3~5)は文字のみられる丸瓦である。(同図-1)は「文中元年六月」。(同図-2)は「おそめ□」。(写 I -120-5)は不明である。

釘穴には脇部にあるものと玉縁にあるものが存在する(写 I -121-2,3)。

4. 平瓦

図 I -195-1は凸面に繩叩き、凹面に布目痕・中央に分割用截線が残存した熨斗瓦である。同図-2は両面に糸切り・離れ砂、同図-4は凸面に離れ砂、凹面にナデ調整をする。図 I -196-1は引掛片側のみにもつ。同図-2は図 I -190-10のような両袖付き軒平瓦に重複する平瓦であり、狭端部両側面に切り込みを有する。写 I -123-3~5は調整台の圧痕が残存している瓦である。写 I -123-6~8は端部に記号・刻印がある。写 I -124-1,2は瓦の胎土内に瓦器碗と思われる破片が混入している。

5. 道具瓦

(図 I -196-5)は熨斗瓦である。焼成前に凸面側より分割用截線を入れる。(同図-6,7)は隅木蓋瓦である。前者は短辺約18cm、後者は短辺約6cmを測る垂木の蓋である。(同図-8)は平面三角形、あるいは台形を呈するものである。用途は不明であるが、戸戸瓦のような隙間を埋める役割を有すると思われる。(同図-9, 10)は戸戸瓦であり、丸瓦を切断して加工している。

(図 I -197-1)の鳥衾瓦は背の反りは強い。(同図-2)と(写 I -125-5~8)は雁振瓦である。いずれも断面は山形を呈する。(写 I -125-8)の凹面に吊り紐の痕跡が観察される。雁振瓦には(写 I -125-5,6)の刻印があり、丸瓦・平瓦においても同様の形態が観察される。(同図-3,5)は蓋状の形態を呈する。(3)には円形の穿孔があり、ヘラによる刻み目がみられる。(図 I -198-1~6)は埠である。A類は両面に離れ砂が付着し、仕上げは粗い。C・D類は片面以外は丁寧に調整をしている。

(写 I -126)は鬼瓦である。(1~3)は粘土板に目・鼻などを付着させており、裏面は平坦である。(4~6)は粘土板に目・鼻・牙を付着させるが、立体感があり、裏面の一部に凹みをつける。

(7~9)はより立体感が増しており、ヘラによる刻みの装飾がみられる。

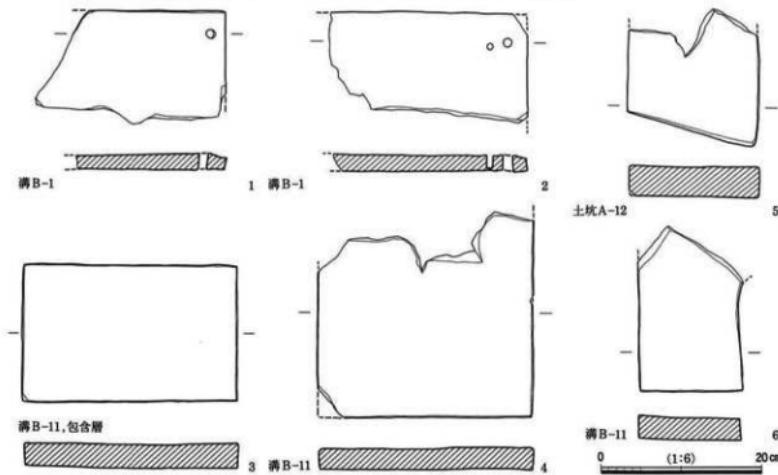


図 I -198 墟